
ネギま！ ～最終進化的転生者～

零崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ ～最終進化的転生者～

【Nコード】

N1766S

【作者名】

零崎

【あらすじ】

生きると死ぬは大違い。

生きると死ぬは紙一重。

正しい道は生か死か。

歩んでみなければわからない。

これは、生と死を体験し、能力者となって過ごす転生者の話。生と死を体験し、進化した人間は何を目指すのか。

プロローグ

プロローグ

真っ白い空間、何も無い、唯白だけの空間

其処に俺は居た

そして目の前にはきれいな女の人居た

「はじめまして、 さん」

…アレ？何でこの人俺の名前知ってるの？

「それは神ですからね」

…頭がとても残念な人なのか？

それより、何故喋っていない筈の事が…

「だから神だからって言ってるでしょう。

あなたは死にました、よってこれより別の世界に転生してもらった事になります」

……死んだ？どういう事だ

それに、転生って…

「あなたはちゃんとした寿命ですよ。
事故死、あなたはあの日あの時確実に死にました」

…良くあるテンプレ乙な展開じゃないのか？

「それは知りませんが、あなたを転生させる事は確かです
理由としては、まあぶっちゃけ私達を楽しませて欲しいんですよね」

…何故俺がそんな事を？

「最近暇なんです」

…さいですか…

「そんなわけで、魔法先生ネギま！の世界へ行ってもらいます
もちろん何かしらの特殊能力とかは付けてあげますよ」

…ああ、そう…

「…乗り気じゃないんですね？大概の人はチート能力をくれたってう
るさいのに」

…いやまあ、チート能力は欲しいけどさ、いくつまでなの？

「できうる限りは大丈夫ですよ」

…じゃあ、アライブ 最終進化的少年の能力全て、もちろんアクロ
の心臓と心臓の欠片を含む

「おっけーですよ」

…次は、鋼の錬金術師の錬金術と錬丹術の技術と知識

「手を合わせるだけで練成とかできるようにしておきますね」

…あざつす。最後に、人造人間のラーズの最強の眼とプライドの影の能力を

「だいじょーぶです、ついでに眼は直視の魔眼としての力を使えるようにしちゃいましょう。他には？」

…大丈夫です、もういらない

後、あんたこの状況かなり楽しんでるだろ

「まあそうですね。最近の人はアライブの能力なんてマイナーな物使う人なんていませんから」

…マイナーだからって馬鹿にしちゃいけない気がするが

「そうですね、私と言い、作者と言い、この作品大好きですから」

…オイコラ神、そういう発言すんな

「それでは、逝ってらっしゃい……あ、ヤバ」

…オイコラ！今確実になんかシクったよな！しかも字がちがう！！

「大丈夫です、何とかしますから」

…絶対だぞ!!

「分かってますって、では改めて…逝ってらっしゃい」

…だから字がちが…

其処で俺の意識はブラックアウトした

プロローグ（後書き）

はい、というわけでプロローグでした

もうひとつ書いてるんですが、並行して書いていきたいと思っています

ですが、更新は遅めになると思いますのでよろしくお願いします

第一話 誰にだって失敗はある物ただし神様、テメエは駄目だ！！（前書き）

ところで、木乃香が川に落ちたっていつの事でしょうか

自分読み込みが浅いので、具体的な年齢が分かんないんですね

第一話 誰にだって失敗はある物ただし神様、テメエは駄目だ！！

第一話 誰にだって失敗はある物ただし神様、テメエは駄目だ！！

どーも、転生してしまった男です

テンプレな展開だよな

ちなみに名前は近衛黒樹、近衛木乃香の双子の兄だ

ただねえ、問題があるんだよ

あの神様さあ、俺を転生させるときに何かシクったみたい発言したじゃん

アレの意味が分かった

心臓が無い

あ、違うよ？『アクロの心臓』の方ね。ついでに欠片と能力全般も

錬金術は使えるし、影や最強の眼は使えるよ。最強の眼は目にウロポロスの模様が浮かびあがる、鏡で確認済みだ

そして何故か直視の魔眼は使えないという

ふざけ過ぎだろ、あの神様。いい加減な仕事し過ぎ

しかも他の子供より明らかに身体能力低いし、魔力も気も一般よりちよっと多い位

木乃香と比べられる事もあるが、別に気にしてないよ

だって錬金術って魔力も気もいらないし

本音をいうと、能力使って大戦で大暴れしたかったが。

まあ錬金術だけでも何とかなるだろ、と思っている

そういう考え事していると、廊下を歩く音が聞こえる

「にーさまー」

「どーした木乃香」

「あんね、ウチお友達ができたんよ」

「ホントか、どんな子？」

「うん、紹介するねー。桜咲刹那ちゃんやー」

「は、はじめまして黒樹様、さ、桜咲刹那と言いましゅ」

……かわええな、オイ

噛んだよ、そしてあわあわ言ってるよ

かわいいね、うん、かわいい

「俺は近衛黒樹だ、よろしくな。それと、様なんていらないよ」

「そうやで、せっちゃん。にーさまの事はクロって呼んだってー」

「えー、猫かよ」

「じゃ、じゃあ、クロ君と呼んでもいいですか!？」

「いいよー。まあこれからよろしくね。刹那」

「はい、よろしくお願いしましゅ!」

ハッハッハッ、かわいいなあー

頭を撫でてやろう

そんなわけで刹那が友達になり、数か月

ちよつと気分的に神鳴流もやってみたんだが、無理

身体能力低過ぎてついていけねえわ

何か師範達は俺の事を才能が無い子として見ているようだ

別に気にはしない

だって、見切って避ける事は出来るわけだし、別に使えなくてもいいかなあとか思ってた

実際、キング・ブラッドレイの剣術が使えてしまったんだが、何故だろうか

あの神がまた何か間違えたんだらうか

まだ誰にも見せて無いが

そんな感じで寝ていると、木乃香がやってきた

「兄さま。これからせつちゃんと川に行くんやけど、一緒に行かへん？」

「川？そうだな、暇だし、俺も行く」

「分かった、ほないこ」

「おっけー」

そんな感じで川へ来た

川で遊んでいて、ふとトイレに行きたくなり、其処から離れる

そして、戻ろうとしたとき、確か溺れるようなイベント無かったっけ、とか思いだした

ダッシュで刹那達のところへ戻ると

「このちゃん！このちゃん！」

と、叫んでいる刹那を見つけた

「刹那！」

「クロ君！このちゃんが！」

「分かってる！」

そういつて川へ飛び込む

泳いでるように見せているが、実は影で足場を作って歩いている

そうやって木乃香を助け出す

「このちゃん！」

「ケホッ、ケホッ」

良かった。息はしている。

「刹那、俺は木乃香背負って行くからお前少し先に戻って大人に知らせる」

「は、はい」

すぐに屋敷に向かって走り出す刹那。足速いなオイ。

さて、俺も木乃香を運びますが、と意気込んだその時だった

ドクン！！！

俺の中に何か落ちてきた

俺は木乃香の近くに来たところでふらふらしだし、倒れた

「……にーさま？にーさま！？……」

そう木乃香が叫ぶのを最後に、俺は意識を失った

「や、お帰り」

「お帰り、じゃないわあああああ!」

「や、ごめんごめん」

「誤って済むとも思ってたのか!」

「別に思ってたないけど」

「この野郎…、ハア、で、何だよこの状況」

「うん、じゃあ一つずつ教えて行こう」

「まず最初に、私が君に能力を与え忘れた」

「オイコラちょっと待て、その時点で既におかしいぞ」

「どこが?」

「全部だ、全部。第一にアンタ神様だろ、全知全能だろ、何で失敗してんだよ」

「確信犯だもの」

「ダウト、取りあえず一発殴らせろ」

「女性の顔は殴っては駄目よ」

「俺のモットーは男女平等だ」

「いやなところも平等なのね…
まあ、冗談はここまでよ。
ここからは真剣な話」

そういうと、空気が変わった感じがした

「流石にね、地球のモノじゃないわけよ、アライブの能力者の元つて。

分かるでしょ？アレは生きていたものの精身体

そして、それを全て受け入れるにはあなたの元の肉体は小さ過ぎた」

「それはどういう意味でだ」

「全てにおいて、よ

心の穴もそうだけど、あなた、前世はそこそこ楽しくやってたみたいだし、器としては不十分だったのよ

それで、一旦素粒子から作りなおして、大丈夫なようにしたの

それでも、アレ全部って中々難しいみたいだね。時間が居るのよ」

「時間？」

「そう、時間。

『アクロの心臓』を含むすべての能力を、あなたの能力として馴染ませるには時間がいったのよ」

「それはどれくらいだ？」

「最低限五年ね、その間に直視の魔眼も使えるようにしておくわ」

「五年、か」

「そうよ、私が作りなおしたからそれだけで済んだけど、まともな肉体なら入った瞬間に弾け飛ぶわよ

それこそ、御館華音みたちかのんのように、ね

それと、何か分かんないけど、『アクロの心臓』って、『鋼の錬金術師』でいう『賢者の石』の代わりとしても使えるみたいよ

あれだけの力があるわけだし、何が起きても不思議じゃないけどね」

「…マジか、賢者の石の代わり、ね」

「それと魔力や気もそれで代用出来るわよ。あんな莫大な負のエネルギー、使える人間なんて他にいないでしょうね」

「莫大な負のエネルギーか…
ちなみに、心臓の欠片を取り出したりは？」

「できるわよ。こっつ、胸を貫く感じで、取り出せるわ。『アクロの心臓』もね
でも、誰かに渡すつもり？」

「いや、証明するのには使えそうだな、と違ってね」

「そう、質問はもう無いわね？戻すわよ」

「ああ、大丈夫だ」

「それでは、これからの人生、せいぜい私を楽しませてね」

そういわれて、俺は意識を失った

第一話 誰にだって失敗はある物ただし神様、テメエは駄目だ！！（後書き）

はい、現状確認といったところですか

説明パートですね

この辺全部自分の独自理論なので、其処ら辺よろしくお願いします

第二話 目覚めはいい方

第二話 目覚めはいい方

さて、俺だ

意識を失ったってのはおかしいか

俺は目覚めた

其処は病院だ、別に恒例のあの言葉をいうつもりはない

ゆっくりと起きる

体が大きくなっていた、当然か

流石に五年は長かったらしく、全身の関節がギシギシといやな音を立てる

それでも、筋力は多少は衰えていないらしく、たちあがる事が出来た

関節が固まって無いのは、誰かが定期的にマッサージしてくれたからだろう

こういうのって金がかかるんじゃないか？

詠春め、親バカだなあ

ゆっくり歩き、窓を開ける

風が当たって気持ちがいい

きれいな夕焼けが見える

能力の実験をしようと、シャボン玉をイメージする

すると、ボコボコッ、と音を立ててシャボン玉が出来上がり、宙に浮かぶ

うまく行って良かった、それにきれいだな

シャボン玉に映る自分を見る

…髪が長いな、流石に五年も切って無かったらこれだけ伸びるか

そう思っていると、ガラッ、という音が聞こえた

〈SIDE 刹那〉

あの事件から五年

私は小学校に入学し、お嬢様は麻帆良へ行った

私は小学校に通いながら神鳴流を習い、黒樹様のお見舞いも週に二回必ず通った

あの時、黒樹様に言われて大人を呼びに行き、大人を連れて戻ってきたときには、既に黒樹様は倒れていた

その隣ではお嬢様が

「にーさま！にーさま！」と、何度もゆすりながら泣いているのを見た

その後、黒樹様は家に連れて帰り、術者の人が何度確認しても、外傷が見当たらないと言っていた

病院に連れて行っても同じだった

原因不明の何か

病院ではそう診断された

私は何かが抜け落ちたような、そんな感じがした

でも、いつかは目を覚ましてくれると信じて、いつも通っていた

医者には目覚める見込みは無いと言われた

それを聞いた長や、侍女の人たちが泣いているのを見た

私は罪悪感でいっぱいになった

私が、あの時黒樹様を置いて、一度戻ったから

私が、あの時、お嬢様を守り切れなかったから

その罪悪感を軽くするためだと分かっているにもかかわらず、通うのをやめられなかった

長は、「いいんですよ」と言ってくれた

長も、何度もこの病院に来ているのを知っている。

速く目覚めて欲しいと、そう願いながら

そして、私はいつも通り一人で病室のドアを開ける

其処には一人の男の人が立っていた

ボサボサに伸びた真っ黒な髪

夕焼けに染まるその人

周りにはシャボン玉が浮かび、幻想的な美しさが漂っていた

その人はこちらを振り返った

「ん？刹那か？大きくなっただな」

そう言った

ベッドをみる

誰も寝ていなかった

起きているのが黒樹様だと分かると、私は直ぐに抱きついた

〈SIDE 黒樹〉

「おわつ、と！」

あぶねえ、あぶねえ

いきなり抱きつくんだもん、ビックリしたわ

それでも倒れないのは、能力者になって身体能力が上がった所為か

取りあえずシャボン玉を消す

「グスツグスツ！」

腕の中では刹那が泣いている

そりゃそうか、五年間眠りっぱなしだったわけだしな

ゆっくり刹那を見る、すると、おぼろ朧げに何かが見えた

木乃香が川でおぼれている

俺が助ける

刹那が助けを呼びに行く

俺が倒れている

その横で木乃香が泣いている

…チツ、胸糞悪いもんみたな

俺に人の心の傷トラウマみて楽しむような性癖は無いと思いたい

すっかり忘れてた

心臓の欠片の持ち主は、こうなるんだっとな

刹那め、木乃香が川でおぼれた事もだが、俺が倒れた事まで心の傷になってんのかよ

取りあえず、刹那をなでる

「そう泣くなよ刹那」

「クロ君、心配したんやで…」

おふう、刹那が関西弁を使ってる

其処までシヨッキンキングか、俺が起きたのは

「大丈夫だつて、心配済んな」

「心配した…」

ずっと心配したんやで…

あの時倒れてから五年間、一度も目覚めへんかった…」

「……ああ、すまないな、刹那。

取りあえず、ナースコール押さない？」

「うん」

そう呟き、腕から離れてナースコールを押す

あ、やべ

ドサツ！

「クロ君！！」

「あゝ、いや、大丈夫、大丈夫」

やっぱり五年は長い

普通に歩いたのに、フラツとした

栄養が足りて無いのかね

それとも、筋力が足りて無いのか

取りあえずベッドに戻り、医者がくるのを待つ

その後、来た医者に驚かれ、俺を急いで診察した

異常は無いそうで、診察している間に詠春が来た

「や、父さん。久しぶりかな」

そう言ったら、詠春は何も言わずに俺を抱きしめた

「良かった、本当に良かった…」

「…うん、心配掛けてごめん」

俺は取りあえず謝り、医者を待つことにした

医者には異常が無いのが異常だと言われた

オイコラ、医者が言っている事じゃ無くねえか？

こんな前例は無いらしいから、しょうがないかな

そのあと、検査入院という事で一日入院し、俺は晴れて退院した

そして今

「…久しぶりの我が家だなあ」

「そうですね、五年ぶりに帰ってきた訳です」

「うん、取りあえず、言いたい事があるんだよね」

「？何ですか？」

「ただいま」

そう言うと、詠春は一瞬驚いて、笑いながら

「おかえり」

と言ってくれた

家に入ると、激震が起きた

あっという間に使用人たちにもみくちゃにされる

何処からこんなに湧いた、別に逃げやしないっての

「とりあえず落ち着いてくれ」

そう言うと、使用人たちは引き下がった

俺はにっこり笑って

「ただいま」

といたら

「おかえりなさいませ、黒樹様」

と、返してくれた

いいよね、こつこつって

それからしばらくはリハビリだった

しばらくと言っても二、三週間程だが

小学校は夏休み直前らしく、刹那が学校をさぼって俺と居たいと言
い出した

俺そもそも小学校なんて行く必要性すら無いんだが

知識は人一倍あるよ。理系の分野だけ

取りあえず刹那は帰ってきてからは一緒に居てやると言って、しづ
しづ引き下がった

この分だと、木乃香の方は大変な事になってそうだな

夏休みに入ってから、刹那が神鳴流を習いながら、俺のリハビリ
の手伝いをしてくれた

普通なら、目覚めて直ぐは起きる事も難しいらしいんだが、俺起き
た上に歩いたんだけど

ク ラじゃないが、立てた事が不思議らしい

リハビリも終わり、体が自由に動かせるようになって気付いた

身体能力が半端じゃなく上がった

これが能力者になるってことなんだなあ、と思いつつ、何故か神鳴流が『複製』^{コピー}出来るのでコピーしたりして過ごした

あれかな、ここには俺以外能力者がいないから、技術をコピーできるようにしてくれたのかな

『ピンポン、せいかい』

…ちょっと今幻聴が聞こえたようだ、うん、気にしない

取りあえずは能力を確認したりしている

スゲー熱いわ、山ん中って、修行にはもってこいだけだ。『隔離』
かけてるから絶対見つからねえし

偶に帰ってきたときに大騒ぎになってるけど

過保護過ぎだろ、ここの使用人

そんな感じで過ごす日々

俺はだんだんと人に会いたく無くなった

会うたびにそいつのトラウマが見える

正直言っただけ気分が悪い

まあ、これはしょうが無い事だと割り切ってはいるけどな

それと、詠春に俺が魔法を知っていると云う事を話した

驚いてはいたが、本格的に俺に立場とかを教えてくれた

神鳴流も技は一通り覚えた

詠春はして欲しくないと云っていたが、俺は裏の仕事をやり始めた

もちろん学校に通いながらだ

ちなみに最初に行ったときに女の子と間違われた

髪切って無かったからかな

それはともかく、俺は裏の仕事をし続けた

おかげで知っている人は知っている位には名が売れた

俺は、仕事的时候は『ゼロザキクロシキ零崎黒識』を名乗っている

零崎一賊とか大好きだからね、俺

俺は『殺人鬼』だとか、『スィーパー掃除人』と呼ばれた

何故かと言われると、殺人鬼は自分が名乗ったからだが、掃除人は死体も残さないから、だそうだ

詠春は複雑そうな顔をしていたが、それでも認めてくれていた

ちなみにこの事を知ってるのは詠春だけだ

刹那には教えていない

そんな感じで数年が過ぎ、中学に入学する事になった

今は詠春の部屋で刹那と共に詠春を待っている

「すみません、待たせてしまつて」

「いいえ、そんなことは有りませんよ」

「大丈夫だよ。それで、話つて何？」

「二人には麻帆良へ行ってもらおう、と思ひまして」

「それつて、じいちゃんが学園長してるつていう？」

「ええ、その麻帆良です。」

二人とも、木乃香には会いたいでしょう？」

木乃香かあ、そう言えばあつて無いなあ

「ん？でも、目覚めてから夏休みとか来る機会は沢山あつたよな」

「ええ、一応お義父さんには話しておいたのですが…」

「忘れてるか、話して無いかの二択だな」

「そうですね、取りあえず、不満はありませんか？」

「私は有りません」

「俺も無いけど、少なくともあと一年はいけないと思うよ？」

「ああ、あなたはちょっとした用事があるんでしたね」

「うん、そんなわけで、来年行くことにするわ

刹那、木乃香によるしくな」

「はい、来年黒樹様がくるのを楽しみにしておきますね」

「そうしてくれ」

そして、一年間仕事をし、麻帆良へ行く時が迫ってきた

第二話 目覚めはいい方（後書き）

はい、早くも第三話です

ずっと書きたいと思ってたので、構想は大体出来てました

感想を書いてくれるとありがたいです

では、また次回

第三話 再開、そして戦闘（前書き）

春休みがもうすぐ終わる、そしたら書けなくなる
終わってほしくないと思うのは自分だけではない筈

第三話 再開、そして戦闘

第三話 再開、そして戦闘

さて、刹那が麻帆良に行って一年が経った

俺も行くことになり、準備を終えて詠春の部屋に居る

「さて、待ちに待った麻帆良への転校だ」

「ええ、木乃香によろしくお願いしますね」

「分かってるさ。しかし、結局木乃香は戻ってこなかったな」

「お義父さんが教えて無いんでしょう、戻ってくるのはあまりいい事とは言えませんから」

「そうだね。」

「じゃ、行つてきます」

「ええ、行つてらっしゃい、黒樹」

そう言つて部屋を出る

その後、新幹線などを使って麻帆良に到着した

案内してくれる人が居るらしいが、誰だろうか

俺の予想は刹那

そして、五分ほど待つと、誰かがこちらに近づいて来た

「やあ、君が近衛黒樹君かい？」

高畑先生じゃん。俺の予想は大外れ

「そうです、あなたは？」

「僕はタカミチ・T・高畑。

麻帆良中等部の教師だ。木乃香君の担任でもある」

「そうですか、木乃香がいつもお世話になってます」

「いやいや、そんなにかしこまらなくてもいいよ。

しかし、木乃香君にとっても似ているね」

「そりゃ双子ですから、髪も面倒だから切って無いし」

初見の人にはまず間違いなく女に間違われる

「そう。じゃあ、早速案内しよう」

というわけでやってきました。麻帆良学園女子中等部学園長室

相変わらずのぬらりひょんだ

「久しぶり、会うのは何年ぶりかな？」

「そうじゃのう、十年近くあつて無い事になるのう。
見舞いには行つたが、意識が無かつたからの」

「迷惑掛けたね」

「いやいや、そんな風に思うな。」

それより、おぬしには女子中等部に編入してもらつ」

「…女に見えても俺は男だぞ？」

「わかつとるわい、共学化のテストケースとしてじゃ。」

それに、木乃香と一緒にの方がいいじゃろ？」

「そうだなあ…そういや、木乃香に俺の事は？」

「話とらん、戻ると言われても困るからの」

「ああ、そう。寮はどうすんだ？」

「一人部屋を用意してある、これは流石に男子寮じゃから安心せい」

「当たり前だ、女子寮に入れとか言われても入らねえからな」

「それじゃ、明日また来てくれ。」

…それと、こここの警備員について欲しいんじやが
実力は婿殿のお墨付きじゃし、大丈夫じゃろ？」

「神鳴流は一通り出来る、それ以外にも錬金術とかも使えるぜ」

大丈夫かどうかはそつちで判断してくれ」

「分かった。なら、明日の夜にでも世界樹広場に来てくれ
それと、明日から一緒に授業を受けてもらう
担任はここに居るタカミチ君じゃ」

「よろしくね」

「こちらこそ、どうぞよろしく。
広場に行く具体的な時間は？」

「それは追って通達するからの」

「おっけー。じゃ、またなじいちゃん」

そして、次の日

木乃香に見つからない様に登校し、

途中でクラス名簿なんかを見せてもらいながら来た教室前

「ここが俺のクラスですか？」

「うん、二年A組だよ。ちょっと騒がしいけど、みんないい子だからね」

「その割にはチャチなブービートラップが仕掛けてありますが」

「ハハハ、僕が先に入ろうか？」

「いえ、いいですよ」

そう言っつてドアを開ける

黒板消しが落ちてくるが、それを避け

足元のロープを踏み、落ちてくるバケツを避け、飛んでくるおもちゃの矢を取る

教壇をバン！！と叩き、話す

「まだまだ甘いな、そんな物じゃ俺をトラップにかける事なんて出来やしないぜ！」

「兄様！？」

「ぐふう！」

いきなり木乃香に抱きつかれた

「おー。木乃香久しぶりー。元気だった？」

「兄様！、起きたんやね、よかつた〜！！」

そしてそのまま泣きつかれ、啞然とする教室内

高畑先生に目を向ける

「木乃香君落ち着いて。一旦席に着こうか」

そう言われると、しぶしぶながらも自分の席に戻る木乃香

刹那は刹那でニコニコしてんだけど

「高畑先生。その人は？」

「今日からこのクラスで一緒に学ぶことになった。自己紹介してくれるかい？」

「はいはい。はじめまして、近衛黒樹です。どうぞよろしく」

「えー、それじゃあ質問は朝倉君に任せるよ」

待ってましたと言わんばかりに一人の女生徒が立ち上がる。麻帆良のパラッチだったか？

髪をなびかせ、ズスイッと寄ってくる

「えーっと、では黒樹さん。なぜ女子中か？」

「知らん。じいちゃん 学園長の所為だ」

そう言うと、クラスの大半が苦笑して納得する

あの爺いつもこんなことしてんのか？

「このクラスの近衛木乃香さんとはどういう関係で？」

「兄妹だ。追記するなら双子」

「ホントに男？」

「ぶっ飛ばすぞてめえ」

「冗談、冗談。でも、ホントに女の子見たいなんだけど、髪切ろうとか思わないの？」

「面倒だから切って無い、最近うっとおしくなってきたけど」

「趣味と特技は？」

「趣味は寝る事。特技は特に無い」

「このクラスで気になる人は？」

「九年くらいあって無かった木乃香と、後は刹那かな」

「何で九年もあって無いの？」

「え？聞きたい？空気が重くなるよ？」

「…遠慮しときます」

そう言って下がる

「高畑先生。質問終了です」

「それじゃ、黒樹君の席は……エヴァンジェリンさんの隣に座ってくれ」

「はいはい」と

そう言ってエヴァンジェリンの隣に座る

「よろしく、エヴァンジェリンさん」

「…ああ、よろしく」

無愛想だな、別に気にして無いけど

その後、授業を寝て過ごし、放課後に起きた時に刹那にあきられた取りあえず木乃香と刹那を連れて屋上へきた

「久しぶりや、兄様。」

起きてたんなら伝えて欲しかったんやで、心配したんやから!」

「悪いな木乃香、でもいいちゃんには話しといたんだが……」

擬音語がなくなると『ぴたあ』といった表現が一番しっくりくるぐらいに木乃香が固まる。

反応を見る限りどうやら本当に知らなかったらしい。

「それ、本当なん?」

「ホントホント。ところで、二回繰り返すと信用ってがっくり下が

るよね」

「…あとでおじいちゃんにはお話せんといかんなあ」

ドンマイジジイ、命がつきそうだけ

「それにしても、いつ目覚めたん？」

「ん〜四、五年位前かな」

「そんな前やったん？」

「まあね」

そしてチラッと刹那を見る

あの時の事を思い出しているのか、顔が真っ赤だ

目が「あの時の事は話さないください！！」と訴えている

「しかし、刹那とは仲良くやってたか？」

「うん？仲良くやっとなよ」

嘘だな

直ぐに分かる、木乃香は顔に出るからな

と言っても双子だからこそ分かるってのもあると思う

刹那を見ると、申し訳なさそうにこつちを見ている

「刹那、仲良くしてやれよ。」

あの時の事は気にしなくていいからな」

「…はい」

「木乃香も、あの時の事は気にしない

俺が倒れたのはお前のせいじゃないんだからな」

「何で気にしてるって分かったん？」

「そりやお前、双子だからな。何でも分かるさ」

まあ実際には最初に見たときにあの光景が鮮明に見えたただだが

これっていいのか悪いのか分かんないよね

心臓の欠片を手に入れてからクラスの奴を見るたびにトラウマが見えた

「そういうもんなん？」

「そういうモノなの。木乃香が速く目覚めて欲しいって思ったから俺は目覚めたんだよ。」

結局五年はかかったけどな」

「ふふっ、うれしいなあ、そう言ってくれと」

そしてまた抱きつく木乃香

「あ、そういえば、パーティーの準備してるから連れてきて欲しいって言われてたんや
いこ、兄様」

「パーティー？」

「歓迎会ですよ、さあ、行きましょう」

そうやって二人に腕を引っ張られて連れて行かれた

と、そんなこんなでクラスに到着。

「兄様連れて来たえ〜」

『ようこそ！ 2 - A へ！』

パンパンパーン

と、クラッカーまで用意してある。

やはりテンションの高さはこの学校で随一だろう

俺にはこのハイテンションについていけない気がしない

「あたし最初に見たとき木乃香かと思ったわよ」

「あ〜それあたしも思った。すごく似てるよね」

「双子なんだ、似てるのは当然だろう」

とまあこんな感じでハイテンションすぎる放課後は過ぎて行った

夜、ジジイに頼まれたとおりに世界樹広場に来た

広場に到着すると既に結構な人数が集まっている。

「……フォツ。ちょうど来よったわい」

ジジイがこつちを見てそれにつられるように全員が俺たちを見る。

「五分前行動は当然だ」

ちなみに俺の格好はジーパンにTシャツと戦う気ゼロの服装だった

「さて、自己紹介してくれ」

「学園長の孫、近衛黒樹だ。以後よろしく」

それだけ言っただけでUターン

「ちょっと待つんじゃ黒樹、実力を知りたい者も居るじゃろうから、模擬戦をしてくれ」

「え〜。いいよ」

「…扱いづらい奴じゃのう、ではタカミチ君。よろしく頼む」

「分かりました」

そう言うと高畑先生はポケットに手を入れて前に出てくる

俺は手袋を両手にはめ、構えは取らない

「さあ、始めようか」

そして戦いは始まる

俺は高畑先生の放つ居合拳を初見で避け、パチン！と指を鳴らす

ドオオン！と、足元で爆破が起きる

ちなみにこの手袋はフェイク、一応これだけでも『焰の錬金術』は使えるが、『電撃』の能力を使えばノーモーションで爆破を起こせる

錬金術と能力が合わさって相乗効果を生んだな

初見で居合拳を見切られた事に驚いた高畑先生、ちなみに居合拳は既に『複写』した

これだけの身体能力なら、あんな見世物みたいな居合拳を避けるのは容易い

更に爆破の煙で視界が狭まったところで錬金術を使い、足元から棒のようなものを作って攻撃する

高畑先生はこれを飛んで避け、居合拳を連発する

流石に最初みたいに気の抜けた一撃じゃ無く、本気の一撃

俺は『スピード』を使ってそれを避け続ける

『スピード』の能力ってほぼ瞬動だけど、方向転換なんかも自由自在だから、瞬動より便利だ

そして『風』を使ってカマイタチを起こし、多角的に攻撃する

高畑先生は「左腕に魔力。右腕に気。合成！」と、咸卦法をつかう

ここでも俺は『複写』を使って感卦方をコピー

「『豪殺居合拳』！」

豪殺居合拳でカマイタチを打ち消し、そのまま俺に向かって攻撃をする

飛んで来る大砲並みの威力をもった豪殺居合拳、俺はそれを手を振って『無』の力で打ち消す

打ち消すだけね、本気を出すと殺しかねない

高畑先生がビックリしてる間に距離を詰め、首に手を当てる

「今のが武器なら、死んでましたよ」

「…強いね、君」

「それはどうも、ですが、高畑先生の方が強いですよ。今のは一瞬の隙を狙っただけです」

「そうかい？でも、君は本当に強いよ」

「そうじゃの、タカミチ君を倒すとは、ワシもビックリしたぞ。しかし、どんな術を使ったんじゃ？」

「一部は錬金術だ、それ以外は企業秘密」

「そうか、教える気は無いんじやな？」

「当然だ」

とまあ、そんな会話を繰り返して、他の先生と話して帰った

あ、ちゃんと広場は元通りにしておいたよ

しかし、特にやる事が無い

エヴァと縁でも作っておくか

第三話 再開、そして戦闘（後書き）

はい、そんなこんなで戦闘まで入れてしまいました

どこがおかしなところがあつたら教えてください

感想まっています

第四話 面倒事は嫌い

第四話 面倒事は嫌い

模擬戦をした次の日の朝

俺は取りあえず起きていつも通り学校へ行く

「おはよう、兄様」

「おはようございます、黒樹様」

「おはよう、木乃香、刹那」

刹那は何度言っても様とか敬語をやめないのです、もう勝手にさせる
事にした

しかし眠い

目覚めはいい方だが、睡眠はたっぷり取りたいんだ

そんな感じでダル気に教室へ入る

木乃香は他の図書館探検部の早乙女や宮崎、綾瀬と話している

楽しそうに話しているようだ

あいつって俺が倒れてる間はかなり落ち込んでたって聞いたし、心配はかけたくないんだよね

俺は席に座って睡眠を開始しようとするが、目の前を見てそれをやめる

何故目の前に相坂さよがいる？

え？あいつって一番前の席じゃないっけ？

とか思っていると

「ホントに近衛木乃香さんに似てますね。」

双子の人は珍しくは有りませんが、男女の兄妹ってここまで似る物なんでしょうか？」

どうやら俺の顔を見ていたらしい

「はあ、でもこんな近くに居ても気付かれないなんて…悲しいですね」

…目の前でそんな事言われても困るだけなんだがなあ

そんな事を思っていると、チャイムが鳴り、高畑先生が入ってきた

その後、授業は適当に過ごし、昼休みになった

「兄様、昼ごはんどうするん？」

「ん、今日は購買で何か買おうかな」

「ほんなら一緒に弁当食べようや。屋上でまっとるで」

「分かった、買ってから直ぐに行く」

木乃香は刹那を連れて屋上へ行った

俺は購買で適当なパンを購入し、屋上へ向かう

しかし、原作開始まであと一年か、何して過ごそうか

等と考えていると、誰かとぶつかってしまった

ドサツ！という音がした

「いたたたた…」

「ごめん、大丈夫か？ちょっと考え事しててな」

「いえ、私も余所見をしていたので…あ」

「ん？君、確か昨日あの場所にいた…」

「あ、ハイ。佐倉愛衣と言います。でも、何故ここに？ここは女子
中等部ですよ？」

「ああ、あの爺の所為でな。共学化のテストケースだと」

「へえ、そうなんですか。シフトなんかは聞きましたか？」

「後で爺から予定を送ってもらおう事になってる
俺はちよつと用事があるからこれで」

「あ、はい。すみません」

「じゃあ、またね」

そう言って歩き出す

そして屋上へ来た

気持ちのいい晴れた空が目に入る

「あ、やっと来た。遅いで〜兄様」

木乃香がぶくうと頬を膨らませながら言う

「刹那も居るんだから寂しくは無かっただろ」

「ウチは今まで兄様と一緒に居られなかった分一緒に居るんやえ。
もちろんせつちゃんも一緒にな〜」

「お、お嬢様!？」

木乃香に抱きつかれて刹那が焦っている

これはこれで中々面白いな

「さあ、さつさと昼飯食おうぜ」

「そうやな」

「そうですね」

そのあと昼休みが終わるまで三人ですつと談笑していた

そして放課後、あまりに暇なので、近くの本屋に寄った

漫画を見ていると、千雨ちゃんと会った

「や、長谷川さん」

「ん？ああ、近衛（兄）か」

「それ言い辛いだろうから黒樹でいいよ」

「そうか？じゃあ、黒樹は何してるんだ？」

「適当に本見てるだけ、何かお勧めとかある？」

「そつだな…こついつのはどうだ？」

そう言っ手取ったのは少年漫画、ライトノベル等だった

その後一時間は千雨ちゃんにこれがいい、アレがいい、と話を聞かされ続けた

これからは気をつける事にしよう

夜、警備の仕事が入った日

爺と連絡中

「で、俺はどこを担当するわけ？」

「お前は遊撃じゃな、戦力が足りなくなった所に行ってもらおう。それまでは待機じゃ」

「おっけー。じゃ、それまでは暇な訳？」

「暇というわけでは無いが、必要になるまでは動けんのう」

何にもすることねーんだが、どうしようか

数十分後、漸く連絡が来た。暇で仕方なかったんだよね

高音達を援護しろって言う連絡が来たんで、今向かってる

影を使ってもいいけど、後々説明するのが面倒だし、直に倒しに行こうと思う

SIDE 佐倉

とても不味い状況です

先ほど学園長に連絡して増援を頼みましたが、それまで持ちこたえられないかも怪しいくらいに不味いです

「お嬢ちゃん達じゃ、相手にならんで!!」

そっついながら鬼はこん棒を振ってきます

「くっ!!」

お姉さまが影で必死に攻撃を防いでいます

他にも数十体の鬼が私と高音お姉さまを囲っています

私はもうほとんど魔力が残ってません、このままではやられてしまいます

「これで終わりや!!」

巨躯の鬼が私に向かって棍棒を振り上げていました

バシユ!!、と音がした

「あゝあ、数多くね?... まあ、暇するよりいいかな」

「援軍ですか!？」

「そっだよ、ちょっと下がってな。」

「こいつらは俺が片付ける」

「ゆづてくれるやんけ嬢ちゃん、ワイらを片付けると？」

「……誰が嬢ちゃんだつて？」

「あ？そんなの、あんたに決まってる……」

バシユ！！

鬼は言い終わる前に頭が弾け飛んだ

私は周りを見ました

シャボン玉？

私達の周りには、いくつものシャボン玉が浮かんでいました

お姉さまや鬼達も、不思議そうにそれを見ています

「あゝあ、まったく、誰が嬢ちゃんだよ。俺はれっきとした男だつ
つーの」

そう言われても、最初見たときは私も女の子かと思っただんですが

「しよーがない、さっさと掃除してやろう。」

俺はキレー好きなんだ」

そう言った途端にシャボン玉が大量に出てきて、周りの鬼達を弾き飛ばしていきます

ほんの数分で、其処は殲滅されていました

「ま、こんなもんだろ」

「あの、ありがとうございます」

「うん？アンタ確か高音さんだったか？」

「ええ、私は高音・D・グッドマンです。先ほどは本当に…」

「ああ、いいよいよそうというのは。堅苦しいのは嫌いなんだ。それにあんたの方が年上だろ、敬語はいらないし、俺も敬語なんて使う気は無い」

「いえ、私はこれが当たり前なので…」

「そう？まあいいや」

何だか、普通に会話しているお姉さまがうらやましくなってきました

「あ、あの。ありがとうございます！！」

「ハハ、いって。味方なんだし、助けないとね

…さて、今日はもう終わりらしいし、早めに帰るようにな

それだけ言つと、黒樹さんはどこかへ行ってしまうました

〈SIDE 黒樹〉

寝みい…

流石に警備の仕事をした後の日は眠い

だがまあ、ストレス発散にはなるよな

吹き飛ばしてて気持ちいいし、楽しい

基本的にアライブの能力って対人戦では使えないんだよね

絶対に殺す！！って時は使えるけど、殺さないで殲滅しろって言われても、足を吹き飛ばすのが最大級の良心になってしまっ

…いや、電撃使えばいいだけか

影は俺だとばれなければ問題無いけど、眼は確実に相対した奴にはばれるんだよなあ

難儀だ、と考え事していると、誰かから声をかけられた

「あ…お、おはようございます！」

「ん？…ああ、確か、佐倉だっけ。おはよう」

「はい、覚えててくれたんですね！」

「いや、まあ、流石に会って数日で忘れる奴はいないと思うが……」

何でこの子俺にこんなによってくるの？

俺なんかしたか？

昨日助けただけだよな？

「私、黒樹さんに負けないくらい強くなって見せますから」

…ああ、なるほど。

昨日の俺みたく強くなりたいと、そういう事が

俺だけに聞こえるくらいの声の大きさで言った

ちなみに今の時間は人はまばら

「そう、がんばれよ。応援してやる」

「ハイ！」

応援してやるといったら、何かめちゃくちゃうれしそうな顔で先に
行った

…結局何だったんだろう、あの子

余談だが、木乃香と刹那がこの状況を見ていたらしく、一日中不機嫌だった

俺はクラス全員から

(一体何をした?)

という目を向けられる事になった

第四話 面倒事は嫌い（後書き）

まさかのフラグ…？という事で、書いてみました

まあ、それっぽく書いただけで、ハーレム目指してるわけではないですが

感想は常時募集中です

第五話 傲慢（プライド）（前書き）

ハーレムにしてほしいと来た感想に大河内アキラが全部に入っていたんですが、彼女ってそんなに人気あるんですね

自分はアキラってそんなに印象あるキャラじゃないんで、使いづらいんですね

教えていただけるとありがたいです

第五話 傲慢（プライド）

第五話 プライド 傲慢

もうすぐ五月に入る頃になり、夜も暖かくなってきた

月明かりに照らされている森の中

そこでは銃声や爆音がしていた

まあ、ぶっちゃけ俺のシャボン玉の音と龍宮の銃声、刹那の神鳴流
奥義の音なのだが

やがて鬼達は全て還し、一息つく

「…こんなもんかな」

「そうだね、もういないだろう。今日の仕事はこれで終わりだ」

「ちやっちやと帰って寝たいな、全く」

「疲れでも溜まってるんですか？」

「いや、眠いだけ。ま、時間があればいつまでも寝てるんだけどな」

休みの日は十中八九木乃香が外に連れ出そうとしてるがな

「もうすぐゴールデンウィークだから、昼間はずっと寝てられるん

じゃないか？」

「だといいけど。たぶん木乃香がどっか遊びに行こうとか言い出す
だろ」

「でしょうね。お嬢様の事ですし、たぶん計画練ってますよ」

「だよなー。たぶん休みにならないと思う」

「そう……ところで、気付いてるかい？」

「ああ、さっきからずっと見られてるな」

ずっと視線を感じてたんだよね

「どうしますか？」

「おーい！其処で隠れてないで出て来い！」

俺が声を出すと、龍宮と刹那が頭を抱えた

何故だ、俺が居るなら問題ないだろう

出てきたのはエヴァンジェリンだった

「何か用でもあるのか？エヴァンジェリンさん」

「用ね、用ならあるぞ。零崎黒識」

その名前を言った途端に龍宮の顔色が変わった

「…何故俺だと思ったんだ？」

「何、私には優秀な従者が居るんだ。それに、お前は最初見たときから人間とは少し違う感覚がするのでな」

「待つてくれエヴァンジェリン。彼がああ零崎黒識だつて？」

「そうだ、何なら証拠を見せてやろうか？」

「龍宮、その『零崎黒識』とは誰だ？」

「裏の世界もあまり知られていない請負人さ。四年程前から活動している謎の人物でね」

容姿は肩まである黒髪が特徴で、謎の魔法と剣術を使うと聞いている狙われたら最後、組織の人間全員を皆殺しにする『殺人鬼』だ。死体も残さないから『掃除人』^{スワイパー}とも呼ばれている

だが、奴は左目にウロボロスの模様があるのではなかったか？
彼は左目にそんなものは無いが…」

「ああ、確かに無い。だが、そんな物はコンタクトでも使えば分からなくなるだろう」

だから聞いているんだ。

近衛黒樹、おまえは零崎黒識か？」

かなり高圧的に話しやがるな、エヴァンジェリンめ

……さて、どうしようか

ここまで言う以上、何かしらの証拠を握ったと言う事だろう

だがまあ、ばれても困る事ではないし、話してもいいかな

「…そうだ、俺は零崎黒識だよ」

俺は最強の眼を発動し、前髪を上げ、左目を見えるようにする

刹那が横でかなりショックを受けている

「まさか、本当に君があのか『殺人鬼』かい？」

「そうだよ。しかし、龍宮も良く知ってたな。」

基本的に皆殺しだから、情報を知る奴も少ないのに」

「まあ、いろんなところから情報が流れてきてるんだよ」

「…そろそろいいか？」

エヴァが空気になってたな。どうでもいいことだが、刹那が固まって動かないんだが

「ん？あ、スマン。いいぞ」

「さて、零崎黒識。お前を我が屋敷に招待しよう」

そう言うと、何やら地図を取り出して俺に渡した

「今週の日曜にでも来い。待っているぞ」

それだけ言つとさつさと帰ってしまった

「…結局アレ言つたためだけに来たのか？」

「そうなんじゃない？」

「まあ、取りあえずは今週の日曜に…てか明後日じゃん」

「それより、刹那がさつきからフリーズしてるんだが」

まだ固まってるのか刹那

「…其処までショック受けるようなことかなあ」

「…少なくとも私だったらショックを受けるだろうね」

「取りあえず、この事は誰にも言わないでくれないか？」

「いいよ。ただし、今度餡蜜を奢ってくれ」

「そんなことでよければ」

それだけはしつかり約束し、帰る事にした

刹那は俺が運び、途中で起きた時は顔を真っ赤にしていた

一応刹那にも口止めしといたから、話す事は無いだろう

そんなこんなで日曜日

地図を頼りにエヴァンジェリンの家に向かった

カランコロン、とベルを鳴らす

直ぐにドアが開き、中から茶々丸が出てくる

「いらっしやいませ、近衛黒樹様」

「エヴァンジェリンは居る？」

「はい、直ぐに呼んでいただけますので、ソファでくつろいで居てください
い」

そう促されてソファに座り、おかれた紅茶を飲む

部屋の中にはたくさんの人形が並んでいる

エヴァンジェリンは中々に少女趣味なんだろうな、と思いつつ紅茶
をまた飲む

エヴァンジェリンは直ぐに二階から降りてきた

「随分と速いな、来るのは昼ごろだと思っていたが」

「速いか？もう十時過ぎてるぜ」

本当は俺も寝ていたかったのだが、今さっきまで龍宮に餡蜜を奢っていたんだ

あいつ、俺が寝てると知っていながら連絡してきやがったからな

一遍ガチで殺り合おうかとも思ったが、思いとどまった

閑話休題

「それで、俺に何の用だ？」

「ついてこい」

「オイコラ、質問に答えろよエヴァンジェリン」

「エヴァで構わん。ついてきたら教えてやる」

結局そのままついて行き、地下室にきた

其処には球体の何かが置いてあった

「これは私の別荘だ、中に入るぞ」

俺は何か言う暇も無く中に連れ込まれた

其処はでかい城があり、周りは水平線しかない場所だった

「さて、お前には私と戦ってもらおう
ここなら呪いも効かないからな」

「何故俺が？」

「そんな物、お前の實力を見たいからに決まっているだろう」

そう言うと、指をパチンと鳴らす

音が鳴った瞬間、何か俺に向かって突っ込んできた

「ケケケケケケケケケケ！！」

チャチャゼロだった。ナイフを持って俺に突っ込んできている

俺はとつさに剣を練成し、防ぐ

キイイン！と、音が響く

「あつぶねえな、オイ！」

「ケケケ、ソノ割二ハシツカリ防イデルジャネエカ」

「条件反射って奴だ、よ！」

チャチャゼロを押し返し、俺はもう一本剣を練成する

そして最強の眼を発動し、構える

「フ、漸く本気になったか」

「いやいや、この位しないとやられそうなんでね」

「ほう。なら、私も本気でやらせて貰おう!!」

『魔法の射手 連弾・闇の五十九矢』!!」

魔法の射手が一斉に俺に飛んでくる

チャチャゼロはその合間を縫うように近づいてくる

いや、エヴァが当たらない様に撃ってるのか

魔法の射手をシャボン玉で相殺し、近づいてきたチャチャゼロを止める

其処から何度か剣をぶつける音が響くが、チャチャゼロが唐突に下がった

「『闇の吹雪』!!」

詠唱を終えたエヴァが呪文を唱える

「うおっ! あつぶねえ!!」

強力な魔力の奔流を避け、エヴァを攻撃しようと距離を詰める

「サセネエヨ!」

チャチャゼロが俺の行く手を阻み、また剣を打ち合う

「貴様に化け物の力というモノを見せてやろう!!」

『氷神の戦鎚』!!」

巨大な氷塊が俺に振って来る

「化け物の力？」

俺は右手に持った剣を捨て、『無』の力を使い、ただ右手を振るだけでその氷塊を消滅させる

「知ってるよ、そんな物」

俺の影が伸び、広がっていく

「俺も化け物だからな」

俺は笑い、影は巨大になり、無数の目や口が現れる

〈SIDE 三人称〉

「なん、だ…それは…」

エヴァは言葉に詰まる

六百年生きてきた吸血鬼でも、目の前の光景は見た事が無かった

「オイオイ、何ダコレハヨ。真祖ノ吸血鬼デアルゴ主人ガカワイク
見エルゼ」

ずぞぞぞぞぞ、と地面をうごめく影

其処には無数の目と鋭い歯を持った口があつた

「ハハハハハハハハ！どうした！化け物の力を見せてくれるんじや
なかつたのか！？」

ドッ！ と、影が動く

槍のように鋭く尖つた影はエヴァへと向かう

チャチャゼロはそれを食い止めようと立ちふさがるが、数の暴力に
は逆らえない

影はあつという間にチャチャゼロに巻きついて捕まえ、エヴァへと
また影を伸ばす

「『闇の吹雪』！！」

ドオオオオン！！

エヴァの強力な攻撃が影に当たる

だが、影は形を変えるばかりでダメージなど無い

「一体何なんだ！？その影は！！！」

黒樹はその問いに答えず、無数の影でエヴァを捕まえる

エヴァは黒樹を睨む

黒樹は唯不敵に笑うのみ

「これで終わりだ」

その言葉にエヴァは「やられる」と思い、目をつぶる

しかし、待っていても痛みは無く、目を開けると影が消えていた

「…何故止めた？」

「言っただろ。これで終わりだって」

〈SIDE 黒樹〉

「一体何なんだアレは!!」

エヴァがご立腹だ

まあ、いきなりあんなモン見せられたら誰だってそつなるだろうが

「まあ落ち着けよ。」

ほれ、深呼吸しろ、深呼吸」

そう言うとエヴァは深呼吸し始めた

意外と人の言う事は聞くんだね

落ち着いたところでまた俺に質問を投げかけてきた

「アレはな、俺だけが使える影の魔法だ」

「嘘をつくな。あんな出鱈目な魔法があつてたまるか」

即座に看破された

アレだ、戯言で固めようとしても俺には才能が無いらしい

しょうがないので嘘と真実の半々で話した

概要はこんな感じ

- ・俺は五年間謎の何かでこん睡状態にあつた
- ・目覚めたときからおかしな力が使えるようになった

とまあ、文にすると二行で終わる短さだが、うっかり本当の事を話さない様に気をつけなければならない

半分は本当だがな

エヴァはかなり考え込んでる

「…仮に……仮に、同じような事例があるとすれば、その話は信用できるが、同じような事例は無いのだろうか？」

「医者が言うにはな」

居たらそいつはまず間違いなく転生者だろうよ。俺とは違う何かの能力を持った奴だろうが

俺が言うのもなんだが、アライブの能力を選ぶ奴は俺ぐらいだと思ってる

まず知ってる人間から少ないしね

閑話休題

「ならその話は信用性に欠ける。

だが、お前がそれ以外の方法で影の力を手に入れた覚えが無いのなら、それしか可能性は無いんだろうが…」

「…何？まだ信じられないと？」

「当たり前だ！あんな出鱈目な力がそんな原因不明の何かで倒れたからって手に入るわけがないだろう！！」

ですよねー

「でもそれしか覚えがねえんだよ。しかも起きた日を境にこういう能力が使えるようになったわけだしさ」

そう言ってシャボン玉を作り出す

別にエヴァになら話していいと思ってる

刹那達はタイミングがつかめないだけで、話すつもりではあるんだがなあ

「…まあ、今のところはそれで納得しよう」

「で、結局俺を呼んだ理由は何な訳？」

「ん？そんなの決まってるだろ。实力を見るためだよ。予想以上に強かったがな」

「いやいや、本気では無いよ」

「何！？アレで本気では無いのか！？」

そりゃ俺が本気でやったら人類滅ぼせるからな

広瀬のように世界を否定することはしない

身内に手をかけた奴は容赦なく存在を否定してやるがな

「だって、俺はアレだ。相手によって戦い方を変えるからな。相手が前衛なら牽制しながら遠距離攻撃するし、後衛なら近づいて剣で攻撃したりするからな」

「…とことん出鱈目な奴だな、お前。魔法使いの常識が通用しないとは」

いやあ、全くだよ。自分で言っという何だが、この戦法使えるよね
だが、本気で殺す気なら『無』を連発すれば……地形が変わるのは
避けられんな

できうる限りは『無』は使わない様にしよう……人には、だが

「で、俺はもう帰ってもいいの？」

「そうだな、実力も見れたし、帰ってもいいが…

この別荘は一日経たんと出られんぞ
外の時間では一時間だから安心しろ」

「それまで何すんだよ」

「寝ればいいだろ。時間になったら茶々丸が起こしに行くよう言っ
ておいてやる」

「OK。お休み」

「速いな、オイ！」

「眠いんだ、今日は朝早くから起こされたからな
…八時という早朝に」

「それは早朝とは言わんわっ!!！」

その言葉を最後に俺は城に入って寝た

第五話 傲慢（プライド）（後書き）

はい、そんなわけで初めて使ってみました
プライドの影

使ってみて分かりましたけど、これもかなりチートですね
攻撃と防御を同時に行える上に数にも困らない

個人的に昼間に戦えばプライドって負けなかったんじゃないかと思
います

感想は常時募集中です。どんどん書いてください、待ってます

第六話 自分の事を話せる人が居るって良い事だと思う

第六話 自分の事を話せる人が居るって良い事だと思う

エヴァに解放され、別荘から出る

いつでも来ていいと言われたが、たぶん呼ばれない限り行かないと思う

偶に茶々丸に飯を作って貰いたい

料理を誰かに習おうかな

俺、基本的に簡単な物しか作れないからな

弁当は偶に作るけど、基本的に冷凍食品だし

前に木乃香に言ったら「ウチが兄様の分まで弁当作ったる」と言われたが、流石に悪いので辞退させて貰った

兄妹でも、兄が妹に頼りつきりって何か嫌じゃね？

とまあ、そんな考えに行きつき、取りあえず料理の本でも買ってみようかと本屋へよる

其処でまた千雨に会い、Uターンしようとして首を掴まれた

「酷いな、何をするんだ千雨」

ちなみに学校の帰りに寄る度に会うので、名前で呼ぶようになった
千雨は直ぐに手を離してくれた。

「人を見かけた途端に帰ろうとするからだろ。
今日は何を探してるんだ？」

「料理の本だよ。最近自炊しなきゃなって本気で思い始めたから」

「…驚いた、黒樹って料理出来るのか？」

「簡単な奴ならね。木乃香程では無いよ」

「比較対象が間違ってる。あいつの料理は其処らのレストランより
うまいから」

ちなみに千雨と木乃香は俺を通して仲良くなった

最近では部屋に遊びに行ったりもしているらしい

「そうか、それもそうだな。だが、俺は料理が出来なければなら
ないんだよ。」

一人暮らして中々大変だし、最低限料理のスキルくらいもつとか
ないと」

「……黒樹ってさ、人の顔見て話そうとしないよな」

「え？何を急に」

「いや、なんつーかさ、こつ、人の顔見るのを避けてるような、そんな感じがすんだよな」

…驚いた。其処までばれてたか

出来る限りは他人の心の傷トラウマなんて見たくも無いから、意図的に見るのを避けてたのに

まあ実際は見ると言つより感じると言つた方が近いと思うがな

「…まあ、その話は後々するとして、料理の本買ってくるからちよつと待つててくれる？」

「ん？構わないけど、話してくれるのか？」

「其処までばれてるなら話した方がスッキリしそうだからね」

それだけ言つて料理の本を探す

種類は何でもいいが、取りあえず和食系の本を買つ

その後、千雨と合流し、喫茶店へ入る

後ろから三人程付いてきてるが、取りあえずスルーの方向で

チラッと見た限り、木乃香を除く図書館探検組だろう

主犯は早乙女という事でFAだ

店員さんにジュースとクッキーを頼み、話し出す

「…で、何で人の顔を見るのを避けるんだ？」

「それはアレだ、俺は人の顔を見るとそいつの『心の傷』^{トラウマ}が見えるからだ」

「……………」

「や、本当だし、そんな目で見られても困るんだけど」

滅茶苦茶頭のおかしい奴みたいじゃないか

「…で、仮にそれが本当だとして、何で人の顔を見ない」

「だから、人の『心の傷』^{トラウマ}が見えるからだって」

その後、こんなやり取りが約五分ほど続いた

「…ハア、お前は女子校に通う男子って点を除けばまともな奴だと思っただけだ」

「まあまともでは無いよね。トラウマなんて見ても楽しくないし」

「…本当なのか？」

「…しょうがないな、ちゃんと話そう」

「初めから話せよ！」

「まず、俺は九年ほど前に入院した事があるんだ。理由は原因不明でね、遊んでたらバツタリ倒れちゃったんだ。その後、五年間昏睡状態だったで、起きて最初に見たのは刹那の顔だったんだが、その時に刹那のトラウマが見えたんだ」

「……えっ？本当の話？」

「もちろんだ。それから俺は人の顔を見るたびにそいつのトラウマが見えるようになったんだ
前触れもなく、臍に時に鮮明に、脳に直接再生される。絵・音・匂いなど、様々な形で人の心が抱えている闇が見える。
見ないようにしても、それは強制的に見えてしまうから、抗うには知らない振りをするしかない」

「…それはつまり、あたしのトラウマも見えたのか？」

「そういう事になるね。ただ、分かって欲しいのが一つ。これを見るのは俺の意思じゃない
別に信じてくれなくてもいいが、この事は他人に話さないでくれ」

「分かった…それで、仮にそれが本当だとして、あたしは何が見えたんだ？」

「興味本位で聞くのはやめた方がいい。
絶対に思い出さたくない事でも、それは俺には分からないから
うっかり話して克服した筈のトラウマが再発、なんて事になったら
面倒だ」

「…それでも、あたしは聞きたい」

「そう。ならいい。」

千雨の心の負の部分は、『人に異常だと言われた事』だ。俺はそれを言われているところが見えた。

多分だが、いじめにでもあった事があるのか？」

言った瞬間に千雨の顔色が変わった

やっぱ聞かせない方が良かったかな

「…それは、さ。あたしが、麻帆^{まほ}良はおかしいって言ったからなんだ」

「…どうして？」

「ここはおかしい。明らかに他のところの技術より、ここの技術が上回ってるのはおかしいだろ。」

世界一の技術とまで言われるような技術も、ここではありふれてるそれに世界樹だってそうだ、あんなにでかい木がギネスに乗らない筈無いだろ

それなのに、ここの連中はこれが当たり前だって言う。

ここの常識はあたしの異常で、ここの異常はあたしの常識なんだ」

「…なるほどね、それは確かにおかしいな」

俺はジュースを飲み、クッキーを掴む

「…お前もおかしいと感じるのか？」

「その話を聞けば、普通ならここに何らかの調査が入ってもおかしくない。

だが、事実それは全くない。

それはつまり、常識が非常識になるような『何か』があるってことだ」

「常識が非常識になるような『何か』…?」

「そうだな、ファンタジーに言えば『洗脳』といったところか」

「っ!!そんな事が、本当にあると思ってるのか!？」

「あるかどうかは問題じゃないさ。

要は常識が非常識になるような『何か』、それを調べればいい」

「…どうやってだ?」

「そうだな、科学的に見るなら麻帆良に人の意識に介入する装置でもあるんじゃないか?」

となれば、当然それは何かしらのエネルギーを使ってるわけだ」

「それはつまり、使用用途が不明の電力供給場所を探せば、その『何か』が見つかるんだな?」

「可能性はある、ってだけなんだけどね。

もし、その意識に介入する装置があったとしても、そのエネルギーが電力とは限らないわけだし」

「…どういう事だ?」

「科学的に見るなら機械、ファンタジー的に見るなら魔法と言った所だろう。」

機械は電力や熱で動くし、魔法だって言うならそれこそMPのようなものがあるだろうしね。

どちらにせよ、こんな広範囲で意識に介入してるわけだし、巨大なエネルギーを使っているんだろう

それだけのエネルギーは外部から供給しようとするればまず間違いなく何処かから怪しまれる

となれば、必ず麻帆良でエネルギーを生成している筈だ」

千雨はポカンとしている

「：お前って頭良かったんだな」

「いや、まあ、頭がいいってわけじゃないが、『麻帆良だから』で済ませるのはおかしいだろうって事も多々在るわけだしね
自分なりの考察ってヤツさ

ま、魔法なんて言ってる時点で現実離れしてるけどな」

「お前の『人のトラウマが見えるんだ』発言であたしの常識は崩れ去ったよ」

「アハハ、そりゃ良かった。じゃ、常識なんてモノに縛られずに『何か』を探してみるといい」

「ああ、そうさせて貰うよ。具体的な方法はまだ決まって無いけどな」

「そんなのはゴールデンウィークにでも考えればいいじゃないか。時間はたっぷりあるんだしさ」

「そうだな、そうする」

そのあと、ゆっくりとジュースを飲みながらクッキーを食べ、談笑した

…さて、あの三人組はどうしようか

千雨は早速調べてみるって帰ったから、近くの茂みに隠れてた三人を呼び出す

「いや、悪いね。ジュース奢って貰っちゃってさ」

「何言ってるんだ、俺は払わねえぞ？」

「え、このというのは男が甲斐性見せるもんでしょ？」

どこで聞いた、そんな事

「それよりさ、さつき千雨ちゃんと何話してたの？あたし達の距離じゃ聞こえなくってさ」

早乙女は唐突に隣に座っていた綾瀬にメニュー表でスパーン！と叩かれた

「そういうのは友達なら黙っておくものですよ、パル」

「そ、そうだよ。知られたくないことだってあるんだろっし…」

ちなみに宮崎は男性恐怖症の筈だが、俺の見た目がほぼ女なので大丈夫だそうだ

俺は喜んでいいのか悲しんでいいのか分からない

俺はジュースを飲みながら話す

「ズズツ……千雨とは本屋でよく会うくらいだな。お勧めの本とかを教えてもらってる」

「ほう…本に興味は御有りですか？
なら、私達と一緒に図書館島に行ってみませんか？」

「…そういや、俺一回も行った事無いな。図書館島」

「そーなの？いっぱい本があって楽しいよ、それに木乃香だって図書館島探検部の一員だし。」

今度の日曜と一緒に図書館島に行く約束してるしね」

「よし、俺も連れてってくれ」

「……木乃香さんが絡むとついてくるんですね」

「いやいや、そういう訳じゃないが、図書館島には興味がある。今度案内してくれ」

「いいよいいよ、オッケーだよ！じゃ、ここ払ってくれない？」

ちやっかりクッキーまで頼んで、それをつまみながら早乙女が言う

他二人は控え目で何も頼んでいない

「…いいだろ、今回は特別だ。綾瀬と宮崎も何か頼んでいいぞ？」

「ホントですか？ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます」

「ちゃんと木乃香には黙っててあげるよ！」

「何故其処で木乃香が出てくる？」

「え？だって黒樹君ってシスコンでしょ？」

俺は迷い無くおいてあったメニュー表で早乙女をスパーン！と叩く

「いったいなー、何か変な事言った？」

「自業自得ですよ、パル」

「…っーかさ、俺ってそんな目で見られてんの？」

「そーだよ？多分半分くらいはそう思ってるんじゃないかな？
後は桜咲さんとの交際とかも噂されてるよ」

マジか

俺そんな行動とったかな？

朝、木乃香、刹那と一緒に登校

昼、木乃香、刹那と一緒に昼食

放課後、本屋に行く

…うわぁ、自分の行動を改めて客観的に見ると、これはしょうが無い、と思ってしまう

休み時間は流石に一緒にはいないが、基本的に一緒だからな

「…ん？でも、それなら木乃香がブラコンって可能性は無いの？」

「それはもう二一Aほとんどの共通認識になってるですよ」

「…ああ、そう」

「なーに落ち込んでんの、いいじゃない木乃香。料理は上手だし、家庭的で」

「それでも一応言っておくが、妹だぞ？」

「だよなー、と早乙女は笑いながらジュースを飲む

「ちなみに残りの半数は普通に仲のいい兄妹として認識されてますよ」

「いや、それが普通だと思う。仲いいだけでやれシスコンだ、やれブラコンだって言われてもな」

「そうですね、流石に一線越えたりはしないでしょ」

「当然だ、流石に其処までは行かない」

「つか普通の兄妹で一線越える事って無いだろ

それこそ漫画じゃあるまいし

「じゃあさ、桜咲さんとの交際疑惑は？」

「俺は誰とも付き合っていないよ」

「なーんだ、つまんないな」

誰かと付き合っていたとしてもこいつにだけは絶対に教えないけどな

後、パラッチの朝倉にも

こいつらにだけは絶対教えたくない

嫌いじゃないが、相手をするのが面倒だからな

夕方になり、暗くなり始めた時間

「さて、そろそろ帰るか」

「そうですね、もう外は暗くなり始めてるです」

「いや、悪いね。奢ってもらって」

「構わないよ、その代わりちゃんと案内しろよ？」

「分かってるって、じゃあね、黒樹君」

「また明日、です」

「さ、さようなら」

三者三様とはよく言ったものだ

実際は俺を含めば四人だが

それはまあどうでもいい

三人は俺に手を振って寮へ帰って行った

ああ、明日は学校か。面倒だな

第六話 自分の事を話せる人が居るって良い事だと思う(後書き)

はい、今回は戦闘なしです

日常は書いてて楽しいですね
いろんなキャラが出せますから

感想は常時募集中 待ってマース

第七話 連休は俺にとって休みにならない・前半

第七話 連休は俺にとって休みにならない・前半

五月

それはゴールデンウィークという素晴らしい休みの連続がある

そして俺はそれを存分に使って寝ようと思っていた

だが、いろんな奴の邪魔によって結局ほとんど休みにならなかった

ゴールデンウィーク一日目

今日は水曜

今年のゴールデンウィークは水曜から三日間が祝日になり、土日も挟んで実質五日間休みだ

そんなわけで昼過ぎまで睡眠を取ろうと寝ていたのだが、どうやってか分からんが

刹那と木乃香が俺の部屋にいた

「兄様、今日は一緒に遊びにいこ」

「俺は寝ていたのだがマイシスター」

「駄目や、今日は一緒に遊びに行くんや」

「拒否権は？」

「無いで。せつちゃんも一緒にいくんやし、ええやろ？」

「…しょーが無いな。ところで、どうやって部屋に入ったんだ？」

「おじいちゃんに頼んで合鍵貸してもらたんよ」

「…後で説教だな。まあいいや。ちなみにどこ行くの？」

「近くの商店街でショッピングや」

「分かった、準備するからちょっと待っててくれ」

そして着替え終わり、財布や携帯などを持って出かける

商店街にて

沢山の店が立ち並び、沢山の人がいる

商店街には服屋、食品店、その他いろいろな店がある

「こんなにいろんな店があるんだな」

「黒樹様は商店街には行かれないのですか？」

「基本的に本屋とスーパーだけだ。後は寝てる」

「ずっと寝とつたらアカンよ、兄様」

「そう言われてもな、眠い物は眠いんだ」

「今日もウチが部屋に行くまでずっと寝とつたんやろ？
昨日何時に寝たん？」

「昨日は十時ごろ寝たな」

昨日は俺はシフトじゃ無かったし

「ウチらが来たんは十時前やで、十二時間近くは寝とるやん」

「俺はいつまでも寝れるんだ。俺の特技だぞ」

「いくらなんでも寝過ぎや、ほら、あっちの店にはいる」

そう言つて刹那と俺の手を引っ張りユニ　口に入った

よくよく思つてみると誰が金払うんだろ

多分俺だろうけど

裏の仕事なんかで金は結構ある、それでも出来るだけ無駄な出費は
避けたいが、まあいいや

言つても無駄だろうし

「これなんてどうや？」

そう言って持ってきたのは所々にフリルのついた白いスカート

「いいんじゃないか？あつてると思うよ」

その後何着か服を選び、やはり俺が金を払う事になった

…あとで銀行で金おろしとこう

そうやってまたいろんな店に入り、何着か買う

昼には近くの洋食レストランで食べ、現在公園にいる

のだが

「なあなあ、君達かわいいよね。俺らと一緒に遊ばない？」

何故こうなる

しかもこいつら『君達』とか言いやがったんだが、俺も含まれてんのか？

ナンパするなら女にしるよ

いくら俺が女に見えるからって、流石にナンパされとは思わなかった

「困ります、私達は用事があるので」

「そんなこと言わずにさ、俺達と遊びに行こうぜ」

俺が女だと思われてんのは俺が喋らないからだろうか
刹那がチラチラこっち見てるし、助け船を出そうかね

「何処に行くんだ？」

「それは…ん？何でそんなに声が低いんだ？」

「なあ、もしかしてこいつ男じゃねえの？」

「マジかよ、こいつ見た目ほぼ女だぜ」

「ちっ、何だよ。つまんねえな、男連れか」

それだけ言うときささどっかに行った

「兄様、見た目女で言われとったな」

「心外だよ、まったく」

「髪を切るとかすればいいんじゃないでしょうか」

「そーだなあ、考えとくわ」

その後、また買い物しにうろつき、帰ったのは五時過ぎだった

…今日だけで結構金使ったなあ

具体的には五万位

木乃香には金額は教えて無いけど

その後爺に説教をくらわせ、就寝

ゴールデンウィーク二日目 木曜

今日こそは昼過ぎまで寝ると言う願望を持って寝ていたが、龍宮から電話があり「餡蜜奢ってくれ」と言われた

しかも電話口で少し笑ってたし、俺が寝てると思って電話をかけてきたんだろう

あの野郎、マジで一遍殺り合う必要性がありそうだ

だが何故餡蜜を奢らなければならない？

この間一回奢っただろう、といたら

「別にもう一回位いいじゃないか、知られたくないんだろ？」

あの野郎

脅してきやがった

しょうが無いのでわざわざ喫茶店まで足を運んでやった

カランと言う音が鳴りながらドアを開け、龍宮を探す

一番奥の席で、近くには誰も座って無い

聞かれたくない話があるなら絶好の場所だろう

「…不機嫌そうだね」

「開口一番それかよ。お礼の言葉でも述べてろ」

そう言っただけに座り、喫茶店のモーニングセットを頼む

「朝食は食べて無いのかい？」

「待ち合わせ場所がここだって聞いたからな。俺は休みの日は常連だ」

これはホントの話

休みの日は料理なんて作るのは面倒なので喫茶店のモーニングセットで済ませてる

おかげで店員とは顔見知りだ

ちなみに喫茶店の名前は『茶茶』

いろいろと思う事はあるが、取りあえず馬は飼っていないが店員さんの一人の名前は春花さんらしい

「つーか何でまた奢る事になってんだよ」

「しつこいな、いいじゃないか二回奢っても」

「お前は二回目がありそうだから嫌なんだがな」

「酷いな、流石に三回目は無いよ」

「言質取ったからな」

そんな事を話してるうちにモーニングセットが運ばれてきた

龍宮は二杯目を頼んでいる

「そんなに食べると太るぜ」

「大丈夫さ、発育に役立ってるから」

「其処からまだ育とうとするか」

「セクハラで訴えるよ？」

「お前が言いだしたんだろ」

何故俺が訴えられなければならんのだ

「……それより、聞きたい事があるんだが」

「あん？何だ？」

「君の左目の事だよ。一体どういう仕組みなんだい？」

普段は普通の目なのに、突然ウロボロスの模様が浮かびあがるなんて

「ああ、その事。アレは簡単に言えば魔眼なんだよね」

今思い出したけど、直視の魔眼も一応使えるんだよね

使う機会なんて絶無だけでも

「魔眼かい？私の左目も魔眼と呼ばれるものだが、それとは違うのか？」

「お前の持つ魔眼が何かは分らんが、俺のは任意で切り替えが出来る。

中々に便利だぜ、銃弾でさえも見切る事の出来る眼つてのは」

「私の魔眼は説明するのが面倒なんだ。私も任意での切り替えは出来るよ。

しかし、銃弾でさえも見切るとはね、私の天敵じゃないか」

「実際には避けれるだけの身体能力も必要だがな」

「君の身体能力は嫌というほど見せられてるよ」

そりゃそうだ、何度も一緒に鬼を撃退してるからな

「今でも驚いているんだよ。あの零崎と一緒に仕事をしていると言
う事がね」

「そんなに驚く事か？」

「…君は自分がどれほど有名人か知らないのか？」

知っている人しか知らないが、正体不明の殺人鬼として裏の業界では一時期大騒ぎだったよ

『ヤツを敵に回せば死体も残らない』って言われてたしね」

「まあ、確かに処分に困った事は無いな」

無、もしくはシャボン玉で消すからね

「後は穴だらけにされた建物とかも有名だよ」

交番じゃないよ？とある暴力団のアジト

今じゃ組員は残って無いが

「用件はこれで終わりか？」

「まあね、聞きたい事は聞けたし、餡蜜も奢ってもらえたし、これで話しは終わりだ」

金を払った後、さっさと帰って寝ようと思ったところに電話がかかってきた

着信を見ると、超鈴音だった

アレエー？俺電話番号教えたかなあ？

取りあえず電話に出る

「何の用だ？」

「ちょっと話したい事があるネ、昼頃でいいから麻帆良大学工学部に来て欲しいヨ」

「夕方になってもいい？」

今から寝ると確実に五時間は寝続けるだろう

ちなみに今は十時過ぎ

「できれば一時ごろ来て欲しいネ」

「…まあいいか。分かった、一時頃だな」

電話を切つて寮へ帰る

帰ってタイマーをセットし、爆睡

十二時ジャストにタイマーが鳴り、起床

カップ麺を食べ、麻帆良大学工学部へと向かう

工学部の研究室の一室

超と葉加瀬が部屋の中に居た

「やあやあ、よく来てくれたネ」

「お前が呼んだんだろ。つーか何で俺の携帯の番号知ってる」

「それはご都合主義という奴ネ」

「話せ」

「龍宮さんに聞いたヨ」

即座に口を割った。

龍宮め、人の番号を勝手に教えんなや

マナーが守れてないな、全く

「で、何用？」

「実は、私は火星人兼未来人ネ」

「へー、そうなんだあー」

「…いくらなんでも棒読み過ぎるヨ」

「だって興味無いしな」

俺も半分宇宙人みたいなもんだし

「で、その宇宙人兼未来人は俺に何か用なの？」

「うむ、私は歴史を変えるために、二十二年に一度の世界樹の大発光の魔力を使い世界中に強制認識魔法をかけて

魔法の存在を全世界にバラそうと思っっているのだが、手伝ってもら

えないかな？」

「何故俺が？」

「あなたの実力は未来でも歴史に残る程ヨ
だから、あなたは敵に回したくない」

へー、俺ってそんな有名人なんだ

「面倒だからヤダ」

「…そんな理由で断られるととても複雑な気分だヨ」

「歴史を変えたきや勝手にやればいい、俺は魔法使いじゃないし、
別にどうなるうと関係ないしね」

「えっ？黒樹さんって魔法使いじゃないんですか？」

「まあね、俺魔法は使えない事は無いけど使わないよ」

だって始動キーとか考えるの面倒だし

「黒樹サンは錬金術師ネ。

未来世界において『究極の錬金術師』の名がつくほどの実力者ヨ」

オイ、そんなの聞いたことも無いぞ

「錬金術？」

「うん。錬金術とは、物質の構成や形を変えて別の物に作り変える

技術と、それに伴う理論体系を扱う学問の事ヨ」

「……俺、誰にも錬金術の事を話した事無いんだけど」

この世界にも錬金術は一応あるが、俺が使ってるのとは全く違うモノだった筈だが

「未来世界ではあなたがこの学問を広めた事になってるヨ」

へー、俺が学問をねえ

そんな面倒な事をするとは思わなかった

「ちなみに何故に『究極』の二つ名がついたんだ？」

「錬成陣さえ用意せずにノーモーションで錬金術を使うからヨ」

なるほど、納得

しかし、錬金術を知ってるってことは、人体錬成とか賢者の石とか知ってるのかね？

「『賢者の石』ってのに心当たりは？」

「一応存在は知っているが、あくまで知識としてだけヨ
実際に存在しているかさえ怪しい物だからネ」

…納得

しかし、賢者の石を作ろうとするやつが出てくるかも知れないんだ

よなあ

「なら『真理の扉』ってのは？」

「それも存在が曖昧ネ。この世の何処かにある、錬金術師の到達点とも呼ばれているヨ」

なるほど、人体練成した奴はいない訳か

いたとしても帰ってこれないだろう、帰ってきたとしてもその結果は誰にも教えようとしないだろう

『真理の扉』は完全に間違った解釈だが、どうでもいいか

「ところで、話が終わったなら帰ってもいい？」

「いやいや、錬金術の開祖とも呼ぶべき人が目の前に居るんだヨ？この機会に錬金術を教えて欲しいネ」

「お前勉強してないの？」

「さわりの部分は勉強したが、流石に練成出来るまでには至って無いヨ」

「…さわりってどの位？」

「知識はあるヨ。ただ、それを練成陣に書いて練成する技術を知らないネ」

「なんでそんなに中途半端なんだ。」

それに俺は帰って寝たいんだが」

やはり二時間程度じゃ寝た気がしない

「駄目ヨ、しっかり教えてもらっネ」

その後、三時間ほどかけて漸く帰る事が出来た

二人とも練成陣をしっかりと確認しておけば、軽くなら錬金術が使えるようになった

ちなみに金属系の錬金術だ

連休二日目にしてこの不幸

俺の不幸はまだ続く

第七話 連休は俺にとって休みにならない・前半（後書き）

はい、前後篇です

長くなりそうだったので二つに分けました

第八話 連休は俺にとって休みにならない・後半（前書き）

明日から高校なので、投稿は週一位のペースになります

そして今日高校まで自転車で往復し、帰ってくるときに目にゴミが入り、最終的に眼科にお世話になりました

何という不幸…

執筆に少し影響が出るかもしれませんが、なにとぞご容赦ください

では、第八話です

第八話 連休は俺にとって休みにならない・後半

第八話 連休は俺にとって休みにならない・後半

ゴールデンウィーク三日目 金曜

この日は早朝に爺に電話で侵入者の捕獲を依頼された

侵入者め、俺の安眠を邪魔するとは…

しかも俺に仕事が回ってくるとは…

四肢を弾いて学園長室に投げ込んでやろうか

という訳で朝の四時から搜索してありました侵入者、図書館島の近くに居ました

出会いがしらに電撃をくらわせ昏倒

正直運ぶのも面倒だから洗脳して学園長室に言って全部自白させた

そして俺は帰って寝ようと思ったところでまた電話

一体何なんだ？

アレか？俺の睡眠を邪魔しようとするんでは？

っ！か今五時だぞ。普通に掛けてもスルーするわ

でも起きてるので出る

「まさか本当に出るとは思わなかった」

「エヴァか、何の用だ？イタ電なら切るぞ」

「お前錬金術って技術が使えるんだってな」

……え？

「…何で知ってんの？」

「茶々丸から聞いた。教えてもらおうと思ってな、ついでに悪戯代わりに早朝に電話をかけてやった

でないだろうと思ったんだが、出るとはな」

「今日は朝っぱらから侵入者が出たんだよ。俺はそれの始末をしてんのさ」

「なら丁度いいだろ。そのまま私の家に来い」

それだけ言って切りやがった

周りの森ごとエヴァの家を隔離してやるのかな

大騒ぎになるだろう

つてか、吸血鬼って窒息で死ぬのか？

まあ多分気付いて魔法を連発するだろう

登校地獄はともかく、麻帆良結界の方は確実に防げるわけだし

そんなことを考えながら歩き続けてエヴァ家ナウ

ドアを蹴破ってやるつと振りかぶると、蹴る前にドアが開いた

「……………何しているんだ？」

「蹴破ろうとしたら蹴る前に開いたんだよ！」

つーかまさかエヴァがドアを開けるとは思わなかった

「蹴破るなよ…茶々丸は今ちょっと出ているんだ」

「こんな朝っぱらからかよ」

「なんでも、超と葉加瀬が錬金術の練習をしているとか言ってるな、検査の筈なんだが、実験台になってるような状態らしい」

それはそれはご愁傷様だな

「で、錬金術とは何だと問いただしたらお前が未来で広めた技術らしいじゃないか」

「それで俺に錬金術を教えろと？」

「そういう事だ」

俺はUターンして帰ろうとする

「ちょっと待て、何故帰ろうとする」

「だってめんどくせえし、そもそもお前の知ってる錬金術とは全然違うぞ？」

「だからこそだ。そういう技術があるなら知っておいて損は無い」

「ゲーム機が壊れても修理できるからか？」

「そんなことに使うかっ！！」

エヴァはいい反応するなあ

弄りがいがある

「取りあえず教えろ」

そのまま引つ張られて別荘の中へ

「あ、そうだ。」

俺の成長と外の時間が合うようにする道具とか在ったら探してくれ。

無駄に年取りたくないからさ」

「分かった、何とかしよう」

これ以上は何を言っても無駄そうなので、錬金術の基礎を教えてやった

茶々丸が戻ってきたので、取りあえず茶々丸にも教える事にした

茶々丸に教えるのは錬丹術だが

エヴァが外の時間が六時くらいになった時に漸く錬金術が軽く使えるようになった

基礎を詰め込むのに一週間程度の時間がかかったがな

それでもこの時間で出来るようになるとは思わなかった

地面に練成陣書いて発動させてもちっちゃい物体を作るのが関の山だったが

ちなみにエヴァも金属系

茶々丸は流石にまだ出来て無い

晩飯はエヴァの家で食べ、結局帰るのが八時ごろになり、俺は寮監に怒られた

ゴールデンウィーク四日目 土曜

また早朝から電話だよ

まだ十二時……じゃない零時じゃん

日付変わったばっかじゃねーか！

こんな夜に電話かけてくるバカは誰だと電話にかかる

「黒樹、明日……つーか今日、話があるから予定あけといてくれ」

「はぁ？何だよいきなり」

「取りあえず明日は話があるんだよ、朝寮の方に迎えに行くからな」
それだけ言って電話が切られた

何だったんだ？

取りあえずは寝る事にする

ダンダンダン！！

いきなりドアを叩く音がした

びっくりするじゃないか、いきなりドアをたたくとは

眠気と戦いながらリビングに行き、玄関へ足を運ぶ

一体何なんだと思ってドアを開ける

「あれ？千雨じゃん。何してんの？」

「何って、昨日電話で言っただろ。話があるって」

アレは千雨だったのか。納得

何に納得したかは俺も良く分からんが

「取りあえず準備出来るまで部屋に入って待ってる」

千雨をリビングに通して俺は自室に着替えに行く

今更だが、俺の部屋は三室くらいある

元は二人部屋らしいが、爺が特別に一人で使わせてくれる

さっさと着替えてリビングに行く

「黒樹の部屋って何も無いよな」

開口一番にソレか

リビングにあるのは大きめの机とテレビ位だ

広さは十畳くらいの大きさ

ぶつちやけ一人で使うには少し大きい気もするが。

後は本（料理関係、千雨お勧めの漫画とライトノベル）とゲーム

ごちゃごちゃしてるのは嫌いだから、シンプルにまとめてある

それはともかく

「話って何だよ」

「…実はさ、黒樹に言われているいろいろ調べてみたんだよ。麻帆良についで」

ああ、この間言ってたね。そう言えば

「有ったんだよ、おかしな物が。ハッキ…いろんなところアクセスして調べて、

その名称が『麻帆良学園結界』って書かれててな、これへの電力供給は麻帆良だけでされてるんだ」

…おいおいおいおいおいおい

麻帆良学園結界で、バカかここの魔法先生共は。

安直過ぎるだろ、てか見られたらあやしきバリバリじゃん

つかハッキングしたのかよ。いや中学生に破られるようなセキュリティってヤバくね？

普通こついう機密情報は高度なセキュリティでブロックされてる筈

だろ

今回みたいに見られたらどうすんだ

「これだけ調べるのにはちょっと時間を食われたけどな」

…千雨が規格外過ぎるのかな？

まあ、ここまで知ったなら、巻き込んだがいいかもね

「それで、何で俺のここに来たの？」

「お前なら何か知ってるんじゃないかと思ってさ。

あたしにあそこまでの確なアドバイス出来るんなら、初めから知ってたんじゃないかって思ったんだ」

「…もしかしたら、俺は千雨の敵かも知れないよ？

情報を知れば殺すかも知れないのに」

「教えるつもりが無いならアドバイスなんてしないだろ」

「…ま、そうだよな。いいよ、教えようか」

「それで、ここにはどんな秘密があるんだ？」

「この世界には魔法がある」

…千雨の目が辛い

頭のおかしな奴みたいな感じなんだけど

「本当さ。言っただろ、ファンタジー的に言うなら『洗脳』だって」

「…まさか、本当にそんな物でこの常識が揺らいでいるのか？」

「ああ、千雨が調べ上げた『麻帆良学園結界』ってのはそういう効果がある

だが、千雨にはこれが効かなかった
だから他の奴と常識が違うのさ

この現象は麻帆良に居る限りは続くだろう」

「……マジか……」

脱力して後ろに倒れ込む

「もちろん魔法使いも居るよ」

「…黒樹も魔法使いなのか？」

「そ。でも、一応使えるってだけで、俺は魔法使いとは少し違うけど」

千雨は？を浮かべているが、其処はスルーだ

「其処は後で説明しよう

それで、千雨には二つの選択肢がある

一つ目はこの記憶を消して一般人として過ごす。これは其処ら辺の魔法使いの常套手段だ

二つ目はこの事を知ったままこちら側に関わる。この場合、俺が安

全に過ごせるだけの技術を与える
使えるかどうかは千雨次第だ」

其処から十分ほど悩んで答える

「あたしはあたしの記憶が偽物だと疑いたくない
巻き込まれても大丈夫なようにしてくれ」

「オツケー。じゃ、君には錬金術を教える」

「錬金術？魔法じゃないのか？」

「魔法がいいならそっち方面の師匠を紹介するけど、俺が教えられるのは錬金術だけだ」

エヴァは嫌がりそうだが、錬金術の技術と等価交換でいこう

「…いや、錬金術でいい。お前が教えるってことは最低限身を守れるってことだろ？」

信用してくれるのか

いい子だよな、千雨って

「ま、その辺は千雨次第だ。真面目にやればちゃんと出来るし、真面目にやらないなら全然できない」

「真面目にやるさ、何せ命がかかってるんだからな」

「うん。まあ、そうだな。取りあえずエヴァの家に行こう」

「何でだ？」

「あいつも魔法使いだからな。後、ちょっといろいろ用事があるんだよ」

そして千雨を連れてエヴァ家なう

「別荘貸してくれ」

「…何を急に言っているんだ？」

「実は、かくかくしかじか、という訳で」

「オイ、それで通じるわけが…」

「なるほど、長谷川に魔法がばれたのか」

「通じた!？」

ネタばらしすると、念話で伝えたから分かるだけだが

ここまでいい反応されると面白いね

「それで私の別荘を使って修行させたいと言っ訳か」

「そういう事だ。エヴァにもちゃんと教えてやるから安心しろ」

エヴァはニヤツと笑って答えてくれた

「いいだろう。しっかり教えるよ？先生」

別荘なう

入るときに千雨が驚いたが、『魔法があるならこつこつというのがあってもおかしくない』って言うてくれたよ

流石に慣れが速いね

「さて、俺が千雨に教えるのはこれだ」

手袋をし、パチンと指を鳴らし、ドオン！と小規模な爆発を起こす

「…………え？何今の？」

エヴァも啞然としてる

魔力を使ってないからだろうか

「今のは『焰の錬金術』だ。千雨にはこれを使ってもらおう」

「指パッチンで爆発起こせるのかよ……」

「錬金術とは規格外だな……」

無詠唱で魔法の射手の弾膜張れる奴が何言ってるんだか

ちなみにしつかりコピーさせて貰った

「練成陣さえあればこういう事が出来るようになるんだ。
ま、がんばれ」

その後、時間をかけて錬金術の基礎をたたき込んだ

流石に直ぐには使えるようにはならない

エヴァは元々化学に関しては知識が豊富だったから出来た事だ

六百年の歳月は無駄では無い

ゴールデンウィーク五日目 日曜

朝、不法侵入してきた木乃香、刹那、早乙女、綾瀬、宮崎が俺を起
こそうとしていた

ぶっちゃけスゲー眠いわけで、今日は一日中寝ようと思っていたの
だが

「兄様、起きてや」

「うん、後五ね…やっぱり起きる」

あつぶねえ!!

危うく木乃香のトラウマ起こすところだった!

刹那は今のを聞いて軽く顔が引きつってる

という感じで起きる羽目になった

「あ、やっと起きた。早くしないとおいでくよ?」

「……何故ここに居るんだ?」

「え? 忘れたの? あたし達が図書館島を案内してあげるっていったじゃん」

あ、してたねそう言えば

すっかり忘れてたよ

「…取りあえず着替えてくるからちょっと待っていてくれ」

それだけ言って部屋へ戻り、着替える

「それじゃ、いこ」

テンション高えなコイツ

適当な雑談しつつ歩き、二十分程で着いた

中に入ってまず一言

「でけえ〜」

「フッフ、驚いた〜？黒樹君」

「ああ、驚くなこれは」

何という蔵書量だ

しかも奥には滝があるし

「よし、じゃあレッツ探検！！」

そういうと俺の腕を引っ張って奥へ

俺は地上で安全に本を読みたいのだがなあ…

ここは地下三階

中学生が入っているのはここまでらしい

その割にはいろんなところにトラップが仕掛けてあるが…

トラップは木乃香がトラップが発動させる前に装置ごと隔離してる

でも、そもそもこのトラップに慣れてるようであんまりかからな

いが

それはともかく、早乙女や綾瀬が次々と俺の手元に本を持ってくる

「こっちのこの本とか珍しいよ」とか

「この本は面白そうですよ」とか

珍しいとか面白そうって理由で俺んところに本持ってくんなや！

おかげで俺の周りに本の山が出来てんぞ

「兄様、ちょっとコツチ来て〜」

「はいはい、何だよ木乃香」

「あの本取って欲しいんやけど」

木乃香が指差したのは棚の上の方にある古い本だった

「ほいっと、これか？」

俺は近くの梯子を持ってきて取る

「うん、ありがとう兄様」

「いいって」

そのやり取りを早乙女、綾瀬、宮崎の三人がじゅっと見ている

「……何？」

「いや、別に？仲いいな」と思ってた

ニヤニヤしながら早乙女が言ってくる

この位普通だと思うんだが…

「ウチは兄様の事すきやで」

そう言っただけで抱きついてくる

そう言ってくれるのはうれしいが、早乙女のニヤニヤが暴走し始めてるぞ

「俺も好きだぜ、木乃香」

俺も反射的にそう返してしまった

気持ちとしては間違っていないが、こいつらの前って言うのが何かヤダ

宮崎は顔を真っ赤にさせて俺達の方を見ている

綾瀬は手で顔を隠しながらも指の隙間から見ている

刹那は慣れてるようで、いつも通りだ

早乙女はニヤニヤしながら携帯で写メるつと…

「ってちょっと待てや!!何写メろうとしてんだ!？」

「いや、これは残しとくべきかな、と思って」

「いいんだよ別に残さなくても!」

あんなモン流されたら困るわ!

羞恥心で死ねる

「ええやん別に。ウチらの仲がええだけやる」

「それはそうだが、早乙女に取られるのが何かヤダ」

「ひどっ!！」

「自業自得だと思いますよ。パル」

その後、昼飯はやはり俺が奢る事になった

昼飯を食べた後、また図書館島に向かっているんな本を読んだ

今度最下層まで行ってみるか

ドラゴンも見てみたいし、アルビレオ・イマにも会ってみたい

第八話 連休は俺にとって休みにならない・後半（後書き）

ゴールデンウィークネタ

作者はゴールデンウィークは忙しくなりそう（おもに高校の事で）
なので、早めに書いてみました

明日が入学式ですので、土日は投稿出来ればいいなというところでは

感想は常時募集中です

どんどん書いてください、お願いします

第九話 祭りのときはハツチャケる奴が多い(前書き)

ストックしておいた物です

第九話 祭りのときはハツチャケる奴が多い

第九話 祭りのときはハツチャケる奴が多い

六月

梅雨の時期だ。

じめじめしていて湿気がある

しかし、俺としては空気中の水分を使って『氷の爪』の本質的な能力である『物を凍らせる』という能力の実験をしていた

心臓を使って強力になってるから、氷の爪以外にも変形させたり、いろいろ楽しんでいた

大紅蓮氷輪丸とか、冥府の石柱氷バージョン（『冥府の氷柱』と名付けよう）とか

ノリでやったら出来たんだよね。ビックリしたよ

大量の水が必要だが、雨降ってればあまり関係ないし

その後派手に実験し過ぎて爺に問い詰められたが、適当に嘘を吐いて帰ったりした

六月

中間テストがあった

理系など勉強せずとも満点だ！錬金術の知識ってホント便利

文系はスルーで、平均点取れるから。だって仮にも転生してる訳だしね

千雨とかは理系の勉強がそのまま錬金術につながるって言うたら真面目に勉強しだした

椎名桜子はありえない

あいつ選択式の問題勘で全問正解してるからな

1/1000000の能力とか持つてるんだろうか

でも当たらない時もあるらしいしなあ

そして髪を切りました。長さは腰までであったのが肩くらいまでバツサリと

次の日クラス全員に驚かれたがな

六月

麻帆良祭だア！！

俺達のクラスはメイド喫茶らしい

木乃香と刹那から教えてもらった

俺の知らない間に決まっていたがな

知らない間ってのは、学校に来て席についてアイマスクをして寝ている間の事だ

相当大騒ぎして新田に怒られたらしいが、俺は寝ていたので知らんついでに説教も寝ていたので聞き流している

俺は女装をさせられそうになったが、執事服を着ると言う事で妥協した。というかさせた

さて、原作では告白がどうのという奴があったが、あれは22年に一度の現象であり、今回は仕事が無いため、麻帆良祭を楽しませて貰う事にした

〈麻帆良祭 一日目〉

「……で、何故俺はこんなことになっているのだろうか？」

「何故って、それはお前が暇してるだろうから私が一緒に行つてやるうと思っただからだか？」

この吸血鬼幼女め…

朝いきなり押しかけて来たと思つたら、

「お前暇だろ？一緒に回るぞ」

と、言われて連れまわされる始末

正直いつもの喫茶店でのんびりしていたい

「すみません、マスターが迷惑を…」

「ああ、いいよ。もう慣れたから」

俺は順応が速いのだ

「で、俺を誘うと言う事は行くところでもあるのか？」

「いや、特に無い。お前を誘ったのもなんとなくお前は暇してそうだったからだ」

この幼女！！

一遍消し炭にしてやろうか！

「お前のシフトは昼だろ。朝は私に付き合え」

そしてエヴァに引きずられ、まずは仮装させられる

適当でいいかな、と思ってバーテンダーの服を着る

服のイメージは某池袋の喧嘩人形

エヴァ曰く、「意外と似合ってる」「らしい

エヴァはどこぞのお姫様のようなゴスロリ服

茶々丸はメイド服だ

そのままライドアトラクション、ギャラクシーウォーというシューティングゲームに付き合わされた

俺は五百十点という高得点をたたき出した

魔眼なめんな！ばれないように使うのが大変だったわ！

エヴァにセコイと言われてしまったがな

その後、いろんなアトラクションを回り、腹が減ったと言う事でデキトーに昼食を食べ、

俺は2 - Aの出し物であるメイド喫茶（俺は執事）に行った

そして2 - Aのクラスへ行くと

「あ、やっと来ましたわね」

雪広が待ち構えてた

「やっと来た、て…俺のシフトはもう少し後の予定だろ？」

「それが、宣伝にあなたの写真も使ったら、あなたを見たいという要望がとても多くてですね…」

黒樹さんには少し長めに入って欲しいんです」

ああ、そう言えば宣伝用とかいって朝倉が写真取ってたな
てかメイド喫茶なのに俺目当てで来るやつがいるのかよ

「早めに入っていただけですか？」

「ああ、うん。大丈夫だ」

俺はさっさと着替え、ホールに入る

メイド服オンリーの中に執事服は少し合わない気がするが、まあいいや

ホールに出たらどこかから『キャー』とか聞こえたが、其処はスルーだ

俺は女性客の相手をしると言われたので、そっちに行き

「いらっしやいませ、お嬢様方。

ご注文は何でしょうか」

「あ、えっと、コーヒーとケーキをお願いします」

「私もそれで」

「はい、コーヒーとケーキを二つずつですね。
かしこまりました、少々お待ちください」

そう言つて厨房に行き

「コーヒーとケーキを二つずつ、早めにな」

其処には啞然とした顔でこつちを見ていた厨房組（早乙女、明石、那波、村上）がいた

「…どうした？」

「いや、黒樹君つてこういうの凄いうまいなーって思つて」

「やるからにはしっかりやるのが俺のモットーだ」

「ふーん。ビックリしたよ」

「取りあえずコーヒーとケーキだ」

「りょーかい！」

明石はそういうと、さっさと準備を終えた

意外と手早いな、コイツ

そして俺はそれを持って運ぶ

「お待たせいたしました、こちらコーヒーとケーキでございます」
音を立てない様にゆっくり置く

「では、しゅっくり」

そう言って席を離れ、別のテーブルに注文を受けに行く

「いらっしゃいませ…って、佐倉と高音さんじゃないか」

佐倉と高音さんは二人で座ってた

「あ、はい。黒樹さんは午後からシフトが入ってるって聞いたので…」

「それにあまり用事もありませんからね」

「それでわざわざ来てくれたのか。何か悪いな」

「いえ、私も黒樹さんの執事服姿が見れてうれしいですし…」

最後の方は声が小さくて良く聞こえなかったんだが…

「さて、注文はどくなさいますか？」

「私はコーヒートケーキをお願いします」

「私はグレープジュースとケーキで」

「かしこまりました。少々お待ちください」

とまあこんな感じで夕方（それも七時、ほぼ夜だ）まで働かされた

ちゃんと俺の手元に金は回ってくるらしいからいいけど、ただ働きたかマジ御免だからな

〔麻帆良祭 二日目〕

今日は午前中がシフトだった

昨日の噂を聞いてきた人が多いらしく、メイド喫茶なのに女性客の
数も多かった

その分馬車馬の如く働かされたがな！

帰って寝ようとしたところで木乃香と刹那に捕まった

そして超包子で昼食中

ここ飯はうまい

「も〜昨日は朝からいくら探してもおらへんからずっと探しとった
んやで！」

「悪いな、昨日はエヴァに連れまわされてたんだ」

「…兄様ってエヴァちゃんと仲ええの？」

「まあそこそこな、隣の席だし」

「ふ〜ん、今日はウチらと一緒に回って貰うで」

「いいよ。どうせ帰って寝ようと思ってたからな」

「黒樹様…麻帆良祭まで寝て過ごす気だったんですか？」

「朝から馬車馬の如く働かされたからな。休みたい」

「ほんなら、あそこいこ！」

そうやって指差したのは占い研の出し物だ

「つて、これ木乃香の入ってる部活じゃん」

「そうやけど、ええやろ？見てってや」

…まあいいか、別に何か不都合があるわけでもないし

そして占ってもらった結果

大凶でした

ええ、まごころ事無き大凶でした

あゝあ、やんなっちゃったよ。まったく

「兄様、そんな露骨に落ち込まんといてや〜」

「そうですね、大丈夫ですよ。

大凶が出たからって気にする事は有りませんよ！」

「ああ、うん、大丈夫だよ」

テンション下げまくったなあ

切り返して行こう

「腹減ったから何か食べてから回ろう」

そう言っつて二人を連れまわす

まずは水泳部のたこ焼き

「あ、来てくれたの？黒樹君、木乃香さん、刹那さん」

「よう、大河内。何、こここのたこ焼きはうまいと聞いたんでな」

「そうなの？はい、一パック五百円です」

さっさと払って一つ食べる

「熱っ！！」

でもうまいなコレ、売れるわけだ

「アハハ、焼きたてだもん。熱いよ」

「えーなー、兄様、ウチにも食べさせてや〜」

木乃香に一つ食べさせる

「アツッ！へもおいひいは〜コレ」

「刹那も食べる?」

「あ、頂きます」

刹那も食べる、やはり絶賛

「作り方を教えて欲しいもんだ」

「ダメダメ、これは水泳部の伝統のたこ焼きだからね」

「手厳しい事で」

「アハハハ、残念だったね。黒樹君」

次、天文部のプラネタリウム

「凄いな、コレ」

天井いっぱい広がるプラネタリウム

星が光って綺麗だ

「ウフフ、すごいでしょ?コレ天文部が作ったのよ」

那波が笑っている

千鶴と聞くと某生徒会書記を思い出すのは俺だけだろうか

顔色一つ変えず大嘘をつくとかするし、『戯言遣い』かと思ったこともあるよ、俺

こんな感じで夕方まで遊び倒し、夜はさっさと寝た

く麻帆良祭 三日目く

今日は誰にも邪魔されないように喫茶店に逃げてきた

ここって少し外れたところにあるのと、まだ早い時間だからか、客は少ない

「いらっしゃいませ〜って、黒樹君。麻帆良祭までウチに来てくれるんだ〜」

このおっとりした喋り方の子が春花さん。ここでアルバイトしている

ちなみに高校生らしい

「ここは静かで好きなんだ」

「客が少ないからね〜。ゆっくり出来るでしょ」

「それはそうなんだが、はっきり言うとマスターがへこむぞ」

「大丈夫よ〜、いつもの事でもう慣れたから〜」

マスター、ドンマイ

「じゃ、いつものセットでいいかしら〜」

「ああ、お願い」

待ってる間、俺は最近買ったライトノベル（千雨お勧め）を読む

客が少ないせいか、持ってくるのはかなり速かった

「お待ちとおさま」

そうやっていつも通りランチを食べ、コーヒーを頼んでまた本を読む

しばらくそうしていると、誰かがきたらしく、チリンチリンと鳴る

別に誰が来ようとか関係ないか…と、思い直し、また本を読む

入ってきた誰かはこっちに近づいているようだ。足音で分かる

そしてその音が近くで止まり、声がした

「何やってんだ？黒樹」

千雨だった

てか、お前も何やってんだよ

「お前も暇なの？」

「いや、委員長がお前の事探してたぞ。お前携帯の電源切ってたろ」

そっぴいながら俺の対面に座る

「いや、寮に忘れた

つーか俺は探されるような覚えは無いんだが」

「何か手伝ってほしいってさ。お前目当てで来た奴も居るんだと。お前のおかげで男と女の比率が6対4になってるらしいぜ」

「…物好きな奴もいたもんだな」

「お前が言つと嫌味にしか聞こえないからやめろ」

つーかメイド喫茶なのに男と女の比率が6対4っておかしくね？

「疲れたんだよ、少しは休ませろ」

「お前ホントに疲れやすいな。いつも寝てる癖に」

「眠いのは眠いんだ。しょうが無いだろ。やるときはやるからいいんだよ」

「そのやる時がいつか分からないけどな」

全くだ、俺に活躍の場が無い

「そついや、今年は鬼ごっこをやるらしいぞ。賞金も出るらしいが、黒樹は参加しないのか？」

「メンドイからパス。別に金に困ってるわけじゃないしな」

俺はこのゆったりした時間が好きなんだ

俺のシフトは昼からだし、朝くらいゆっくりさせて欲しい物だよ

「ふうん。ま、いいや。あたしは戻るよ。見つからないってことに
しといてやる」

「ああ、ありがとな。千雨」

「別にいいさ」

それだけ言って出て行ってしまった

そのまま昼前まで喫茶店で本を読み、携帯を持って超包子で昼食を
食べる

炒飯、餃子、スープと、中華三昧だ

「いつもながらにうまいよなあ。料理教えてくれない？四葉」

「時間がある時ならいいですよ」

「さんきゅー」

「何をウチのコックを口説いてるアルか」

「そうネ。ウチのコックの料理は門外不出ヨ」

このダブルチャイナ娘は一体何を言っているんだ

「お前ら仕事しろよ」

「ちゃんとやってるアルよ。でも、私はもうすぐ『ウルティマホラ』があるアルから、直ぐ準備しなきゃならないアルけど」

「ふくん、まあ頑張れ。お前なら優勝できるさ」

「そついう黒樹は出ないアルか？」

「俺はそついうのはあまり得意じゃないんだよ」

下手な事してこいつらに目付けられるのもヤだしな

「実は黒樹さん、ものすごく強いけど、実力を隠してるネ」

「オイコラ其処のチャイナ…つて二人ともか…まあいいや。チャイナ娘、お前何言ってるんだ」

「何って本当の事ネ」

「本当アルか!？」

「すごく強いネ、チャレンジしてみるといいヨ」

うわあ、面倒くさい状況になったなあ

「冗談！俺はちょっと喧嘩に強いだけの一般人だ。武術を使う古菲に勝てるわけねえだろ」

「ム、そうアルか。ならいいアル。もっと強くなったら手合わせしてほしいアル」

普通はそのセリフは俺が言う物だと思っただが

まあバカイエローだからってことで納得しよう

その後、手伝いに行ったら雪広に怒られた

何故俺が怒られなきゃならんのだ！

シフトは昼からだったぞ！時間も守ってるぞ！と言ったら、

「昨日シフト変更と言ったでしょう!？」

と言われてしまった

俺は午前中に入る予定だったらしい

後は夕方、昼が休みになる予定だったらしい

今更言ってもしょうが無いがな

その後、仕事を終え、世界樹の発光を見に行った

もちろん木乃香、刹那と

「わあ〜綺麗やな〜」

「ああ、本当にきれいだ」

「綺麗ですね〜」

ホントにきれいだ。幻想的と言っのだろうか

巨大な樹が緑色に発光する非現実的光景。

何度見ても、それは幻想的だった。

非現実的光景そのものが幻想的と表現できるわけではないが、俺は
そう思う

ゆっくりとその光景を目に焼き付け、後夜祭を楽しむ

結局徹夜で後夜祭を楽しみ、次の日は一日中寝ていた

第九話 祭りのときはハツチャケる奴が多い（後書き）

はい、麻帆良祭でした

次の投稿は土曜です

多分出来ると思います

遅くても日曜には投稿します

感想は常時募集中です

第十話 夏休み（前書き）

この頃サプタイが思い浮かばない…
何かありませんかねえ、ネタになるようなの

第十話 夏休み

第十話 夏休み

夏真っ盛りの今日この頃

最近のニュースは夏休みに入った事位だ

夏休みに入り、エヴァの家を使って一日で宿題を終わらせ、錬金術を教える

千雨は最近少しずつ爆発の練習をしている

やっと錬金術が行使できるようになったからね

別荘内で年取らない宝具も手に入れたし、ゆっくり練習していく事になっている

ちなみにまた増えるかもしれないので五つ程用意し、一つは俺、二つ目は千雨、残りは俺が持っている

エヴァはもう大分質量の大きい物も練成出来るようになった

茶々丸は気の流れを読むのに苦労していたが、時間をかけてしっかりと教えたので、錬丹術を多少なり行使できるようになった

そして、夏休みに入って数日

寮で寝ていた俺は呼び鈴の音で起こされる

さっさと玄関口に行き、ドアを開けると刹那がいた

「…何か用でもあるのか？」

「黒樹様、私に剣を教えてください！」

「いいよ。じゃ、さっさと準備して」

「…え？いいんですか？」

「え？剣を教えて欲しいんだろ？」

「いや、二つ返事で言われるとは思わなかった物で…」

「ま、その辺はいいよ。エヴァの家に行くから、準備して」

そんな感じで刹那もエヴァの別荘に招待し、修行することになった

「あれ？長谷川さん？」

「ん？桜咲もこっちの関係者だったのか？」

そつえば話した事が無かったな。どっちにも

話す意味も無いし

二人は勝手に話し始めたから、放っておいていいだろう

刹那には別荘内で年取らない宝具を渡しておいたから、余計に年取る事はない

「じゃ、早速始めようか」

ちやっちやと終わらせようと思い、西洋剣を作る

「…相変わらずだな、どうやってたら練成陣無しで練成出来るんだ？
しかも速いし」

「俺は天才なんだよ」

自分で言うのはどうかと思うがな

「天才ってだけで練成陣無しで練成出来るのかお前は…」

そんな呆れた声を出すなよ

「実際には自分の体を練成陣に見立てて練成してるんだ。
この技術は生半可な物じゃないから、エヴァでも出来るか分からないけどな」

「へえ、そんなやり方があるのか」

本当は『真理の扉』を見たうえで帰ってくる必要があるけどな

それでも両手を合わせる必要はあるが

賢者の石を使えば陣なんて必要ない。ついでに等価交換の法則も無

視できる

さて、取りあえず刹那との戦闘を開始していいかな、あっちはもう準備出来てんだよ

「よし、じゃあ切りかかって来い。どれくらいの実力が見てやる」

「はい！」

瞬間、ギヤギギギン！！と何度も刃を打ち付ける音が響いた

「うん、結構速いな」

嘘じゃない、ホントに速い

対する俺は攻撃せず、唯攻撃を受け止めるのみ

見切るの簡単だ。魔眼は使ってないよ

やがて刃の打ち合いが終わる

「どうでしたか？」

「うん、結構強いね。でも実際には剣で戦闘した奴なんてそういないから比べる対象が分かんないけど」

「…そういえば、黒樹様って神鳴流の技使えました？」

「使えるよ。まあ、練習してるとこ見た事無いから分かんないだろうけどね」

技術をコピーするだけなら別に練習なんて必要ない訳だし

何か『見稽古』ばりにセコイ事してんなあ俺

そもそも対人戦ではブラッドレイの戦いの方がやりやすいしな

俺は風の力と気も使って超高速戦闘術に昇華させてるし

まともに戦闘できるのはエヴァレベルだけだと思っ

あいつ雷速についてくるからなあ

そして、夏休みの修行は刹那の相手をしながら千雨達に錬金術を教
えていた

夏休みなのに何も事件が無いとかつまらない

夏休みのとある日

エヴァの別荘の一室にて

「漸く完成かな」

「ええ、苦労しましたね」

フッフッフと俺と茶々丸は笑っ

「人体に関しては大体理解できただろ」

「はい、知識としてだけでなく、実際に確認できたのは大きいですね」

「体中を流れる気の流れを理解するには感じるのが一番だし、人体の構造を知るには見るのが一番だ」

そう言っただけで目の前にあるモノを眺める

「うん、いい出来だ。」

人体練成は失敗するのが当然だが、『肉体』『精神』『魂』のどれかだけなら練成に成功した例があるし、やってみる物だな」

今横たわっているのは身長は150cm程の女の子。腰の辺りまである白く真っ直ぐな髪に、陶器のように滑らかな白い肌

平たく言えば人の体。ちなみにさよちゃん

「しかし、こんなモノを作っただけでどうするつもりだ？」

「てかあたしたちは見てるだけだったが良かったのか？」

「見るだけでもいいさ、人体の構造つてのは錬金術で治療する際に必要な知識だし、

自分の怪我位は自分で治せるくらいじゃないと。」

これを作ったのは見せるためだけじゃないしな。茶々丸、それに服着せといて」

「分かりました」

「何処へ行くんだ？」

「その体に入る人物のどこ」

時間になり、別荘からでて学校へ向かう

学校に居るかなあ

そうして探す事十分

ペン回ししてた。てかもうペン回しって領域じゃ無い気がするよ

「相坂さん」

「ふえっ!?!」

ビックリしてこっちを見ている

「あ、わ、私の事が見えてるんですか?!?!」

「見えてるよ」

「今まで誰にも気付いて貰えなかったのに、見えていたんですね」

「まあね、転校した初日に気付いたよ」

「だったら何で直ぐに声かけてくれなかったんですか」

「だって君見え辛いでしょ？俺が独り言言ってるように見えるじゃないか」

「それはそうですけど…」

「とにかく、君に渡したいモノがあるから付いて来てくれるかい？」

「え？でも、私自縛霊ですからそんなに遠くまで行けませんよ？」

ああ、そうだったっけ、どうしようか

俺に憑いてもいいけど、精身体も居るし『心臓』もあるし

何かもしもの事が起こりそうで怖い

精神をのつとる云々じゃなくて、さよちゃんの魂の方に何か異常が起きそうな気がしてならない

肉体の方を持つてきてもいいけど、それはそれで俺が不審者扱いされそうだしな

結局その日はあきらめる事にした

後日、霊体が憑けるように陰陽術を施した人形を作り（父さんに送って貰った）、さよちゃんを人形に憑かせ、エヴァの家へ

六十年も中学生やってるだけあって、魔法使いの事は知っていた

地下室に入り、ボトルシップの前に立つ。

「ところで、何で私を呼んでくれたんですか？」

「ちょっと見せたいものがあつて」

術式が展開し別荘内へ。

「な、なんですかここはーッ！」

流石に別荘の事は知らないらしい、面白い反応をしてくれるよ

まあ、それはいいや

さっさと部屋に入って肉体を見せる

「えっ！？こ、これは！？」

「うん、さよちゃんの肉体だよ。

本物じゃないから、繋げるために遺骨を少しばかり使わせて貰ったよ。ごめんね

でも、ちゃんと憑けると思うし、人間として活動できるように作ったもう一度人生をやり直せるよ」

さよちゃんは既に人形から出ていて、涙を流していた

「ほ、本当にやり直せるんですか！？」

「うん。ただ、こういう事をやった事が無いから、もしかしたら失

敗するかもしれない
それでもやってみたいかい？」

まあ失敗する可能性なんて最初から考えて無いけど

「もちろんです。それに何だかここに入った途端に、何かこう、魂がざわつくって言うんですかね？そんな感じなんです」

ふむ、人間の定義からはみ出した幽霊の事は良く分からないが、失った肉体の代わりを求めているのか？

肉体と魂をつなぐ精神の役割を遺骨が成しているのかね

「じゃあ、憑いてみて」

さっそくイレモノの中に入るさよちゃん。その瞬間、物言わぬ器だったモノが心音を奏で、呼吸を始める。

そして目を開いて起き上がり、手を握ったり広げたり、感覚を確かめるように身体を動かす。

「調子はどうだい？」

「ええ、なんだか、すごく心地いいです。」

なんだか、元居た場所へ戻ってきたような、そんな感じですよ」

うん、成功かな

「生きてるっていいですね」

反応に困るからそういうのは控えて、お願いだから

とりあえず、別荘内で一日経つまでは連絡できないので、まだ中に残ってた茶々丸と千雨とエヴァに紹介したりして過ごした。

エヴァは知ってたらしいが、そのほか全員が驚いていた

まあ普通クラスメイトに幽霊がいるとか信じないよね

後で爺にいろいろ用意させなきゃな

そして、別荘で一日が経ち、外で一時間が経過したので、爺に直に会いに行った

もちろんさよちゃんも連れて

「うーっす、じいちゃん。ちょっと頼みがあんだけど」

「なんじゃ黒樹、彼女でも出来て結婚したいと言っか」

無表情で槍を形成し、投擲する構えをとる

「あ、やめて、ワシが悪かったから、あ、ちょ、やめ…」

いい訳を聞かずに槍を投擲し、爺の後ろの壁に穴を開ける

「…さて、実はこの子、2-Aいた幽霊なんだよ。俺が体を与えて学校に通えるようにしといたから、転入手続きとかしといて」

「それだけの事を伝えるためにワシ殺されそうになったの？」

「爺が余計な事を抜かすからだ。それにそれだけの事ってのはちょっと聞き捨てならねえぞ」

「あ、ワシついに爺扱い？」

…取りあえず、君の転入についてはワシがどうにかしよう
曲がりなりにも教育機関じゃからな、ここ」

「ちなみに魔法の事も知ってるよ。六十年幽霊やってるからな」

「ふお！？六十年もかの！？」

「六十年もだ」

「それは驚いたのう。良く悪霊化しなかった物じゃ」

其処は俺も考えた

肉体はとつくに滅んでるのに、魂が滅ばないってことはあるのかね
作品別だから考えてもしょうがないけどな

「じゃ、俺の用事はそれだけだ」

「ああ、黒樹。ちょっと聞きたいんじやが、お前さん、木乃香に魔

法をばらさないのかの?」

何故今それを聞いたし

「父さんの教育方針に俺がどうこう言う訳無いだろ。

だが、どうしようも無くなった時は教えるさ

だがな爺、てめえの都合で木乃香をこっちに引きずり込むようなら、俺はアンタを許さねえぞ」

「舐めるな、ワシとて自分の孫を危険にさらすような事はせんわ」

「…ならいいがな」

気分が悪くなった、さっさと出よう

ボタンと扉を閉じ、さっさと歩きだす

「え、えつと、アレでよかったですか? 仮にもあなたのお爺さん
でしよう?」

「アレは身内の定義には入らないさ。なんせ、自分の孫を危険にさらす事を簡単にやってのけるからな」

「え? でも、さっきは自分の孫を危険にさらす事は無いって言っていましたけど」

「さよちゃん、あの狸爺の言う事を一々真に受けちゃいけない。いつか足元をすくわれるぜ」

わざわざ2 - Aみたいな『異常』な奴らの集まったクラスを作る位

だからな

魔族であるザジ、半魔族^{ハーフ}の龍宮、鳥族と人のハーフである刹那、
『黄昏の姫御子』のアスナ

そして極東最強の魔力の持ち主である木乃香と恐らく殺し合いなら
負ける事のない俺

その他忍者に格闘家にロボに吸血鬼に未来人（これは知らないと思
うが）、超強運娘にお嬢様に親が魔法関係者に幽霊等など

しかもこのクラス担当を『秘匿』の二文字を知らないガキにやらせ
ようとしている

頭がイカれてるとしか思えない

…自分で言っというて何だが、俺もこのトンデモクラスの一員だと思
うと悲しくなる

さっさと帰って寝よう

第十話 夏休み（後書き）

はい、そんな感じで夏休みでした

特に事件を起こすつもりも無いので、時間が飛びます

次回の更新は速く書けるようなら日曜、無理なら来週です
感想は常時募集中です

第十一話 憤怒（前書き）

かなり今更な気がしますが、アライブについての説明とか入れた方がいいですかね

第十一話 憤怒

第十一話 憤怒

年を越え、一月の寒い日々が続いていた

冬休みに入ろうと事件なんて全くおこりやしなかった

今日は金曜、今日まで行けば明日は休みだーと浮かれている

新学期も始まって数日、いつも通り俺は木乃香と刹那と一緒に登校するつもりだ

いつもの集合場所に行き、声をかける

「おはようございます、黒樹様」

「おはよう刹那。…あれ？木乃香は？」

「お嬢様は今日は日直だから早めに行くと言っていましたよ」

「そうか、ならいいや」

別に何か用があった訳じゃないしな

二人で話しながら歩く。これもいつも通り

今日は木乃香がないけどな

だが、どこかから視線を感じる気がする

なんとなくしか分からない位だし、ある程度は離れているんだろう

ま、手を出すなら潰すまでだが

そんな事を思いながら教室へ行く

「あ、おはよう兄様」

「おはよう木乃香。今日は日直なんだってな、がんばれよ」

「そう思うなら手伝ってや」

「いいけど、少しだけな。こういっているのであんま人を頼るなよ」

「ありがとな、兄様」

ニコツと笑ってくれる木乃香がかわいくてたまらない

俺はさっさと自分の席に着く

「今日は速いじゃないか、エヴァ」

「今日は珍しく速く目が覚めたんだよ」

まだ眠そうに見えるがな

「今日は珍しく速い日か、雨降るかもな」

「何故私は速く来ただけで其処まで言われにやならんのだ…」

おおつ、これ以上言ったらキレそうだ

「冗談だつての。それより、分かるか？」

後半は真剣な話だ

「いや、距離がつかめないからかなり遠いな…ジジイに報告しておくか？」

「そうだな。だがまあ、後でいいだろ。今の時間にアクションを起こすバカじゃない筈だ」

つーか今気付いたが、携帯寮に忘れて来てしまった

「それはそうだろうな。今の時間にアクションを起こせばあつという間に魔法教師が飛んで行くだろ」

ほつといていいや。特に問題は起きないだろう

そう思いながらアイマスクを取り出す

「……いつも思うが、それをするくらいならサボったほうがいいんじゃないか？」

「いいんだよ。出るだけ出てれば。点数はちゃんと取ってる訳だしな」

「ホントに何で点取れるんだろうな。授業なんて聞いて無いのに」

「それはアレだ、俺は家で勉強してるから眠くて授業中寝てるんだ」

「本末転倒だなオイ。普通は逆だろ」

「確かにそうだけども、いいんだよ、結果的に点数取れてんだから」

「そうだな、卒業出来ない私と違って点数取れてれば卒業出来るかな」

「反応に困るからそういうのはやめてくれ」

あと今言うなよ！聞かれたらどうすんだ！

って言うか、呪いをまだ解いてない事を思い出した

タイミングを計ったようなチャイムが鳴り、高畑先生が入ってくる

…まあ、いつでもいいか。大した事じゃないし

その後の授業はエヴァと共に寝て過ごし、昼休みにエヴァと共に新田の小言を貰うことになった

運が悪いとしか言いようがない。というか完璧に自業自得なパターンだな

「新田の授業中に寝たのは運が悪かったとしか言えないよな…」

「まさか急きよ授業の変更があったとはな…」

新田の時間だけは絶対に寝ないのにな

説教受ける事が分かってるから

今日は高畑先生が急に出張になったから、代わりに新田が授業をする事になったらしい

朝は居たのになあ。高畑先生

俺達は基本休み時間も寝てるからな。移動教室の時は誰かが起こしてくれるし

今日は一度だけ木乃香を手伝い、その後はずっと寝てた

「あゝあ、昼休みがつぶれちゃったよ」

「特にやることも無いくせに良く言うな」

「まあ、昼飯は木乃香と刹那と一緒に食べれたからよしとしよう」

「…傍から見たらリア充と呼ばれるぞ」

爆発はしない。させる方だし

「俺は充実しているよ」

「私は不満だらけだがな」

そりゃ十数年も学生やってりゃ不満も出るだろうな

「しょうが無いから次の授業を受けに行くか」

「そうだな、次の担当は瀬流彦だし、寝て過ごそう」

全く懲りて無い俺達だった

放課後

今日もエヴァの家に行く事にした

特に用事も無いし

携帯はいいや。別に大した問題は起きやしないだろう

爺には既に今朝の事は伝えてある

何らかの対策をとる筈だ

刹那は部活、木乃香も部活

俺はエヴァの家の向かい、別荘で千雨とエヴァと茶々丸を共に一日
錬金術を練習させる

最近千雨が火力を調節できるようになってきた

エヴァも茶々丸も大分上達している

師匠として鼻が高い

外で一時間経ち、別荘から出る

千雨と俺は帰ろうとするが雨が降っていた

「まさか本当に雨降るとは思わなかった」

「まさかってどういうことだよ」

「いや、今日は珍しくエヴァが速く来てたから」

「…何か分かる気がする」

「喧嘩売っとるのが貴様らは!」

俺はさっさと傘を練成し、千雨に渡す

「ああ、ありがとう」

俺はもう一つ練成し、ソレをさしながら歩き出す

「じゃあな、エヴァ、千雨。また明日」

「ああ、また明日。黒樹、千雨」

「また明日な、エヴァ、黒樹」

千雨と俺は別方向なので、もうエヴァハウスから別の道に行く
何かもやもやした感じが取れない

部屋に戻り、着替えようとするその時に、携帯の音が鳴り響く
携帯にかけてきたのは爺だった

「…何の用だ？」

「おお、やっと出たか！何度かけたとおもっとなるんじゃ！」

「なんだよ、野暮用なら切る…」

「刹那君が重体じゃ！侵入者にやられたらしい！」

それを聞いた瞬間、意味が分からなかった

その言葉をゆっくり、ゆっくり理解しようとした

ほんの少しの時間しか流れていない筈なのに、何分にも何十分にも
感じた

「どづいう、事だ？」

「侵入者が木乃香を狙ったようじゃ。そして、護衛をしていた刹那
君がやられ、木乃香は誘拐された

夕凧も折られていたらしい」

「いつの事だ？」

「今さっきの事じゃ。刹那君が意識を失う前に連絡してくれたので、まだ侵入者は麻帆良の中じゃ」

「どっちを取る？」

刹那か、木乃香か

「刹那の容体は？」

「あまり良くない、失血が多過ぎるから、下手をすれば死ぬ可能性がある。それに、左腕ももう使い物にならんらしい。神経と筋肉がズタズタになっとるらしいからの」

まずは刹那だ。

木乃香は利用価値がある分殺される事は無い筈だ

刹那は死にかけてる

「刹那はどこだ？」

「麻帆良病院の緊急治療室におる。じゃが、お前は木乃香を追え刹那君については我々が最善を尽くす」

「ヤダね、信用できるか」

それだけ言って電話を切る

窓を開け、風を操作して虚空瞬動をし、速度を跳ね上げる

数分で病院に付き、走って刹那のいる場所を探す

其処は直ぐに見つかった

扉を開け、中に居た医者電撃で昏倒させる

こいつもどうせ魔法関係者だろう

刹那の状態をよく見る

左腕は曲がらない筈の方向に曲がり、いたるところから出血している

骨折は錬金術で元通りに直し、

『再生』の能力ちからで怪我を治す

こういうときに『アクロの心臓』の力に感謝したくなる

賢者の石の代わりにもなり、能力者としての力を跳ね上げてくれる

目が覚めるまでにはまだ時間がかかるだろう

俺の姿がばれるようなヘマはしていないし、もう治療の必要性も無いだろう

次は木乃香だ

この雨で視界が悪いが、そんなことは関係ない

魔法先生が戦ってるらしく、所々で光っている

直ぐに爺に連絡を取り、奴らの場所を聞き出す

複数にバラけているらしいが、木乃香を連れている奴らは居場所がつかめないらしい

逃がすものか

俺の身内に手を出した以上、生かして帰すモノか

絶対に

＼SIDE 三人称＼

酷い雨だった

其処を走るの六人男達がいた

本当はまだいるのだが、魔法先生を足止めするためにバラけて行動している

木乃香は鬼に背負わせ、走っている

「オイ、まだ麻帆良から出れないのか？」

「まだだ、もう少し先に行けば、外で待機していた連中が手引きしてくれる」

「早くしないと連中が追いつくぜ」

「大丈夫だろう、ここの魔法教師風情に負ける気はしない」

「相手をするのが面倒だったの」

「喋ってる暇があったら走れ」

無駄口を叩きながら走る六人

無駄口を叩くと言う事は、それだけ余裕があると言う事

だが、それも次の瞬間には消し飛んだ

「みいいいつけたあああああ」

ゾツとするような声が響く

男達は不快になるような声を聞いた

ザツザツザツと土を踏む音が聞こえる

「俺の身内に手出しといて、生きて帰れると思つなよ」

其処には肩まである黒髪で、麻帆良の制服を着た男子生徒

男達は警戒して構える

「何者だ！」

「答える意味なんてねえよ

これより 零崎を開始する」

瞬間、まるで怨嗟のように、世界を呪うような殺気が、殺意が侵入者達に向けられた

一瞬体が固まり、動けなくなる

次の瞬間には既に男達は一人を残して絶命していた

五人の男達はそれぞれ体中に穴があいて死んでいた

残った男は恐怖し、逃げようとする

「逃げられる訳がねえだろおが」

男はある程度進んだところから先に行けなくなった

何も無い筈なのに、それ以上先に進めない

そして男は気付かなかった

先ほどまで降っていた雨が止んでいる事に

「組織の全貌教えてから死ねや」

黒樹は電撃を使って男を動けなくする

『洗脳』し、組織の全貌を吐かせる

組織の規模は中々に大きい

二百人程の人員を使っているようだ

場所まで全て吐かせた後、頭をシャボン玉で弾いて殺した

鬼は術者を殺したことで既に還っていた

直ぐに木乃香に駆け寄り、様子を見る

木乃香は気絶しているだけのようだ

木乃香を直ぐに爺のところへ連れて行き、安全を確保させ、黒樹は
残党狩りに出る

一時間後

其処は廃ビルだった

其処には二百人近くの魔法使いがいた

そう、『いた』のだ

其処に『いた』魔法使い達は、魂の無い抜け殻の肉体となり、黒樹の『無』の力によって、肉体さえも消滅した

第十一話 憤怒（後書き）

はい、刹那が悲惨な事になりました

刹那ファンの方、すいませんでした

でも、味方に黒樹がいる以上は即死で無い限りは治す事が可能という理不尽さ

錬金術と『死と再生』の力は強力です

治せないモノは無いと言ってもいいくらいに

呪いは多分無理ですが

書いてたら長くなっただんで、分けてみました

次は今日中に投稿します

具体的には十二時ごろ

そして、次回、木乃香に魔法がばれます

ついでに黒樹の秘密も暴露します

感想は常時募集中です

第十二話 正体（前書き）

サブタイに意味は特にありません

第十二話 正体

第十二話 正体

今日は土曜

昨日の戦闘から一夜明けた

刹那は検査入院という事で今日は病院から出れないらしい

俺は爺に呼ばれて学園長室へ

後始末までやったんだから呼ばれる理由は一つしかない

「で、何の用だ？木乃香に魔法がばれたのか？」

「うむ、それもあるが…黒樹、お前やり過ぎじゃ」

「何がだよ」

「ふざけるでない、昨日の戦闘じゃ、お前程の力を持っておるなら殺さずにとらえられたじゃろっ」

「そうだな、生かしてとらえて実験台にするのも良かったかもな」
あいつらは全員賢者の石にさせてもらった

千雨に渡すか、それとも人造人間ホムンクルスでも作ってみようか

「何をいつておる！！二百人を超す魔法使い全てを殺す必要は無かったと言ったのじゃ！！」

「てめえこそ何言つてんだよ？刹那を殺しかけ、木乃香をさらった組織を、生かして置く意味なんて無いだろ」

「生きて罪を償わせればよかったじゃろう！殺す理由などどこにも無いじゃろが！」

「駄目だね、俺の身内に手を出したんだ、殺す理由はそれで十分だし、生かして置く理由が無い

そんなどうでもいい事をわざわざ聞いたのか。下らないそんなことより、木乃香はどうだったんだ」

「……木乃香は、刹那君がやられたところを見ておる。其処で気絶したからそれより先の事は覚えとらんらしい」

「展開としてはまあまあだな。願いが叶うならこの事がトラウマにならなきゃいいが」

難しいかもしれない。何せ親友が目の前で殺されかけたのだ

刹那も守れなかったと自分を責めるだろう

チツ、原作より悪い状況じゃねえか

「それで、父さんはなんて言ってるんだ？」

「こつなつた以上は木乃香にも魔法の事を話した方がいいんじゃない。お前が話すか？」

「ああ、刹那のところに連れてって魔法に関してもバラすこれで話しは終わりだな」

さっさと学園長室からでて、木乃香の所へ向かう

木乃香は寮に居た

神楽坂は出ているようだ、丁度いいかな

「木乃香」

「兄様、せつちゃんは、せつちゃんはどつなつたん!？」

「落ち着け、刹那は無事だ。それと、その辺に関して話したい事がある

これは真剣な話だ。だが、刹那が退院してからな明日には退院できるだろうし」

「えっ?でも、血が、めっちゃ、で・・・てて」

今にも泣き出しそうな顔だった

俺は木乃香を抱きしめて

「思い出さなくてもいい、今思い出すのはつらいだろ
明日刹那の元気な顔見てからでいい」

と言ってやった

精神的にかなりキツイだろうからな

「うん……分かった」

「明日話すからな。朝に迎えに来る」

「分かった」

その後、刹那のいる病院へ向かった

扉をガラツと開け、中の様子を見る

其処にはベッドに寝ている刹那の姿があった

「黒樹、様」

「よう刹那、あの時とは逆だな」

あの時ってのは、俺が五年間寝ていて起きた日に刹那に会った時の
事だ

「すみませんでした。黒樹様」

刹那は頭を下げている

「何故謝る。今回の落ち度はお前の所為じゃない

ここの教師共が無能だっただけだ

おかげで侵入を許した上に刹那を殺しかけ、木乃香は誘拐されるなんて事になったんだからな

…ああ、木乃香は無事だよ。俺が侵入者を皆殺しにしといたから」

「そう、ですか。ですが、私はお嬢様に合わせる顔がありません守れなかった。私はまた、守れなかった…」

シートをギュツと握りしめ、涙をこらえているらしい

俺は刹那の頭をなでてやった

「大丈夫だよ、刹那。お前が出来ない事があるなら、俺がやってやる。

だから、お前は木乃香のそばにいる。木乃香にはお前が必要だ」

「しかし、黒樹様がいるのでは…」

「俺ももちろんいるさ。だが、木乃香にはお前が必要だ。俺は『家族』だが刹那は『親友』なんだ。それも小さい頃からのな

俺と刹那じゃ分けてる部分が違う」

「で、ですがっ！私はこのちゃんを守れなかった…」

護衛失格です！」

「そんな事は無い。今回だって、お前は必死になって木乃香を守ろうとしたんだろ。」

自分が弱いと思うのなら修行しろ。

今回は相手が悪かった、それだけだ。

それと、夕凧は修復しておいた、明日エヴァの家に来い

エヴァの別荘で木乃香に魔法をばらす」

「……分かりました」

俺は病室からでて、寮に帰った

翌日

朝、夕凧を持って木乃香を迎えに行き、エヴァの家へ向かった

木乃香は刹那の事が気になっているようだが、俺は会えば分かる
としか言っていない

エヴァの家に付くと、茶々丸が居た

刹那とエヴァは既に別荘の中にいるらしい

地下室に降りて別荘の前に立つ

「今からコレの中に入る」

「え？でも、コレ…」

「直ぐに分かるさ」

魔法陣が輝き、別荘の中に入る

中にはエヴァ、刹那、千雨がいた

「せつちゃん!!」

木乃香は刹那の姿を見た途端に刹那に抱きついた

「良かった…本当に良かった…」

「…お嬢様……」

「よう、まったか？」

「外の時間では十分程だろうな、其処まで待つてはいない」

「そうか…木乃香、これからお前に説明する事は全て本当の事だ、それは分かってくれ」

木乃香はコクンと頷く

「これはできうる限りは関わって欲しくなかった事だ、だから父さんも俺も話さなかった。これも分かってくれ」

木乃香はまた頷く

そして、俺は魔法に関しての事を話した

「……………分かったか？」

「…うん、大体の事は分かったえ」

「お前の魔力は膨大だ。それこそ、戦争の英雄と呼ばれた人物よりも多い

だからこそ狙われた

だからこそ、刹那は木乃香の近くで守っていた

だが、昨日は違った

昨日の敵は刹那では荷が重過ぎたんだ

だが、それでも必死に木乃香の事を守ろうとしていた

普通なら実力不足とみなされ、護衛の役は解任される

だが、お前が望むなら俺が何とかしてやる

どうするかはお前次第だ」

「そんなら、せつちゃんはウチの護衛のままにして！
ウチの事をちゃんと守ろうとしてくれとったんやる？
なら、ウチはせつちゃんのままでいい！！」

「そうか…刹那、受け取れ」

俺は夕凧を刹那に渡す

「これは父さんの剣だ。この剣に誓え、刹那。お前はこの先、必ず木乃香を守り通して見せるとな」

「ハイ！！もちろんです！！」

「そうか、それなら安心しよう」

木乃香と刹那は抱きしめあって泣いていた

「……さて、木乃香が魔法に付いて知った事だし、俺も自分の事を話そうかね」

「自分の事？お前何か隠してる事でもあるのか？」

「まあ……木乃香と刹那もちゃんと聞くようにな
これから話す事は、お前らを信用しての事だ
誰に話さないでほしい。分かったな

…俺は、まともな人間じゃない

まともな人間じゃないってのは、こういう事が出来るからだ」

シャボン玉を大量に作り出す

「…シャボン玉を作りだせるからまともな人間じゃないのか？」

「このシャボン玉は爆弾だ。空気を圧縮してあるから、爆発させる

ことで人間なんて簡単に殺せる

俺がこの力を手に入れたのは、十年程前にぶっ倒れ、その五年後に目覚めた時だ」

「たしかにそんな事を言っていたな」

「ああ、十年程前にぶっ倒れた時、俺の中に『何か』が落ちてきたこの『何か』ってのは、宇宙人の精身体だ
あ、コレホントの話だからさ、そんな目で見るなよ」

千雨が胡散臭そうに見ている

「前に言っただろ、俺は人の『心の傷』が見えるって。それはこの精身体の所為だよ

「まあそうだな、見てもらった方が速い」

俺は胸に手を付き刺し、心臓の欠片を取り出す

「痛っ！…コレが、『心の傷』を俺に見せてる元凶だ」

白く淡く光るそれを見せる

血が流れているが、別に気にすることじゃない

「これは、何だ？」

エヴァが驚いている

こんなものを見せられても困るだけってのは良く分かってるけどな

「これは精身体と共に地球へ飛来してきた。『心臓の欠片』と呼ばれるものだ

コレが俺の中にある限り、他人の心の負の部分が見える。

前触れもなく、臍に時に鮮明に、脳に直接再生される。絵・音・匂いなど、様々な形で人の心が抱えている闇が見える

誰かに受け渡す事も出来るが、こんな目に会うのは俺だけでいい」

俺は欠片を戻し、傷を『再生』させる

「…欠片という事は、本体があるのか？」

「ある。俺は『アクロの心臓』と呼んでいるモノだ

意志を持ち、アクロの心臓の適合者と認められなかった者は内側からその身を破壊され、消滅する。

適合者と認められた者はその強大な力を大きく引き出され、暴走状態に陥る。

俺は適合したうえでこれを押さえつけてる。

で、精身体は俺の中に入った後、死のうとした訳だ

だが、俺の生への欲求が人並み外れて大きかったのか、俺は生き残った

とはいえ、五年間も寝ていたんだがな

そして、生き残った俺は謎の能力に目覚めたんだ」

「……………そんなSFじみた事が本当にあるのか？」

「あるんじゃないか？俺がそうだしな

精身体つてのは、まあ端的に言えば宇宙人だ

何かいろいろあつて精身体になつて宇宙へ旅立ち、死にたくても死ねないから、生命体の中に入って死のうとしたんだ

そして、俺の中に入ってきた

もし、俺以外の誰かの中に入るようなら、そいつはもう死んでいるだろうな

生き残る可能性もあるが、限りなく低いと見ていい

で、生き残った俺は超能力が使えるようになりましてわけてわけ

「なるほどな、それであんなでたらめな力が使えるのか」

「そついう訳だ。質問はある？」

「兄様はどんな能力が使えるん？」

「そつだな、簡単なので行けば、さっきのシャボン玉、電撃、風、音波、石化とかがある」

「簡単なのつてどついう事ですか？」

「分かりやすい能力つてことだ。

他には分かりずらい能力もあるし

例えば死神の約束とか

これは、約束を破つた奴を死神が殺すつている能力だ

つーか全般的に能力は殺す事に特化してるから

対人戦では使えないんだ」

他には空間隔離、氷の爪、重力操作、洗脳・操作とか、後は無の能力とかがあるな

「これで分かったか？」

俺は化け物と呼ばれてもおかしくない人間だ」

「黒樹様は、化け物ではありません！」

「そうや！兄様は化け物やあらへん！」

「…いや、まあその辺は割とどうでもいいことだが、俺が特殊な能力を使えるってことを分かってくれれば」

「…それを私達に話して良かったのか？」

「いいんだよ。お前らは俺の身内だからな」

「身内？家族ってことか？」

「まあそんなとこだ。俺が認めた奴だけだな」

父さんにはまだ話して無いが、今度帰る時があるならその時にでも話すさ」

「…黒樹、お前が零崎で殺人鬼だってことは教えないのか？」

エヴァが小声で聞いてきた

聞こえて無いだろうな

「今はまだ刺激が強過ぎるだろう。だからまだ教えない

それと、木乃香に魔法を教えてやってくれないか？」

「え？兄様が教えてくれるんとちゃうの？」

「俺は魔法は教えないんだよ

良く言うだろ？名選手が名監督とは限らない、反対に名監督が名選手とは限らないって

エヴァは名選手で名監督だがな

俺は教えないんだよ」

ぶっちゃけコピーしただけだからな

「いいか？エヴァ」

「ああ、構わん」

「よし、それじゃ、木乃香はエヴァに魔法を教えて貰ってくれ

それと、木乃香が魔法に関わった事は誰にも話すなよ」

どの道一昨日の一件で知られてるだろうが、その辺は記憶を操作したとでも言えればいい

知っているのは爺と父さん、それにここに居るメンバーだけだ

さて、もうすぐあの薬味坊主が来るな

…どうでもいいか。興味も無いし

第十二話 正体（後書き）

はい、木乃香魔法を知るという回でした
アライブ関係で説明も入れて見ましたが、意味が分からないとかあ
つたら教えてください

次回から原作に入ります

感想は常時募集中です

次回の更新は週末です

第十三話 トラブルメーカーが来た

第十三話 トラブルメーカーが来た

木乃香に魔法がばれて数日

ここ最近木乃香と刹那はエヴァ家に通い詰めだ

速く強くなりたらしい

刹那は木乃香を守るために

木乃香は自分の身を守れるくらいに強くなって、刹那の負担を減らすために

刹那は俺が、木乃香はエヴァが教えている

よくよく考えるとあの時さよちゃんが居なかったなあ、と寮に帰った後で思い出し、後日話しておいた

小さい頃に一度死にかけたって

そしたら、「生きてるって素晴らしいですよね」と言われた

反応に困るからそういう事言うのはやめてほしいと思う

ちなみにさよちゃんはポルターガイスト現象を自在に操れるようになった

体をあげてからずっと練習していたらしい

それはともかく、刹那の気合いの入り方が半端じゃない

「ここまで気合い入れるのはいいが、体壊しそうだよなあ」

「大丈夫だろ、病氣じゃない限りはお前が治せる訳だし。健康面には気を使っているのだろう」

「まあ一応ね。怪我は茶々丸に錬丹術で治させようかな」

「お前：自分の弟子を実験台にする気か？」

「失敬な、茶々丸の腕じゃ失敗する事はもうないと言ってもいい位だろ

エヴァは最近サボりがちだから練成出来る質量が増えて無いけどな」

「飽きてきたんだよ。魔力も気も使わないって言うのは大きいが、別段必要になる事もあるまい
下準備をしなきゃ戦闘でも使えんしな」

「…そう言えば、その下準備の段階をすっ飛ばすモノがあったな」
すっかり忘れてた

何処にやったんだっけ。

部屋に置きっぱなしだった気がするよ。賢者の石

使う機会も無いしな。小さくして千雨に持たせるか、人造人間でも作るか

そんなわけで作ってみました、ホームンクルス人造人間

能力としては万物への変身。エンヴィー嫉妬がモデルだ。名前もエンヴィー

ウロボロスのマークももちろんある。左脚の太股に

性格はかなり気が短くて喧嘩っ早い。後はかなりテキトーな性格をしている

フレッシュバーガーをフィッシュバーガーと間違えるくらいだし

だけど千雨がエンヴィーを近くに居させるのを拒否したから、十数人分の賢者の石を抽出し、常に携帯させることにした

学園長室なう

「朝っぱらから何の用だ爺」

俺は朝っぱらから呼び出されて不機嫌極まりない

モーニングコールは余計なお世話として受け取る男だ、俺は

「もう爺がデフォになっとるのかの？せめて孫には『おじいちゃん』と呼んで欲し…」

「帰るぞ？」

「実は今日、婿殿の戦友である英雄の息子、ネギ・スプリングフィールド君がこの学校に教師として修行に来るんじゃ

一応魔法学校は首席で卒業であるが、まだ未熟な魔法使いじゃ。

お主暇じゃろ？手伝いとが…」

「面倒だから絶対しない」

「だと思つたわい。一応給金も出すが？」

「やらない。金なら警備の仕事なんかでかなり溜まってるからな」

何故好き好んでトラブルメーカーの手伝いなどしなくちゃならんのだ

「他に用件は？」

「…無いが？」

「…ちなみに聞くが、そいつって何歳？」

「確か、十歳位だったの」

「PTAとか平成教育委員会とかから訴えられても知らねえぞ」

「いや、この場合平成はいらないよね」

「PTAから訴えられる」

そう言っただアから出ようとしたが、嫌な予感がしたので一歩下がる

下がった途端にバーン！と勢いよくドアが開けられた

「学園長先生！！ 一体どーゆーことなんですか！？」

神楽坂か、あぶねえなオイ

あのまま開けようとしてたら確実にぶつかってたぞ

「あ、兄様おはよう」

「おはよう木乃香。どうしたんだ神楽坂の奴」

何故にジャージ？

神楽坂と自己紹介している少年ネギをよそに木乃香に聞く

木乃香はそれに小さい声で対応してくれる

「…あんな、あの子の魔力がくしゃみで暴走してアスナの服が破けたんよ」

なるほど、納得

そして魔力の制御すらまともにできないガキを主席にしている魔法

学校の器が知れたな

所詮は元老院の使いやすい駒の為の養成所か

それと源先生、あなたはいつの間に俺の後ろに立っていたんですか？

「このか、アスナちゃん。しばらくはネギ君をお前たちの部屋に泊めてもらえんかの」

唐突に爺がそんな事を抜かした

「とうとうボケたか爺」

「ボケとらんわい。至って真面目な事じゃ」

「余計に悪いに決まってるだろ。何で来る事分かってたくせに部屋の一つも用意出来てないんだよ」

「それがの。今ちようど部屋が空いて無くて、ネギ君の住むところが決まつとらんのじゃよ」

「随分と職務怠慢だな。さっさと後任決めたら？」

「何でワシ其処まで言われなきやならんの？」

「それは爺が悪いからに決まってるだろ。高畑先生にでも頼めばいいじゃないか」

高畑と聞いて少年が目を輝かせてるし

「しかし、タカミチ君も出張などで部屋にいない事も多いしこの」

「高畑先生に迷惑がかかるくらいなら私達が面倒を見ます!!」

「コレをバックノズルと言うのか。どうやっても同居はするらしい

すっかり忘れてたんだよね、少年の事

木乃香の部屋を強引にでも変えさせておくべきだったか

「ウチもええよ」

「：お前がいいならいいか。だが木乃香、何かあったら直ぐに言えよ」

洗脳位なら幾らでも出来るからな

「それと一応退寮届だ。嫌になったらエヴァの家にお世話になれ。あいつは信用できるから」

部屋が足りない？そんなもの錬金術があれば数分で解決可能だ

「大袈裟やね、兄様は」

「心配なんだよ、俺は」

そついいながら俺は学園長室を出て教室へ向かう

教室なう

千雨の席の隣に来て一言

「英雄の息子が来た」

「…何を言っているんだ？いきなり」

「いや、千雨の嫌いな非日常の塊が来てるんだ。それが昔大戦を終わらせたって言う英雄の息子」

そういうと、千雨は頭を抱えた

「…それはどんな奴なんだ？」

「直ぐ来ると思っから待ってたら？」

そう言っつて千雨の後ろの席に座る

エヴァは何か今近づきたくない

だっつて一人で「もうすぐだ…」とか、「あと少し魔力がたまれば…」とか言っつてんだよ

何か忘れてる気がするけど、忘れてるといふ事はそんなに重要じゃないと思っつので思い出そうともしない

そんな話をしていると、ガラスとドアが開いて少年が扉を開け、仕掛けられていた黒板消しトラップを障壁で止めやがった。

それを確認し、千雨をチラッと見ると、案の定頭を抱えていた

悩みの種が増えたな

どこの転校生がトラップを初見で破ったので多少トラップは増えているが、大した問題じゃない

全部に引っかけてるし

木乃香はいつも通り、エヴァは何やら怪しい笑みを浮かべている

刹那は寝ているらしく、机に突っ伏して寝息を立てている

会話を聞かれないように盗聴防止の魔法を使い、木乃香を呼んで話し出す

「で、感想は？」

「…コレが白昼夢だと信じたい」

「デイドリーム白昼夢ね、夢もキボーも無いってか」

「ウチはあの子結構かわええと思うけどな」

「木乃香、アレはトラブルメーカーじゃない、トラブルの塊だ。トラブルを呼ぶんじゃない、作るんだよ。あいつは」

「何で分かるん？」

「俺の信用できる勘だ」

自信満々にこたえる俺にあきれる二人

「お前曰く非日常の塊らしいしな、アイツ
後絶対訴えられるだろ普通」

「残念ながら訴えても無駄だな。

結局は金の問題だし、何処に言おうと抹消されるだけさ。
裏、政治、経済と圧倒的権力で隠蔽出来る」

「何であのガキ一人の為にそんな事をする必要があるんだよ」

「あの少年はな、昔戦争を終わらせた英雄と呼ばれた男の息子だ。
自分達の為の広告塔で手駒にしたいメガ口元老院っつー老害どもが
送ってきやがったのさ
あの少年の為なら別に三十数人の生徒なんざどうなってもいいっつ
ー事よ」

「…ふざけてやがるな」

「気分が悪くなるえ」

っつーても、俺も身内以外は死のうが生きようがどうだっていいっ
て思ってるしな

あいつ等のやり方は吐き気がするがな

「全くだよ。とはいえ、関わらなけりゃどつってことは無いだろ。精々目立たない様にする事だな」

…まあこのクラスじゃ目立つ方が難しいが」

「……兄様は女子校に通う男子生徒って時点で目立ってると思っえ」

「そりゃそつだ」

「あたしは叶う事ならコレが夢だと願いたい」

「ついでにトリップしたままのアレ戻るように願ってくんないかな？」

エヴァを指差して言う

「……元に戻るのを待った方がいいんじゃないか？」

「エヴァちゃんがあんなになるとこ初めて見た気がするえ」

「俺も初めてだよ。アレの隣に座るのヤダなあ」

「あきらめろ。って言うか直ぐに戻ってくるだろ」

「だといけど」

そう話しているとしずな先生が静かにさせていた

木乃香と俺は自分の席に戻り、授業が始まった

特筆すべき事なんて無い

放課後に少年の歓迎会をやるらしいが、俺は特に興味も無いのでさ
つさと帰る事にした

第十四話 期末テストを頑張ったり頑張らなかったり

第十四話 期末テストを頑張ったり頑張らなかったり

少年が教師になった次の日

少年が惚れ薬を作って持ちこんだ

俺が処分する前に千雨がキレて試験管ごと爆破した

誰にもバレてはいない様だったから良かったが、あぶねえな千雨

最も、バレても記憶の操作なんて造作もないが

数日後、ウルスラの高校生とドッジボール対決をする事になった

俺はもちろんサボリ

介入しても良かったが、古とか長瀬辺りに目を付けられると面倒だからやらない

ウルスラの連中が脱げた時は眼福だったね

刹那と木乃香に目隠しされて一瞬しか見えなかったが

それにしても少年、感情が高ぶって魔法を使うとか魔法使いにある

まじき行為だな

少しは抑えるよ。子供だからって許されると思うなよ

俺は身内関係なら抑える気すら起こらないがな

3月某日

期末テストがあるらしい

最も、俺は毎回範囲だけを確認して勉強なんてしないけど

寮で寝ようかという時間帯に電話がかかってきた

面倒なので着信を見ずに電話に出る

「…もしもあーし？」

「何だ、その眠たそうな声は」

「何だ龍宮か。眠たそうって言うか眠いんだが」

「悪いね、ちょっと聞きたい事があるんだ

実は最近ちよつとした情報が流れていてね。

『クイーンオブザハート首狩りの女王』という女を知らないかい？」

「『クイーンオブザハート首狩りの女王』？」

「巷で最近騒がれている謎の女性の請負人でね。君の『零崎黒識』と同レベルで情報が少ない」

「ターゲットは全員首を落とされていることからそう言われているんだ。他には二メートルはある大鎌を使うらしいという情報もある」

「…知らないな。って言うか何故俺に聞くんだ？」

「君と同レベルで情報が少ないんだ。もしかしたら何か知ってるかもしれないと思ってるね」

「だからと言って何故調べる必要があるんだ」

「ここ数年はあまり噂を聞いていなかったんだが、最近になって動き出したと情報が入ってるね」

「それも日本で、だ」

「…なるほど、気をつけておこう
情報を教えてくれた事に感謝するよ」

「いいさ。彼女の強さはそれこそ紅き翼に匹敵するとまで言われているほどだ、私としてもあまり相手にしたいような奴じゃないからね」

「それだけ言っただけ電話を切りやがった」

「つまりはいざとなれば俺に丸投げしたいと？」

「確かに戦闘では死ぬ事なんて無いと言ってもいいけど、そんなヤバいやつは相手にしたくない」

と、思っていたらまた電話

今度は着信を見る

…爺かよ

「…何の用だ？」

「実は、ネギ君の最終課題を2・Aの最下位脱出にしようと思つての、既に図書館探検部に『魔法の本』などの噂を流してあるから、図書館で成績の悪い者の合宿をするつもりなんじゃが」

ああ、そう言えば休み時間に話してた気がするな

半分寝てたからうる覚えだが

「図書館島関連なら木乃香も付いて行くかもしれないってことか」

「危険は無い筈じゃ、一応ワシも監督しておるからの」

「…それを俺に伝える意味は？」

「木乃香関連は伝えておかないとキレそうだから」

確かにキレるかも知れんが、このイベント知ってたしなあ

「魔法に関しては知ってるんだし、保険はかけておくから、大丈夫だろ」

「ならOKという事でいいんじゃない」

「俺は行かないけどな」

「分かった」

さっさと電話を切って寝る

翌日のHR

朝っぱらから少年が大勉強会とか張り切ってる

俺は眠過ぎて正直意識が半分無い

が、それも椎名の大声で強制的に覚まされた

「提案提案！ お題は『英単語野球拳』がいーと思いまーすっ！！」

……それは俺が居る事を分かってて言ってるんだよな？

そしてそれを採用する少年

チラツと千雨を見ると、既に発火布を装着しようとしていたので止めた

流石にやり過ぎだ、あと最近千雨が暴走しがちだと思う

エヴァでさえ若干引いていたぞ

怒りは分からないものでも無いけど、流石にこの教室を火の海にする訳にはいかない

多分真正面からやりあっても勝てる奴は少ないからな、焔の錬金術

…雨の日は無能だが

あとホントに英単語野球拳始めたんだけど、木乃香が怖い笑顔を向けてきたので慌ててアイマスクを装着

ついでに耳栓までされた

その後、結局やることも無いのでそのまま熟睡

終わった後でエヴァに起こされた

ニート吸血鬼に起こされる俺は末期だと千雨に言われ、それを聞いたエヴァが別荘で千雨とマジ喧嘩

千雨も流石に今日のは鬱憤が溜まってしまったらしい

エヴァの氷を一瞬で溶かし、その上広範囲に爆炎をまき散らすそれはまさに『歩く爆撃機』とでも呼びたいほどだった

魔法の射手なんかに関しても瞬動なんかで避けれるようになったし、何より一対一だしね

最近雨の日でも使える紅蓮の錬金術を教えたのが不味かったと思う

「まったく、やり過ぎだろ…」

「ホントですよ…止める私達の身にもなってください」

「反省はしてない」

「鬱憤は晴らせた」

そんな『やりきってやった』みたいな清々しい顔で言われるとこっちがいらつくのでやめて欲しい

賢者の石こそ使わなかったものの、焰の錬金術と紅蓮の錬金術のコンビボは凶悪だと知った

湿気^{しけ}つても紅蓮の錬金術の爆発で湿気を吹き飛ばす上に焰の錬金術で爆発の規模が数段上がった

止めるのにさよちゃんのポルターガイストと俺の風の力で強制的に押さえつける羽目になったからな

夜、普通とは違う着信音なのでワンコールで電話に出る

「木乃香か、何か用か？」

「…相変わらず電話に出るのは速いなあ、兄様」

「それは木乃香からの電話だからこそだ、で、何用？」

「何かおじいちゃんが本気で怒っとるらしくて、次の期末で最下位のクラスは解散って聞いたんやけど、本当なんかな？」

「それは無い。クラス編成がどれだけ面倒事かは教職員が一番知ってるし、学園長の爺が知らない筈は無いから解散はしない筈だ」

誰だって進んで面倒事作ろうとは思わないだろうし

そもそも才能を持った連中を集めた2・Aなんかは特に解散される事は無いだろ。今までの苦勞を水の泡にするようなもんだし

「ほんまに？ 特に悪い人は留年とか小学生からやり直して聞いたんやけど」

「それは誰から聞いた？」

「パルが言ってた」

頭を抱える

常識知らずにも程があるだろう

「…ちなみに木乃香、義務教育って知ってる？」

「そんなくらいは知って…あ」

「分かった？小学生からやり直してのは流石に無い其処までやると世間が黙って無いからな」

「じゃあ、『魔法の本』は本物なんかな？」

「それは爺が用意した合宿の口実だ、成績の悪い奴の為のな。神楽坂辺りは行った方がいいと思うね、俺は」

「そう、ほんなら危険は無いんやね？」

「木乃香が行くなら一応保険もかけるつもりだし、大怪我するような事は無いだろ」

「分かったえ。それと、アスナは何かもう既にやる気全開やし、ネギ君とこそこそ話しとるし、ネギ君魔法がバレとるんかなあ」

やる気全開ってことは『魔法の本』が本物だと確信してるってことか

「それだけ露骨ならバレてるだろうな。後、関係者だって事は気付かれないようにな。少年に構ってやれるほどこっちも暇じゃ無いだろ」

「そうやね。そう言えば、兄様はいかへんの？」

「俺は行かない、だが念のためにエンヴィーを連れて行かせるから」

「分かったえ。お休み兄様」

「お休み木乃香」

電話を切り、エンヴィーを呼ぶ

ちなみに普段は猫の姿で家に居候している

流石に普段の質量だと床が抜けかねないのでエヴァ作の特殊な魔法薬で体重を軽くさせている

いくつか携帯させているし、あくまで体重を軽くさせるだけで質量は変わらないのがいい

エヴァは「一時的なごまかしにすぎない」って言ってたけど、十分過ぎるものだ

俺も作り方を習った。材料は爺に頼んで手に入れている

何故必要かと聞かれたが、錬金術の実験としてと答えた気がする

閑話休題

「聞いていたな？」

「分かってるよお父様。木乃香ちゃんの護衛だろ？」

「そうだ、直ぐに向かえ」

「りょーかい」

そついうと鳥に変身して飛び去って行った

一回性格悪いからって矯正しようとしたが失敗した

喧嘩っ早いのと口が悪いのが治らない

ま、気にする事でも無いと思う

…忘れていたが、一応俺とエンヴィーは仮契約をしている

アーティファクトは他人との思考や感覚の共有だった。媒介として
血を使う

中々便利なものが出たものだよ。コレがあれば直ぐに俺と連絡が取
れる

取り合えず今は関係ないので俺は寝る

〈SIDE 木乃香〉

兄様、エンヴィーが来てくれるっていったけど、どれ位で来る
んやろ

そう思っていると、バサバサッと一匹の鳥が近くに降りた

その鳥はウチの肩に乗って話し出した

「お父様に言われてきたよ」

「よろしくな、エンヴィー」

「ああ、よろしく」

「あれ？何？その鳥」

「兄様が飼つとる鳥や、兄様のところから飛び出して行つたて聞いたからこつちに来るやろと思つてな」

間違つてはいない筈や、一応ペットとして兄様の部屋におるんやし

…猫としてやけど

「よゝし、それじゃあしゅっぱーっ！」

目的は魔法の本になつとるけど、実際はアスナ達の勉強やからな、危険は無いやろ、兄様もそう言つてたし、念の為にエンヴィーもおるし

「ちなみにメンバーはバカレンジャー五人、ネギ君、ウチ、パル、のどかや。」

図書館島の中に入るのは最初の七人。兄様に伝えとつてや」

もしかしたらもう知つとるかもしれんけど、何かあつたら全員助けてもらわないといかんからなあ

エンヴィーは見つかるといゝろいと不味い気がするし

「おっけー。バカレンジャーってのが良く分からないけど、お父様は分かるよね」

「大丈夫や」

「ちょっと木乃香？」

小声で話してるうちにアスナ達は先に行ってしまったているらしく、慌てて追いかける

「どうしたの？」

「なんでもなくて、兄様に電話しただけや」

「？ふん」

そのまま図書館島の内部へ入っていく

下に進むにつれて罨が増えて行くけど、バカレンジャーの体力と運動能力はすごいと感心させられる

本が雪崩みたいに崩れてもあつという間に受け止めてるし

落ちかけてもどこから取り出したリボンでぶら下がるし

こんな異常としか言えない人たちの近くでよく不思議と思わなかったなあ、と今更ながらに感じる

最も、一番異常なのは兄様やおもつけど

半分宇宙人みたいなものっていつとったし

「こんなのばかりなら俺が付いてくる意味あったのかな？」

「あくまでも念のためやし、何も無いならそっちがええやろ」

「それはそうだけど、つまらないな。何か異常な生物…それこそドラゴンとかいたら面白いのに」

「流石に日本の図書館の地下にドラゴンはおらんやろ」

「お父様は『ありえないなんて事はありえない』って言うけどね」

「魔法があるからあなたが間違いで無気はするわ」

「いなくてもイメージできれば俺が変身できるよ」

そんな会話を列の一番後ろでしながらしばらく歩くと、ゆえに連絡があった

パルとのどかやね

『こちら地上班です。その先に休める場所があるので、そろそろお弁当にしてくださいー』

って声が聞こえたから

軽く食事をしながら雑談をしていると、またネギ君とアスナがこそ話してるのが聞こえた

「やっぱり、ここ僕とは別の魔法の力を感じますよ」

「ちょっと、ソレどういう事よ？魔法の本が近いの？」

「いえ、本かどうかは分かりませんが、とにかく魔法の力を感じるので、気をつけた方がいいと思いますよ」

「…ハアー、こんなときに限ってアンタは魔法が使えないみたいだし、あたし達でどうにかするしか無いわよね…」

小さい声やったし、ウチ以外は聞かれていないと思う

エンヴィーはまき絵達に大人気みたいやから

本人は嫌がってるみたいけど、そのおかげで会話を聞かれていない話したいけど、兄様からそっち関係は話すな言われとるしな

しばらくは関係ない一般人の振りをする事になるんやろな

アスナ
親友に隠し事とかしたくないんやけどな…

その後、ツイスターゲームをやる事になり、ウチとネギ君以外のみ

んなが頑張っていたが、アスナとまき絵が間違えたため、落ちる事に

ウチは一步離れたところにおったから落ちへんかったけど

とりあえずおじいちゃんの声がする石像に話しかける

「おじいちゃん、コレ勉強合宿なんやる？」

「フオツ！？しつとつたのか？」

「兄様がいつとつたで」

「そうか…一応木乃香も行くかの？」

「一人だけいないのは不安がられるじゃろう」

「うん、みんなに勉強教えてあげなあかんしな」

「分かった。それで、どうやって降りるつもりじゃ？」

「其処は問題あらへんよ。兄様からいろいろ教わっとるから」

正確にはエヴァちゃんやけど

それにエンヴィーもおるし

「そうか、ならワシは先にいっとるぞ」

そう言って目の前の石像は飛び降りて行った

「じゃ、ウチらもいこか」

「おっけー、大きめの鳥にでも化けて飛べばいいんだね？」

そういうとすぐに変身して大きい鳥になる

ウチはその上に乗り、穴の中へ急降下していく

〈SIDE 黒樹〉

夜中にエンヴィーから報告を受け、若干寝不足を感じながら学校へ行く

案の定バカレンジャー + 木乃香 + 少年^{ネキ}が行方不明になってた

エンヴィーから報告を受けてるし、問題は無いのだろうが、こっちは問題だらけだった

「黒樹様！お嬢様は！」

「落ちて着け刹那、木乃香に関しては問題ない

アレは爺の用意した勉強合宿だ、バカレンジャーの為のな」

実質エンヴィーも居るし、高畑先生以外の英雄も一応いるみたいだから問題は無いだろう

「さて刹那、お前成績良く無かったよな？」

「え？いや、そんな事は……」

「そんな刹那にうれしいお知らせ、今ならさよちゃん、超、葉加瀬の家庭教師が得られる」

さよちゃんは二つ返事で了承したが、後の二人は他の人にも教え無ければとかが言っていたが、

俺の『等価交換』の一言で決定した

なんだかんだ言っても貸し一つだったからな、あの二人

ま、学校に居る間は流石に他の奴も勉強を見ないとヤバいから後で寮に帰ってからになるが、

それでも学年トップツーに教えてもらえるのはありがたいよね

「その勉強、あたしも混ぜてくれ」

「あれ、千雨は成績悪くないだろ？」

おもに錬金術関連で勉強したから

「理系はな。文系は全く勉強してない」

「そ、別に一人分増えたところで対して変わりはないだろ。あの二人には俺が言っというてやるよ」

「さんきゅー、助かるよ」

これで貸し一つ…とは言わないかな

別に勉強を教えるのは俺じゃないし

魔法関連でもほぼ俺の所為で巻き込んでるし、むしろ借り一つだったのかな？

今回の勉強会でチャラにさせて貰おう

俺はいつもどおりぐっすり眠らせて貰う……つもりだったが、雪広に

「あなたも成績いいんですから勉強を教えてあげてくださいー！」

と言われたので、しぶしぶ勉強を教える事になった

おもに理系でだが、この分野なら超にも負ける気はしない

勝負する気もないが

翌日、エンヴィーから報告を受けたが、問題ないらしいので放っておく事にする

別に遅れて最下位になって少年がクビになっても知った事じゃないしな

むしろ千雨はクビになってくれる事を望むと思うが、雪広がウザそうなので無理っばいが

結局、2 - Aは学年一位になった

今は最下位脱出+終了式のパーティーをしている

木乃香に連行されたんだよ

エヴァはいつの間にか帰ってたし、千雨は刹那に連れてこられたらしい

頼んだのは木乃香だと思っけど

エンヴィーは鳥の状態で俺の頭の上に乗っていたが、連れてくるなり鳴滝姉妹やらに大人気だった

こっちをちらちら見て助けを求めているが、無視

…春休みか、特にやることも無いんだよな

どうしようか

第十四話 期末テストを頑張ったり頑張らなかつたり（後書き）

取り合えず期末テストです

春休み編は後で番外編として出そうかとも考え始めたのですがどうでしょうか

一応まだ募集中ですが、本編を書いて欲しいとの要望が多いので本編を書くことになると思います

感想は常時募集中です。どしどし書きちゃってください
お願いします

外伝 殺人鬼の絵 近衛木乃香編（前書き）

本編とは全く関係ない一日です
落ちも何も考えていません

外伝 殺人鬼の絵 近衛木乃香編

外伝 殺人鬼の絵 近衛木乃香編

何でこんなことになっとるんやろ

目の前にはシャツシャツと真剣に絵を描いている兄様

ウチの周りにはパル達

いきなり言っても分からないと思うので回想をどうぞ

く回想く

図書館島、ウチはいつも通りゆえやのどか達と図書館島へ行った

そしてしばらく探索していると、大きめのカバンを肩にかけている兄様が来た

「あ、いたいた。見つけたぞ木乃香」

「え？探してたん？」

「まあね、ちょっと探してた」

「何でここに居るって分かったん？」

「それはアレだ、双子だから」

「そんなもんなん？」

「そんなものなの」

「で、結局兄様は何しに来たん？」

「ああそつだ。木乃香、ちょっと絵のモデルになってくれない？」

「モデル？」

「モデル」

「ええけど、何で？」

「絵を描きたいから」

そういうと、スケッチブックをカバンから取り出し準備しだす

ゆえ達が気付いてこっちに来る

「何してんの？」

「絵を描いているんだ、モデルは見ての通り木乃香」

そついいながらも兄様は手を動かすのをやめない

「絵なんてかけたの？趣味？」

「小学校の頃から偶に描いてる。趣味って程じゃ無い、気まぐれに描いてるだけだからな。後見るな。完成したら見せてやる」

そう言っつて兄様はパルを追い払う

く回想終わりく

それから二十分位ウチはパル達と話しながらモデルをやった

兄様が「自然体を描きたいから」って言っつて話してていいって言うから喋ってる

時折兄様から話しかけるけど

「時に木乃香」

「何？兄様」

「お前今疲れて無い？」

「え？何で？」

「いや、元気が無いみたいだからな」

「あ、ソレあたしも思った」

「何だかいつもより元気無いですよ」

「大丈夫？風邪引いた？」

「パル達にも言われた」

「実はちょっと風邪気味なんよ」

「最近エヴァちゃん家で修行ばっかやっとなった所為やるか？」

「そんな事は無いと思うんやけどな」

「と思ってたら兄様から念話が来た」

（ホントは今日と明日も修行にするつもりだったが、今日の昼と明日の予定はキャンセルだ。ゆっくり休め）

（ええの？）

（体壊したら元も子も無いだろ）

「でも、どうして分かったですか？私達も一、二時間一緒に居てやっとなつたのに」

「それはアレだ、双子だからな」

「なんでもそれで済ませられると思ったら大間違いやで」

「…しょうがないな」

「よし、ちゃんと話してや」

「絵を描いてるとき、そいつの事が分かるんだ」

「どづいう事？」

ウチらはパルに同意する

「デッサンなんかで人を描くとき、その人の事が少しわかるんだ。今回は木乃香をよく見ていつもと様子が違うから少し不審に思っただけ」

「へー、そういうモノなんだ」

「俺はそうだってだけで他の奴がどうなのかは知らん」

それだけ言うとおもむろに手を止める

「よし、完成」

そういったのを境にわらわらと兄様の周りに集まる

「わ、すごいです。とても上手です」

「うわー、すごい。黒樹君って絵上手いんだね」

「上手なんだね、ビックリした」

「ホントや、すごい上手」

なんて言うんやろ

こう、絵がそのまま飛び出してもおかしくない様な感じ

こういうのは良く分からんけど、すごく心が引き込まれるって言うのは分かる

「そんなでも無い」

「またまた、謙遜しちゃって」

「謙遜って言葉を知ってたのか？驚きだな」

「ムキー！！怒るよー！！」

それでも顔は笑ってるから冗談やと思うけど

「それでも絵を描く事は好きなんですか？」

「…好きか嫌いかで言えば好きな部類だろうな」

何で其処で迷ったんやろ

「いつから絵を描いたりしてるんですか？」

「小学生の頃だな。刹那や父さんをモデルにデッサンを描いていた」

それは知らんかったな

せつちゃんも教えてくれてもええやろに

「これだけ上手に描けるってのはすごいと思うですよ。」

「欲しいならやる。俺は残す事に興味が無い」

「こんなに上手なのに？」

「どれだけ上手く描けても俺は残したいとは思わない。何故と言われると返答に困るがな」

「ふ〜ん。変わってるね」

「自覚してるよ」

「じゃあさ、私達を描いてよ」

「今日は木乃香を描いて満足した。今日はもう描かない」

「え〜、いいじゃん一枚くらい」

「俺は気が向いたら描くんだ。コレだって今日思い出して引っ張り出して来たんだからな」

そう言つてスケッチブックを指差す

押入れの中にも入れとつたんやるか？

「気が向いたら描いてやる。取りあえず今日は帰って寝る」

「もう正午やで？」

「昼飯食って寝るとしよう」

多分もう何言っても無駄やね

目がもう眠そうやし

「ほんならお休み。兄様」

「ああ、お休み。木乃香」

「昼に寝る前のあいさつって…」

其処は突っ込んだら負けや、パル

兄様はさっさと片付けて、ブリッと一枚破いて渡してくれた後、ふらふらしながら帰って行った

「…あ、漫研に手伝いに来てって言うの忘れてた」

「多分無理やと思うえ」

「それにあの絵は漫画の絵とは部類が違うと思うです」

「パルが描いてるのは少し感じが違っよね」

あはは、と笑いあって今日の部活動を終わり、解散する

兄様が渡してくれた絵を見る

其処には兄様が描いてくれたウチの絵がある

アスナに見せてあげよう

外伝 殺人鬼の絵 近衛木乃香編（後書き）

短めです

今回は木乃香でしたが要望があれば別のキャラを書いてもいいなと思います

アンケートをまだ募集しているので本編が書けないので外伝を書いてみました

感想お待ちしております

第十五話 春休みは徹夜ばかり（前書き）

アンケートの結果、本編を進めろとの事なので、本編を進めたいと思います

第十五話 春休みは徹夜ばかり

第十五話 春休みは徹夜ばかり

春休み

俺は初日に京都へ里帰りし、木乃香に魔法がバレた後から父さんと話し合っていた事を準備した

木乃香に陰陽術を教えるのだ

一応俺も昔に習ってはいるが、一か月足らずで全て習得した

一回見ただけでコピーしてたからな。一応ちゃんと理解はしている

それはともかく、エヴァのおかげで魔力の運用がうまくなり、父さんと俺も『もういいだろう』と判断したので、陰陽術を教える事にした

木乃香にはなんかを使役して貰うつもりだ

最終的には安倍清明が記したと言われる『占事略決』を使えるようになって貰おう。

俺は一応使えるが、全然へボい。使いこなせてないんだよね

ついでに父さんと剣を打ち合ったりした、最近は鍛えて無かったら

しく、俺の連撃に耐えられなかったが。

父親の面目丸潰れって顔してたな。まともにより合えば俺に勝てる人間の方が少ないのに

更に言えば剣の打ち合いを見ていた神鳴流の師範が俺達の殺気を感じてかなり引いていた

後は、父さんに俺の能力について話した

意外と直ぐに信用してくれたよ。

とまあ、そんなこんなで『扉^{ゲート}』の魔法で麻帆良に戻ってきた

そして帰ってきて数分で着物姿の木乃香を発見

何故に着物？

「おーい、木乃香ー」

「あ、兄様。ウチ今追われとるんよ。助けて〜」

「追われてるって…誰に？」

それに刹那も居ないみたいだが

「おじいちゃんの部下の人。ウチにお見合いさせようとしてるんよ」

「OK、全面戦争だ」

爺に一泡吹かせてやる

「何処からバズーカ出したん？」

「俺は何でも作れるのさ。錬金術師だから
ちなみに前にもした事あるの？」

「ある。最近は無かったんやけど、今日急におじいちゃんから連絡
があったんよ」

「なるほど、俺が居ないと思って行動に出たか」

取りあえずバズーカを分子レベルまで分解して捨てる

何で作ったんだろ、俺

自分で自分の思考が理解できない

そんな事を思っていると、何処からか黒服のSPみたいなのがわら
わらと出てきた

夏場の台所に居るアレかよ

「黒樹様、木乃香お嬢様をこちらに引き渡していただけませんか？」

「お前らそのセリフだけ聞くと完全に危ない人だぞ」

「違いますよ！！」

「ウチの爺が変な仕事押しつけて悪いな、こんな仕事したくないだ

る?」

「そりゃもちろんです。私達だってもっとまともな仕事がしたいですよ」

ですが、今回の仕事がコレなのでしょうがないんです」

思いつきりぶつちやけたな。コレ雇い主に聞かれたらクビじゃね?

「雇い主の爺には俺が話しとくから今日は帰れ」

「一応仕事なんでそういう訳にもいかないですよ」

仕事熱心な事で

「…しょうが無いなあ」

「兄様!？」

木乃香がビツクリしてこっちを見ている

黒服集団はホツとした顔をしている

え?勘違いしてるみたいだけど見捨てないよ?

指をパチンと鳴らし、風で砂埃を起こす

さっさと『扉』の魔法でエヴァの家に行き、エヴァに木乃香を預ける

俺はそのまま爺の元へ

学園長室前なう

さっさと終わらせようとなわざわざ足を運んでやった

ドアを思いっきり蹴破り、そのまま魔法の射手を何発か無詠唱で放つ

「ちよっ！いきなりなんじゃ！？」

高畑先生もいたよ。居合拳で防がれた

剣を練成して剣先を爺に向ける

「それはこつちのセリフなんだがな。何で木乃香にお見合いさせたんだよ」

「え？…いや、…それは…」

「木乃香は嫌がってたんだろ。てめえの都合で無理やりお見合いなんて勝手な事すんなや」

「わ、分かったからその殺気を抑えてくれ」

「なら『約束』しろ。『今後一切木乃香の嫌がる事を無理強いするな』」

「わ、わかった『約束』する」

ククク、言質取ったぞ

多分爺には大鎌をもって黒い布切れをきた少女が見えている筈だ
ちなみにこの姿はデフォだった。いじる事さえできなかつた

コレじゃ俺がロリコンの方と間違われるじゃねーか！

話がずれた。閑話休題

「ふおっ！？な、なんじゃこいつは！？」

「学園長！？何を見ているんですか！？」

「み、見えておらんのか？タカミチ君」

「いえ、僕には何も見えませんが…」

「そいつは死神だ。約束を破れば爺を殺すから気をつけろよ
後、約束した奴にしか見えないから」

多分麻帆良結界も意味を成さないだろうな

「ふおっ！？そんな危ない事するでない！！」

「爺が約束破らなきゃいい話だろ？安心しろ、ぶっちゃけ爺のやつ
てた仕事くらい誰にでもできるから」

爺洗脳すれば麻帆良の地も俺が掌握出来るんだがな

「いつも思うんじゃが何でワシにそんなに冷たいの？」

「だって爺木乃香の嫌がる事するじゃん」

「…シスコン」

「よし、その首をはねてやれ死神」

「ちょ、ストップストップ！！御免！謝るから許して！！」

「チツ！」

どうせ約束破らなきゃ死神は殺さないんだけどな

「…グスン」

「爺のすすり泣きは需要が無いからやめろ。吐き気がする」

「ちょ、黒樹君。其処までにしておいて欲しいんだけど」

「…高畑先生に其処まで言われたら仕方がない。じゃ、約束守れよ爺」

それだけ言って部屋から出る

出て扉を閉め、直ぐにエヴァの家に転移する

事情を説明し、木乃香に早速陰陽術を教え始めた

ここで俺の一日の流れを教えよう

朝、九時起床

十時にエヴァの家に行き、別荘に入る。この時大概俺以外のメンバ―（木乃香、刹那、さよ、千雨、エヴァ、茶々丸）が集まっている其処から、刹那に神鳴流を教え、木乃香に陰陽術を教え、千雨に錬金術を教え、茶々丸に練丹術を教えている。さよに俺は教えられる事は無い

アレ？俺教えてばっかじゃん。

仕事熱心だね、俺

取りあえずこれで別荘の三分の二がつぶれる

残りはエヴァにいろんな魔法を実演させ、コピーし、一度使って精霊を洗脳・操作し、詠唱なしで魔法を使えるようにしてみたり

普通より魔力を多量に使うけど、アクロの心臓からエネルギーを魔力に供給すれば問題なんて全くない

『燃える天空』や『千の雷』なんかもコピー済み

そして木乃香に教えるならちゃんと思えなきゃな、と、陰陽術を練習したところ

三徹、四徹当たり前になってしまった

そんなある日（別荘内）

「雷鳴剣!!」

ドオオオン!!と、まともに喰らえば結構ヤバい事になるであろう
一撃を俺は真正面から消滅させ、前に出る

「フツハハハハハ!!効かぬわー!!」

両手に持った剣とカマイタチで多角的に視覚にギリギリ入るように
調整しながら攻撃する

刹那は必死に防ぐが、完全には防ぎきれずに傷を増やす

剣で刹那の刀を弾き、剣先を向ける

「これで一回死んでるぞ」

それだけ言って動きを止める

「これで終わりだ。一応視覚に入るようにしてるから攻撃に対処で
きるように頑張れ」

「はい!!」

「おわった?」

「ああ、治療してやれ、木乃香」

「OKや。せつちゃん、コッチ来て」

木乃香は陰陽術で怪我の治療が出来るようになってきた

元々木乃香はこっち方面に才能があるからな

「はい、お願いします。お嬢様」

「…それにしても、今日はまたいつもと違う感じがするな、お前」

「徹夜続きで正直テンションがおかしい」

今んとこ最高の六徹

ホント死ぬんじゃないかと思ってる

一応仮眠は取ってるけどな

「兄様も、せつちゃん女の子なんやから顔は勘弁したってや」

木乃香が陰陽術で治しながら俺にぼやく

「できる限りは狙わないようにはしてるさ。ただ、上とか下とかから攻撃すると顔に当たっちゃう時があるんだよね」

「避けきれない私が悪いので…」

「せつちゃんががんばってるのにな。もっと簡単に強くなる方法とかあらへんの？」

「いや、お嬢様。それは流石に…」

「無い事も無い」

「え！？あるんですか!？」

「エヴァ、アレなんだっけアレ」

「どれだ」

「ぱ、ぱ、ぱ、パクチ？」

「パクチ?……ああ、バクティオー仮契約の事か」

「そうそれ、全然覚えて無かったんだよね」

「ぱくておーって何なん？」

「バクティオーな。西洋魔法の契約の事だな。契約によって魔力で身体能力を強化したり、アーティファクトという魔法具が手に入ったりする」

「基本的には前衛の剣士と後衛の魔法使いが通例だな」

「それをやると強くなれるん？」

「主の魔力とかアーティファクトが何かによるな」

「へえー、ほんならやってみようや」

「何であたしが強くなる方法を求めた時に言わなかったんだよ」

千雨がジト目でにらんでくる

「忘れてた」

「忘れてたって…まあ、今更言ってもしょうが無いけどな」

「ちなみに主流の方法はキス」

刹那が固まった

効果音を付けるならビキッ、だろっな

茶々丸はさっさと陣を書いている

「よし、じゃあ、早速しようやせっちゃん」

「え？え、えと、あの…」

「つべこべ言わずにやれ」

エヴァが糸を使って顔を向ける

そのまま顔を近づけてキスする

刹那は顔を真っ赤にして倒れている

「…そういえば、黒樹。お前私の従者になる気は無いか？」

「無い」

「お前ホントにセリフが短くなってるぞ」

千雨が軽く顔を赤らめながら言ってくる

ゴメン、マジで頭ん中真っ白だわ

眠くしょうがない

「何故だ？アーティファクトが欲しくないのか？」

「いらん。そんな物に頼る必要性も無い」

「ならせつちゃんとしたってや。もう一枚カード作ればまた強くなれるんやろ？」

「ちよっ！？このちゃん！？」

「いいよ」

「ちよっ！クロ君まで！？」

久しぶりだな、それで呼ばれるの

「長谷川もやるか？」

「いや、あたしは別にこれ以上力なんて…」

「何かあったときにカードがあれば念話で話せるぞ。
キス一つで命が守れる可能性が高まるんだ、結構得だと思っちな」

それ以前に雨の日じゃなきゃ千雨に勝てる奴はほとんどいないんじゃないか？

多分刹那も勝てないぞ

近距離には小規模なピンポイント爆破で距離をとり、遠距離ならお構いなしに大火力と紅蓮の爆弾攻撃

うん、レベルで言うと高畑先生レベル位と同等かなあ

「……………そうだな、世の中何があるかわかったもんじゃないし。一応しといた方がいいのかも知れないな……………でも……………」

なんか千雨がブツブツ言ってるんだけど

「嫌なら別にしなくてもいいんだけど」

「いや、そういう訳じゃないんだけど……………」

「さよはどつだ？」

「へ？いえ、私は戦闘とかするつもりもありませんし、逃げるだけなら方法はいくらでもありますから」

「そうか、お前なら面白いアーティファクトが出そうな気がするんだがな」

俺はどうでもいいんだが、エヴァよ、勝手に俺と仮契約させようとするんなや

「ならせつちゃんからばくておーしよっせ」

「へっ!?!う、ウチは別にええよ!?!クロ君とキスなんて、あの、その…」

刹那がパニックしてる。面白いね

「ええよ、ウチは気にしないから」

「いや、このちゃんだけの問題とちゃうよコレ!?!」

なんかこの二人傍から見たら百合カップルだな

「俺も別にいいんだが」

その後も五分位駄々をこね、最終的に木乃香が落とした

「よっ、っせ」

魔法陣の上に立ち、刹那とキスをする

刹那は顔を真っ赤にさせてまたぶっ倒れた

「千雨は結局どうすんの?」

「……………やる」

そして千雨とキスし、仮契約カードを出す

千雨も顔が真っ赤だったが、気にする余裕が無い

「じゃ、俺は寝る。流石に眠い」

それだけ言って別荘の奥の部屋へ行く

その後二時間ほど寝て、起きてくると刹那と千雨がアーティファクトの確認をしていた

「あたしのはネット関連だな」

千雨の持ってきたパソコンの周りに電子精霊らしきものがふよふよ浮かんでいる

「戦闘ではあんまし役に立たないが、ネット関連の事ならどんと来い、だ」

「ネット関連で何かおかしな事が起こらない事を祈ろう」

「あたしのアーティファクトを役立たずにしたいのか!？」

「いや、起こした相手がかわいそうだなーと思って」

確実に負けるだろそいつ。茶々丸も居るしな

「刹那のは？」

「私のお嬢様とのが『建御雷』タケミカヅチですね。石剣でお嬢様から魔力の充填があれば巨大化します

黒樹様とのは良く分らないんです。刀ではあるんですが」

「へえ、ちよつと見してみ」

そう言つて刀を受け取り、観察する

確かに刀ではあるが、刀身にモノを斬れるような切れ味は無い

なんか見た事あるような刀ではあるんだが…

「…コレ、カードにはなんて書いてあるんだ？」

「あ、えくと。『六幻^{ムゲン}』です」

……………え？『六幻^{ムゲン}』？

それつてつまりイノセンス？

「…刹那、ちよつと刀身をなぞってみろ」

「え？はい」

刀身をなぞると、それに沿うように光が発する

「…ああ、なるほど。確かに刹那はこいつの力を十全に発揮しそう
だ」

「コレそんなにすごいんですか？」

「そいつはな、対象者の命を代償に使用者に力を与える武器だ。

一応神の武器なんだが、悪魔みたいに力を得たけりゃそれなりに代償を払えつて事になるな」

「そんな危ないモノなん？」

「まあ、使い方次第だろ。寿命を代償に力を得る。つまりは今死ぬか生きる時間を減らすかだな

刹那は木乃香の為に命投げ出してでも強くなりたいと思うだろうしハイリスクハイリターンって奴だ」

どっちかといえばエンヴィーがこの刀を使えそうだ

ほぼ不老不死だから代償をどれだけ払っても力を得られる訳だし

…ん？不老不死？

「……ああ、そうか。そうだよな、そうすればいいんだ。あの神め、くだらないことしてくれる」

「え、えつと、黒樹様？」

「ん？ああ、すまん。考え事してた。取りあえずはそれ使えるように修行しろ

ある一定レベル以上の力を引き出そうとしなけりゃ大丈夫だから」

「はい、分かりました。もっと強くなって見せます」

「頑張つてな、せつちゃん」

「はい！もちろんです」

今回の事で刹那と木乃香は更に仲良くなった気がする

と、まあこんな感じで春休みを過ごした

中々に充実したと言えるだろうな

もうすぐ新学期だ

……やっぱり何か忘れてる気がするならないんだよなあ

第十五話 春休みは徹夜ばかり（後書き）

はい、仮契約の回でした

これでハーレムになる事が決定した訳ではありませんが、取りあえず仮契約させてみました

感想は常時募集中です

第十六話 桜通りの吸血鬼

第十六話 桜通りの吸血鬼

SIDE 千雨

新学期

あたしたちは二年生から三年生になった

数字の上では一つ繰り上がるだけだが、本人達からしてみれば結構変わったと思う事だ

少なくとも最高学年として成長しては居る筈なんだ

だが、このクラスにおいてそんな常識は通用しないとはつきり分かった

なぜなら…

「「「3年！A組！！」」」

「「「「「ネギ先生——！！」」」」」

「バカ共が……」

とまあ朝っぱらから超ハイテンションで盛り上がっている

チラッと後ろを見ると、黒樹が珍しく起きていた

いつもならこの時間は寝ているのだが、今日はちょっと違った

「で、では皆さん身体測定ですので…ええと、今すぐ脱いで準備してください」

「キヤー！ネギ君のエッチー！」

「あわわ、その…ごめんなさーい！」

バキッ！

怒りのあまりにシャーペンを握りつぶしてしまった

後で黒樹に修理させよう

後ろを見ると、黒樹は既に教室の外へ出ていた

あたしはさっさと着替え、順番を待っていた時だ

「先生　っ！　まき絵が　っ！」

いきなり和泉が大声出しながら走ってきた

何があったんだよと思ったら

「何！？　まき絵がどーしたの！？」

と、いきなり教室の窓やドアを一斉に開いた

「…一応聞くが、ここ女子校だよな？」

取りあえず近くに居た茶々丸に聞く

「はい、女子校ですね」

「だからっていきなりドアや窓を全開するのはどうかと思うのはあ
たしだけか？」

「いえ、恐らく私を含む関係者全員が思っている事でしょう」

こんなとこにまで麻帆良結界の悪影響が出てるのか…

さよは…苦笑いしながら他の奴を見ている

刹那は…顔が引きつっている

木乃香は…こいつはいつも通りニコニコしている。既に身体測定は
終わって着替えてるけど

エヴァは居ない

「…あれ？エヴァは？」

「私ならここに居るぞ」

「何処行ってたんだ？」

「トイレだが？」

「ああ、そう」

話をその辺にして身体測定をする

その時に変な噂を聞いた

その噂の内容は、満月の夜には寮の桜並木に吸血鬼が出るといっもの。

…吸血鬼って……

まさかエヴァじゃないよな？

エヴァだとしたら何のためにそんな事してるんだろっな

まあ、あたしに害が無いなら何やってくれてもいいけど

夕暮れ

あたしは先生の手伝いとかさせられ、帰るのが遅くなってしまった

帰り道に桜通りを通る

別に誰が出てこようとケシズミにできるから恐怖はあまりない

そんな事を思っていると、ひととき強い風が吹く

桜が散り、散った桜が街灯の光に照らされる

少し見上げると、街灯の上に誰かが乗っていた

丁度影になる位置に居るため、あたしの顔はあっちからは分からないだろう

あたしもあっちの顔が分からない

だが、敵ならケシズミにするまでだ

「悪いが、お前の血を少し分けて貰う」

バサア！とマントをはためかせながらこちらへ跳んでくる

直ぐに手袋をはめ、敵に向けて爆破させようとする

が、

「……………て、エヴァかよ」

「む？…千雨か。お前なら手を出す訳にはいかな」

「良心的な事で」

「黒樹がうるさいからな」

黒樹の影響力半端じゃねえな

互いに構えた状態で話す

「そうかい、それなら何でこんな事をして「コラー！ぼ、僕の生徒に一体何をするんですかーっ！！」「……」

構えを解いて話そうとしたらかぶせられた

いらつくよな、こっこの

「魔法の射手・戒めの風矢！！」

「もう気付いたか。氷楯」

エヴァと先生で勝手に戦闘を始めてる

っーかあたし一応普通の生徒なんだが、目の前で魔法を使っつてどうなんだよ

被害にあわない様に少し離れたところで見てると、神楽坂と木乃香が来た

エヴァは一般人が来たからと場所を変える為に何処かへ跳んで行った
先生もそれを追って行ったが、あたしはどうしろと？

神楽坂も先生を追って行った

「何があったん？」

「エヴァが桜通りの吸血鬼の犯人だったって話だ」

「ああ、そういう事。それでネギ君がエヴァちゃんをおってっただんやね？」

「そうなるな。神楽坂も追って行ったし、一応黒樹に連絡しとくか」
「そうやね、エヴァちゃんが何かするにしても兄様なら何かしつとるやろし」

あたしは仮契約カードを取り出して念話をする

（黒樹、今大丈夫か？）

（全然オツケー）

（桜通りの吸血鬼って知ってるか？）

（桜通りの吸血鬼？……ああ、なるほど。忘れたと思っていたのはそれだったか）

（？何の事だ？それより、先生がエヴァをおっていったんだが）

（心配なんてしてないでしょ？）

（する必要もないだろ。それより神楽坂がその先生を追って行ったんだが）

（ああ、なるほど。一応彼女も関係者なんだとおもうよ？）

(疑問形じゃねえか)

(取りあえず監視はするから危なくは無い)

(了解だ)

「兄様、なんやて？」

「一応監視するから心配はいらないってさ。この件に関しては何も知らなかったらしい」

「それはまた珍しいな」

「まったくだ。明日雨が降らなきゃいいけど」

〈SIDE 三人称〉

満月の光に照らされ、とある建物の屋上に三人の人影を作っている

一人は言わずと知れた子供先生、ネギ・スプリングフィールド

もう一人は真祖の吸血鬼、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル
最後の一人はエヴァの従者、絡繰茶々丸

茶々丸が押さえつけ、エヴァが血を吸おうとしたところで邪魔が入った

「コラァッ！ この変質者どもーっ！！」

神楽坂明日菜だ

この建物は八階。それも屋上だ

この短時間で追い付くのに体力バカだからでは説明がつかないが、それはこの際どうでもいい

明日菜はエヴァにとび蹴りをくらわせ、ネギの前に立つ

「何っ！？」

障壁を障子のように破って蹴りをくらわされたエヴァは少し後退し、二人を睨みつける

その時、一つの変化が起こった

ずぞぞぞぞぞ、と、影が蠢いていた

その影には目があり、口があった

それに見おぼえがあるエヴァと茶々丸と違い、ネギと明日菜はその

得体の知れないモノに恐怖する

そして影は話し出す

「…随分と面白そうな事をしているじゃないか」

「ふん、お前の知った事ではないだろう。手を出したのはお前の身内では無い者だ
言いがかりを付けられる覚えは無いぞ」

「いやいや、言いがかりなんて付けやしないさ。ただ、面白そうだから見に来ただけだ」

「な、なんなのよ!!コレ!!」

「…ふむ、これははじめましてになるかな、神楽坂明日菜。俺の名は『プライド』だ」

「そ、そんな事を聞いてるんじゃないわよ!!」

「しかし、俺はお前に興味が無い。故に答える必要性も無い。
エヴァ、あまり派手にやらかすなよ?学園の奴らがうるさいからな」

「分かっている。今日のところは帰るとするぞ」

それだけ言うと、屋上から飛び降りた

「俺はいつもお前らを見ている。おかしい行動はしない事だな」

影は何処かへと消えて行き、屋上に残ったのはネギと明日菜の二人

となった

安堵したのか、突如泣きだすネギ

それをあやしながら、明日菜は思う

(まったく、何がどうなってるのよ…)

翌日

ネギは学校に行く事を拒否しだし、明日菜が無理やり連れてきた

しかし、その状態で授業などできる筈もなく、ぼろっとしている

黒樹はその状態のネギを見て呟く

「先生が給料もらつときながら授業をしないと、給料泥棒だな」

「何があつたんだよ。教えろ」

千雨は後ろを振り返って黒樹と話し出す

エヴァはいつも通りサボリだ

「昨日の夜にちょっと脅してやったただけだ。まさかあそこまでへこむとは思わなかったけどな」

そんな事を話していると、ネギが唐突に呟いた

「……あの、みなさんはパ、パートナーを選ぶとして、10歳の年下の男の子なんて嫌ですよね……?」

「……ええええええっ!?」「」「」

それと同時にシャーペン^{バキッという}を折る音

千雨が怒りでシャーペンを折っていた

(…また俺が直すのか?)

(ああ、頼む)

念話をした後、盛大に溜息をつく黒樹

今にも不幸だーとか言いそうな雰囲気である

そんなどうでもいい事は置いておいて、放課後

「何で吸血行動なんてしてるんだ?」

「私にかけられた呪いを解くためだ」

エヴァの家でくつろぎながらいつものメンバーで駄弁っている

「呪い?」

千雨が首をかしげながら言う

「『登校地獄』というふざけた呪いだ。コレの所為で私は十五年間ずっと学校に通うはめになったんだよ」

「それはまた…」

「だが、ぼーやの血を使って呪いを解くつもりだ。邪魔するなよ黒樹」

「しないよ？だって俺に何の得も無いし」

「……ちなみに一つ聞くが、お前は呪いを解けるか？」

「多分解けるよ」

「そうか、やはり無理……って、何イ!？」

「おお、エヴァがノリ突っ込みだ。茶々丸」

「愚問です黒樹さん。既に最高画質で録画済みです」

「お前呪いを解けるのか!？ならなぜ教えなかった!」

「聞かれなかったから」

エヴァの問いに黒樹はさも当然だ、とばかりに答える

「くっ…だが、解けるなら今すぐ解け!」

「でかい貸しが一つできたな」

「構わん、この呪いが解けるなら貸しの一つや二つ作ってもいい」

「契約は成立だ」

黒樹はおもむろに立ちあがり、ナイフを練成する

直視の魔眼を使い、呪いの精霊を視認し、死の線と点を見る

ナイフを死の点に突き刺すと、呪いの精霊は霧散して消えた

「どうだ？」

「おお、魔力が戻ってくる！…だが、完全ではないぞ？」

「それはアレだ、麻帆良結界で阻害されてんだろ」

「なるほど、しかしもう私は自由だ。漸く呪いから解放された！」

喜んでいるエヴァを茶々丸は親指をグツと付きだしながら録画している

黒樹はグツと親指を突き出し、茶々丸と喜びを分かち合う

「……展開が急過ぎて話についていけないんだが」

「兄様何したん？」

「呪いを解いたんですよ、お嬢様。しかし、呪いを解いたのならば、学園長に報告したほうがいいのでは？」

「呪いを解いたんですか、すごいですね黒樹さん」

「爺に報告ね…そういや、真昼間から侵入者があっただろ？」

「ん？そうだったな、だがまあ気にするほどの奴でも無いだろう」

「それも含めて報告かなあ。メンドクサ」

「…つてことはさ、エヴァはもうネギ先生を襲う理由が無くなった訳だろ？」

「それがどうした？千雨」

「あのままほつといていいのか？授業に支障が出るのは困るんだが」

あくまでもネギ自身では無く授業の方を気にする千雨

授業>ネギの方程式が完全に出来上がってますね

「……大丈夫だろ。勉強は黒樹にでも教えてもらえ」

「また俺頼みか！」

「お前が万能過ぎるから駄目なんだ」

「何その理不尽な理由」

「それに明日菜の事も気になるんやけど」

「別に良くね？神楽坂が自分でこっちの世界に足突っ込んだんなら俺は別に何も言わないよ」

「多分ぼーやが魔法を使ったところを見たとかだろうな」

「俺もそう思う。間抜けだしな、あの少年」

「…お前は何故ぼーやの事を少年と呼ぶんだ？」

「ん？とあるビン底眼鏡野郎の受け売りさ」

「誰だよ。…それより、私も目を付けられた可能性があるんだが」

「何で？何もしてないでしょ？」

「何もしてないが、エヴァと先生の戦闘を見たんだよ。記憶を消しに来るなり、何かアクションを起こすんじゃないか？」

「可能性が無いのがいやだな」

原作では襲われたのは宮崎さんですからね

むしろあの戦いをしていたらエヴァと千雨のガチバトルでネギが丸焦げになる可能性が出てきますよ

「対処はできるだろ？いざとなれば俺が何とかするさ」

「頼むぞ、黒樹。あたしはアレにはできれば関わり合いたくない」

「ウチは相部屋なんやけど」

「まあ、何かあったら基本俺に報告って事でいいだろ？木乃香も少年位なら軽くあしらえるからさ」

「そうなん？戦いなんてした事無いから分からのやけど」

「刹那もいるし。できれば一人で行動をするなよ。少年がおかしな行動に出る可能性も無きにしもあらず、だ」

そのまま「今日はコレでかいさーん」といい、各自自分の部屋へと帰っていく

「…この半年の私の苦労は何だったんだろうな…」

「気にするな。気にしたら負けだぞ」

こうして、桜通りの吸血鬼事件は閉幕した

何の解決もせず、全員が何かもやもやした感じを残して

第十六話 桜通りの吸血鬼（後書き）

ちよつとグダグダになってしまいましたが、取りあえずエヴァの呪いを解きました

今回は後日談ですかね。茶々丸襲撃とか千雨に問い詰めたりとか

千雨に襲撃するとネギが丸焦げにされそうですね

感想は常時募集中です

第十七話 しつこい男は嫌われる

第十七話 しつこい男は嫌われる

エヴァの家で呪いを解いた夜

早速爺に呼び出され、学園長室に居る

周りには雁首そろえた魔法先生、魔法生徒

周りを見渡せばどいつもこいつも敵意バリバリだ

佐倉と刹那だけは心配そうに俺を見てるみたいだが

「君は！自分が何をしたか分かっているのか！？」

はっきり言えばウザい。コイツ確かガンドルフィーニだっけか

正義を妄信してる奴ほど頭が固いもんだ

「何か？……………ああ、爺に死神の呪いをかけた事？後悔はしてないよ。1ナノグラムとてね」

こんなくだらない事に『死神の約束』を使った事なら0・1ナノグラムぐらい後悔してるかもしれないが

「何！？学園長、それは本当ですか！？」

「本当じゃよ。約束を破れば死ぬという呪いじゃ」

ガングロは爺に問うた後、俺の方を向いて叫ぶ

「君は！！君の家族に呪いをかける事に罪悪感を感じないのか！？」

「いや全然？何でわざわざ余計なことしない様に首輪したのにそれに罪悪感を感じる必要がある？」

「首輪だと！？君は学園長を何だと思っているんだ！！」

「唯の血のつながった老人だが？そもそもコレはお前が首を突っ込む話じゃないだろうが。自分の立場をわきまえろ」

脱線させたのは俺だが

「何！？…そもそも、何の約束をして、それを破ると学園長は死ぬんだ？」

「『木乃香の嫌がる事を無理強いさせる』と爺は死ぬ。」

あ、コレの原因は木乃香に無理やりお見合いさせようとしたりしてだから事情酌量の余地は無いよ」

あ、ガングロが思いつき溜息ついた

「……学園長、自重してください」

まあ、この件は完全に爺が悪いからな

「コレで終わりなら帰るが？」

「待て黒樹。まだ本題にはいっとらん。お前、何故エヴァンジェリ
ンの呪いを解いた？」

「至極単純な事だ。頼まれたから解いた。それだけだが？」

「君は彼女がどれだけ危険な人物か分かっているのか!？」

「分かってるよ。600万ドルの賞金首だろ？だがまあその程度だ
俺が本気を出せば多分ホントに生物を死滅させることだってできる
だろうし

危険度なら俺の方が上かもしれんなあ

やらないけど

「その程度だと!??その賞金首を野放しにするのがどれだけ危険か
分かっているのか!？」

「大丈夫じゃね?取りあえずは卒業までいるって言ってるし」

「信用できるものか!とにかく、即刻何かしらの手を打つべきです。
学園長!!!」

「まあ落ち着けよ。大の大人がそんなにうるたえてさ、みつともな
い」

「コレが落ち着けるものか!!!そもそも原因は君だろう!!」

「これでエヴァンジェリンが何かしらの被害を出せば、君も共犯になる可能性があるんだぞ！」

「心配済んなよ。それに、エヴァがネギ少年を狙っていた理由も無くなった。」

安心できるだろ？ 『立派な魔法使い』を指すオッサン」

「そんな簡単に信用はできないに決まっているだろう！それに君も『立派な魔法使い』を指しているなら…」

「ふざけんな。そんなくだらないモン目指す訳ねえだろ」

「くだらないですって！？」 『立派な魔法使い』のどこがくだらないというんですか！？」

高音が話に加わってきやがった

隣を見ると佐倉がどっちの味方をすればいいか迷ってるように見える

「くだらないね。無償で人を助けるか、大層立派な考え方だと思うぜ」

「そう思っのなら…」

「だがな、魔法使いの全部が全部それを目指してると思うなよ？正義なんてその時と場所によるもんだ」

「だからと言って、人を助けるのが悪い事だともいっのですか！？」

「別に悪いとは言わないさ。唯な、その思想を他人に押し付けるな。価値観てのはそいつが自分で決める物だ

他人が勝手にアレは悪い、これは善いなんて教える意味がある訳ねえだろ」

「…しかし、価値観が違おうとしても人を助けるのに価値観など…」

「甘いな。価値観は重要だぜ？」

『平和』を知らない子供と、『戦争』を知らない子供の価値観は違う何が悪で何が正義か…そんなものはいくらでも塗り替えられてきた」

「そんな筈はありません！！勝者は常に正義なのです！！」

「は、正義は勝つって？そりゃあ、そうだろ！

正義が勝つ訳じゃない、勝者こそが正義だ！！
頂点に立つ者によって善悪は塗り替えられる！」

以上、某七武海のセリフをリスペクトさせていただきました

「そもそも関西呪術協会の長候補の筆頭である俺が西洋魔法を使うこと自体がでかい批判を生むことになるだろう

『立派な魔法使い』マギステル・マギなんてもつての他だ」

だからこそ俺は実家に帰っても魔法は使わなかった

『扉』の魔法は人目につかないようにしていたし、木乃香には陰陽術を使わせている

そして今、周りの奴らは俺の言葉に黙り切っている

…てか、何でこんな話になってんの？

エヴァの話だったよな？

「フーかまア今は関係ない事だ。それで、俺に何か罰則でも与えんのか？」

「…お前は何が目的でエヴァを解放したんじゃ？」

「目的は無い。頼まれたから解いたって考えでいいよ」

強いて言うなら使える駒を増やした、といってもいいけど

(黒樹、今大丈夫か？)

千雨から念話が来た。何かあったのか？

(少し待ってくれ)

「それで、お前は何をするつもりじゃ？」

「何も？俺は、俺と俺の身内に手を出さないなら何事にも基本はノータッチだ。コレで話しは終わりだな、情報はやった。俺は帰る」

俺は扉を開け、扉を閉めて『扉』の魔法で寮の前に帰り、念話を再開した

～SIDE 千雨～

エヴァの家で黒樹がエヴァの呪いを解いた夜

あたしは部屋へ戻り、ネットをしていた

時計は九時を指し、まだネットをしようかなと考えていた時だった

扉をノックする音

こんな時間に誰だと思いつつ、今や癖になってしまった賢者の石とライターを隠し持ってドアを開ける

「あ、すみません。夜にお邪魔しちゃって」

「ごめんね、千雨ちゃん。どうしても用事があったの」

ネギ先生と、神楽坂だった。先生の方に何か乗ってるが、アレはオコジヨか？

意外と行動が速かったな、と思いつつライターを見られない様にしまう

「どうしたんです？なんかあったんですか？」

「いえ、あの…少しお話があるのですが、今大丈夫ですか？」

…やっぱりか

十中八九魔法関係だな

ボ口を出す前に黒樹に連絡するべきか

「…ええ、上がってください」

結局あがらせることにした

あたしとしては信用しない相手は家に上げない主義なんだがな

知ってるか？詐欺師はその家の最初の反応でカモになるか決めるそ
うだ

話そうとして一回で断られるなら駄目、玄関先ならまだ何とか、家
に上がれば勝ったも同然

そんな考え方で詐欺をしているらしい

理由としては家にどのタイミングで上げるかで、話し相手と詐欺師
との心の距離を示してるらしいぞ

まあ今は全く関係ない話だが

取りあえずリビングに座らせ、お茶を注ぐ

お茶を注ぎながら黒樹に連絡する

（黒樹、今大丈夫か？）

（少し待ってくれ）

そう返って来た

あっちもなんかあったのか？

取りあえずお茶を運び、話し出す

「…それで、話とは？」

「あの、その…昨日の事なんですけど…」

「昨日の事？」

「ハイ。千雨さん、昨日僕とエヴァンジェリンさんの戦闘を見ましたよね？」

…いきなり直球で聞くバカが何処にいんだよ

普通はさりげなく聞いてその反応で確かめるモンだろうが！

（千雨、もう大丈夫だ。何かあったか？）

（先生と神楽坂が来てる）

「…あたしは何も見えてませんが」

「そんな筈無いでしょ？気を失った訳でもないみたいだったし、第一エヴァちゃんに襲われてたじゃない」

…さて、どう答えたもんか

黒樹に今の会話を流してあるし、何かいい案でも無いのかな？

「…なら、はつきり言うがな神楽坂。こついうのはまとも聞いても教えてもらえないもんだぞ。往々にして魔法は秘匿する物だとか、超能力者は危険だから監視するべきだとか。」

大体そついうものだろ？それにあたしはそんなファンタジーな世界に入るのは御免だ」

あたしの言葉に先生たちはうつ、と顔を歪ませる

「ちよつと、どうするのよネギ。アレ完璧に見られちゃってるじゃない」

「うつ、記憶を消すしかないですね…」

オイコラちよつと待て其処のバカ

記憶を消すとかふざけんな

「記憶を消すのはあたしは賛成しないわよ？それにアンタ記憶消そつとしてあたしの服消したじゃない」

「で、でも、どうするんですか？」

「正直に話した方がいいんじゃない？関わるうとは思ってないみたいだし、黙っててっつて言えばいいじゃない」

「そ、そつですね。分かりました、話してみます」

……「こついつら隠す気無いのか？」

全部筒抜けなんだが

「…で？他に用が無いなら帰って欲しいんですが、先生」

「あ、いえ、用ならあるんです。

……えっと、この世界には魔法があつてですね…」

うわ、ホントに話しやがった

「…そんなわけで、僕の事は黙つててくれると嬉しいんですが」

「…分かりました。どうせ誰に言つても信じてくれないでしょうしね
その代わり、今後一切あたしはこついうことに関わりませんから」

「分かりました。それでは、帰らせていただきます」

そのまま二人は帰って行った

(…大変だったな)

(全くだ。あたしは関わりたくないんだがな。てか結局役に立って
ねえじゃねえかお前)

(悪かったな。お前だけで対処できたならそれでいいだろ)

(それはそうだが、何かあつたら連絡しろつて言ったのはお前だろ
?)

(……………)

あ、念話切りやがった

…まあいいか。今日は疲れた。もう寝よう

〈SIDE 茶々丸〉

ここ数日は特に何も無く進み。今は家に帰る途中です

マスターから「ぼーやに助言者が付いたかもしれん、念のために気を付けておけ」と言われました

私はあまり重要に考えず、今日の夕飯は何にしましょう、と考えていると、高畑先生がこちらへいらっしやいました

「こんにちは、高畑先生」

「何の用だ？タカミチ」

「こんにちは、茶々丸君、エヴァ。」

学園長がエヴァを呼んでいてね。来てもらえるかい？」

「…ふん、まあいいだろう」

茶々丸、できるだけ人目のあるところを通って帰れよ」

「分かりました。お気を付けて」

そのままマスターは高畑先生について行きました

私はいつも通り猫に餌をあげる為、公園へと向かいました

その途中で猫状態のエンヴィーさんと会い、暇だからと一緒に公園へ行く事になりました

エンヴィーさんはしきりに後ろを見ているようですが、付けている事は分かっていても振り向かないモノですよ

公園で猫に餌をあげていると、ネギ先生達が漸く姿を現しました

錬丹術を使うようになって、人の気配を敏感に察知できるようになつてとても便利です

エンヴィーさんと黒樹さんは異質で何処に居ても分かりますけど

「ネギ先生ですか、何か御用でも？」

「あの…茶々丸さん、僕を襲うのを止めていただけませんか？」

「それはできません」

既にマスターは襲う気を無くしていますし、何を止めろというのでしょうか

「仕方ありません行きます
契約執行10秒、ネギの従者・神楽坂アスナ！」

パン！と音が響く

デコピンには音がおかしいような気もしますが、気にしません
其処から何度もデコピンのやり合い

その間にネギ先生が詠唱を完成させ、魔法の射手が私に向かってき
ます

数は十一

「追尾型魔法、至近から多数。回避不能です
すみませんマスター、もし私が動かなくなったら猫に餌やりを……」

そう言つて攻撃を受けようとしてはますが、ババババン！と猫エンヴ
イーさんが虚空瞬動を使って魔法の射手を防いでくれています

猫が虚空瞬動：シユールですね

「二対一か、卑怯な事するね」

「ね、猫が喋った!？」

「姐さん落ち着いて、きつと俺っちみたい魔法妖精ですよ!」

「お前如きと一緒にされるのは心外だね」

「お前如き！？やいやい、何様のつもりだテメエ！！」

「プライドの従者だよ。その二人なら分かるんじゃないかな？」

「え…プライドの…？」

ネギ先生が放心状態ですが、プライドとは誰でしょうか

…… ああ、この間黒樹さんが影を使って名乗った名前ですね

「兄貴、何か知ってるんですか？」

「あわわわわ、不味いよカモ君！」

「そうよ！あんな気味悪いの相手にしたくないわよ！？」

「そう思うならこんな事をしない方がよかったのにね。他人に選択を任せるからこうなる。」

自分の事は自分で考えなよ。オチビさん」

私の前に居るのでエンヴィーさんの表情は分かりませんが、恐らく笑っている事でしょう

「でもまあ今回の事は言わないで置いてあげるよ。尻尾まいて逃げるなら今のうちだよ？」

「お、覚えてやがれー！！」

最後にオコジヨ妖精が悪役のセリフを吐いて帰って行きました

「…なんだっただんでしょうか？それと、本当に黒樹さんに言わなくてもいいのですか？」

「茶々丸を襲いに来たんじゃないか？それに言わなくてもお父様は既にこの事を知ってるよ

あっちの影から見てみたいだったし」

なるほど、影で見ていたから私が気付かなかったのですか

「取りあえず帰りましょうか」

「そうだね、これ以上ここに居てもしょうがない」

後日、何だか妙にやる気のあるネギ先生にマスターが果たし状を渡されてしまった

面倒だから、とマスターに一撃で沈められ、ネギ先生は激しく落ち込み、それでも何度も挑んできました

何度も戦っていると、マスターもいい加減ウザくなったのか、

「お前を襲う理由は無くなったから関わるな」

と言つと

「父さんの事を教えてくれるまで引き下がりません！」

と、ファザコン気質を見せつけてくれました

結局これ以上相手をするのが面倒だと、「京都にナギが使っていた別荘がある」と教えられていたのですが。

京都、修学旅行で行く街ですね

マスターを撮影できるように容量を増やすようハカセに頼まねば

第十七話 しつこい男は嫌われる（後書き）

はい、桜通りの吸血鬼事件が完全に終了しました

次回から修学旅行編です

ネギの扱いがだんだんと酷くなってる気がしてなりません

感想は常時募集中です

ぜひ、感想を書いてください。お願いします

第十八話 修学旅行とは学を修める物

第十八話 修学旅行とは学を修める物

今日は修学旅行

楽しみで寝れなかった、なんて子供のようない

俺にとっては里帰り見たいなモンだし

そして全員集合した駅の中

「刹那、アレちゃんと持ってきた？」

「はい、ちゃんと肌身離さず持ってます」

刹那はそう言ってポケットから懐中時計を取り出す

これは俺が作ったもので、時計、オルゴールが内蔵されている

オルゴールの曲は『レイシー』

ちょっとした細工もしてあるんだが、それは今はどうでもいい

時間になり、手早く新幹線へ乗り込んでいく

ちなみにエンヴィーはチケットを買って別の座先に座っている

今回こいつが必要になるだろうしな

ちなみに今の見た目は折原臨也

あらかじめ割り振られた座席に座り、各々勝手にしゃべり始めている

「そういえば、京都には黒樹の実家があるんだろ？」

「うん。あ、そう言えば言つの忘れてたけどさ、今回の修学旅行は確実に何か起こるから」

「起こるのは確実なのか……で、何かってなんだよ」

「木乃香の誘拐とか考える奴が出てくるだろうからな。普段京都にいないし、今回はチャンスだろう」

「それって、必然的に黒樹さんを敵に回しますよね？」

暗にそんな馬鹿な事をする人が居るのかと問いかけている

「俺は実家では神明流と陰陽術しか使った事が無い」

それも師範と同レベル位までしか、と付けたす

班員は全員引きつった笑いを浮かべていた

多分誘拐を企てている連中に同情してるんだろっ

ちなみにメンバーは俺、千雨、さよ、エヴァ、茶々丸だ

木乃香と刹那は神楽坂や宮崎達と同じ班になっている

修学旅行

修学旅行とは行き来の乗り物で一般の人に迷惑を掛けない配慮が
要だ

乗っているのは俺達だけでなく、一般の客も居るとい
う事を忘れてはならない

まあ3-Aの連中に言ったところで馬の耳に念仏だけどな

そんなわけで京都行きの新幹線の中、俺は絶賛乗り物酔い
中だった

「ああ、気持ち悪……」

「まさか黒樹が乗り物に弱いとはな」

「それも乗って一時間で酔うとか」

「新幹線は乗り物酔いしづらいハズですが」

上から俺、エヴァ、千雨、茶々丸だ

俺もまさか乗って一時間でダウンするとは思わなかった

前に乗った時は携帯のタイマーかけて乗って五分で熟睡してたし

「酔い止めの薬とか持ってないんですか？」

「持ってないな。必要だと思った事もない」

「そりゃまあお前必要なら『扉』の魔法で直ぐに移動するからな」

「全くだ。おかげで新幹線で酔うはめになった」

「寝ろ。寝れば治る」

「俺もそう思う」

そんなわけで寝ようとした直後に悲鳴

頭に響いて余計気分が悪くなった気がする

俺は気にせず熟睡。新大阪駅について茶々丸に起こされるまで寝ていた

清水寺

京都についてまず最初に向かったのは清水寺だ

つーか先生達が必ず行かせるために予定を組んでただけども

「京都おーっ!!」

「これが噂の飛び降りるアレ」

「誰かつ!!飛び降りれっ」

「では拙者が…」

「おやめなさいっ!!」

いつも通り騒がしい3-A

俺はそいつらを後目にベンチで休んでいた

「まだ気持ち悪い…」

「あたしは乗り物酔いとかしないから分からないな」

その言葉につなずく一同

え?マジ?誰も乗り物に酔った事無いの?

エヴァは乗った事無いだろうし

茶々丸はロボだから酔わないだろうし

さよも初めて乗ったらしい

「なるほど、まともに乗り物に乗った事があるのはこの中では俺と千雨だけか」

「その言葉にいらついたから殴っていいか？」

「ここを消し飛ばす気か」

エヴァとガチ喧嘩は洒落にならんからな

そう言えばここは人類最強と人喰いの決戦場だった事を思い出した

「よし、じゃ、やろうか」

「やらないでください!」

さよに止められてしまった

まあ元から本気でやる気も無かったけど

ベンチで休んでいると、刹那が話しかけてきた

「何かあったのか？」

「実は、新幹線内で敵術者と思われる人物から、ネギ先生は一度親書をとられています」

「…そうか、あの少年、其処まで役立たずか」

ここまで来ると爺が期待しているのは別の奴なんじゃないかと思う

「最早エンヴィーに化けさせて親書届けた方がいいかもなあ」

「流石にそれはネギ先生が納得しないでしょ」

「少年は納得しなくてもいい。が、やっぱ面倒だし、勝手にやらせとけ。こっちのやる事にも支障が出かねない」

「分かりました。こちらの対応などは…」

「それも適当でいい。つーかなんかばれた？」

「いえ、新幹線内で敵の式紙を切っただけです。親書を奪われていたようだったので、取りあえず助けておきました

それと、あのオコジョとの話を聞く限り、お嬢様と黒樹様が関係者だと知っているようでした

学園長が教えたようです。その辺の対応等は？」

「爺は後で折檻するとして、お前が怪しまれてるだろうな。

斬った式紙を片付け無かったら？降りるときに切れ端が落ちてたぞ」

「私が怪しまれてるのでしょうか？」

「多分な。それでも可能性として、だ。だがまあ気にするような事じゃない。少年を相手にしてもお前じゃ負ける要素が無い
どちらにせよ、今は放っておいていい」

「分かりました」

それからエヴァとさよは唯ひたすらに興奮しているんるところを見て回っていた

「オイ黒樹、お前の地元だろ？なんか説明しろ」

「いや、俺も来たの初めてなんだけど」

「何？地元でいつでも来れるのに初めて来たのか？」

「いや、地元でいつでも来れるからこそ行かないっつーか…」

そついつ事ってあるよね

近くに城があつても近過ぎていつも見てるから近くに行く気にならない、見たいな感じ

「よく分かんが、取りあえず役に立たないんだな？」

「おおう、ぐさつと来たぜ今の言葉。そんなに知りたいなら茶々丸に聞けよ」

そついつつ茶々丸を探す

さよに清水寺の説明をしていた

さよは目をキラキラさせながらその説明を聞いている

まあ初めて来ただろうしねえ

エヴァとさよはテンションが上がってもしようがない

そんな事を思いつつ子を見る親のようにエヴァ達を見てみると、
ま
たもや悲鳴

騒がしいので移動し、移動した先で目にしたものは、恋占いの石を
実践して落とし穴に嵌ったクラスメイト二名の姿

恋占いの石は二十メートル程離れた石と石の間を目を瞑って歩き、
辿り着けたら成就するというもの

その間に落とし穴が作られていたわけだ

「……なんか、かなり地味なやり方だな」

「地味だな。関西の奴らはへボいとしか言いようが無いな」

「お前の親が長なんだろ？そんなに批判していいのか？」

「いいんだよ。押さえつけられない父さんが悪い」

そんな事を話しつつ音羽の滝にやってきた

既に酔い潰れているクラスメイトを発見

どうやら酒が混ぜられていたらしい

「…ふむ、皆殺しに…」

「駄目だぞ」

そのまま千雨とさよから猛抗議を受けた

結局酔い潰れた連中をバスに押し込み、予定より早く嵐山のホテル

に着いた

夜

俺の風呂に入る時間は教員と同じなんだ

だって一応女子中だし、男は教員しかいない訳だ

そんなわけで少年と一緒に風呂に入ってる

会話は無いが、別に気まずくも無い

よくよく考えると俺全然接点が無いんだよね

「あ、あの〜」

と、思ってたらあっちから話しかけてきた

「なんだい少年？」

「何で僕の事を少年って言ってますか？って、そっじゃなくて。黒樹さんって魔法関係者なんですよね？」

確認できてないのに魔法って口に出すなよ

「まあ一応ね。それがどうかした？」

「いえ、木乃香さんが狙われているかも知れないって学園長から聞いたので…」

「それによ、あの桜咲刹那って言うのが怪しいんだよ！ありや関西呪術協会の刺客だね！」

いきなり口を挟みだすオコジヨ

「…それは何を根拠に言ってるんだ？」

「新幹線の中で親書を一度奪われてしまったんですが、その時に刹那さんが持っていたんです」

「そんであの女の近くに式紙が落ちてたんだ！っーことはあの女が親書を奪おうとしたにちがいねえ！」

取りあえず少年の位置から見えない様にナイフを練成し、投げる

オコジヨはナイフに当たる寸前で避けやがった

「あ、あぶっ！！何すんだよ！！」

「いらついたんだよ。少年、一つだけ言っておく
選択は他人にゆだねるな。自分で考える。考えて考えて考え抜いて、
納得できる答えを探せ」

考える、考えるんだマクガイバーってな

分かる人いんのかな？

それだけ言っただけで、と風呂からあがる

もちろんこの周辺の確認も忘れない

近くに五人、明らかに周囲と違う雰囲気の人たちがいた

これから、歯車は動き出す

第十八話 修学旅行とは学を修める物（後書き）

予想以上に早く書き上がったのでアップします
修学旅行編ですね

黒樹達がいるいる動きます

感想は常時募集中。いつでも書いてください

第十九話 一日目夜 出会い 洗脳 偽物

第十九話 一日目夜 出会い 洗脳 偽物

風呂から上がり、ロビーで寛いでいると少年がやってきた

「あの、さっきの事を詳しく聞きたいんですが…」

「さっきの事？……ああ、『考えて考えて考え抜いて、自分の納得できる答えを探せ』だったっけ」

「はい、僕も考えてみたんですが、よく分からなくて…」

「これはそう難しく考える事じゃない。この考え方は勉強にも戦闘にも使えるってだけだ」

「戦闘にも、ですか？」

少年は首をかしげながら聞いている

そんな気になる事言った覚えは無いんだが

「単純な事だ。自分の手札^{カード}を理解し、敵の手札^{カード}を知る。

その上で自分がどうすれば勝てるのかを考え、状況を判断し、冷静に、その場で最も有効で有益な選択をする

目的次第では戦わないってことも選択肢に入れるべきだろうな
必要なのは考える為の知識と判断力だ」

これはあくまで実力が近い相手にだけ通じる考え方だけだな

ありとあらゆるスペックで上回られてれば勝てる要素は無い

逃げの一手に尽きる。逃げられるならな

「そういうモノですか…」

「そういうものだよ。どんな状況にせよ、考える事をやめれば死と同じだし、選択肢を間違えれば死に向かって一直線だ
戦闘において卑怯と呼ばれる行為でも、殺し合いでは意味を成さない様なモノだよ
親書を渡すという役柄を請け負った以上、狙われる覚悟もしておくべきだぜ」

「…僕は、殺し合いなんてしたくありませんし、するつもりもありません。

誰しも話せば分かってくれるハズです！

エヴァンジェリンさんだつて話したら分かってくれました！」

ああ、それってエヴァが

『いい加減しつこいから教えてやった。これでやっと付けまわされずに済む』

つて言ってたな。アレはこの事を言ってたのか

「話し合いが通じる相手ならな。まあ、少年の好きにするといい」

「分かりました。いろいろ教えてくださいさつてありがとうございますとございまし

た」

そのまま何処かへ歩いて行った

〈SIDE 三人称〉

駅のホームにたたずむ四つの影

一つはネギ、二つ目は明日菜

三つ目は木乃香、四つ目は木乃香を肩に担いで攫っている天ヶ崎千草

ネギと千草は駅のホームで相對している

「ふ、よーここまで追ってこれましたな。しかし、それもここまでですえ

とっておきの三枚目。いかせてもらいますえ」

千草は札を構えて呪を紡ぐ

「…お札さん、お札さん。

ウチを逃がしておくれやす。喰らいなはれ!!

三枚符術 京都大文字焼き!!」

その言葉通りに大文字型に炎がでる

「!?!」

「ホホホ。並の術者では、その炎は越えられまへんえ。
ほな、さいなら。」

そのまま千草は逃げようとするが、ネギの魔法によって炎がかき消される

「風花風塵乱舞!!」

逃がしませんよ!! 木乃香さんは、僕の生徒で…大事な友達です!
!」

明日菜は千草を指差し、木乃香を返すように要求する

千草はそれを笑い、「猿鬼、熊鬼」と、式紙を召喚する

「アスナさん! 契約執行180秒間、ネギの従者『神楽坂明日菜』
!」

明日菜は光に覆われ、身体能力を上げる

そして、ネギはアーティファクトを呼び出し、明日菜に使わせる

「いつくわよ!!」

明日菜は敵の式紙にハリセンを叩きつけ、強制的に送り還す

そのまま二体とも送り返し、千草に向かって走る

「させませんえ」

上空から間伸びした声と共に一閃

明日菜はかるうじて避け、ネギはその隙について魔法を使う

猿鬼エンキと熊鬼ユウキを還され、月詠は明日菜の相手

ネギに障害は無かった

「ああつ、しまった！？ ほんたいガキが居た！」

「もう遅いです、魔法の射手 戒めの風矢！！」

「あひいつ、お助けー」

その矢は千草が木乃香を盾にした事によって外れる

捕縛魔法がどんな効果を持っているか知らないのか、と問いたくなる状況だった

捕縛魔法は相手に怪我をさせない

なのに、ネギは戸惑った

最大のチャンスを棒に振ったのだ

「？……ははーん、なるほど、読めましたえ。

甘ちゃんやな、人質がちよつとくらい怪我するのなんて気にせず打ち抜けばえーのに」

「全くだ、選択肢を間違えれば死につながると言っただばかりなのに

な

唐突に、気配さえ感じさせずに現れた乱入者

近衛黒樹と、その従者桜咲刹那である

「刹那、お前はあの神鳴流の相手をしろ」

「了解しました」

刹那は夕風を抜き、月詠の前に立つ

「今度はセンパイが相手ですか、楽しませてくださいね」

「楽しむつもりは無い」

其処からの一閃

何度も剣を打ち合う音が鳴り響く

「ほえ、やりますな、センパイ」

「二刀流の相手なら慣れてるのでな」

普段黒樹が使っているのも二刀流である

それも、刹那がぎりぎりで追いつけるような速度で剣を振るう為、必然的に動体視力は上がる

そして、月詠の剣速は黒樹と比べモノにならないほどに遅い

それから何度も打ち合いが続く

「さて、こつちも手早く済ませようか」

黒樹は千草の十メートルほど前に降り立つ

「あんさん一人でもうにかできるとでも？」

「できるさ。簡単だ」

黒樹は剣を二本練成し、構える

千草はまた式紙を使い、猿鬼と熊鬼を呼び出す

「ダメダメ、そんなのじゃ足止めにもならない」

瞬動で距離を詰め、二体を一閃して切り捨て、千草に迫る

「ヒイツ、お助けっ！！」

千草は懲りずに木乃香を盾にする

黒樹と木乃香は仲が良い事を知っていて、傷つける事は出来ない
だろうと踏んでの行動だった

しかし、その考えは甘かった

「……え？」

「残念だったな。俺は仕事と私事はわかる性質タチでね」

剣は木乃香の腹を貫き、千草の左肩深くまで届いていた

致命傷では無い一撃、しかし、行動不能にするには十分な一撃

千草はそのまま横に倒れる

黒樹は千草の頭に触れ、パシン、と音がした

「何をしているんですか！！黒樹さん！！」

振り返ってみれば、ネギが怒りの形相で黒樹を見ていた

明日菜も同様だった。今からでもとびかかりそうな顔で、黒樹を睨みつけていた

黒樹は気にすることなく剣を引き抜き、手をかざし、怪我が見えない様に手で覆った

数秒して手を離すと、傷は無くなっていた

「よし、取りあえずは帰るか」

用事は済んだとばかりに立ち上がり、刹那を見る

まだ斬り合っているようだが、ほぼ互角と言っていいだろう

ほっついていいかなと思ひ、木乃香を抱えようと近づく

その瞬間、黒樹の首が切り落とされた

いや、切り落とされたように見えた

切った断面はゆらりとゆれ、其処だけ現実味が無くなっていた

黒樹の背後で首を切った女は思った

(手応えが無い　?)

黒樹は振り返ることなく後ろにカマイタチを飛ばす

女はそれを難なく避け、黒樹と相對する

茶色のウェーブがかかった肩甲骨辺りまである髪

整った顔立ちをしていて、一目で美人と分かる

身長は170位で、紅い眼のスレンダーな体型だった

胸は大きく、腰も引き締まっている

「…いい女なのに、持ったいねえ」

黒樹は思わず呟いた

「あら、うれしい事言ってくれるじゃない。でも、持ったいないって言うのはちょっと気にかかるわね」

「いや何、これから殺し合つと思つとちよつとな〜」

剣についた血を払いながらそういう

木乃香を隔離し、女を見る

女は大鎌を構える

黒樹は瞬動で近づき、斬りかかる

女は鎌で弾き、そのまま回転して蹴る

黒樹はもう一本の剣の腹でそれを受け流し、離れる

「…やるねえ、其処まで強いと本気を出したくなる。名前教えてくれない？」

「名前、ね。名乗った事は無いけど、『ハンプティダンプティ』と呼ばれているわ」

「『ハンプティダンプティ』か、長いな。…ハンでいいかな？」

「構わないわよ。私も本気を出すし、それで生き残っていられるなら本名を教えてあげるわ」

「それは『本名教えます』って言ってるようなもんだぞ」

「あら、自信があるのね」

「常に意識するのは最強の自分だ」

そう言って剣を振るい、大鎌と対峙する

「そう、私もあなたの名を教えて欲しいのだけれど？」

黒樹は一瞬迷い、名乗る

ネギ達に聞こえないように配慮しながら

「俺は『零崎黒識』だ。本名は俺に勝ったら教えてやる」

「フフ、なら教えてもらったも同然ね」

「自信があるんだな」

「常に意識するのは最強の自分なのでしょ？」

「そりゃそつだ」

そう会話しながらもギン、ギン、と何度も打ち合う

二人は一旦離れ、構えなおして話し出す

「それじゃ早速」

「本気を出そうかしら」

二人は構え、今までとは比較にならないほどの殺気をバラまく

互いに睨み合い、動きを止めている

其処に、横槍が入る

「其処までだ。千草さんは回収した。一旦退くよ」

二人は乱入者を見る

白髪の少年、フェイト・アーウエルンクスだ

「…そう、とても残念よ。これは次回にとっておくのでしょうか」

「ありがたいね『クイーン・オブ・ザ・ハート』。君を止めるのは一苦労しそうだしね」

「いいのよ、面白そうな人を見つけたし。今回は収穫があったわ」

「そう、お嬢様の誘拐は失敗したけどね」

そのまま二人は影の中へ消えていく

「…バアイ、^{ダーリン}黒識」

「誰がダーリンだ、誰が」

一瞬放たれた殺気が刹那のモノじゃないと信じたい、と思う黒樹だった

二人は完全に影の中に消え、追跡はしなかった

〔SIDE 黒樹〕

「…さて、帰るか。刹那ー！」

「はい、何でしょうか？」

「木乃香は俺がおぶつてくから、少年たちに適当に話そうぜ」

「…まあいいですけど、なんて話すんですか？」

「まあ見てろ」

木乃香を連れて少年たちの所へ行く

少年たちは俺とハンの殺気にあてられて硬直していたが、俺が話しかけるとハツとしたような顔をして俺に怒鳴りだした

「黒樹さん、何故木乃香さんを斬ったんですか!？」

「そつよ!アンタ木乃香と仲良かったじゃない!」

神楽坂は既に掴みかかっている

メンドクセエな

「落ち着け、まず少年。俺が話した事を覚えているか？」

「…『考える』って事ですか？」

「そう、俺の行動には理由がある。教える気は無いがねだが、ヒントをやるう」

一つ、俺は木乃香の為に行動している

二つ、木乃香が狙われている事は分かっていたさて、この材料で考える事だな」

神楽坂の手を振り払い、刹那を連れて木乃香をおぶり、虚空瞬動で帰る

空中にて

「…うまくいくでしょうか？」

刹那は心配そうに俺を見ている

「何とかするさ、というか、何とかしなきゃならない。木乃香の為に、邪魔ものは消さなきゃならんそれより、気になるのはあの女だ」

ハンプティダンプティと名乗ったあの女

少なくともアーウェルクスと同レベルで厄介な奴だな

「そんなに強かったんですか？」

「俺じゃなかったら確実に最初の一撃で首を落とされてたな」

刹那が息を飲んでいた

まあ、少なくともあの殺気を浴びたんだし、どれくらいヤバいかは自己判断でいいだろう

「明日は奈良かあ、バスに乗りたくねえなあ」

そういつつエヴァに携帯で連絡を取る

数コール鳴った後、エヴァが出た

【エヴァ、木乃香は無事か？】

【私を誰だと思っている？無事に決まっているだろう】

【そうか、俺達は直ぐに戻るから、隠蔽はしっかりしといてくれ】

【分かった】

そう言えばあの女、俺の本名直ぐに分かるだろ

木乃香を狙ってるなら俺の事も知ってる筈だが…

……ま、考えるのは後でいいかな

第十九話 一日目夜 出会い 洗脳 偽物（後書き）

はい、オリキャラ出してみました

前々から出そうと伏線張ったり張らなかつたりしてました

黒樹が木乃香を斬ったのはちゃんと理由があります

感想は常時募集中です

第二十話 二日目 勧誘 正体 死亡フラグ

第二十話 二日目 勧誘 正体 死亡フラグ

修学旅行二日目

今日は奈良観光だ

だがしかし

「ここが奈良か!」

「鹿が沢山です!」

「ああ、マスターがあんなにはしゃいで…(撮影、撮影)」

とまあこんな感じでいつもどおりな俺達だ

夜中中いろいろ仕込んでたから正直寝不足だよ

「あの、黒樹さん」

「ん?少年か。宮崎達と一緒に行動するんじゃない無かったのか?」

「はい、それはちょっと待って貰ってます。僕の考えが当たってるか黒樹さんに聞きに來たんです」

「ほう?少年の考え?」

「黒樹さんが昨日木乃香さんを斬ったのは、アレが偽物だからじゃないんですか？」

昨日調べて考えて、一番可能性があるのはそれだと思ったんです」

「理由は？」

「黒樹さんのヒントです。」

普段から黒樹さんと木乃香さんは仲が良く、ヒントにも『木乃香の為に動いている』って言ってましたし。

『木乃香が狙われている事は分かっていた』って言っていたので、何らかの対策をしていたとして、傷つけても平気なら式紙なんかで偽物を用意すると思ったんです

陰陽術にそういう手法があるって聞いたので」

ほお、アレで其処まで考えれたか

ま、上出来かな

「答えは教えないと言った筈だ。それが正解かどうかは自分で判断するんだな。」

唯一つ言うなら…陰陽術では無いよ」

「そうですか…分かりました」

そのまま走って宮崎達の所へ行った

「何を話してたんだ？」

「ああ、千雨か。いや何、ちょっとしたゲームさ」

「ゲーム？」

「そ、どれだけちゃんと考えられるのかを試すゲーム。千雨には……あまり関係ないかな」

「そうしてくれ。自分から非日常に入るのは御免だ」

千雨はそれだけ言っているだけで行って行った

そう言えば、エンヴィーは木乃香の護衛についている

猫状態だな。こっちで俺が飼っていた猫という事になっている

昨日の夜、俺と戦った女は『クイーン・オブ・ザ・ハート』と呼ばれていた

前に龍宮に聞いた気がするので、質問に行ったら

「私は前に話した程度の事しか知らない」

と言われた

腕利きの情報屋でも探すべきかなあ

二時間後

俺は近くの団子屋で団子を食っていた

鹿煎餅を買って食べさせようとしたら鹿に逃げられた

エヴァと千雨に大笑いされたよ

本能で俺が危ない奴って分かるのかな？

それはともかく、結構人でにぎわう団子屋でくつろいでいた

「お客様、申し訳ありませんが、相席をさせて貰ってもよろしいでしょうか？」

店員が申し訳なさそうにそういう

「いいですよ」

人が多いから相席して貰う事もあるらしい

そう思っていると、机の反対側に座った人物を見る

「ハアイ、元気してた？」

ハンだった

きつちり認識阻害の魔法を使い、話しだす

「昨日の今日で『元気してた？』はおかしいだろ」

「そう？一人で団子屋に居るからなんかあったのかなって思ってたね」

なんか友達みたいなノリで話してるが、一応言っておこう

コイツ敵

「何しに来たんだ？」

「そう構えないですよ。戦いに来た訳じゃないわ。ここで戦ってもメリットなんて無いしね
勧誘よ、カンユー」

「勧誘？何にだ」

ハンは団子とお茶を頼んでまた話しだした

「私達の組織よ。本当なら唯の人間なんて組織に入れようなんて思わないけど、あなた人間の枠から外れてるもの」

「心外だな。これでも十五年間普通の人間として生きてきたんだぜ？」

「それにしても随分と気味の悪い中身してるのね」

…何故分かったんだ？

コイツ自身は探知に優れているようには思えないが…

「気味の悪い中身？どついう事だよ」

「とぼけなくていいわ。ウチの組織に探知がずば抜けて高い子がい

るのよ。

それであなたの事を探らせて見れば、人間であって人間で無いような中身だつて分かったのよ」

まあ転生者つてのは関係無いだろうが、精身体や心臓があるから探知がずば抜けて高い奴にはそう感じるのか？

「ま、あなた達の学園の生徒達にもまともな人間じゃ無い子もいるみたいけどね」

「其処まで分かっているのか…ちなみに、お前等の組織の目的は？」

「簡単に言えば、私達組織の者以外の人を消す事よ」

お茶を飲みつつその言葉を理解する

「…そんな事が本当にできるとでも？」

「できるわよ。あなたは知らないだろうけど、十年くらい前にちょっとしたおかしな事があってね」

ドクン

十年前だと

それはつまり

「その時、地球には地球外生命体が飛来したのよ」

ドクン

何故この女が精^{ヤシ}身体^コの事を知っている？

「飛来したのは全部で『精身体』 『アクロの心臓』 そして」

ドクン

まさか

まさかまさかまさか

「『アクロの御霊』ミタマ」

ドクン

「私達は既に『アクロの御霊』ミタマは手中に収めているの。後は『アクロの心臓』のみ」

つまり

「ミタマと心臓を手に入れれば、ちょっと面白い事が出来るのよ。それが私達の計画の要よ。」
私達は便宜上コレを『アクロ・システム』と呼んでいるわ」

こいつらは、本気で

「その為には戦力がいるのよ。」

ウチにはミタマに作られたっていう梟フクロウから情報は貰っているけど、心臓の持ち主は強大な力を持っているらしいの。

それこそ、世界を否定できるような力がね

梟曰く、『日本に心臓はある』との事だから、今回の仕事ははっきり言えばついでなのよ」

「ついで、ね。それにしただって、本気でそんな事が出来るとでも思ってるのか?」

俺は乾いた笑みを浮かべる

「信じられないでしょうね。私もそうだったし。」

唯、『魔法』なんてモノが日常的に存在している以上、宇宙人がいてもおかしくは無い

そうは思わない？」

「どうだか。宇宙人がいたとしても、興味も無ければ好奇心も起きない」

「あら、意外と冷めた性格なのね」

何がおかしいのか、ハンはクスクスと笑っている

「どうだっていい事だ。お前等の組織にはどんな奴がいるんだよ」

「そうね、一言で言い表すなら 異常、よ」

「異常？」

緊張感は欠片も無く、団子を食べつつまた話します

コイツ目の前に座ってるのが昨日殺し合った奴だって認識して無いのか？

「そ、異常。昨日あなたの連れてた子みたいな感じよ

気付かれないと思った？私は日常的にああいう子たちと一緒にいるせいか、ああいう普通の力と一歩離れた力には敏感なのよ

私自身探知に優れている訳じゃないけど、それぐらいはわかるのよ」

「そのくせ、俺の力には気付かなかったのか？」

ハンは肩をすくめている

「しょうが無いわ。あなたの異常性はそれこそハーフとかの力じゃ

ないもの。

ハーフの子達は別種族同士でできるモノで私にも簡単に分かるけど、あなたの力は根本的に違うモノよ」

「ふうん、そういうもんかね」

「あなた、自分の力の事なのに気付かなかったの？」

訝しげに顔を向ける

「気にしたことも無いね」

「あのハーフの子と言い、あなたといい、変わってるわね」

「変わってるとはよく言われるな。それより、日常的にハーフの奴らと関わってるってどういう事だ？」

「簡単よ。ウチの組織のほとんどが別種族同士のハーフだもの」

「へえ、変わった組織だな。大概ハーフは忌み嫌われるモンだろう。俺はそうは思わないがな」

「そりゃあ、あなたが否定すれば連れの子が可哀想過ぎるわよ」

俺は気にしないが、刹那の方が気にするんだよな

「可哀想、ね。お前もそうなのか？」

「そう、私は半分吸血鬼よ」

…そうか、だからこいつの負の部分は其処が見えるんだな

ハンは家族を目の前で殺された。

広がる血の匂い

自分は研究の実験台にされた

想像を絶する激痛

実験は失敗とも成功ともとれる結果だった

渦巻く殺意

「真祖の吸血鬼ではあるけど、半分人間だから魔力は普通だし、不老って訳でもないのよ

その代わり、普通の吸血鬼より回復力や身体能力が高いらしいの
私を吸血鬼にした研究者達を皆殺しにし、研究成果を読んで知った
事よ」

最早、普通の性格でいられるのが不思議な人生だな

「…随分と悲惨な人生歩んで来たんだな」

「安っぽい同情なんていらさないわ。下らないもの
だから私達は低劣で下劣な人間を消してあげるのよ」

「大層な目的だ。だが、俺はそんな物に関わる気は無い」

「そう、とても残念よ。あなたレベルの実力者がいてくれるととて

も助かるのだけれど」

ハンはこの結果が当然だと捉えていたようだった

この短時間で俺の性格を把握したのか？

「どちらにせよ、私が請け負ってる今回の仕事。あなたがいるなら成功しそうにないわね」

「報告するのか？」

「いいえ、そんな面倒な事はしないわよ。こんな地方の争いなんて私からすればどうでもいいことだもの」

まあそうだろうとは思ってたがな

「それに、計画の事を俺に話して良かったのか？」

「宇宙人がいるなんて、誰に話せば信じてもらえるのかしらね」

ハンはさっさと店から出て行き、姿を消した

夜、旅館にて

いつも通り隔離空間内

「さて、面倒な事になった」

「何がだ？」

今現在、エヴァ達の部屋にいつもの八人が集まっていた

「あつちに半吸血鬼がいる。相当な実力者だ」

エヴァの顔色が変わった

当然か、自分に近い存在だからな

「…半吸血鬼とはどういう事だ」

「不老じゃ無いし、真祖の吸血鬼のように膨大な魔力も無いらしいが、身体能力や回復力は高いらしい」

「そうか……そいつの相手は私がやるべきか」

「いや、実質敵側にまだ他に面倒なのが居る

厄介過ぎる状況だ。誰が誰と戦うかは臨機応変に対応するしかないだろう」

「おい、あたし達がその半吸血鬼やもう一人とまともに戦えるのか？」

「無理だな。だから、俺かエヴァが戦う。エヴァ、チャチャゼロは？」

「置いて来てる。必要も無いと思っていたが、こうなると話は別だな」

俺は隔離を解き、エヴァは影にもぐってチャチャゼロを取りに行った

「…さて、お前等のとる行動は簡単だ。隙について逃げる絶対にもともに戦うな。戦えば死ぬぞ」

刹那は勧誘されるかもしれないが

「其処までですか…黒樹さんは昨日戦ったのでしょう？」

「俺とまともに斬り結べる。が、昨日はどっちも手加減してたからな、正直実力は測り難い」

だが、吸血鬼より高い身体能力があるって言うてたし、まともに戦っても勝てる気がしないな

…あくまでまともに戦えば、だけど

「それより、さっきから外が騒がしいんだが」

「そついえば、さっき朝倉がネギ君にキスがどうのっていったって」
「で」

…ああ、朝倉に魔法バレしたのか

「…ってことは、この旅館内に描かれた仮契約の術式はその為か」

「え？仮契約の術式が書かれてるってことは……」

「キスに成功すれば、もれなくこっち側にご招待ってこった」

あの小動物め、やっぱりあいつが原因で事が起こってる気がするな
木乃香に被害が及ぶ前に消してしまおうか

と思つてたらエヴァがチャチャゼロ連れて戻ってきた

「それって不味くないですか？」

「うん、早めに消した方がいいよな」

「何をだ？」

エヴァが訝しげに聞く

そんなの決まつてるじゃないか

「あのげっ歯類だよ。木乃香の部屋に住んでるし、そろそろ我慢の
限界が来そうだ」

「……げっ歯類？」

「ネギ先生と一緒に住んでいるオコジヨですね。私もあのげっ歯類
の入れ知恵でネギ先生に襲われました」

「…あー、なんだ。それは消しといた方がよくは無いか？」

「だろ？」

「私の従者に手を出したんだ。生かす筈も無い」

こうしてあのげっ歯類抹殺計画を実行しようとした矢先

「アレでもネギ君の友達やねんから、殺しちゃ駄目やえ」

「そうは言っても木乃香よ、あのエロオコジヨ、下着を盗んで逃げて来てるんだぞ？」

「それは弁解の余地は無いな。でも殺しちゃダメやえ」

「そうですよ、殺すのは流石にいけませんよ」

木乃香とさよに止められてしまった

「本国つてところに送り返したらどうですか？」

「…考えておこう」

結局抹殺計画を実行する事は出来ず、取りあえず解散することになった

途中少年の分身がいたが、邪魔なので全て消して部屋へ戻った

数十分後、新田の叫びが聞こえたが、特に興味も無いのでスルーした
いや、俺は何もしていないよ？

ただ、俺は教員と同じ部屋だから、偶然テレビを付けてみたら朝倉
実況のゲームが映っただけだよ？

そしてそれを見た新田が鬼の形相で出て行ったのも俺は知らないよ？

瀬流彦先生が俺の顔見て苦笑いしてたけど、俺は某新世界の神を
指す高校生ぐらいの優等生だよ？

唯、宮崎と少年との仮契約は成功してしまったらしい

其処だけは残念

第二十話 二日目 勧誘 正体 死亡フラグ（後書き）

はい、今回はかなり独自解釈と自己満足で書きました

伏線ばかりです

ぶっちゃけどうしても出したかったです。御霊

アライブを混ぜる以上、御霊は絶対必要だろう。と思ったので

御霊に関しては追々説明を入れて行きます

オリキャラの方もそんな感じですよ

勝手に設定作ってみました

カモに死亡フラグが建ちかけた…

感想は常時募集中です。書いてくれるととてもうれしいです

第二十一話 三日目 情報 戦闘

第二十一話 三日目 情報 戦闘

修学旅行三日目

この日は完全自由行動だ

ネギ少年は今日親書を届けに行くと言っていた

まあ頑張ってくれといった所か

俺は今、関西呪術協会総本山

平たく言えば俺んちにいる

「久しぶり、という程でもありませんね。黒樹」

「そうだね。前にあったのは春休みだし」

そういつつ俺達のいる部屋を隔離する

「…さて、今回はどうしたんですか？」

「報告はいくつかあるけど、まずはコレ」

そう言って二枚写真を渡す

「…！これは何処で撮ったんですか！？」

一枚はハン、もう一枚はアーウェルンクスだ

エンヴィーを変身させて撮った

「優秀な従者が居てね。それより、何か心当たりは？」

「こっちの女性の方は知りませんが、この白い髪の少年は心当たりがあります。」

しかし、この少年は二十年前にナギに倒された筈…一体どういふことでしょうか」

「さあ、その辺はよく分からないけど、取りあえずこの二人は要注意人物だ。後はどうにでもなるよ」

そう言っって残りの三枚を渡す

「この五人が実質木乃香を狙っている奴らの実行部隊だ」

「分かりました。直ぐに対策を講じておきましょう」

「頼んだよ、父さん。後はコレだ」

とある一枚の紙を渡す

「コレは？」

「今回木乃香を狙ったウチの配下の組織。俺が確実に潰して置く」

「…親としてはできる限り殺しはして欲しく無いのですが…」

父さんはそういいながら顔をしかめている

「…まあ、部下の方は父さんに任せるよ。首領は許さないけど」

邪魔する奴は問答無用で皆殺しだけど

「そうですか。分かりました、こちらもお対処しておきましょう」

それを聞いた後隔離空間を解き、『扉』^{ゲート}でエヴァ達と合流した

「よ、楽しんでるか？」

「ああ、満足している。お土産もかなり買ったしな」

エヴァ、茶々丸の両手にはお土産とみられる袋が大量にあった

「…なあ、お前何買ったの？」

「ん？八橋を各種とキーホルダー、それに抹茶バウムクーヘンだの、京都限定チョコケーキだの、とにかくいろいろだ」

通りで明らかに両手に収まらない様な数の袋を持ってると思ったよ

っーかさ、チョコケーキって麻帆良でも買えんじゃね？

京都限定って書いてあるだけで変わらないと思う

「それより、黒樹の用事は終わったのか？」

「まー大体はね。後は夜だろう」

「夜？暗殺でもするのか？」

最近千雨の言動が危なっかしくなってきた

俺やエヴァという所為だろうか

「いや、動くのは敵が動き出してからだな」

「ふーん。それってあたしたちも戦うのか？」

「強制はしないけど、エヴァは多分戦う事になるよ」

「…半吸血鬼の女か。そいつは私がやるう。同族として、私の手で葬ってやる」

エヴァは苦虫を噛み潰したような顔をして答えた

半分とはいえ、同じ吸血鬼だし、同族殺しは嫌なんだろう

「…ま、辛気臭い話しはコレで終わり…」

(あー、お父様？聞こえる？)

エンヴィーからいきなり念話が入った

「ちょっとまってくれ、念話だ」

(なんかあったか?)

(頭がおかしそうな神鳴流の女がちょこちょこ攻撃仕掛けてくんだけど)

(…面倒な事態になりそうだな。場所は?)

(多分ね。場所はシネマ村の近く)

盛大に溜息を尽き、空を見る

(しょうがない、俺が相手をしよう。それと少年はどうした?)

(さつき赤い髪でツインテールの子と一緒に何処かへ行ってたよ)

てことはもう親書を届けに動いてる訳か

あつちにハンがいたら厄介なんだよな

親書は確実に届けさせなきゃいけない

つかジジイめ、もうチョイましな奴選べや

…月詠は早めにつぶして置くか。腕でも折れば夜の戦闘はできないだろっ

「…面倒なことになった、俺は木乃香の方へ向かう。お前等は好きなように過ごしていいよ」

「言われなくても楽しんでやるよ」

「さっさと終わらせて来い」

簡単に言ってくれちゃって…

少年の方は父さんに話しとくかな

監視くらいやってんだろ。あんな近くなんだし

そんなわけでシネマ村

映画のセットとかあるし、ごまかすにはここが好都合だったんだろ
うな

刹那が決闘がどうかいろいろ言ってるけど、取りあえず一言

「アホか、お前は」

橋の上で敵と決闘とか、無いわー

「しかし、受けてしまったものは…」

「だからアホなんだよ。そんなもんすっぱかせ。敵の言う事一々律儀に従ってんじゃねえよ」

「でも、お嬢様が狙われて…」

「ドアホ、それもあるからすっぱかせつつってんだよ」

原作でも思ってたけど、守るためならわざわざ決闘しなくてもよくな？

それも木乃香は今回自分の立場を知ってる訳だし

守る＝戦うって訳じゃないんだし

「お前等は本山へ向かえ、他の奴らまいてな。後は俺がやっつくから」

「…分かりました」

刹那は少し不満そうだったが、最終的に折れた

「あ、それとカバンの中身に気をつけとけよ。朝倉バカがGPSしかけてる可能性があるから

今思い出したよ。あつぶねー

あいつらが来ても見捨てるだけだけけど

とある橋の上、すっかり人払いと認識阻害をかけたうえで俺と月詠は対峙していた

「やっと来ましたか〜」

「一応時間前だろう」

「頑張つてな〜せつちゃん！」

と、言う訳で

刹那の格好をした俺（一応言っておくが幻術魔法、エヴァ提供）と、木乃香の格好をしたエンヴィーがいる

しかしエンヴィー、演技うま過ぎやしないか？

まあいいけど

「じゃ、早速やり合いましょ？」

月詠は二振りの刀を俺に向け、斬りかかってくる

本当なら虚刀流でも使いたいたいところだが、生憎俺はそんな事はできない

だから

「!?!」

月詠の振るった刀をかわし、失速したところで刀を二本とも掴む
俺は掌が切れるのが分かる位力を入れて握っている

「そんな事をして、刀は抜かないんですか?」

「抜いて欲しいならそれだけの技量を見せる事だな。…もう無理だ
が」

ジュウツ!!

「!?!?!」

刀が派手な音を立てて溶ける

手を離すと、手の傷は直ぐに治った

「…あなた、先輩じゃありませんね?」

「お、よく分かったな。ま、最初は気付かなかったから計画は成功
かな」

ポコポコツ、とシャボン玉を複数作り出す

「何を…」

バシユツ!

月詠の両腕が肘から弾け飛ぶ

「ぐっ、あああああああ!!」

叫びを上げ、月詠は倒れる

「ま、こんなもんだろ。敵に容赦情けをかける義理もねーし、殺してもいいけ……」

ヒュン、と複数の石の槍が飛んでくる

俺はそれをシャボン玉で弾き、飛んできた方向を見る

アーウェルンクスが空中に浮かんでいた

「…近衛黒樹。やはり厄介だね。いや、零崎黒識と呼べばいいのかな？」

「どっちでもいいさ。それで？お前は何をしに来たんだ？」

「お嬢様の誘拐、と行きたいところだけど、君がいるなら無理だろっね」

「させる筈無いだろうが」

剣を練成し、構える

「今回は引かせて貰うよ。彼女の治療もしなきゃならないしね」

アーウェルンクスは月詠を連れて『扉』で移動しやがった

追う気は無い。メンドイし

俺の演技も中々だったと思う

取りあえず幻術を解き、着替え、本山へと向かった

〈SIDE 三人称〉

時は少し遡り、ネギと犬上小太郎の戦闘さかのぼが終わった時

「や、やるや無いかお前……こうなったら本気や!!」

小太郎は叫び、獣化して、ネギに襲いかかる

「させませんよ」

バン!と詠春が現れ、横から刀の峰で叩きつける

小太郎は数メートル吹き飛び、林の中へと突っ込んだ

詠春はそれを確認した後、ネギの方を向く

「大丈夫ですか？」

「あ、ハイ、ありがとうございます」

「あの、あなたは…?」

「私は近衛詠春。木乃香と黒樹の父親ですよ」

「あ、あなたが…」

ガラッ、と音がして、そっちを向く

「クッ、誰や…?」

「おや、随分頑丈ですね。気絶してくればよかったです」

「舐めんなや。あんくらいじゃ倒れへんで!」

そう言いながらも小太郎の足はふらついている

後一撃でも喰らえば、間違いなく倒れるような状態

そんな状態では逃げる事さえまならない

(…どうすっかな。千草の姉ちゃんに助けて…いや、女に頼るのだけは御免や。自分で何とかせな…)

詠春は瞬動で回り込み、峰打ちで気絶させようとする

ガキイン!と金属音が響く

「!あなたは!?!」

「お初に、『サムライマスター』近衛詠春」

大鎌を構えたハンは小太郎を担ぎ、距離をとる

「…クツ、あんたか。何の用や…？」

「いつまで意地張ってんのよ。あたしだって助ける気は無かったけど、依頼主に頼まれたんじゃしょうがないわ」

心底ダルイと顔が言っているような状態だった

「…でも、かの『サムライマスター』と一戦交えるのも悪く無いわね」

「あなたは、黒樹の報告にあつた…確か、『首狩りの女王』でしたか」

「あなたに知っていて貰えるなんて光荣ね。やっぱりちょっと殺し合っていていこうかしら」

ハンは小太郎を投げ捨て、鎌を構える

小太郎は何とか着地するが、力尽きて倒れる

「…その子は仲間では無いのですか？」

「違うわよ、同じ依頼を受けた同業者」

（一応組織には誘ったけど、乗り気じゃないみたいだし、そもそも其処まで強くないし、あまり必要性感じないのよね

それに比べて黒識の実力と殺気、後その妹のお付きの子は欲しいのよね。

忌子らしいし、力もそこそこありそうだったし」

「あ、あの！あなたの名前を教えてくださいませんか！？」

突然言われたその言葉にハンは緊張感が無くなる

「わ、私は宮崎のどかと言います！あなたの名前を教えてください
！」

「…名乗ったら名乗り返すモノなのかしらね。戦国時代の武将じゃあるまいし」

ハンは意外と日本の歴史が好きらしかった

「……………教えてもらえませんか……………うう…お役に立てず、申し訳ないですー」

「ちょ、本屋ちゃん！？そんな事無いわよ、役に立ってくれたわよ
！」

宮崎が落ち込みだし、それを慰めるアスナ

その隣ではネギと詠春が気を抜かずにハンを見ている

「……………何だか興が削がれたわね。今回は引かせて貰うわ」

小太郎を担ぎなおし、瞬動で移動する

結界は詠春が入ってくるときに既に破壊されている

消えたのを確認し、詠春は肩の力を抜く

(…ふう、アレはかなりのやり手ですね。あのまま戦っていれば私も無事ではいらなかったでしょう。

それに、黒樹が要注意人物と言っただけある。相当強いですね、アレは)

ネギの方を見れば、今までの疲れが出たのか、ばたりと倒れてしまった

「す、すみません。でも、力が入らなくて…」

「仕方ありません。彼は強かったようですし、魔力も大分使ったみたいですね。私がおぶって行きましょう」

「いえ、これ位なら…」

「遠慮する事はありませんよ。それに、彼女の事も何かする必要があるのでしょうか？」

そう言っつて宮崎の方を見る

「あ、はい。どうやら巻き込んでしまったようなので…」

「本当ならセオリー通り記憶消去をしたいところですが…」

(お義父さんが『ネギ君のやりたいようにさせてやってくれ』と言っっていましたしね…

しかし、一般人に魔法をばらして良いものか…)

「あ、あの、できれば記憶消去はしないで欲しいんですが…」

アスナが詠春に詰め寄る

「何故ですか？」

「いや、えっと、あの…」

「僕が責任を持ちます。だから、宮崎さんの記憶を消去するのはやめて頂けませんか？」

「……………分かりました、それで納得しましょう。とにかく、一旦本山へと行きましょう」

同時刻、刹那と木乃香が本山へと向かっている時

いったん休憩と公園に入り、ベンチに座ったまでは良かった

しかし、数分後に人払いと認識障害が張られ、黒服の男達が現れた

「木乃香お嬢様、我々と一緒に来てもらえますか？」

黒服の一人が毅然とした態度で言う

「それに足る理由を説明していただければ、構いませんが」

対する木乃香も毅然とした態度で話す

「実は、本山の方でいろいろごたごたがありまして、お嬢様の護衛にと使わされました」

「おかしいですね、それなら直ぐに父から連絡が入る筈ですが」

「何分急な事だったので、詠春様も連絡が出来なかったのでしょうか」

この時点で木乃香が魔法関係者だと知っているのはエヴァの家に集まる数人、学園長、ネギとアスナ、そして詠春のみ

黒服の男達にとってほぼ一般人である木乃香は、刹那がいるとはいえ、簡単に誘拐できると踏んだのだろうか

千草達では無い理由は、恐らく初日の一件で戦力の増強でも図ったのだろう、と木乃香は推測する

「それも随分と無理な言い訳ですね。私達を心配しているなら、少なくとも兄が知っている筈ですし、護衛は彼女一人で十分です」

男はだんだんと面倒になってきたのか、口調が次第に乱雑になっていった

「おい、もういい。力づくでやるぞ」

数人の男は武器や符を取り出し、構える

「せつちゃん、気をつけてな」

「はつ。『アテアット来たれ』」

呼び出したのは石剣、建御雷（タケミカヅチ）

木乃香の魔力が充填され、その長さは一メートルを超える

夕凧を右手、建御雷を左手に持ち、構える

六幻は使わない

黒樹から「アレは隠し玉だ」と言われているし、夕凧があるから刀の心配はしていない

「式紙 タンロウ 貪狼 フキヨク 武曲」

ニホンオオカミの姿をした式神と落ち武者の姿をした式神が現れる

この陰陽術は本来蘆屋系の術だが、黒樹が本山にある書物を勝手気ままに読み漁り、その系統の家系の者に許可も得ずに勝手に使っているものである

「やったり、貪狼、武曲」

「グルオオオオオオオオオ!!!」

「御意に！」

貪狼は高速で走りだし、周囲の黒服達に噛みつき、爪で切り裂いていく

武曲は木乃香に近づく者を槍を使って薙ぎ払い、気絶させていく

「な、舐めるな！『斬空閃』！！」

気を使い、曲線を描いて放たれた斬撃は木乃香へ向かう

だが、それは同じく気を使った斬撃によって止められる

「『雷鳴剣』」

弾かれた斬撃は明後日の方向へ跳び、何も無い所へ着弾した

刹那は一瞬で距離を詰め、足を切る

男は悲鳴を上げて倒れる

刹那はそのまま数人の隙間を縫うように動き、足を切って動きを止める

倒れた男達は貪狼によって踏みつぶされ、気を失う

「くっ…舐められたままで終われるか！」

数人の男が動き、木乃香に襲い掛かる

武曲は他の敵を相手にしている為、間に合わない

刹那と貪狼も距離があり過ぎて間に合わない

木乃香は直ぐに数枚の符を出して防ごうとする

「このちゃ……」

パチイン！

指を鳴らす音と共に、爆炎が男達を包む

「こういう場合は奇襲が最も有効的、だったかな」

「正解だ。足を攻撃すれば機動力を削げる」

「ケケケ、モウ殆ド終ワツテルジヤネエカ」

現れたのは千雨、エヴァ、茶々丸、さよだった

茶々丸の頭の上にチャチャゼロが乗っている

「大丈夫ですか？木乃香さん」

さよは木乃香に近づいて聞く

「うん、大丈夫やえ」

さよはほっとした顔を見せ、襲った男達を見る

既にほとんど倒されていた上、千雨の一撃で残りの全員が気を失っていた

「取りあえずは本山へ向かうんだろ。黒樹から連絡を受けてる」

「うん。またこういう人たちが来んとも限らんし、いそごか」

木乃香が先導し、六人は歩を進める

第二十一話 三日目 情報 戦闘 (後書き)

今回木乃香が使った陰陽術はぬらりひよんの孫で出てくる奴ですね

なんとなく気に行っただので使ってみました

千雨の活躍シーンを書くつもりが、書いてみればほんの数行…
うまくいかないものです

感想は常時募集中です。書いてくれると嬉しいです！

第二十二話 三日目 合流 誘拐 戦闘

第二十二話 三日目 合流 誘拐 戦闘

関西呪術協会総本山

俺が到着したところにはネギと神楽坂が居た

「よう少年。親書は渡したか？」

「あ、黒樹さん。親書は既に渡しました」

「ええ、しかと受け取りましたよ」

ネギの声に父さんが反応する

「ーことは、だ

ネギはもう用無しで、守る必要は無い、と

大分楽になったな。足手まとい二人、いや、宮崎を含めれば三人か。

少なくともそいつらの事など気にしなくて済む

後はどれだけうまく行くかな

俺が到着して十数分後、木乃香達が到着した

「お父様、久しぶりや〜」

「ハハハ、これこれ木乃香」

…そうか、木乃香は長い間会って無いんだっけ

「やあぼーや」

「え、エヴァンジェリンさん!？」

「それに千雨ちゃんにさよちゃん、茶々丸さんまで!？」

面倒なことになってきたな

取りあえず状況説明

「…千雨さん、元々関係者だったんですか…」

「いや、元々ってわけじゃない。ちょっといろいろあつてな」

「そうですか」

「でも、関係者ならあの時話してくれば良かったのに」

「あたしだっているいろいろ都合があるんだよ」

「ふーん」

こいつ等の適当な雑談は無視しながら、俺は次の一手を考える事にしよう

ま、大体決まってるだけだね

千草は既に洗脳済みだし、月詠は恐らく今回は出てこないだろう。

後は小太郎とハン、アーウェルックスだ

小太郎はどうでもいいが、後の二人は面倒だな

アーウェルックスは精々利用させて貰おう

結界は正常に動いている

見張りの巫女からの連絡もほんの数分前にあつた

だが、数分の間というモノは中々長い

「早速侵入してくるたあね」

「君の相手は少々骨が折れる。できればしたくないんだけどね」

コイツ、見張りが連絡したのを確認してから石化させやがったらしい

「逃がすと思ってるのか？」

「思ってる無いけど、ここで戦う気は無いよ『石の息吹』」

辺り一帯が石化する煙に包まれる

この煙に乗じて逃げやがったか

俺は隔離で空気だけを通さないようにしている

勇太が中途半端に隔離して魚を水ごと取ったみたいだね

煙が晴れた後、直ぐに木乃香の刹那と念話で連絡する

（木乃香は無事か？）

（すみません、お嬢様は白い髪の敵に攫われてしまいました…それに、長も私をかばって石化の魔法を…）

なるほど、予定通りか

父さんがやられるのは少々予想外だったが、まあ仕方が無い

得物が違った所為もあるだろうし

（問題無い。予定通りだ）

（っ！…どういふことですか!?!?）

(取りあえず俺の部屋まで来い。場所は知ってるな?)

(はい、直ぐに行きます)

と、言う訳で俺の部屋の前

あらかじめ張ってあった隔離を解除する

「やほー、大丈夫やった?」

「お、お嬢様!?!」

「あ、アレ?何で木乃香がここに?さっき攫われたハズじゃ…」

「ああ、アレ偽物」

「『ええええええ!!?!』」

あらかじめ木乃香と千雨、エヴァを隔離空間に閉じ込めておいたんだよね

エヴァは念の為の護衛、千雨は錬金術で空気の確保の為に

隔離してると空気も通さないからな、窒息する可能性がある

「さて、俺は後始末に行ってくる。行くぞ、エヴァ」

「分かっている」

「ケケケ、出来ルダケ楽シマセテモラウゼ」

エヴァはチャチャゼロを連れ、浮遊する

「後始末って、何をするつもりですか？」

「簡単だ。スクナを消滅させるのさ」

「は？」

刹那が驚いた顔で見ている

俺とエヴァは湖の近くに行き、スクナの復活を待つ

途中で小太郎が勝負を仕掛けてきたが、一撃で気絶させてやったよ

そしてこの辺り一帯を隔離し、見られないようにする

俺は心臓から魔力を引き出す、というより心臓のエネルギーを魔力に変換することができる

そして、心臓は賢者の石の代わりとしても使える

つまり、賢者の石のエネルギーも魔力として扱えるって訳で、だからこそアーウエルンクスも騙されたんだが

しかし、俺や木乃香の魔力はそこら辺の魔法使いとは違う、近衛家の魔力だ

賢者の石から膨大な魔力を引き出せたとして、それを使ってもスクナは操れない

ゆえに

確実に暴走し、確実に被害をもたらす

どちらにせよ、あんな迷惑なモノを後世にまで残す必要も無いし、どうせだから消してしまおうと考えた訳だ

「お、光の柱が現れた」

「そろそろだな。で？どうするんだ？暴走するあいつを抑える方法があるのか？」

「取りあえずは近づかないとな。行くぞエヴァ」

取りあえず湖へ降りる

「ふん、今更現れたかて遅いで。もうスクナは復活しとるんや。コイツさえいれば、援軍だろうと何だろうと打倒せ……」

「
!!!!!!!!!!!!!!」

瞬間、スクナの咆哮が響き渡った

「……うるさっ。隔離しといて良かったぜ。あんなの聞いたらまともな人間ならイカれちまう」

「まともな人間じゃ無くてもアレはできるだけ聞きたくないものだ」

「ま、そうだけどな」

俺は直視の魔眼を発動し、死の点を見る

…よくよく思えば、直視の魔眼ってほとんど使う機会無いよな

そんな事を思いつつ、氷の爪を湖に突き刺す

「邪魔はさせないよ」

アーウェルンクスが現れ、俺に一撃与えようとする

しかし、その攻撃は届かなかった

「ふん、半吸血鬼の奴は居ない様だからな。お前の相手でもさせて貰おうか」

エヴァはアーウェルンクスを殴り飛ばし、追撃を加えようと動く

「

!!!!!!!!!!!!!!」

スクナが俺に向かって拳を振り下ろす

「『冥府の氷柱』」

名前をそれっぽく付けただけで実際にはいらないんだが

それはともかく、氷の爪を湖に刺し、凍らせて巨大な六角柱を作り出し、ぶつける

スクナは四本の腕を使ってそれを壊すが、時間稼ぎは十分

さっき刺した氷の爪を使い、巨大な氷の槍を作り出す

それを俺は念動力…マクファーンソンの元部下の能力者が暴走した時使った奴…を使って浮かせ、死の点へと突き穿つ

「

！！！！！！！！」

スクナは絶叫にも似た咆哮をし、消滅していく

「……………うん、まあこんなもんだろ」

後はエンヴィーを回収して、千草と小太郎バカを連れて帰れば終わりだ

隔離を解き、刹那と念話で連絡を取る

(刹那？こっちは終わったから直ぐに戻る)

(……………)

アレ？反応が無い

仮契約カードは持つてる筈だ、となると…

(千雨？なんかあったか？)

(……………)

こっちも反応が無い

念話が妨害されてるのか？

「どうした、考え込んだ顔をして」

「念話が繋がらん。お前も試してみる」

「何？本当か？」

直ぐに念話を試しているようだが、茶々丸と繋がらないらしい

何かあったのか？

〈SIDE 三人称〉

関西呪術協会総本山

黒樹とエヴァがスクナ討伐に出発してすぐ

「……………結局、黒樹は何をするつもりなんだろうな」

「さあ、兄様の考えとる事はよー分からん」

「終わった後で説明を求めればよいのでは？」

「それが一番無難だと思います」

「それより、長の石化はどうかできないものでしょうか？」

自分の所為で石化したからと、申し訳なさそうに刹那は言う

「あ、それと本屋ちゃんも石化されちゃってるみたいなのよね。どうにかできる？」

それから全員で詠春の元へ向かっている

宮崎は詠春の後、という事になったらしい

「うーん、ウチもやってみるけど、どうやる。多分できると思っえ」

「だといいいけどな。別の奴が襲ってこないとも限らない訳だし、戦力を確保しておいた方がいいだろ」

「そう、そう考えるのが正解よ」

背後から聞き覚えの無い声がある

その声を聞いた瞬間、ほぼ全員が瞬動で距離を取る

「あら、いい判断するじゃない」

「……随分と物騒な子達ね」

「!?マスターとの念話が出来ません!」

「何!？」

「無駄よ、念話は妨害してるから連絡はできないわ」

ハンは大鎌を構え、言い放つ

「さあ、殺し合いをしましょう」

その言葉と同時に斬撃が放たれる

刹那はそれを弾き、刀を構えなおす

「出し惜しみはしない方がいいわよ。手加減なんてするつもりないから」

(…やはり、私より数段上の相手。出し惜しみをすればやられるのは必然か…)

「アテアット
来たれ」

刹那は夕凧をなおし、茶々丸に預ける

六幻を呼び出し、構える

それを視てハンは鎌を振るう

刹那はそれを弾き、避ける

「へえ、中々良い刀じゃない。頑丈で切れ味もいい、いい刀持っているわね」

ハンは余裕だと言わんばかりに話しながら鎌を振るう

しかし、刹那は鎌に集中しなければ避ける事はおろか弾く事さえま
まならない

刹那は庭へと逃げ込み、距離を取る

「逃げてても無駄……」

パチイン！

爆炎がハンを包み込む

千雨はそれで倒したと思わず、何度も爆破を起こし、ハンを焼く

ガキイイン！！

千雨の背後から切り裂こうとしたハンは武曲によって阻まれる

「……………つー！！」

「残念、それくらいじゃ倒せないわ」

「……障壁、か」

「そう、コレでも真祖の吸血鬼だね。魔力は其処まで多くないけど、魔法は多少使えるわよ」

それでも間に合わなかったのか、多少なりやけどを負っていたらしく、服が所々焦げている

やけどそのものは直ぐに治ったのだろう

（真祖の吸血鬼、か。厄介だな、オイ）

ハンの後ろから短剣が複数飛んでくる。

さよがサポートに、と飛ばしたのだ

しかし、障壁によって阻まれ、短剣は地に落ちる

武曲は切り裂かれ、紙となる

ハンはそれを受け、一瞬でさよの視界から消える

「ぎゃっ!」

真横から切りかかるうとしたハンを貪狼が噛みつく事で邪魔する

それさえ一瞬

貪狼は切り裂かれ、武曲と同じように紙となる

「僕の生徒を攻撃するな!」魔法の射手 連弾・雷の十五矢!」

ネギは詠唱を終え、魔法の射手をハンに向けて放ち、直撃する

それで倒したとは思わず、集中し、煙が晴れるのを待つ

「『僕の生徒に攻撃するな』、ねえ。そう言うセリフはもう少し強くなってから言うモノじゃないかしら」

真横から聞こえた声に反応し、ネギはそちらを向く

しかし、向いた瞬間障壁をいとも簡単に突破し、メキメキツ…と嫌な音を立てながら強烈な蹴りを喰らい、吹き飛ば

「ネギツ！…」

「よそ見してる暇は無いわよ」

アスナはネギに気を取られ、余所見した一瞬で同じように蹴り飛ばされる

既に二人を戦闘不能に追い込み、余裕の笑みを浮かべるハン

「……こりゃちつとヤバい状況じゃないか？」

「ちよつとどころじゃなさそうですが」

「どうにかして連絡とれないのか？」

「マスターは携帯を持っていませんし、黒樹さんは携帯を置きっぱなしで行ってますから」

「クソツ、最悪の状況じゃねえか…」

「やるしかあらへんよ。兄様とエヴァちゃんが速く帰ってくる事を願うばかりやえ」

全員が構えつつ、話し合う

「さて、全員の實力は大体計れたわね。やっぱり实力的に其処のサイドテールの子が欲しいわね」

「……どういう事や？」

「私は組織に属していてね、その組織の目的の為に戦力が必要なよ。」

で、完全な人間じゃ無くて實力がある子を探していたんだけど、その子が丁度いいかかって思ったのよ」

「せつちゃんは人間や！」

「……あら？あなた知らなかったの？あなたのお兄さんは知っていたのに…」

「……え？」

刹那は驚きで一瞬頭が真っ白になる

「昨日ちよつと話したのよ。ウチの組織に来ないかって。ま、振られちゃったんだけどね

その時にあなたの話もしたのよ。

完全な人間じゃないハーフの子、ってね」

「ハーフ？」

「簡単に言えば、人間の血が半分しか流れていない子の事よ」

刹那は絶望したような表情をする

「……そう、なんか？せつちゃん？」

刹那は唇を強く噛む

自分の明かしていなかった秘密を他人が明かす

何の心構えも無く、覚悟なんてもつての外

「キ、サマアアツアアアアアアアアアア！！！！」

刹那は唯、怒号と共に斬りかかる

だが

「そんな怒りにまかせて刀を振るっても斬れないわよ」

あっさりと、相手にするまでも無いというように

大鎌は振るわれ、刹那を切り裂く

右肩から斜めに、切り裂かれる

倒れた刹那をさよが受け止め、千雨が牽制しながらそのまま後ろま

で下がる

「茶々丸さん！」

「分かっています！」

茶々丸は直ぐに陣を描き、止血する

「グツ、…」

「…コレで恐らく大丈夫です。とはいえ、傷をふさいで止血しただけですから、木乃香さん、直ぐに治療を」

「し、しかし…」

「大丈夫や、せつちゃん」

木乃香は、やさしく声をかける

「せつちゃんの秘密、せつちゃんが心構えが出来てからでええ、いつでもええんや。でも、無理はせんといて…」

木乃香は、今にも泣きそうな声で唯語りかける

「お嬢様…」

持っている符と魔力を使って刹那の傷を完全に癒していく

「おい、悪いがそう話してる暇はなさそうだが」

「そうよ、私もいい加減待つのも面倒だし、大事にされてる其処のお嬢様連れて行けば、そっちの子も彼も組織に入ってくれるでしょ」

その言葉に反応した刹那は、傷が完全に治る前に立ち上がる

手に持っているのは六幻のみ

先ほどの一撃でタケミカツチは落としてしまった

「…させない。お嬢様は、私が守る」

そして少女は、唯一人を守る為に立ち上がる

第二十二話 三日目 合流 誘拐 戦闘（後書き）

書いてたら長くなったので半分に分けました
残りは近いうちに投稿できると思います

第二十三話 三日目 秘密 狂気 虐殺

第二十三話 三日目 秘密 狂気 虐殺

バサア…と刹那は真つ白な翼を広げる

「お嬢様、コレは、私が見せなくなかったモノです。
でも、コレを使わずにこのちゃんが危険な目にあうなら、私はこの
力を使う」

嫌われると思った

怖がられると思った

化け物と呼ばれるのが怖かった

だから話せなかった

「…バカ、ウチがせつちゃんを嫌いになる筈ないやんか」

木乃香は涙ぐんだ声で言う

刹那はその言葉を聞き、覚悟を決める

刹那は六幻を手に持ち、黒樹の言葉を思い出す

『アレは本当にヤバいと思った奴にだけ使え。毎回使ってるとお前の命が持たん』

(…本当に危険な相手、なら、あの女には使うべきだろう)

刹那は六幻を構える

「六幻 昇華！私の命を吸い高まれ！」禁忌 三幻式』！！」

刹那の眼に三点の文様が浮かび上がり、眼の周りに罅が入る

「へえ、それが隠し玉って訳？」

「答える義理は無い」

ヒュン、と

風を斬り、高速で斬りかかる

鎌と刀をぶつけ合い、派手な音が響き渡る

それから何度も、何度も鎌と刀をぶつけあう

「フフツ、やるじゃない。私の速度についてくるなんて」

ハンは楽しそうに鎌を振るう

一方刹那は限界が近かった

大きな怪我をし、完全に治療する前に、あまつさえ肉体の限界を超

える動きをしながら戦っている

未だ倒れていないのもおかしいような状況だ

それでも、倒れる訳にはいかない

倒そうとは思わない

勝とうとは思わない

自分では勝てない

刹那は自分と相手の力量差がはつきりと分かっていた

三幻式はいわばドーピング

長く続く筈も無く、その身には傷が増えて行く

それでも、唯一人の守ると決めた人の為に戦う

それから数分、刹那は戦い続けた

避けれる攻撃は避け、避けれない攻撃は逸らす

ここにきて刹那は自分の限界を超えつつあった

今までなら反応できても捌けなかったであろう攻撃に反応し、あまつさえ避けて見せる

(……… 凄いわね。コレが才能ってヤツかしら)

三幻式の状態とは、身体能力が跳ね上がるだけ

逆に言えば、技術はそのままなのだ

どれだけ身体能力が上がるかと、技術が三流では攻撃を捌く事さえ出来はしない

頭を上った血は抜け、冷静になり、極限の殺し合いの中で進化している

だが、それでも体は耐えきれない

限界を超えた身体能力を使い続けた代償は急に来た

足は動かなくなり、手に力は入らなくなる

ハンはチャンスとばかりに鎌を振るった

ガキイイイン

しかし、その攻撃はさよの短刀で逸らされ、木乃香が動く

「『縛』っ!!」

複数の符と魔力を使い、縛る

膨大な魔力を注ぎこまれた符は即興ながらも強力な力を持ち、ハン

を縛り付けた

「茶々丸っ!!」

「分かっています!」

投げられたクナイは五つ

それを起点に鍊丹術を發動し、大窯のような形を作る

上のみ穴が開いており、それ以外は塞がっている

できうる限り厚く、できうる限り頑丈に

「さあ、焼き尽くされる!!」

千雨は両手を合わせ、紅蓮の鍊金術を發動する

轟音と共に大爆発が起こり、爆風が上空へとまき散らされる

「大丈夫か、刹那」

爆発音を気にすることなく、刹那の様子を気にかける一同

「…はい、大丈夫、です」

「無理すんな、相当辛いだろ。木乃香に直して貰ってる。あの女がアレでやられるとは思えないが、時間稼ぎ位なら…」

「無駄よ。威力はすごいけど、あなたは前衛タイプじゃない。あな

たじゃ私とは対等に戦えないわよ」

大窯を切り裂き、焼けてボロボロになった服を纏いながらも、歩みを止めずに現れる

「まさか、無傷かよ……」

「無傷じゃ無いわ。流石に今は効いたわよ。唯、ギリギリ障壁張れたから多少は威力も抑えれたし、吸血鬼の回復力は舐めちゃいけないわ」

焼けた肌は今も再生を続けている

「ちつ、肉を焼く嫌な臭いだ」

「あなたが焼いたんでしょ。びつくりしたわ、あんなこともできるのね」

「キレないんだな。あれだけやればキレると思ってたが……」

「冷静さを失うのは戦場では死と同義よ。死にたくないなら冷静な判断力を身につけることね」

ヒュンヒュンと大鎌を回しながら話す

「ま、容赦なんてする気も無くなったけど」

感化法まで使った瞬間

千雨や茶々丸には全く見えなかった

しかし、刹那はぎりぎりまで反応できる速度だった

それは、死にかけていると手加減した結果に過ぎない

防いだはずの刀は弾かれ、またも刹那は切り裂かれ、鮮血を散らす

(……ああ、私は、また守れなかったのか)

木乃香の悲痛な叫びが聞こえる

刹那の眼には鎌を振り上げ、とどめを刺そうとしているハンが見えた

もはや、いらないと判断したのだろう

このままやっても、どうせ仲間にはならないと

だからこそ、とどめを刺そうとした

刹那は、ゆっくりと眼を閉じる

ここで死ぬ

それは絶対の事実になる、ハズだった

だが

「何俺の身内に手え出してんだよクソ女」

鎌は弾かれ、ハンは距離を取る

「エヴァー!!」

「分かっている! 『奈落の業火』 固定 掌握 術式兵装・獄炎煉我
!!!」

エヴァの肌は黒くなり、チャチャゼロと共に近接での戦闘を開始する

黒樹は直ぐに刹那の怪我を視る

既に意識は無い

「三幻式まで使ったのか、それもかなり酷使したらしいな。おかげ
でこいつもかなり熱を持つてる」

そう言って刹那のポケットから取り出したのは懐中時計

修学旅行前日に黒樹が渡していたモノだ

中に賢者の石が入れてあり、刹那の代わりに命を差し出す

とはいえ、刹那の命を吸う量が少なくなっただけで、厳密には完全
に寿命を減らさずに使えている訳ではないのだが

刹那の服を破り、上半身をあらわにする

(傷が深い、それにさつき受けた一撃だけじゃねえな)

傷口に触れ、錬金術で治しながらそう思う

失血が多く、刹那の顔は蒼白になっていた

その間に周りを見ると、ネギとアスナが倒れているのを発見した

カモはネギの肩に乗っていた

少しずつ動いているところを見ると、ネギ達は先ほどの爆発で目を
覚ましているようだった

「傷は治した。後は寝かせてる」

ダン！ とエンヴィーが千草と小太郎を担いで現れた

「丁度いい。茶々丸、エンヴィーの賢者の石を使って全員の怪我を
治せ」

ここに居る全員、大なり小なり怪我を負っている

一番ひどい刹那は既に黒樹が治療を終え、自分の上着を着せている

「了解しました」

「兄様！ せつちゃんは、せつちゃんは……」

木乃香は泣きながら黒樹に尋ねる

黒樹は木乃香をそつと抱き締め、呟く

「大丈夫だ。怪我は治した。お前はそばにいてやれ」

前に刹那が血だらけになった事を思い出したのか、木乃香も蒼白な顔をしていた

泣きながら黒樹にしがみつく

「泣かないでくれ、木乃香。

お前を悲しませるモノ

傷つけるモノ

全部

ぜんぶぜんぶ

俺の手で、壊してあげるから

「兄、様　？」

木乃香はその声にゾツとした

今までの黒樹とは、雰囲気が全く違う

今まで似たような事は多々あった

それでも、今回は何かが違う。そう感じた

黒樹は木乃香を離し、ハンの方を向く

エヴァとハンほぼ互角と言っているいい戦いをしていた

近接戦闘はエヴァの得意分野では無く、なおかつ相手は同じ吸血鬼の脅力を持っている

チャチャゼロがいるとはいえ、厳しい状態だ

「エヴァ、退け」

大きくは無かった

だが、その声は戦闘していた二人にもはっきりと聞こえた

「黒樹、こいつは私がやると……」

「退け」

今度は明確な殺気をぶつけ、エヴァを強制的にどかせる

「……へえ、今度はあなたが相手してくれるの？」

「……………」

黒樹は返事することなく、歩み続ける

「返事くらいして欲しいわね。まあいいけど。決着付けましょう」

ハンは大鎌を構え、感化法を最大限まで高める

「ハンプティダンプティ……」

黒樹の体は心臓と同化し、液体のように、気体のように、その体は揺らめいていく

同化が進むと同時に殺気もまた大きく、禍々しくなる

「お前の全てを、否定^{こわ}してやる…！」

完全に同化し、実体が無くなった

そして、その状態で明確な敵にぶつけられる殺気

それは幾つもの戦場をくぐり抜けてきたハンでさえ、恐怖を抱きかけるようなものだった

それは憎悪でありそれは怒り

刹那を傷つけた怒り、木乃香を泣かせた憎悪

戦闘は唐突に始まる

否、それは戦闘では無かった

最初の一撃をかわせた事さえ、ハンにとっては奇跡

その一撃は山さえ抉る一撃

ハンは上空へ避難し、その攻撃を視る

(……殺気が、無い?)

その攻撃に殺気は無かった

いや、殺気どころか、魔力や気さえ感じなかった

アレだけふざけた力を使うのに、魔力や気を用いていない

何か武器を持っている訳でも無い

(まさか、彼が?)

一つの可能性を持ち、次の攻撃に備える

黒樹は上空へと浮上し、周囲に空気を集め、膨大な熱を持った球体を作り出す

高電離気体
プラズマ

一方通行が使っているように、計算で空気を圧縮している訳ではなく、唯力任せに空気を圧縮している

故に、風が巻き起ころうとその球体はゆらが無い

半径五メートルはあろうかという巨大な塊を作り出し、それをぶつける

殺気を持ったその攻撃を、ハンは難なく避ける

しかし、避けた方向に『無』の力が襲い掛かる

それは木々を消滅させ、地面を抉り、地形を容易く変える

当然避けきれぬ筈も無く、四肢が消し飛ばされ、内臓も消し飛ばされる

だが、幸運にもそれらは一部ずつ削られた為、死なず、再生する

反撃をしようと上空へ跳び、鎌を振るう

その攻撃は唯の人間なら確実に死ぬ一撃

(…また、手応えが無い)

二日前、駅で戦闘した時と同じ

斬った筈なのに、手応えが無い

斬った部分は揺れ、現実味が無い

ハンは本能的に動く

先ほどまで居た場所に不可視の攻撃がされる

虚空瞬動で距離を取る

それでも、『無』の攻撃は避けきれない

片腕を消し飛ばされながらも、次の一手を画策する

詠唱が終わると同時に黒樹の後ろに回り込み、その魔法を発動する

「『燃える天空』」

爆炎に包まれ少しでもダメージがある事を祈るハン

しかし、その願いは無残にも砕け散った

爆炎の中から殺気の無い『無』の力が放たれ、四肢を消し飛ばされる

無様に地面に転がり、再生しようとするも何度でも消し飛ばされる

ハンは何度も再生し、それを消され、再生能力にガタが来はじめていた

「終わりだ。ハンプティダンプティ」

その声は抑揚が無く、感情というモノが感じられなかった

「……やっぱり、あなた『アクロの心臓』の持ち主ね？」

黒樹はその問いに答えない

「あなたのその力、魔力も気も使わずにあんな威力の攻撃が出来るなんてそれくらいしか思いつかないのよ」

「知ったところで無駄だ。お前は俺が殺す」

そして、氷の爪で死の点をつこうとする

「待ってください！！」

黒樹はゆっくりと振り向く

ゾクッ…

その瞳を見た瞬間、ネギに恐怖のようなものが体中をめくった

その瞳は暗く、沈んだ穴のようで、吸い込まれそうだった

「黒樹さん、何をしているんですか？」

「見て分からないのか？ こいつを殺す」

「っ！ 駄目です！ 確かにその人は刹那さんたちに酷い事をしました。でも、生きて罪を償わせればいいじゃないですか！」

ハンはそれを聞き、笑う

「アハハハハハハ！！ 随分と優しいのね。殺さず生きて罪を償わせる、なんて。そんな事が簡単にできるなら世の中犯罪者なんていなくなってるわよ」

「どういう、事ですか？」

「簡単よ。私を捕えたところで、拘束できる人間がいないもの。仮にも吸血鬼の膂力を持つてるのよ？」

そこら辺の人間に劣る訳無いじゃない。どれだけ頑張って拘束しても、簡単に抜け出すんじゃ殺すのが手っ取り早いわよ」

「でも、拘束用の器具があれば…」

「そんな物が意味を成すと思うの？あなたの近くに居る吸血鬼に、そんな生ぬるいモノが通用すると、本気で思ってるの？」

「耳障りだ。黙ってる」

黒樹はハンに氷の爪を突き刺そうとする

「『魔法の射手 光の一矢』！」

氷の爪は破壊され、黒樹はネギを見る

「駄目です！ どんなに悪い人でも、殺しちゃダメなんです！！」

だが、黒樹にその言葉は届かない

「……お前、俺の邪魔をするのか」

「え？」

ヒュン と

小さく放たれた球形の『無』の力はネギの体を抉る

ネギは倒れ、痛みに呻いている

黒樹は今度こそハンにとどめを刺そうとするが、またもネギが魔法の射手で邪魔をする

「…何故、邪魔をする？」

「殺しちゃ、駄目なんです。話し合えば、きっと分かりあえる筈なんです。だから……」

黒樹は、最早聞く事さえ億劫だと言いたげに、無造作にシャボン玉を飛ばす

しかし、その攻撃は当たらなかった

「貪狼…木乃香か」

ネギを銜^{くわ}えた貪狼が視界に映った

ネギは痛みで気絶しているようだった

そして、別の方向には木乃香が居た

「…どうした、刹那のそばに居なくていいのか？」

「茶々丸が、もう大丈夫やって」

「…そうか、それなら良かった」

「……ねえ、兄様。何でネギ君を殺そうとしたん？」

唯、疑問をぶつける

黒樹は答えない。だが、木乃香は答えるまで待つ

そして、黒樹が折れた

「…邪魔をしたからだ。ハンプティダンプティを殺そうとした、だが、そいつは俺の邪魔をした。だから殺そうとしたんだよ」

「……何で。何で殺す必要があるん？」

「刹那を傷つけた。木乃香を泣かせた。千雨が怪我をした。身内に手を出した。」

その元凶を殺そうとした

それを邪魔した

それ以上の理由が必要か？」

木乃香は、その言葉に恐怖する

木乃香は、始めて黒樹を怖いと思った

身内の事は何より大切に思ってくれている

兄が、自分の事を大事に思ってくれている

自分の親友や、家族に近い間柄までになった友達を大切にしてくれている

それはうれしい事だ

だが、それ以上に

「……兄様は、狂ってる」

「……何？」

「兄様が、ウチらの事を大切に思ってくれてるのも分かってる。世の中が、綺麗じゃないってこともよく分かっている。でも、兄様は狂ってる」

邪魔だから。その一言で、ネギ君を殺そうとした教師として頑張ってる、危険になったらウチらを一生懸命に守ろうとしてくれるネギ君を殺そうとした

ウチはネギ君よりも兄様の方が大事や。それでも、まだ子供で、何も知らないネギ君を簡単に殺そうとするのは間違ってる」

それは、ネギの近くに居るアスナも似たようなモノ

ネギより大切なものなんて幾らでもある

それでも一緒に居るのは、一生懸命で、ひたすら努力して頑張ってるからだ

普段子供が嫌いと言っているけど、ネギと一緒に居るのはそういうところがあるからだ

黒樹は、それを邪魔の一言で片づけ、殺そうとした

木乃香からすれば、親友の大切な人になりつつあるネギを、自分の兄に殺させたく無いし、殺す理由が小さすぎる

そんな事で、簡単に人を殺さないで欲しい

黙らせるなら、他に方法がある

違う方法を取らず、殺すという事を簡単に行う兄

それを、やめて欲しかった

何より、木乃香は『零崎黒識』として活動している『近衛黒樹』を知らない

だからこそ、今まで依頼されたからの一言で虐殺してきた黒樹を、今まで誰も殺した事が無いと思っている

ずっとその手を汚さずいて欲しいと思っている

それを、黒樹ははっきりと分かっている

「……………そうか、俺は、狂っているのか」

それでも、ハンを許す気は毛頭無かった

こいつだけは、確実に殺して置くべきだと、そう判断する

そして、今度こそ死の点をつこうとする

だが、それはまたしても失敗する

明らかにネギとは違う方向から魔法の射手が放たれた

その人物は高速でハンを抱きかかえ、影を使って『扉』の魔法を使い、逃げる

黒樹は追って殺そうとした

追跡など造作も無い事だ

だが、木乃香がそれを制した

殺して欲しくないと、手を汚さないで欲しいと、切に願う妹の声を、殺人鬼の兄は聞きいれた

心臓との同化をやめ、パキパキッと元の体に戻る

「……さあ、帰ろう？ 兄様」

「…ああ、帰ろう、木乃香」

こうして、襲撃事件は幕を下ろした

第二十三話 三日目 秘密 狂気 虐殺（後書き）

今回、黒樹超無双モードでした

心臓と同化した状態の彼を止める方法ってあるんでしょうか？
エヴァが空間凍結魔法でも使わない限り無理だと予想

刹那の三幻式は次出てくるのはいつになるやら…
相手のレベルがかなり高くないと使わないと思つんで、そこら辺は
ご了承ください

第二十四話 修学旅行 最終日(前書き)

今回は少なめです

第二十四話 修学旅行 最終日

第二十四話 修学旅行 最終日

〈SIDE 黒樹〉

ハンプティダンプティを逃がしてしまったが、取りあえずは全員無事だった

怪我は既に全員治っており、茶々丸の仕事の速さが分かる

ま、賢者の石使ってたんだけどね

俺が消し飛ばした山やら森やらは錬金術で修復し、ついでに本山の壊れたところも修復した

千雨の爆発なんかは隕石が落ちたって事にして誤魔化すらしい

俺が作った穴をクレーターとして扱う事になった

「まさかクレーターとして扱うとはな」

「丁度いいんじゃないか？」

「まあ、辻褄を合せようとするならな」

円形だし、アレなら隕石が落ちたと言っても信じるだろうな

今、俺はエヴァと俺の部屋で話している

「で、あの女はどうしたんだ？」

「逃がした。『御霊』の居場所が分からんままじゃ対処のしようが無いからな」

「『御霊』？ 何だそれは？」

「あれ？ 話して無かったっけ」

「初耳だな」

五分ほど掛けて御霊の事を説明

「……なるほど、それで私にか」

「能力者にとって御霊は絶対だ。逆らう事は出来ない」

暴走すれば別かもしれないが

「どの道後手に回るしかないんだ。場所が分からないからな」

「私が御霊を殺せばお前が後は何とかするんだろ？」

「ああ、後始末は俺がやる」

組織を組んでるみたいだからな、ハンプティダンプティ含むその組織は俺が潰してやる

とはいえ、情報が少なすぎる

まずは情報を手に入れる所からか

そして修学旅行四日目の朝

千草を洗脳して手に入れた証言を使い、今回の計画を企てた奴らは
関西呪術協会から除名されることになった

もちろんその部下ごとだ

そして今、俺は首謀者共の後始末に来ている

帰ってきて父さんの石化を解いた後、直ぐに動いて除名してくれた
から行動が大分速くできた

辺りには悲鳴と怒号が飛び交っている

近くに居る奴らからシャボン玉で頭を吹き飛ばし、殺していく

『……………兄様は、狂ってる』

あの時の木乃香の言葉が頭から離れない

精身体を手に入れ、進化してから、人間に対して何の感慨も湧かなくなっていた

もしかすると本物の零崎になったのかも知れない

殺す事に何の罪悪感も感じなかったし、由良のように

『俺達が正しい進化、『死』へと導いてやろう』

とか言う考えも無かった訳じゃない

初めて人を殺した時、そいつが死んでるのを見て『うらやましい』
と思ったのも事実だ

やっぱり精身体に憑かれると自殺しようとするのかね

他人を殺して、その『死』を身近に感じて、死にたくないとも思う

生きたいと思ってる癖に死にたがりだ

死にたいと思ってる癖に生きたがる

なんとも矛盾してるな

『死』こそが最終進化だという考え

俺は別に否定も肯定もしない

唯の傍観者だ

『生』に価値はあるか

それも分からない

だが、『神様のレシピ』とやらで未来が決まるのなら、生きる事にも死ぬ事にも価値があるのだろう

あんな軽い神が未来をまともに考えているとは思えないが

等と考え事をしながら殺しまくり、いい加減面倒になってきた頃

「ヒ、ヒイイ！た、たす、助けてくれ！！」

俺が殺していた奴らの一人がそう言う

「わ、私が悪かった！！だ、だから殺さないでくれ！！」

何を言っているんだ、と思う

目の前に居るのは木乃香を誘拐してスクナを使おうとしていた中でも幹部として立場が一番上だ

こいつ位になると、今回の件だけじゃなく、もっと別のあくどい事

をしている

「『この世で一番贅沢な娯楽は誰かを許す事だ』」

「はっ？ な、何を…？」

「昔、アメリカで二十人殺して死刑になった男の言葉さ」

「そ、それが、何……」

「こんな危険な奴は許しちゃいけない…
お前だつてそう思うだろ？」

パン…と、男の頭を吹き飛ばす

周りを見れば、ここに居た奴はもう全員死んだらしいと分かる

近くに隠れているようすも無い

隔離を解き、また残りの奴らを殺しに行く

そうしてあらかた片付け終わると、夕方になっていた

木乃香達は今日、少年の父親が使っていた別荘に居ると言っていた

合流する気は無い

そもそもエンヴィーに変わり身を頼んでたし、茶々丸以外は気付かないと思う

帰りの電車

今まで暴れていたのが嘘のように静かだった

刹那は木乃香達に白い羽の事を話したらしい

全員もう非日常にはなれたようだから別にあまり驚きは無かったと
のことだ

まあ、宇宙人が住み着いてる俺の体が一番驚くべき事なんだろうけど
それと、俺が何故刹那の翼を知っていたかについては『心臓の欠片』
を手に入れたから、という事にしておいた

実際に話したのは俺じゃ無くてエンヴィーだから、間接的に話を聞
いたことになる

俺は掃除で忙しかったからな

……そう言えば、俺がわざわざ逃がしたあのクソ女はどうしてるん
だろうな

〔SIDE 三人称〕

何処かにある島

其処は、とある組織が拠点として使っていた

その島にある施設のとある一室

其処に一人の男がいた

小太りで眼鏡を掛け、色白の男だ

「全く、何と戦えばこうなるんだか……」

一人の男は誰と話す訳でも無くベッドに眠る女を見ながら、呟く

「ホントです。リーダーがあそこまでボロボロで、神様か何かと戦ってきたんですか？」

カツン、と靴音を立てながら歩く少女がいた

赤髪が特徴的で小さめの身長の子だ

「知らん、鴉レイブンが連れ帰って来た時には既にダルマ状態だったからな
さつき漸く両手両足の再生が済んだ所だ」

その部屋には多数の機械が置いてあり、女の容体を表している

「で、その連れ帰ってきた鴉は？」

「寝てるんじゃないか？ 放っておいてもいいだろ」

「ふーん。どんな奴と戦ったか聞きたいのにな」

「そんなに知りたいのなら、教えてあげるわよ」

ベッドに寝ていた女は目を開け、そばに居る二人に目を向ける

「起きたんですか。まだじっとしててくださいよ、重症なんです
から」

「誰誰？ 誰なの？ リーダーそんなにした奴」

少女は女の話に興味津津だった

女は少し体の調子確かめるように腕などを動かした後、少女に向
かって話し出す

「名前は零崎黒識 『殺人鬼』として有名ね。本名は近衛黒樹。そ
れと彼、『アクロの心臓』の持ち主よ」

二人は息を飲む

「……本当？」

「多分ね。実際に確認した訳じゃないけど、山を抉る一撃に魔力も
気も用いていなかったから。可能性はあるわよ」

「いい報告じゃないですか。早速捕獲作戦を……」

「無理ね」

騒ぎ始めた男を一刀両断する

「全力の彼を止める方法が無い。空間凍結なんかならまだ出来ない事は無いと思うけど、一対一じゃまず勝てないわよ」

「でも、『御霊』の体の方もあまり持たないんでしょ？ どうすんのリーダー」

「『御霊』の方はまだ眠らせておく必要があるわね。それにあつちには『闇の福音』がいる。どちらにせよ、まだ戦力が足りないわ」

「『闇の福音』！！ まさか魔法使いのなまはげ的存在に会ったんですか！」

コーヒーを入れていた男はビックリして取り落としそうになる

慌てて持ち直し、ベッドのわきに置く

「ええ、噂通りの実力よ。それに私と違って魔力量も桁違いに多いしね」

「『ハイデライトウオーカー真祖の吸血鬼』があつちに居るの？」

「ええ、私と違って本物よ」

女は体を起こし、ベッドの横の机に置いてあるコーヒーを飲む

コーヒーを飲みながら機械を外し、腕や足の調子を確認する

「上々、いい仕事するわね。岡田」

「やっぱアメリカ人なのに岡田っておかしくないですか？」

「言い訳しない。リーダーのネーミングセンスが絶望的なのは知ってるでしょ」

少女はクスクスと笑いながら岡田と呼ばれる男を見る

「悪かったわね、絶望的で」

「いいんですよ、別に名前なんて気にしてませんし」

「それより、心臓持ちはどうするの？」

「そうね……」

女は考え込み、少ししてから話した

「まずは戦力の増強かしら。アレに対して数で有利に経ってもあまり変わらないと思うけど、選択肢が広がるわ。それと、情報をかき集めるわよ」

「了解」

「後は、そうね……戦力増強、情報の収集が出来るのを見越せば…

………決戦は八月頃になるわ」

「八月っすか」

「それまでにコンディションを整えておくようにみんなに言っておいて。私はまた鍛えなおさなきゃ」

「まだ鍛えるの？」

「やられっぱなしじゃシヤクだからね」

女は立ち上がって軽く体を動かし、そのまま部屋から立ち去って行った

「決戦は八月、あっちがなんの対策も取って無いなら楽だけどね」

女の咳きは誰にも聞こえる事は無かった

第二十四話 修学旅行 最終日（後書き）

修学旅行四日目、五日目ですね

テスト期間中なのに書いてしまった
どうしても書きたくなるんですね

第二十五話 とある休日

第二十五話 とある休日

ぐでーん

俺の今の状態を擬音語であらわすなら恐らくそれが一番しっくりくるであろう状態だった

修学旅行から帰って来た次の日

帰ってすぐ寝た為、晩飯さえ食って無いから規則正しく起きてしまった

寝た時刻は恐らく六時。起きた時間は八時頃

「十四時間睡眠かぁ……」

「寝過ぎじゃないですかぁ？ 黒樹さん」

「いやだつて疲れてたらそんなくらい寝るでしょ」

朝起きた俺は朝食を作るのがだるくなつていつもの喫茶店へ

ちなみにエンヴィーはエヴァに連行されてつた。やりたい事がある

らしい

暇だからハルさんと喋ってる

「マスターはどう思いますっ?」

「僕も少し寝過ぎだと思うよ。若いんだから少しの疲れくらい大丈夫でしょ」

「そうは言っても眠いものは眠いですよ」

「彼女の一人でもいれば起こして貰えるんじゃないかな?」

彼女ねえ

偶に木乃香が起こしに来てくれたりするけど、今日は来て無い

「彼女の候補なんていないっすよ。マスター」

「ならウチのハルでもどうだい?」

「冗談が過ぎますよ。マスター」

その時だけは妙にはっきりした口調で、マスターをお盆で叩いていた

「もうすぐお昼ですけど、食べて行きますか?」

「ん〜、やめとく。久しぶりに自分で作るわ」

修学旅行中は作る必要が無かったからな

材料買って帰るとしよう

とあるスーパーで買い物を終え、寮へと帰る途中

「なあなあ、俺達と遊びにいこうぜ？」

「そうそう、退屈させたりしないからさあ」

ナンパをしている奴らを見つけた

……まだ絶滅して無かったんだな、ああいうのって

ナンパされてるのは誰だと思って覗きこむ

「あの、やめてください。困ります」

……佐倉？

何でこんな時代遅れなナンパ野郎たちに囲まれてんだか

珍しいからとジツと見てたのがいけなかったらしい

「あん？ 何見てんだあ？」

不良の一人が突っかかってきた

「オイオイ弱い者いじめかよ」

「ハハハっ、可愛いそーだな」

他の二人は笑いながら話している

「見せもんじゃねえんだよ。さっさとどっか行きやがれ」

俺の前に立って威圧するように睨みつける男

すげーイラッと来たから、少しばかり殺気をぶつけてみる

みるみる内に男は顔が蒼くなっていく。おもしろいな

そうしていると、男がいきなり

「クソッ、帰るぞ！」

とか言い出してどっかに行き

「は？ お、オイ、ちょっと待てよ！」

「どうしたんだよ、なあ！」

と言って他の二人もついて行った。何だったんだ？ あいつ等

それを見ていると、佐倉がこっちによって来た

「あの、黒樹さん。ありがとうございます」

「ああ、いいって。でも何であんな時代遅れの不良に捕まってたの？」

「いえ、暇だから何処かいこうかなと思ってたんですが、友達みんな用事があるっていうんで、取りあえず歩いてたらああいう人たちに捕まっちゃいました……」

「魔法を使う訳にもいかんからなあ」

それから少しの沈黙

「……あの、黒樹さんは今日是用事がありますか？」

「うん？ 俺は寮に帰って飯を食う。用事はそれだけ」

「で、でしたら、あの、その……」

佐倉は顔を赤くしてもじもじしながら何か言っている

……フラグなんて立ててたかな？

「あの、私と遊びに行きませんか？」

か細い声で不安そうに聞いてくる

「いいよ」

「……っ！ ホントですか!？」

「嘘ついてどうすんだよ。でも昼飯食ってからな。後で待ち合わせしようか」

「分かりました。世界樹前でいいですか？」

「分かった、さっさと準備して行くわ」

その後寮へ戻り、適当に昼食を作って食べ、準備して世界樹前へ

佐倉は既に来ていた。速いなオイ

「よ。速いな。佐倉」

「はい、黒樹さんも速いですよ。まだ待ち合わせの十分前ですからジャック・クリスピン曰く『時間を守れば身を守る』だからな

「ちなみに何処行くか決めてんの？」

「へ？ いや、えっと、その……」

「……つまり、ノープランと」

佐倉はコクンと頷く。正直でよろしい

「まあ、其処まで遠出する気も無いし、ショッピングでもする？ 映画とかでもいいけど？」

「そうですね、洋服とか見たいのでショッピングに行きましよう」

「よし、じゃあショッピングで決定と。早速出かけようか」

「はいー」

俺達はさっさと準備を終え、部屋から出て商店街へと向かう

佐倉はニコニコしながら俺の隣で歩いている。楽しそうだな

商店街へは十分ほどで着いた

「じゃ、あそこに入ってみましょうー」

そう言って指差したのはユクロ

……なんかデジャブを感じるんだが。まあ、気にする事でも無いだろう

「あ、コレかわいい」

そう言って手に取ったのは薄手の黒とピンクのシャツ

もうすぐ五月なのもあり、日が照っていると少し暑い位だという事で、薄めの服を見たいらしい

「どう思いますか？」

そう言って試着した所を見せてくれる

「うん、似合ってる。かわいいと思っよ」

佐倉って実は結構スタイルがいい。流石赤松ワールド

「そ、そうですね？」

顔を赤くしながら買おうか悩む佐倉。店員がこっちを微笑ましく見てくるんだが

結局買わない事にしたらしく、ウィンドウショッピングを続ける

その後あつちの服を見てみよう、あの服がかわいいと試着しまくり、店を移動する事になった

三時間後、ほとんどの店を見て回り、次はどこに行こうか考えている状態だった

「ウィンドウショッピングがまさかこんなに早く終わるとはな」

「結構長い時間見てたと思いますけど……」

「いやいや、木乃香に付き合わされたときはほとんど丸一日潰れたしな」

そして女と間違えられてナンパされたのもいい思い出……

……いや、いい思い出ではないか。むしろ悪い方だろうな

「取りあえず喫茶店にでも入って考えるとしようか」

「そうですね」

そのまま近くにあった喫茶店　何故か行きつけの店の近くに来ていたから　に入る

「いらつしやいませ　て、何だ黒樹君か。また来たんだあ」

「オーイ、俺一応客だぞ、扱い酷くないか？」

「だって今日二度目だしねえ。所で、後ろの子は彼女？」

「え！？　いや、あの、違います！」

後ろを振り向くと佐倉が顔を赤くして必死に否定していた。其処まで否定しなくてもいいだろう

「朝、彼女の候補なんていないなんて言ってたのにね。早速かわいい女の子連れて来て、モテるんだね黒樹君」

カラカラとマスターが笑いながらコーヒーを淹れている

「別に彼女じゃないんすけどね」

「二人つきりで遊びに行くほど仲がいいのにかい？」

俺達の前にコーヒーを置き、ニヤニヤしながらそう言うてくる

「俺二人つきりなんて言いましたっけ？」

「とぼけなくても反応見てれば大体分かるよ」

なにこのひとこわい、人の反応見るだけでそんな事が分かんのかよ。もはや超能力の域じゃねえか

まあ、ぶつちゃけどうでもいい事なんだがな

「それよか、この辺で何か遊べる所とか無いっすか？」

「遊べるところねえ。ハルは何か知らないか？」

「そうだねえ。最近出来たゲームセンターがあったよお」

ハルさんが腕を組みながらそう教えてくれる

ゲーセンか、暇つぶしにはなりそうだな

「どうする？　ゲーセンでいいならそこ行ってもいいけど」

「私は別に構いませんよ。いろいろあるでしょうし」

否定をしない子だよなあ、佐倉つて。その分簡単に物事決まるけど

「じゃ、場所教えてくれる？　ハルサン」

「おっけー、任せときなさい」

店の奥に行き、数分後。一枚の紙を持って奥から出てきた

「はいこれ。場所書いといたから。結構簡単だから迷わないと思う

よお」

「どーも、ありがたい」

「どういたしましてえ」

ちやちやっと採算し、店を出る

紙に書いてある通りに道を進み、十分程度で着いた

「結構大きいですね」

「そうだな。これなら楽しめそうだ」

資金は既に準備済み。さて、遊ぼうかね

レーシングゲーム

「……………負けた。まさか佐倉がここまで強いとは」

「お姉さま達と結構やってますからね」

なんつー速さでゴールしやがる。ランキング上位に入ってんじやねえかよ

「次行こう、次」

さっさと歩きだし、レースゲームを後にする

「あ、待ってください」

ちょっと遅れて佐倉がついてくる、次だ次

クレーンゲーム

「ズルは駄目ですよ。分かってますよね」

「分かってるって。そんなことしなくてもこれくらい……あ、落ちた」

魔法を使うとでも思ってたのか、俺は念動力は使って見せた事は無い筈だしな

「残念でしたね」

「もう一回だ。次こそとってやらあな」

そしてそこからの無限ループ、とはいかず、流石に何回かしてあきらめた

「畜生、何故あそこで落ちるんだか……」

「慣れって奴ですかね。私も全然取れませんでしたし」

二人揃って収穫ゼロは少し寂しいな

「あ、またチャレンジしますか」

「リクエストある？ あるなら頑張ってみるけど？」

じゃあ、コレで。と熊のキーホルダーのようなものを指差す。俺はカチャカチャと操作し、少しだけ念動力を使って安定させ、一発でとる

「フ、コレが実力という奴だ」

「なら最初からやってくださいよ」

言うようになったな。最初からやったらつまらんだろが。実際罪悪感なんて零だけど

シューティングゲーム

ここは俺の独壇場だ

ヒヤッハアアア、汚物は消毒だアアア！！ とまでは行かないが、それなりにテンションは上がったな

「まさかあそこまでとは……某黒猫さんを思い出しました」

意外と漫画が好きらしかった。某黒猫を知ってるとはね

「其処まで速くは無いと思うけどな」

「いえ、あまりに速いので画面がブレてました」

其処までだったかな？

クイックドロウ

早打ちは其処まで得意じゃ無いんだが。龍

宮のをパクっただけだしな

時計を確認する

もうそろそろ帰らないと寮の門限が不味いな。あの寮監は苦手なんだ、出来れば怒られるような真似はしたくない

「じゃ、じゃあ、最後にプリクラ撮りませんか？」

「いいよ」

別に減るものでもないし、プリクラくらい撮るのはいい

「あの、今日はありがとうございました！」

「礼を言われるような事をした覚えは無いよ。今日は俺も楽しかったしな」

「また良ければ遊びに行ってくださいますか？」

「構わないさ。ただし今度はちゃんとプラン立ててからな。行き当たりばったりじゃどうしようも無い」

それでまた笑ってから帰る事にした

二人でプリクラを撮った写真、佐倉がそれを大事そうに持って寮へと帰って行った

今日は楽しめたな。こんな日が続くといいんだが

くおまけ

エヴァとエンヴィーの会話

「態々呼び出して何の用なの？」

「うむ、実はさっき思いついたのだが、お前ナギに変身できるか？」

「出来るよ。写真は見たし、完璧とは言えないけどね」

「よし、変身してくれ」

「ならお父様にでも頼むんだね。俺は別に君の要望を聞く必要も無い訳だし」

「何イ！？ いいだろう、ならば戦争だ！」

「望むところだ！！」

「マスター、自重してください。エンヴィーさんもです」

「チエツ、つまんねえの」

「いいからナギに変身しろ」

「分かったよ、やればいいんでしょやれば」

〈エンヴィー変身中〉

「……コレでいい？ 流石に声までは再現できないよ。聞いたこと無いから」

「分かっている。だがやはり……」

「満足した？ じゃあもういいかい？」

「ううむ、やはり違和感があるな。だがまあ及第点だ。取りあえず私の頭をなでろ」

「ハア？ 何言ってるの？」

といった会話が繰り返されていた

第二十五話 とある休日（後書き）

今回は日常編です

ヒロインが佐倉へとぶれつつある……といつか誰がヒロインか結局
決まって無いですけどね

第二十六話 試合観戦

第二十六話 試合観戦

ザアアアアアア……

外の雨を見ながら考える

「そろそろ悪魔襲来かなあ……」

木乃香と刹那、千雨とさよにはこの時期エヴァの部屋で過ごした方がいいとは言っておいたが、みんなあんまり重要視して無かったんだよな。其処まで信用無かったのか、俺

そう言えば、少年は古菲には弟子入りしたらしいが、エヴァにはして無い。よくよく思えば俺がフラグ折ってたんだよな

どうせ死ぬ事なんて無いだろうし、死んでも別に知った事じゃ無いそんな事を考えているとコール音

「もしもし？」

「あ、兄様！ 大変や、アスナが攫われた！！」

……ああ、あの悪魔、木乃香は攫わなかったのか。納得

攫ってたら十七の肉塊コースどころじゃなかったけどな

「それで、俺にどうしろと?」

「ネギ君が直ぐ追いかけてったんやけど、心配なんや。何とかならへん!？」

そうは言ってもなあ。俺少年を助ける義理なんて無いし。そもそもあの野郎この間邪魔しやがったからな

「つーか多分木乃香は居候ネギじゃなくて同居人アスナを心配してるんだろっしなあ

「爺に頼め。もしくはエヴァ。俺はこれから全員の無事を確かめる」

「おじーちゃんにはこれから連絡する。エヴァちゃんにはせつちゃんがかけたんやけど、断られたって」

少なくとも刹那は無事、か。エヴァはどうでもいいや。あいつが悪魔如きにやられる筈も無いし

「取りあえずジジイに連絡。その後にも俺」

そう言っ取っ取りあえず切る

直ぐに携帯を操作し、千雨に電話を掛ける

「……もしもし? 黒樹か、珍しいな、あたしにかけてくるなんてどうしたんだ?」

「いや、声が聞きたかっただけ」

直ぐに切り、さよの携帯にかける

「は、はわわ、も、もしもし〜？ 黒樹さんですか？ どうかしましたか？」

「いや、声が聞きたかっただけ。後早めに携帯の操作に慣れてくれ」

そう言って切る

取りあえず全員無事か。アーウエルンクスの奴、俺の事はきっちり悪魔に教えていたらしい

それなら少年の方なんて知ったこっちゃ無い。関わる理由が無けりや干渉はしないのが俺のポリシーだ

と、その時。また携帯にコール音

「爺か、何の用だ？」

「うむ、木乃香から連絡を受けていたのじゃが。『アスナが大変や！』とな」

「言つとくが手え出さねえからな」

「そんな事だろうと思ったわい。相手が誰か分からん以上、こちらも迂闊には動けん。木乃香の頼みは聞けそうにないのじゃが？」

「いいんじゃない？　今回は俺達には被害は出て無いし。一般人の保護位ならしなくもないけど」

少年関係は御免だね。面倒なことになるのは目に見えてる

「なら動いて貰おうかの。一般人の那波という子が攫われておる。それ以外にも何人かいるから救出してやってくれ」

……チツ、忘れてた。墓穴掘ったな

那波以外はどーせ少年関係者だろ。どうでもいいや

「しょーがねえ、那波だけな。それ以外は知らん」

「ぬう、しょうが無い。その後はこっちでどうにかするわい」

そう言っつて爺は電話を切った

ハア、後で請求書送ってやらなきゃな

〈SIDE　ネギ〉

「ふむ……実験は成功のようだね。放出型の呪文に対しては完全だ」

実験……？

「さて……そろそろ私も本気でやらせてもらおうとしよう。まさか、

これで終わりではあるまい？ ネギ・スプリングフィールド君」

「……………！！！」

アスナさん達を救出に来て、自分への契約執行や魔法の射手での目くらましを使って『封魔の瓶』を使ったのに、何故かかき消された……………一体、どういう事？

とにかく、今は構えて次のチャンスを狙うしかない！

「この一帯に結界を張らせて頂いた。全力で戦って大騒ぎしても周囲に気付かれことはないよ」

全力で戦える。魔法の隠ぺいを考えなくていいなら楽だ

「ぬんっ！！ 『悪魔パンチ』！！！！」

大砲のような一撃が僕と小太郎君の横をかすめる

「ちっ！」

「うわあっ！？」

速い！！ それに凄い威力だ。あんなの食らったらただじゃすまない！！

「この威力……………！！」

へっ！これが本気がオッサン！！」

今度は威力は低いけど連射性のある攻撃を放ってくる。

「うわわわっ!?!」

慌てながらも何とかギリギリのところで回避する。

どうする? このままじゃジリ貧だ!

「瓶が使えんならしゃあない! ネギ、ゴリ押しや!」

魔法使いの僕は小太郎君が前衛をしてくれば勝てるかもしれないでも、他に何か方法はないの?

『選択は他人にゆだねるな。自分で考える。考えて考えて考え抜いて、納得できる答えを探せ』

ふと、黒樹さんの言葉が脳裏によみがえった

そうだ、考える

「まって……少しだけ時間を稼いで欲しい」

「何……?」

「お願いだから。少しでいい、考える時間を」

「……分かった、何とかしてみるわ」

少しだけ時間が手に入った

後は考える、納得できる答えを探すために、確実に勝つために！

考える考える考える考える考える考える考える考える考える考える
考える考える考える考える考える考える考える考える考える考える
考える考える考える考える
考える考える考える考える考える考える考える考える考える考える
考える考える考える考える

考える！！

まずは現状を確認

戦力は僕と小太郎君。檻の中にいる人たちは戦えない、古老師は相手が悪魔じゃまともに戦えるか分からない

僕は後衛型魔法使いタイプ、小太郎君は前衛魔法剣士タイプ

バランスはいい、でも決定打が無い

魔法はかき消される、何故？ どうやって魔法を打ち消した？ 幾ら悪魔でも魔法を消すなんて事は出来る筈が無い

「ハアツ！ 『犬上流・空牙』！！」

小太郎君の攻撃を見る。やはりあのおじさんの目の前で打ち消される

「あ…！ はあああつ！？」

「アスナさん！？」

どうしてアスナさんが？ 小太郎君の攻撃をあのおじさんが消してから苦しむように……

……アスナさん、確か京都でも召喚魔を一撃で還したりしていた。それにあの白髪の少年だつて石化の魔法をアスナさんに使つて、『こんな風になる魔法じゃ無かつた』と言つていた

服だけが石化していたし……もしかして！？

「とつときの気弾まで！？」

「マジックキャンセル……魔法無効化能力というやつだよ」

マジックキャンセル！ やつぱり！

「一般人のハズのカグラザカアスナ嬢……。彼女が何故か持つ魔法無効化能力……。極めて希少かつ、極めて危険な能力だ……。今回はソレを我々が逆用させてもらったがね」

僕の考えは当たつてる。後はどうやるか……

「小太郎君！！」

「何や！ 策でも思いついたんか！？」

「もしかしたら魔法や気弾が効くようになるかも知れない」

「何！？ どうするんや！？」

それはまだ分からない、でも可能性はある

「何秒稼げる？」

「さあな、持って数十秒、近距離やともっと危ないかもしれん」

「分かった。アスナさんの首にあるネックレス。アレが怪しい。アレを奪えれば何とかなるかもしれない」

「ホントか？ なら何とかしてやる、絶対取れや」

「兄貴、その役割、おれっちがやります。兄貴達は何とかあのおっさんを足止めしてくれ」

「カモ君……分かった。何とかやってみる」

その言葉を言った後、構えをとる

自分への契約執行を掛け直し、おじさんを見据える

カモ君は僕の肩から降りてアスナさんの所へ向かった

「ふ、作戦会議はもういいのかね？ さて、私に対してもう放出系の術や技は使えないぞ。男なら……」

おじさんは構えながら近づいてくる

「拳で語りたまえ」

そして、拳が何度も振るわれる

それを何とか紙一重で避ける。これじゃ近づけない

何度も振るわれる拳を何とか避け、何とか攻撃を　　っ！

攻撃を弾かれ、カウンター気味の二撃を喰らう

「がっ！」

其処から何とか二人掛かりで防戦出来てるけど、コレじゃ直ぐにやられちゃう

強烈な蹴りを喰らい、二人まとめて吹き飛ばされる

「…………やれやれ。この程度かね？」

おじさんは期待外れとばかりに溜息をつく

「先程の動きはなかなか良かったが…………どうやら私が手を下す程ではなかったようだね…………？　残念だよネギ君…………」

「小太郎君大丈夫！？」

「アホ！まだいけるわ！…………いくで！」

まだやられる訳にはいかない。みんなを助けるんだ！

「いや…違うな。ネギ君、思うに君は…」

おじさんは小太郎君のみを殴り飛ばす。ステージの観客側席の上の

方まで飛ばされた小太郎君はダメージが大きくて立ち上がれないらしい

「本気で戦ってはいないのではないかね？」

「！？ な、何を…？ ぼ、僕は、僕は本気で戦ってます！！」

「そうかね？」

「やれやれ…、サウザンドマスターの息子が…、なかなか使えると聞いて楽しみにしていたのだがね。彼とはまるで正反対…戦いに向かない性格だよ」

戦いに、向かない？」

「君は…何のために戦うのかな？」

「な…何のために？」

「そうだ。小太郎君を見たまえ。実に楽しそうに戦う君が戦うのは？ 仲間のためかね？ ……くだらない。実にくだらないぞネギ君。期待外れだ。戦う理由は常に自分だけのものだよ。そうでなくてはいけない」

おじさんはコツコツとステージを歩く

「『怒り』『憎しみ』『復讐心』などは特にいい。誰もが全霊で戦える。あるいはもう少し健全に言って『強くなる喜び』でもいいね。そうでなくては戦いは面白くならない」

「ぼ、僕は別に戦うことが面白いなんて…」

戦う事が面白いなんて思って無い!!

「僕が…僕が戦うのは!」

「一般人の彼女達を巻き込んでしまったという責任感かね? 助けなければという義務感かね? 義務感を糧にしても決して本気になどなれないぞネギ君」

溜息をついて僕の方を振り返る

「私は君の本気が見たいのだ。その為なら手段は選ばんよ? だから、コレなどは…いかがかね?」

「……あつ……」

おじさんは帽子を下にずらし、顔を隠すようにとる

「はっはっは……。喜んでもらえたかな? いいカオだよネギ君……。その表情だ。いやあ、今時『ワシが悪魔じゃー』と出ていっても、若い者には笑われたりしてしまうからねえ」

「あ…あなたは…」

ま、まさか……

「そつだ。君の仇だ……ネギ君」

瞬間、意識が飛んだ

SIDE 黒樹

ハア、メンドクセエ

一般人の保護位なら、と思ったが、ぶっちゃけあのクソ悪魔結界張ってやがる

ぶち破るか？ でもコレ壊したら多分近くの奴らが寄ってくるかも知れないんだよなあ

……雨降ってるし、そもそも隔離すれば済む話か

取りあえず結界を直視の魔眼を使って壊し、中を見る

目の前に、黒いコート着たおっさんが居た

………こいつ、悪魔だろ？

「……どーん」

取りあえずケツを蹴っ飛ばす

悪魔は顔面から前に落ちて行った

取りあえずこの辺り一帯を隔離し、周りを見渡す。すると、ステ-

ジの前に少年と犬耳の少年がいた

「……いたたた、侵入者かね？」

「お前が言つな」

どちらかと言えばテメエが侵入者だろうがよ

「む、君は関東のサムライマスターの息子とやらかね？ 君は君の関係者に手を出さなければ敵対しないと聞いていたのだがね」

「まあ、間違つてはいない。そもそも助けに来たわけじゃないし。あの少年と戦いたいなら勝手にやってる。俺の仕事は一般人の救出だ」

「一般人……」

悪魔が後ろを振り向く。誰が一般人か分らんのか？ コイツ

「あそこの髪が長くて胸がでかい女だ」

「ああ、彼女か。それで、彼女をおとなしく渡せば君は引き下がるのかね？」

「正解。お前にも興味は無いし、あいつらを助ける義理も無い」

「ふむ、ならばおとなしく引き渡そう。くれぐれも彼女以外の人質には手出しをしないで貰いたいね」

「わーってるっての」

カツカツと足音を立てながら歩く

ステージ前まで来て、少年が話しかけてきた

「……黒樹、さん」

「何だ？ 少年」

「助けに、来てくれたんじゃ、無いんですか？」

「ハア？ バカは休み休み言え。何故俺がお前を助けなきゃならん。俺の仕事は那波の救出。それ以外は受けて無いね」

少年の次の言葉を待たず、瞬動で移動する

直視の魔眼を発動し、眼を他の奴らからは見えないように隠す

「私達が居るのにやらせる卜……」

「やめたまえ！ 彼には手を出すな！」

助かったよ、アレの相手何か面倒だし、今眼は見られたくない

水牢の死の線を指先でなぞり、壊すこぼす

バシヤア、と水牢は消え、取りあえず那波を抱っこする

「これにて俺の仕事は終了、と」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ!! アンタネギを見捨てる気!？」

「見捨てるも何も、俺は初めから助ける気なんてありませんけどお？ あ、それと綾瀬、お前そっち関係者？ 今ならまだ一般人に戻れるけど？」

「関係者……？ 魔法の事ですか？ でしたら関係者です。のどか、ネギ先生から聞きましたです。それに一般人に戻るとは……？」

「記憶消去に決まってるんだろ。今ならまだ何とかなると思うよ？」

「ふざけんじゃないわよ!! 記憶消去なんてさせるもんですか!」

その格好で言われてもなあ。後何で反発すんの？ お前関係無く無い？

「で、どうする？ 綾瀬」

「……このままでお願いしたいです。記憶を弄るなんてしないで欲しいです」

「あつそ、じゃあな」

那波を抱っこしたまま歩きだす

「チヨイ待ち、兄ちゃん。ちづる姉ちゃんをどうする気や？」

姉ちゃん？ ……ああ、那波の部屋に居候してたんだっけ

「安全な所まで運ぶんだよ。無関係だしな」

「俺らの手助けするんとちゃうんか？」

「何で俺がそんな事を？」

義理も無ければ理由も無い。利も無ければ意味も無い

唯の時間の無駄だ。そんな事にいちいち口出しする気はないのさ

「……用は済んだのだろう、早めに出てくれると助かるが」

そう急かさないうで欲しいな、全く

「ああ、ちなみに今張られてる結界な。『隔離』っつーんだけど、コレ外とのありとあらゆる繋がりを断ち切られてるから」

電波、空気、魔力、気、水、e t c。ありとあらゆるものを一切通さない

「つまり、この中でなら誰にも見つかる事無く暴れられるぜ？」

「……それはつまり」

「お好きにだけ戦いくださいって事だ。ぼこぼこにしてやれ、俺あのがキ嫌いなんだわ」

「……なるほど、結界を張り直す労力がいらぬ訳だ」

那波に関しては俺が守るし。既に『眠りの霧』で眠りを深くしてる

から気付かれる事も無いだろう

ベンチを乾かし、那波を横に寝かせ、観戦する

それから十分ほど

少年と犬はボロボロだった

「……やれやれ、こんなものかい？ 君たちの実力は」

まあ、原作と違ってエヴァの弟子じゃねえし、木乃香居ないからあの水牢破れねえし、隔離してあるから手助けに魔法先生入れねえし

「やれやれヘルマン。ボッコボコにしてやれ」

「黙ってなさい！！」

アスナがキレた。全く怖くねえけど

……………ん？

隔離空間の外に何人が集まってるな。爺が呼んだのか？ コレで唯の野次馬なら面倒な事になるけど、魔力を使ってるみたいだから多分魔法先生辺りだろう

そろそろ潮時かな

ヘルマンの隣に行き、小声で話しかける

「おい、ヘルマン。魔法先生が集まり始めたぞ」

「何？ 君は外の事が分かるのかね？」

「コレ俺が張ったんだぜ？ 使用者の俺なら外の事がわかんだよ」

「なるほど。しかし魔法先生か、厄介だな」

「お前の気はすんだのか？」

「まあね、期待はずれだったが、十歳の子供ならこんなものだろう」

「あつそ」

このままじゃ俺が魔法先生達から目を付けられるからなあ。いや、もう付けられてるかもしれんけど

そのままってわけにもいかないしな

右手を前に出し、『重力』の能力を使う。

ベコオンと地面ごとへこみ、ヘルマンは仰向けに倒れる。悪魔の筋力でも耐えられないくらいの膨大な重力を掛けてるから立ち上がれやしないだろう

「何を……重力魔法か！？ だが、今の私に魔法は効かない筈……」

「そりゃ『魔法』なら効かないだろうけどよ。世の中『魔法』以外に不思議な事もあるんだぜ」

そして隔離を解くと同時にヘルマンの両手両足を消し飛ばす

ついでに剣を練成、投擲して腹を刺す

「ガッ！」

まあ曲がりなりに悪魔だ。この程度じゃ死にやしない

近くに居た魔法先生もいきなり現れた俺達に戸惑っていたが、直ぐに身を隠した。ジジイに『ネギ君には見つからない様に』とか言われてんだらうか

当の少年達は俺の行動に呆然としていたが、気にすることなく那波を抱えて帰ることにした

第二十六話 試合観戦（後書き）

実は考えるの下りをやりたいが為だけに修学旅行でヒントを与えたり

まあぶっちゃけどうでもいいことなんです

黒樹が最低な主人公と化していく……

感想は常時募集中です。感想は作者の力になります

第二十七話 麻帆良祭の準備

第二十七話 麻帆良祭の準備

ヘルマンを還し、報告や請求をしに俺は学園長室へ来ていた

「それで、いくら払うんだ？」

「うむ、ネギ君達を助けてくれたのも事実じゃしの。しかも相手は爵位級。更に一般人である那波という子も無傷で救出か」

「分かってるなら早くしろや。仕事はちゃんとかなしただろうが」

コレで中途半端な額だったら超に雇ってもらおうか

……やめとこ、面倒な事になるのは目に見えてる。それより爺を強請ったほうが楽だ

「うむ、今回はこれくらいでどうじゃ？」

そう言っって一枚の紙を渡される

其処に書かれている額をしっかりと確認し、了承して紙を返す

「まあいいか。早めに入れとけよ」

「わかつとるわい」

それだけ言って部屋から出ようとする

「ああ、忘れてたが、今回の件。本国やイギリスのメルディアナからは何か言ってきたのか？」

「いや、本国はこの件は調べる気が無いようじゃし、メルディアナからも何も来ていないが？」

「そうか、ならいい」

そして今度こそ部屋を出る

メルディアナから警告が来ていない。って事は、MM上層部が圧力を掛けた可能性がある

少年の爺さんが校長だつて聞いたし、少年が居た村を襲つた悪魔を封じていた瓶が盗まれたとして、警告を出さないなんて事があるのか？

少なくとも孫の事を心配しているなら修行場所であるここには連絡する筈だ

上からの圧力に屈したか、途中で何かに連絡を妨害されたか

何にせよ、どこかがきな臭い動きをしてるらしいな

やっぱ新世界の方にもコネを作っておくべきだったか。去年の夏に

行動しなかった事が悔やまれる

まあ今更言ってもしょうがない。少なくとも対策を立てておくべきだろう

次の日

教室なう

もうすぐ麻帆良祭だという事で、クラスの全員が浮足立っていた

何人かはメイド服に着替えて何やら話している

「……元気だなあ」

「お前も何か考えろよ。このままじゃメイド喫茶になるぞ」

女装だけは勘弁だ。つい去年もメイド喫茶じゃ無かったか？

そんな事を考えていると少年がやって来た

雪広や椎名、朝倉、釘宮、柿崎がメイド姿で少年をもてなしている

「お、いけるな。流石だ」

「どうも」

エヴァが四葉の作ったカクテルを飲んでいた。いいのか、カクテル

いや、エヴァはいいんだろっけど、四葉はそれを知らんだろっし。

ってかそもそもアルコールはいつてんのか？ アレ

「どうぞ。黒樹さんも」

「あ、ありがとう。四葉」

受け取ったカクテル（らしきもの）を一口飲む

……うん、ジューズだわ。これ

まあ流石に中学校の一教室で本物のカクテル作る筈も無いか

「ネギ君見てみて、まだ衣装いろいろ用意してあるよ！」

誰かがそう言って奥に居た奴らを見せる為に仕切り用のカーテンを取る

出てきた奴らはチャイナ服やら和服やらネコ耳メイドやらバニーガールだった

バニーの大河内は「何で私だけバニー……」とへこんでいるがな

「一万四千円になります。払え」

「嘘おおお!? 見ただけですかつ!?」

あつちは少年が古菲に請求されていた。見ただけで一万四千円とか、ぼったくりバーかよ

「全然趣旨違ってるじゃない! もうメイドじゃないし!」

「えー!? だって色んな服着たいし。お金儲かってネギ君は大人の世界学べて、一石三鳥……」

「アホかーッ!」

だから去年もやっただろうが。覚えてねえのかよ

「あ、黒樹くんはこっちでこれに着替えて」

そう言つて袋を渡された。何で俺が? と思つたが反発するだけ無駄なのでさっさと着替えた

そして着替え終わつてカーテンを開けると、他に着替えた異色なメンバーが居た

取りあえず一言

「刹那、何で猫耳スクール水着？ 他のも異色だけど」

「無理やり着せられたんですよっ！！」

「私もだよ。無理やり巫女服を着せられたんだ」

お前普段から巫女服だろうがよ

言ったら撃たれるから言わないけどな。既に懐に隠し持って威圧してるし

「そう言う黒樹は似合ってるな」

「去年も同じの着せられたしな。似合ってるかどうかはともかく」

去年と同じ執事服。良く残ってたな、コレ

「やっぱり黒樹君はそれが似合ってるね。これは売れるよ！」

興奮すんなよ明石。テンション高過ぎて引くぞ

「このクラスのレベルが高いのは同意するけど、脱がしたら意味ないのよ。脱がさずに素材の味を引き立てるには……これよ！！」

そう言うパルが披露したのは、普通の喫茶店のウェイトレスのような格好をした宮崎だった

「おおっ！？」

「普通に可愛い!!」

意外と好評らしい。ってかコレが普通の格好だろうが。お前等の考
えの方向性がおかしいだけだろ

執事服のまま隅っこに居る千雨の元へ行く

「どうだ？ 去年もやったが。そんなに似合ってるか？ 俺」

「ああ、十分似合ってると思うけど？ それよりあたしはあいつら
が我慢ならねえ。あたしに全権プロデュースさせれば客の五百人や
千人位余裕で……もう我慢できねえぞ！ あたしがメイドカフェの
真髓って奴を……」

「ストップ。新田が来てるぞ」

千雨がバサツ、と着替えようとしたときに新田が入って来た

「お前ら朝っぱらから何をやってるかーッ!!」

まあ朝っぱらから騒いでりゃそう言われてもおかしくないわな

「」「ひいっ!?!」「」

「もうHRは終わっとる！ ネギ先生もネギ先生です!!」

「はっ!?!」

千雨は「あ、あぶねえ……」と呟いていたが、窮地を脱して無いぞ

結局、全員正座させられましたとさ

そして翌日

眠いのを我慢し、早起きして超包子に言った

「おはようございます。黒樹さん」

「おはよう。四葉」

メニューを見ながら注文し、出来上がるまで待つ

「あ、黒樹君じゃないか」

「ん？ ああ、瀬流彦先生。先生も朝飯食べに？」

「うん。ここおいしいからね」

俺の隣に座り、何やら注文している

ちなみに瀬流彦先生、修学旅行の一件で俺と手を組んだ。いや、手を組んだって言うか軽く洗脳して俺に情報を流すようにしたただけだ。諜報員として情報を流して貰ってる。迷惑を掛けるつもりは

無い

「……そう言えば、ネギ君が悪魔と戦ったらしいね」

「ええ、まあボロ負けでしたけどね」

ボロボロもボロボロ。フルボッコにされたしな

そんな事を話してるうちに料理が運ばれてきた

「それで、学園長がネギ君に魔法を教える人を探しているらしいよ」

「……それで？ 瀬流彦先生にその白羽の矢が立ったんですか？」

「違う違う。なんでも、ネギ君のお父さんに関係ある人とか。ネギ君のお父さん、『紅き翼』の関係者だとしたら魔法の先生にはもってこいだらうけどね」

ナギ・スプリングフィールド、それと『紅き翼』の関係者で魔法使い。そしてこの学園に居る人物

「クウネル・サンダースか……」

「ん？ 知ってるの？」

「盗み聞きしただけです。誰なのかは分かりません」

アルビレオ・イマ何だろうけど。あっちの名前が印象強過ぎてクウネルで覚えてる

「最初は魔法先生の誰かが教える予定だったんだけど、その人が直々に『自分が教えたい』と言ってきたらしいよ」

なるほどね、エヴァが師匠にならないからアルビレオをと……

「彼は麻帆良祭中しか表には姿を見せられないらしいけど、教えるだけなら問題はないらしいよ」

「なるほど、分かりました」

さっさと食べ終えた俺は先生の方まで払い、教室へと向かった

教室なう

「えー、それでは皆さん。学園祭の出し物を何にするかですが……」

そついや、まだ決まっていなかったな

「いや、しかしそいつは難しい問題ですけど、ネギの親分」

「え？」

「ああ。メイドカフェを越える集客力となるとねえ……」

「はあ？」

こいつらそつち方面にしか頭が回らんのか？

もつと何かあるだろ。普通の喫茶店だとかお化け屋敷だとか

「ハイハイ！」

「さ、桜子さん」

「『ドキッ！ 女だらけの水着大会・カフェ！』がいいと思いまーす！」

「？」

よし、椎名。お前俺が居る事を分かった上で言ってるんだよな？
言つとくが俺は男だぞ？ 俺が居る時点で女だらけって入れても
意味ねえぞ！

「何なのよソレ！？ 意味わかんないわよっ！」

「えー？ フツーに楽しそくない？」

ねえよ

「じゃあじゃあ『女だらけの泥んこレスリング大会喫茶』！！」

だから俺は（ry

「負けねーぞ！『ネコミミラゾクバー』！！」

だか（ry

ってか意味分かってねーだろ。絶対

「もう素直に『ノーパン喫茶』でいいんじゃないかしら？」

「「それだあああああああ！！！！！」」

「それだああ！、じゃないわよ！！　どんな喫茶なのか訳わかんないじゃない！！」

「80年代に実在したと記録にありますが……今は違法のようですよ」
茶々丸……お前そんなことまで調べられるのか

「80年代って……何歳いくつなんだ？　あのおばはん」

「あつ、バカ！　それは禁句だぞ千雨！」

「おばはん……？」

いつの間にか那波が俺達の後ろに回り込んでいた。威圧感パネエ

「ハ！？」

「速い！？」

「俺は言っただけぞ！？」

「ウフフフフフ……」

……こ、こええええええ！　こいつだけは絶対に怒らせちゃいけない。

葱が飛んできそうだ

「あ、あの龍宮さん……オンナダラケとかノーパンキッサとか全然イミがわかりんですが……」

「うむ。君達は生涯知らなくていいことだ。そして良い子は意味がわからなくても決してお父さんお母さんに尋ねてはいけない。お姉さんの約束だ！」

いや、まあ宮崎とか鳴滝姉妹と比べれば同年なのに年上には見えそうだよなあ

「……黒樹、余計な事を考えなかったらどうね？」

「イエス・ママー!!」

銃を使って脅すとは……いや、別に全然脅威ではないけど。ノリで言っただけで

「しかし……よくよく考えてみると、カワイイ女の子を見せ物にするというのはいささか単純かも知れないわね」

「逆ならいいんじゃない？」

「「「「おおっ」」」」

「ええー……」

何その『逆転の発想』みたいな考え。後どや顔すんな

「じゃ、ネギ君をノーパンにー！」

「キャアアアア!？」

そう言つてネギを脱がしにかかる女子生徒達。

「うわぁ……………」

「ついでに黒樹君もいつちやう!？」

「調子に乗んな」

殺気を飛ばしてパルを黙らせる。身の程を知れ

「コラあああ!ー! 3ーA! お前ら朝っぱらから何を……………」

「……………あ……………」

「!？」

突如現れた新田が俺達を見て驚く。いや、驚かないならそれはそれでおかしいんだけども

「全員正座ーッ!ー!」

……………またか。二日連続ご愁傷様だ

最終的に3・Aの出し物はお化け屋敷になった

原作ではこの時期さよが幽霊扱いされたりしてたが、既に肉体を手に入れているのでそんな事は無かった

そして俺は用があるので超と葉加瀬のいる研究所を訪れている

「やっと計画を手伝ってくれる気になた力？」

「んなわけねーだろ。ちょっとした発明を手伝って貰おうと思っただけだ」

「発明？ 黒樹はそんな事出来たの力？」

「まだ計画段階だ。面白そうではあるからな。葉加瀬も手伝ってくれるとありがたい」

「構いませんよ。それで、どんなのなんですか？」

「コレ」

そう言っって一枚の紙を渡す

二人はそれを穴が開くように見て、感想を言った

「……コレ、ホントに出来るんですか？」

「魔法と科学を融合させて作った茶々丸っていう前例があるだろ」

「それにしたって、動力は何処から持ってくるつもりネ？」

「そこら辺は俺が何とかしよう」

二人は頭を悩ませている。何をそんなに悩むんだか

「コレ、面白そうではあるガ、かなり難しいヨ。一日二日程度じゃ無理。年単位で研究時間が必要になってくるネ」

「だからその資料を渡したんだろ？ 基本部分の骨組みは出来る。後は中身だ。魔力を返還する方法もあるが、科学については専門家が居た方がいい」

「なるほど。もう少し早く持ってきてくれれば計画にも使えたのにネ」

「使わせない様にこの時期に持って来たに決まってるんだろ」

「そもそもコレ使ったら確実に負傷者が出るぞ。でも使えないと思うけどな。いろいろな問題で」

「むう。かなり意地悪ネ」

「計画に加担したとか言われても困るからな。立場的に」

俺にはやらなきゃならん事があるんだよ

「まあそうネ。でも、面白そうだからこの依頼受けてあげるヨ」

「ありがとよ。資金は出す」

「分かったネ。資料もこれだけ詳しく書かれてれば、多分二週間で
もあれば大体の骨組みから完成間近まで行けると思うヨ」

心強いな。コレが完成したら戦力は飛躍的に上がる訳だし

「だが完成まではいかないだろ？」

「それはそうネ。コレぶっちゃけ永久機関でも無いとエネルギー消
費が激し過ぎて並みのモノじゃ持たないネ」

そりゃそうだろ、そうなるように作ったからな

「それにそのエネルギーに耐えられる強度を出せるかも分からない
ネ」

「その辺はきっちり計算するしかないだろ。後は実験だ」

いざとなれば俺が作り直せばいいしな。錬金術マジ便利

「ちなみにコレ。茶々丸に付ける気力？」

「うんにゃ？俺が使う」

「何？腕一本無くすつもりなの力？」

「予定があるんだよ。まあ、念の為ってところだ」

「ふーん。まあ面白そうだからいいけどネ」

早速資料を見ながらカチャカチャと工具を弄り始めた。俺も手伝うが、クラスの出し物も手伝わにやならんからなあ。面倒な

「ああ、そうダ。黒樹、私達が君の発明を手伝うのだから、君も私達の計画を手伝って欲しいのだガ？ 等価交換ネ」

「いいよ」

「うむ、ならば別の方法で……って、いいの力!？」

「最終日以外な。それ以外なら基本バレない程度に手伝ってやる」

「最終日が一番手伝って欲しいのだが。まあいいネ。ありがたいヨ。早速計画に組み込ませて貰う、もちろん最終日以外でネ」

分かってるならよし

「それと、木乃香さんが君を探していたようだが？」

「木乃香が？ 何で？」

「私が知ってる筈が無いヨ。自分で聞けばいいじゃ無いカ」

「ん……まあ、そうなんだがな」

「……何かあったの力？」

「修学旅行の時にちよつとな」

「お家騒動だったらしいネ。その時に何かあったという事カ」

情報が速い事で。後、頭が回る奴って説明しなくていいから楽

「『イカしてる』ってさ。俺としては身内を傷つけたから始末しようとしただけなんだがな」

「ほお。あの温和な木乃香さんが『イカしてる』とは。余程の事をしたんだナ」

「いや？ 唯、刹那を殺しかけた奴を両手両足吹っ飛ばしてダルマ状態にした後、殺そうとしたのを邪魔した少年^{ネキ}を殺そうとしたただけだがな」

何故か超が頭を抱えた。どうした？

「……いや、あの資料を見ても思った事だが、黒樹はかなりネジが吹っ飛んでるヨ」

「そんな事言われる筋合いは無いんだが」

「少なくともネギ坊主は殺す必要は無かったネ。多分仲違いもそれが原因ヨ」

殺してねえよ。殺しかけただけだ。ここ重要

「まあな。多分そうだろうとは思ったが、仲違いって程じゃねえよ」

「なら話せばいいじゃないカ」

「簡単に言ってくれるな。お前……」

「唯会って話す。これだけだろう、簡単じゃないか」

「そうは言ってもな、改めて話すってのも何かおかしいんだよな」

感覚的なモノだけどさ。今まで普通に話して来た妹と改めて何か話せっていうのも何か変な感じがする

「嫌いじゃないし、身内だから守りたいのは事実。それでも否定されたから俺と木乃香の関係が崩れて来てる感じだな」

「身内だから守るの力？ それに崩れてると言っても普段は普通に過ごしてるじゃないか」

「身内以外を守る気なんて更々無いし。ってか、修学旅行の前と後じゃ全然違うぜ？」

「それは私が気付かない位些細な違いという事ヨ」

いや、まあ、そうなんだろうけど。他人に話して分かるとは俺も思っただけ

「何だかなあ……」

「二人とも、喋ってないで手伝ってください」

「おっと、スマナイネ。ハカセ」

「悪いな。押しつけてて」

其処から作業に取り掛かる

「そう言えば黒樹。君格闘大会に出ないのかネ？」

「格闘大会？ 賞金十万のアレか？ 賞金が少ねえから出ない」

「なるほど、賞金が上がれば出るト？」

「まあ、そうなるよな」

手を動かしながら返事をする。分割思考って面倒

「ならば出て貰うネ。実は、私が主催して当日に賞金を一千万円まで引き上げるネ。どうヨ、出て……」

「出るに決まってるだろ。俺がそんなイベントに参加しない筈がねえ」

ビバ、一千万！！

「……変り身がえらい速いネ……ビックリしたヨ」

「金は力だ」

「……まあ、いいけどネ」

結局開発は夜中まで続いた。終わらなかつたけどな。複雑な計算式を解いたり、ここにはこの材料を使った方がいいとか

これからずっとこんな感じで毎日やんのか。麻帆良祭の準備もある

のに、憂鬱だ……

いや、自分で持ってきたから自業自得だって分かっては居るんだけどな

第二十七話 麻帆良祭の準備（後書き）

超側についてしまったり。まあこの後の事を考えるとここでもちょっとだけ戦力増強を……

まあ武器は作者の趣味で出すんですけどね

ちなみにこの後の構想を考えた結果

B A D E N Dの可能性が限りなく高いです。ほぼ決定してると言ってもいい位に

B A D E N Dとは別にH A P P Y E N Dも考えては居るんですけど……

それぞれ書こうかなあとも思ったり

感想は常時募集中です。ついでにこのまま行けばB A D E N DになるのでH A P P Y E N D絶対主義者という方はB A D E N D終わった後に書いて欲しいと要望が多ければ書こうと思います
ちなみに期間はB A D E N D が終わるまででお願いします

第二十八話 麻帆良祭・前日

第二十八話 麻帆良祭・前日

遂に学園祭まで残り2日となった。3-Aも作業スピードを上げてお化け屋敷を作っているが、このままだと間に合わない可能性も出てくる

ぶつちやけ錬金術使えたら速いんだが、流石に怪しまれるし、何より連日徹夜レベルで開発してるから頭が回らない

「コレ幽霊役の人だよなー？」

朝倉がそう言って掲げたのは幽霊役用の特殊メイクだった

「あ、それ俺んだわ」

そう言っつて俺は朝倉から特殊メイクを受け取る

「……ちなみに黒樹君。ちゃんと幽霊役できる？」

「何を今更。俺はやる事はしっかりやるぜ？」

「ホントかな？」

其処まで疑うか。ならば

「俺がお前を驚かしてやるっ」

「うん。出来る物ならやってみなさい」

フフフフ、と笑いながら教室からでる。……態々特殊メイクまでする事は無いよな

自分の作業に戻った事を確認して後ろに回り、出来るだけゾツとするようにいう

「うーらーめーしーやー」

「……ああ、黒樹君。流石に今時『うらめしや』で怖がる人はいないと思うよっ」

「……ああ、そう。じゃあ、やりなおすわ」

「あ、やり直すの?」

また教室から出て自分の作業に戻った事を確認し、また背後に回り込む

「むーねーもーむーぞー」

『キヤアアアアア!!--!!』

クラスの女子全員を敵に回してしまった

「ゾツとしただろ？」

「そりゃいきなり背後に現れて『胸もむぞ』って言われれば女なら誰だってゾツとするわ!!」

「それは無い！ それは無いよ黒樹君！」

批判とブーイングの嵐だった

「もっとこう、現代風っていうかさ。取りあえずもっとましなものにして欲しいんだけど」

「分かった。やり直そう」

絶叫させたはいいけど、クラスの女子全員を敵に回した気がするわ。刹那とか龍宮とかまだ睨んでるし。那波は葱持ってるし

またもや作業に戻った朝倉の後ろに回り込む

「は〜い〜い〜な〜う〜」

『背後なう!?!?』

またもや総ツツコミだった。其処までおかしい事したか？ 俺

「いや、何でツイッターをチヨイスしたのかは全く分からないけど、取りあえずそれで悲鳴は上げないと思うよ」

「そうかな？ まあいいか、別のを考えよう」

「まだやるの？ もういい加減あきてきたんだけど？」

「次で最後にしよう」

そしてまた後ろに（ry

「くじくじだくじくじ」

「ゾツとしたよ！ 今のは新聞部としてはダイレクトアタックだよ！！ 大ダメージだよ！！」

「悲鳴を上げたな。俺の勝ちだ」

「え！？ コレいつの間に勝負になってたの！？」

冗談に決まっているだろうに

「遊んでないで働いてください！！」

結局雪広に怒鳴られ、作業を黙々とする羽目になった。ファッキン！

次の日

結局エヴァの別荘を使って休む羽目になったが、かなり休めた

昼間はいつも通り作業をし、夕方になってジジイに呼び出された

「一体何？ 電話で済ませろよ」

「うむ、まあちょっと待つとれ」

そう言われて数分。小太郎と共に少年がやって来た

だが、ネギは此処に集まった人物達を見て何があるのか解っていない模様

「学園長先生？ あ、あのー、この方達は……」

「うむ、ネギ君にはまだ紹介していなかったの……ここに集まってるのは、学園都市各地に散らばる小・中・高・大学に常時勤務する魔法先生……及び魔法生徒達じゃよ。全員ではないがの」

全員合わせると結構な数になるしな。別に全員合わせる必要性も無いし

今まで隠してたくせに公表するって事はそれなりに成長したって認める事だと思っただが、俺からすればこいつの戦闘力上がって無いぞ

「さて、今日わざわざ皆に集まってもらったのは他でもない。問題が起きておる。解決の為に諸君の力を貸してもらいたい」

爺が言っていたのは『世界樹伝説』

学園祭最終日に世界樹の前で好きな人に告白すると上手く行くとか、願いが叶うなどと、そんな噂が流れているらしい

そんなくらい根絶しろよ。魔法使いだろ。噂のコントロールくらいやれよ

「実はこれ、マジで願いが叶ってしまうんじゃないよ。22年に一度じゃがな」

世界樹、正式名称“神木・蟠桃”と言い、魔法世界でも注目を受けている膨大な魔力を秘めた魔法の樹らしい

22年に一度、蓄積された膨大過ぎる魔力が外に放出され、世界樹を中心とした六カ所に魔力溜まりを形成する

何より危険なのはこの魔力、人の心に作用する働きがあり、人間の持つ本能から来る願い……性欲や子孫を残そうとする本能から来る気持ち、所謂恋心に最も強い効果を持つちゃったり。それこそ呪い級の力で、告白を成就させてしまうらしい

何故方向性が告白のみなのかは分からんけどな

「そこで、諸君には学園祭期間中、特に最終日の日没以降、生徒による世界樹伝説の実行　つまり、告白行為の阻止をしてもらい

たい」

しかも異常気象で一年早まったらしい。面倒な……

「マジでマズイのは学園祭最終日じゃが、今の段階からそれなりに影響は出始めておる。生徒達には悪いが、先に言った箇所及び世界樹前での告白が起きないよう見張っておいて欲しい」

あゝあ、面倒な

……あ、ヤバい

「誰かに見られています」

「何？」

気付かれやがったか。あのバカ。何で態々危険な橋渡ろうとするかね

直ぐに動いたのは魔法先生の一人、黒いスーツを着たグラサンの男性、神多羅木先生（通称グラヒゲ、またはヒゲグラ）

ヒゲグラ先生が得意とする風の無詠唱魔法でカメラタチを生み出し、上空に射出した

直後に聞こえた機械が破壊される金属音、空を見上げるとバラバラになって散らばり、地面にカメラが落下してくる

「追います」

「深追いはせんでいいよ。こんなことが出来る生徒は限られとる」

犯人はつきりわかってんのな。その割に対処しないとかアホ丸出しだろ。最初の一回目で記憶消せよ

「さて……たかが告白と思うなかれ！ コトは生徒達の青春に関わる大問題じゃ。但し魔法の使用にあたってはくれぐれも慎重に！ よろしく頼むぞ！！」

これで会議は終了し、解散と共にこの広場全体に掛かっていた人払いの結界が解かれた

直ぐにざわつき、人が入ってくる

俺は人込みを抜け、目的の人物を探していた

〈SIDE ネギ〉

「驚いちゃったよ。世界樹伝説、ホントだったんだね。魔法先生も結構いたし」

「けどあいつら戦ったらほとんど大したことない奴らやで。俺とかネギのが強いかもしれん」

「そんな事無いよ。神多羅木先生も無詠唱魔法とか凄かったじゃないか」

僕もあんな風に魔法を使えるようになってみたい

師匠は「まずは基礎からやりましょう」「って言ってあまり魔法は教えてくれない

でも、『戦いの歌』とかは教えて貰えたし、近接戦では十分かな

ドカツ！

不意に大きな音がして、売店のテーブルが倒れた。カゴに入っていた商品が散らばる。

「だ、大丈夫ですか？」

思いつきり転んでしまったらしい誰かに手を貸す

「あれ！？ あなたは……」

「ネ、ネギ坊主。丁度よかった、助けてくれないか」

出席番号20番。超鈴音さんだった

怪しい奴に追われている

その言葉が示す通り、超さんは白い仮面を着けた黒衣の集団に追われていた

屋根の上を駆け回る僕達に、なんの苦もなくついて来る男（多分）たち

「オイオイオイなんやアレ!？」

「超さん、これは一体!？」

一体何がどうなってるの!？ 超さんを抱えているから普段と違ってあまりスピードが出せない。困った

「実は私、悪い魔法使いに追われてるネ。ネギ先生に助けて欲しい」

悪い魔法使い……? 超さんが魔法使いに追われてて、超さんはそれから逃げてるの？

そうして逃げる最中も、進行方向の屋根から黒衣の男が這い出すのが見えた。

影の魔法。西洋魔術!？

「こいつら俺の狗神みたいなモンや! 殺つてええやろ?」

どの道戦わないと逃げきれないみたいだし……

「事情はわからないけど仕方ない。倒すよ!」

「よっしや!」

小太郎くんは迎撃の構えを取り、敵を見据える

「ラス・テル・マ・スキル・マジステル！」

僕は魔法、小太郎君は体術で敵の黒衣の精霊を蹴散らしていく

あまり派手にやると問題になるから、派手な攻撃は出来ない

と、思ってたなら何体かの黒衣の精霊が目の前で消えた

魔力も気も感じなかったけど、どこから攻撃されたのかな？

あらかた数を減らすと、僕達は建物の影に入った

事情を聞こうとしても、超さんははぐらかすばかりでまともに答えてくれない

「お喋りは終いや。三人、近づいて来るで」

「あやー、マズイネ。今度また捕まったら、さすがに記憶消されてしまうかもしれない。……見栄を張らないで素直に助けを求めれば良かったヨ」

ボソツと、超さんが聞き捨てならないことを呟いた。最後の方は聞き取れなかったけど

『今度』？ 『また』？

それに、記憶を消す？

「おいネギ。囲まれとるで」

しょうがない、後で事情を聞くとして、ここはどっにかしないと……

「小太郎君、どっちに行きたい？」

「上やな。敵は少ないけど確実にしとめたる」

「なら僕は下だね。上が終わり次第援護は出来る？」

「出来るけど、何や、ビビって一人じゃ戦えんのか？」

む、そう言う訳じゃない。念のために決まってる

つと、言い争ってる場合じゃない。対応しないと

「『戦いの歌』」

小さく呟き身体能力を強化。そして師匠から習った瞬動を使い、距離を詰める

「『風花・武装解除』！！」

敵の杖を弾き落とし、また瞬動で距離を詰めて追撃しようとする

打撃のいくつかは影の精霊を間に挟まれてとっさに防がれたけど、まだいける

「って、アレ？」

其処に居たのは、さっき会った魔法生徒の一人、高音さんだった

ガンドルフイーニ先生に事情を聞く事になった

「事情を聞きたいのはこちらだよ、ネギ先生。なぜ君が、エヴァンジェリンにも関わる問題児、要注意生徒の超鈴音をかばっているんだ？」

「え……問題児……？」

問題児。そんな認定はすぐには受けないだろう。

それにしだって担任の僕に一言くらい言っておいてくれればいいのに……

「つまり、超さんは今までに何度も魔法使いの会合を覗き見て、何度と無く出した警告を無視して、今回も事に及んだ、と？」

「そうだ。われわれ魔法使いが現代社会と共存するために、一般人には多くを知られるべきではない」

「超さんは、どうなるんですか？」

「彼女が警告を無視したのはこれで三度目だ。あの凶悪犯、エヴァンジェリンにも手を貸している。記憶を消すことになるだろう」

記憶を消す

魔法使いとしては妥当なのだろう

でも、僕は出来ればそんな事はしたくない

ガンドルフィーニ先生は超さんを連れて行くこととする

「待ってください」

ガンドルフィーニ先生が振り向く

「僕の生徒を勝手に凶悪犯とか、危険人物とか決めつけないでください！！ 超さんは僕の生徒です。僕に全て任せてください！！」

勝手な判断で凶悪犯とか危険人物だなんて言わせない！ 僕の生徒は僕が守るんだ！

「チツ、面倒な……」

超さんが何か呟いたが、僕はそれが聞こえなかった

〈SIDE 黒樹〉

「バカかよ。テメエは」

「いやはや、助かったヨ。スマンスマン」

反省してんのか？ コイツ

「あの時フォローしてくれなかったら多分ネギ坊主もやられてたヨ」
「だろうな。あの程度の実力だし」

「それにしたって、私に化けたあの男は誰ダ？」

「俺の従者。変身能力を持ってる。便利だろ？」

「確かに便利ダ。ぜひ雇いたいネ」

「駄目に決まってるんだろ」

何でそれが通ると思ってんだ

そんな事を話してたら鳥が俺の肩に止まった

「御苦労だったな、エンヴィー」

「全くだよ。あの子供先生、余計なことしてくれちゃって。あのまま素直に記憶消してくれれば楽だったのに」

「まあな、そっちが楽なのは俺も認めるが、世の中そううまくいかないものだ」

プランとしては超に化けたエンヴィーが記憶を消される事で超へのマークを外そうとしたんだがな

あの餓鬼、悉く邪魔してくれる

「まあまあ、カシオペヤは渡してくれた力？」

「ああ、あの時計みたいな物？ 渡したよ」

「そうか、それならいいヨ」

原作読んでも思ったが、アレ渡してコイツいい事あったのか？

「まあ、仲間に引き入れれば使えるかも知れないヨ」

「精々トカゲの尻尾レベルだろうけどな」

もしもの時の為の保険って形で切り落とす尻尾を用意しておくのも悪くない

第二十八話 麻帆良祭・前日（後書き）

ギャグ多めです

そして本格的に超に協力し始めた黒樹。どうなるのでしょうかね

HAPPY ENDを書くかどうかですが、要望は多いですね

やはりみんなハッピーで終わる方がいいのか……

でもここから別ルートに入るとかなり無理やりになるんだよねあ

感想は常時募集中です

第二十九話 麻帆良祭一日目 話し合い

第二十九話 麻帆良祭一日目 話し合い

〈SIDE 木乃香〉

麻帆良祭一日目

「見つかりましたか？ お嬢様」

「ううん。見つからへん」

教室で話すような事じゃ無いから呼び出そう思ったのに、毎日毎日兄様直ぐにいなくなるんやもん

修学旅行が終わった後からあまり話さなくなったし、何か変わったんかなあ

「ホントどこいったんやろなあ」

「先日学園長に呼ばれた時は居たのですが、話が終わった後、伝言を頼まれ、その後直ぐに姿を消されたので……」

「せつちゃんの所為ちゃうよ。それは神出鬼没な兄様が悪いんや」

消えたと思ったらいつの間にかいるし、いると思ってたらいつの間

にかいなくなってるし

「それで、伝言って？」

「『麻帆良祭中は周りに気をつける』との事です」

どついう事やる。こついつときに兄様の勘は当たるからなあ。アスナが攫われた時とか、エヴァちゃんの所に避難しとけ言われてたし。して無いけど

「何者かが侵入しているのでしょうか？」

「それなら他の魔法先生達やネギ君達も動く筈やえ。兄様だけの問題とちやうからな」

「そうですね。でも、周りに気をつけるって言われても……」

何に気をつけたらええんやろ。その辺はつきりしてくれんと困るわ

「取りあえず目的は麻帆良祭で兄様と仲直りする事や。修学旅行以來あまり仲良くできひんかったからな」

「そうですね。仲直り出来るようにしましょう」

「うん。ウチ頑張るえ」

と、燃えていた時にさよちゃんから電話がかかって来た

「木乃香さん、今大丈夫ですか？」

「大丈夫や。さよちゃん、どうしたん？」

「黒樹さんを見つけました。超さんや葉加瀬さんが使ってる麻帆良工学部にいるみたいです」

「麻帆良工学部？ 何でまたそんな所に」

「取りあえず電話を切ってせっちゃん和麻帆良工学部に向かい、さよちゃんと合流した」

「で、どこにおるん？」

「超さん達と何かやってるみたいですね。工学部の人に話を聞くとここ最近入り浸ってるとか」

「工学部に何の用があるんやろ。相変わらず兄様の考えは分からんわ」
「取りあえず超さん達が使ってる部屋の前まで来て、壁に耳を当てて中の音を聞く」

「………からよ、やっぱこの素材を使った方が強度は上がると思うんだ」

「でも、それだと動力変換がスムーズにならないのでは？」

「伝導率は炭素の方が高い。最終的に動力変換に回すエネルギーを考えるとこつちの方が使いやすいだろ」

「まさかダイヤモンドより堅いものを使うとはネ。というかそんな物何処から手に入れタ？」

「作ったに決まってるんだろ。炭素の結晶構造を変える事なんざ俺にとっては造作も無い」

そしてウチらは耳を離す

「……なんていうか、普通に研究者っぽいですけど……」

「マッドサイエンティストと呼ばれるあの二人と何してるんでしょうね……」

「会話聞く限り何か作ってるっぽかったえ」

もう一度耳を付け、話を聞こうとする

「……………うヨ。やはり殺し合いにおいて『零崎黒識』の右に出る物は居ないネ」

「仕事用の名前なんだからあんまりいるんなところで言いふらすなよっ」

「分かってるヨ。しかし、かの『殺人鬼』が味方に居るとなれば心強いネ」

「だから言うなつての。知ってる奴少ないんだから」

「木乃香さんは知らないの力？」

「教えてねえ。あいつが知るにはまだ早い」

「過保護だナ。龍宮さんは知っていたようだが？」

「麻帆良で知ってるのはあいつとエヴァ、刹那ぐらいだな。仕事の事だけなら千雨も知ってるけど」

「ふーん。木乃香さんの事を思ってたの事力」

「まあな。これ知ったら絶対反発するだろうし」

ウチらは耳を離し、眼を見合わせる

「……一体どういう事や？」

「黒樹さんが『零崎黒識』って言ってましたよね？」

さよちゃんが腕を組んで頭を悩ませとる。一体どういう事やろ？

「うん。せつちゃん。しつとるんやろ？ 教えてくれへん？」

「え、えっと。それは流石に黒樹様の許可が無いと、私が話す訳には……」

「むう……お父様ならしつとるかな？」

「それは……」

「コレも答えられへんの？」

「ハイ。これに関しては絶対に話すなと念を押されていますから……」

…」

それだけ重要な事なんかな？ 唯、名前の意味とか知りたいだけやのに

「それと、コレが一番大事なことや……兄様は、人を殺した事は、あるん？」

出来れば聞きたく無い、それでも、聞かなきゃならない気がする

「あるよ。一人二人じゃ無い、それこそ両手両足の指の数使っても足りないくらいの数をな」

〈SIDE 黒樹〉

「扉の外で何をこそこそやってるかと思えば、盗み聞きか？」

「兄、様……」

何をそんな呆然とした顔で見てるんだか。おかしい事は言っていないと思うがな

「……やはり、気付いていましたか」

「お前等が幾らコソコソやっても俺から隠れられるなんて思わない事だな。実力の桁が違う」

刹那は気付かれていると思ったからこそ俺の事を話さなかったんだろ

どちらにせよ、いつかは話す気だったし、それが速いか遅いかの違いではない

「で？ 木乃香は人殺しの俺が嫌いか？ ちなみに修学旅行が終わった後からやった事じゃないぞ。随分と昔からやってる『仕事』だ」

「……それは、本当なん？ 兄様、あの時はもう、人を殺した事あったん？」

あの時つてのは多分俺がハンプティダンプティを殺そうとした時の事だろう

「ああ、そうなるな。『零崎黒識』つてのは仕事の時に名乗る『殺し名』だ」

理由なく殺す殺人鬼。家族に仇なすものは、老若男女人間動物植物の区別なく容赦なく皆殺しにするってところに憧れて名乗り出したんだよな

最近は何崎名乗って無いけど

木乃香は顔を伏せ、何か呟いている

「兄様が、人殺し……どうして？ ウチの所為？ ……」

「勘違いをしているようだ。俺が殺すのは金を貰えるからだ」

「お金を、貰えるから……？」

「そつだ、俺は基本的に金さえ貰えれば何でもやるからな。お前の所為なんかじゃ無い」

自分の所為で殺人をさせたなんて勘違いをされちゃ面倒だ

現状では俺は俺の為にやっていると思わせれば十分だ。つてか半分くらいは本当の話しだしな

ま、経験を積む為であり、いざというときに容赦、情け、戸惑いを持たない様にするためにはコレが一番だったのも事実だ

「……………」

木乃香はダツと走って何処かへ行ってしまった

「お嬢様！」

「……………流石に少し刺激が強過ぎたか。刹那、お前は一緒にいてやれよ」

これから先、俺は狙われる可能性があるしな

木乃香の所為で取り逃がしたなんていう訳にもいかないし、おびき出す為にわざと逃がしたのもある

刹那は木乃香に甘いから言う可能性がある。だから理由は話せない

「……分かりました。しかし、もう少しオブラートに包むとか出来なかつたんですか？」

「アレでいいんだよ。現実を知るにはいい機会だし、それに……」

「それに？」

「……いや、いい。どうせ言ったって変わる訳じゃない」

「どういう事ですか？」

つまり、狙われてる現状で仲良くすれば人質に取られる可能性もあるって事だよ。疎遠になってれば人質に使うには足りないと思わせられる

それに刹那の実力をハンプティダンプティが知ってる以上、それだけの価値の人間に多大に戦力をつぎ込むハズが無い

頭はそれなりにキレル奴だったし、戦うならエヴァレベルで無いとどの道足手纏いだ

まあ、それを察しろって言うのも無理な話だけどな

「まあ、全部終わったら話してやるよ」

「……絶対ですよ。お嬢様も悲しみますから」

ホントこのちゃんLOVE街道まっしぐらだなあ、刹那

「分かってるさ。さよも隣にいてやれよ。友達としてな」

「もちろんですよ!!」

刹那とさよは走って木乃香を追いかけて行った

「さて、話は終わったかな？」

「悪いな、態々三文芝居させて」

「これくらいどうって事無いヨ。しかし、良かったの力？ 嫌われ
てしまうヨ？」

「いいんだよ。アレで嫌いになるならそれで。俺としてはやらずに、
いざというとき冷静な判断を下せずにあいつらを傷つけてしまう事
の方がよっぽど怖いね」

「本当に過保護何だナ。木乃香さんがうらやましいネ」

「ほっとけ。それより作業を続けるぞ」

「分かってるヨ」

そしてまたガチャガチャと機会を弄り始める俺達。麻帆良祭当日な
のにな

そして一時間程度で作業をやめた。流石にコレやってて麻帆良祭を
逃したくは無いらしい

特に超は最後だからな。今回は特に思い入れがあるだろう

最初に俺とエンヴィーは仮装した。エンヴィーを元の格好で歩かせてたまるか

俺は平和島静雄。エンヴィーは折原臨也の格好だ

ぶつちやけ俺はウィッグまで使って金髪にしてるから傍から見たら誰か分からない。エンヴィーは言わずもがな、臨也そのままの格好

そして俺が訪れたのは麻帆良マル秘コスプレコンテスト

「よ、千雨」

「ん？ 黒樹か、見に来たのか？」

「良く一目で分かったな。ウィッグまでかぶってんに」

「女の勘だ」

恐ろしいな、女の勘

「千雨はその格好で出るのか？」

確かビブリアルーランルージュ？ だったと思っけど

「いや、どうしようか迷ってたんだが……」

「でろでろ、でちまえ。面白そうだし」

「お前等レベルでコスプレ出来てる訳じゃねえんだよ!」

コスプレしてるつもりは無いんだがな

「てゆうかそつちの人誰だ」

「エンヴィーです。分かんなかった?」

「ああ、なるほど。お前ならそうなるよな」

もうそのままだからな。見た目が似てるとか言うレベルじゃ無い

ごたごたはあったものの、千雨は渋々ながらに出ると言った

結果? 聞くまでも無く優勝だったよ

まあ、千雨は3 - A属してるだけあってかわいいからな

それを言ったら真っ赤になっただけ

とあるカフェテラスに移動し、コーヒーを飲む

「そう言えば千雨、お前に話しく事があった」

「ん? 態々改まって何の話だ?」

俺達だけを隔離し、話を聞かれない様にする

「……『隔離』してまで聞かれない話か」

「まあな。お前は理解力あるし、もしもの時はお前の判断で話していいから、聞いただけ聞いておいてくれ。お前は信用してる」

「……で？ 何の話だ？」

「修学旅行の時、お前も戦っただろ？ 半吸血鬼の女」

「ああ、確実に致命傷レベルのダメージを与えた筈なのに、平然とした顔で出てきやがったあいつだな」

あの火山噴火見たいな爆炎が舞った時の奴か。あれ相当ダメージでかそうだったけどな

「そいつだ。で、そいつを取り逃がした訳だ」

「木乃香に止められたんだってな」

「そう。そして、あいつ等の目的は俺の持つ『アクロの心臓』だ」

「心臓を、か？」

「そう、詳しい話を話す気は無い、というか面倒だから省くが、あいつらの手に心臓が渡れば確実に世界は滅ぶ」

「そんな核兵器見たいな事が出来んのか？」

「俺がいつもやってるだろ？ 元々心臓のエネルギーはほぼ無限と
言ってもいい位だからな」

あいつ等は御霊を使って自分たち以外を消そうとしてるらしいが、
その辺は面倒なので核兵器のようなモノを使う為に心臓を欲しがっ
てると言った

つてか、核兵器の例えが俺自身とか……まあ、いいや

「なるほど、それで逃がした奴から情報が漏れて、お前が狙われて
ると」

「正解。俺とあまり深い仲、それこそ人質にする価値があると思
われれば確実に利用しに来るからな」

「出来るだけ関係は淡泊に、人質にするには弱いと見せたい訳だ」

「そう、そして一番狙われやすいのが……」

「木乃香ってわけか。納得だ」

流石に理解が速い。頭が回るし、こいつには話しておくべきという
判断は間違っつてなさそうだな

「でも、何で話すのがあたしなんだよ。木乃香に話しておけば自分
からそういう風にするんじゃないか？」

「最初に言っただろ。お前の事は信用してるんだ。だが、木乃香は
其処まで演技がうまい訳じゃないし、何がきっかけでばれるか分か

らん。使われてからじゃ遅いんだよ」

どの道木乃香自身人殺しを賛成してる訳じゃないしな。「相手の組織全員皆殺しにしてくる」「分かった。行ってらっしゃい」「じや済まない

相手の組織の規模さえ分からん訳だし

「なるほどね……分かった。これはあたしがタイミングを計って話せばいいのか？」

「別に話さなくてもいい。どの道木乃香は反発する」

「何で……ああ、皆殺しにするからな。お前」

「朝、俺が既に人を殺した事があるって言ったら頭の中真っ白になったみたいだしな」

「それは話したのかよ……」

まあいつかは話さなきゃならない訳だし？ かといって祭りの最中に話すのもどうかと思うけどな

隔離を解き、金を払うと千雨は何処かへ行った

昼過ぎに教室に行き、お化け屋敷を見てみると、受付のネームプレートが『ドキッ』はあと 女だらけのお化け屋敷』になっていた
「なにこれ」

「あ、黒樹君。こっちの方が儲かりそうだから、こっぴつ名前になつたんだよ！」

「ってか、女だらけって俺は入れねえじゃん」

「うん、首だね」

「クビ！？ 俺クビになったの！？」

まあクラスの出し物しなくていいってかなり楽だけども

「だってお触り一回五百円だよ？ やんないでしょ？」

「イメクラかよ……まあ確かにやらないけど」

つつーか出来ないけど。というよりやらないけど。誰得だよって話だし

「でしょー？ そんなわけで表に出ない仕事になったから」

そんなわけで、結局お化け屋敷の中を通った後の整備やら片付けを

する羽目になった。ガッテム！

そんな事をしていると、六時が近づいていた

もうすぐ『まほら武道会』の予選が始まる筈なので、それに向かう
ことにした

第二十九話 麻帆良祭一日目 話し合い（後書き）

連投です。意外と早く書き終わったので

木乃香が黒樹の仕事を知りました。これから木乃香はどう動くんでしょうか

感想は常時募集中です。書いていただけると作者は投稿ペースが速まります

第三十話 麻帆良祭一日目 予選（前書き）

今回少し短めです

第三十話 麻帆良祭一日目 予選

第三十話 麻帆良祭一日目 予選

今俺は超から連絡を受け、格闘大会を目指している

買収とか早めにやっつけよっつー話だよな

ま、関係無い話だけでも

「っーかお前も出んの？」

「何だ、私が出るのはおかしいのか？」

「そりゃ見た目十歳の女の子が格闘大会に出るってのはねえ」

「バカにするな。見た目だけで判断すると痛い目を見るぞ」

言ってる事は正論だ、実際力封印されてないけど、本気出せ無いだろ。麻帆良結界あるから

「お前は賞金目当てか？」

「当然。十万程度じゃ出る気は無かったが、一千万ともなれば話は別だ」

「……お前本当に金の亡者だな」

失敬な、其処までじゃ無いと思うぜ。一千万なら誰だって欲しがる
だろ

そういう言ってるうちに会場へ付いた

「あ、黒樹。君も来たのかい？」

会場には龍宮、古菲、長瀬が居た

「まあな。一千万と聞いて出ない訳にはいかねえ」

「相変わらず金の亡者だな」

「お前には言われたくない」

後それさっきも言われたし

「黒樹どのも出るでござるか。戦ってみたいでござるな」

「俺は出来るだけ楽をして優勝したいね。一回戦で優勝候補同士が
潰し合ってくれるとかすればいいが」

「君も十分優勝候補だろう」

「そうアルか？ そう言えば超も黒樹は強いと言ってたアルね」

体術は其処まで強くねえよ。ルール無用の殺し合いならともかく

「そうでござるか！ いやあ、楽しみでござるなあ！」

「私も戦いたいアルよ！ 一回戦で当たる事に期待するアル！」

「フッフ、私も黒樹とは本気でやってみたかったんだよ」

戦闘狂のバカ三人を後目に勘弁してくれと思う俺だった

しばらくして、流れたアナウンスに従い会場へと踏み込むと

「ようこそ！！ 麻帆良生徒及び部外者の皆様！！」

朝倉がマイクを持って司会をやっていた

「復活した『まほら武道会』へ！！ 突然の告知に関わらずこれ程の人数が集まった事に感謝します！！ 優勝賞金は一千万円！！ 伝統ある大会優勝の栄誉とこの賞金、見事その手に勝ち取ってください！！」

それでは、今大会の主催者より開会のあいさつを」

そう言われ、出て来たのは超鈴音

「私が……この大会を買収して復活させた理由はただひとつネ。表の世界、裏の世界を問わず、この学園の最強を見たい……それだけネ」

最強を見たい、ね。本当の目的は別にあるくせにな

「20数年前まで、この大会は元々裏の世界の者達が力を競う伝統的大会だたヨ。

しかし、主に個人用ビデオカメラなど記録機材の発達と普及により、使い手達は技の使用を自粛、大会自体も形骸化、規模は縮小の一途をたどた……だが、私はここに最盛期の『まほら武道会』を復活させるネ！

飛び道具及び刃物の使用禁止！！……そして呪文詠唱の禁止！！

この2点を守ればいかなる技を使用してもOKネ！！」

周りで反応したのは魔法関係者のみ。麻帆良結界はしっかり働いてるらしい

少年たちの会話に耳を傾けてれば、高畑先生も出る事にしたらしい。超の監視の意味合いが強いだろっな

あの人となら全力で戦ってみたくはある。木刀作つとこ

「ああ、一つ……言い忘れてるコトがあったネ。この大会が形骸化する前、実質上最後の大会となった25年前の優勝者……学園にフバリと現れた異国の子供、『ナギ・スプリングフィールド』と名乗る当時10歳の少年だった」

明らかに少年の方を向いてその言葉を言う

少年は『ナギ』が優勝したと聞いて出る事を決めたらしい

まほら武道会の予選会は20名1組のバトルロワイヤル形式、A～Hまでの組から2名ずつが選出され、本戦のトーナメントに進出出来る

定員は160名らしい

本戦は翌朝8時から始まり、今日中に本戦の組み合わせは決まる

予選は平たく言えば、バトルロワイヤル

四角い舞台の上でやたらめったに暴れ回って、残った2名で本選出場となる

『それでは、試合開始い!!』

開始の合図とともに一斉に俺に向かってくる奴ら。何故に俺？

「一番弱そうなお前から落とさせて貰うぜ!」

なるほど、納得。見た目は弱そうだな

「だが、見た目で人を判断しちゃいけませんって習わなかったのか」
殴ろうとしたり、蹴ろうとしたり、掴もうとする奴らを悉く避ける

避けながら指でスタンガンのように電気を流し、気絶させる

面倒だから更に『風』で周りの奴らを吹き飛ばし、数を減らす

「ほお、やるでござるな」

ゲ、長瀬が居るよ……どうすっかな

「次は拙者と戦って貰うでござる！ 楓忍法！！ 四つ身分身 臃
十字！！」

長瀬は四人に分身し、四方向から俺に攻撃を加えてくる。つつーか忍法って言うていいのか。忍者だって……いや、最初からばれてると思うけど

腕と足と目を最大限活用しながら避けて防いでを繰り返す

「その程度でござるか！ 黒樹どの！」

「うるっせーな！ 四人一遍とか面倒すぎだつての！！」

能力は人前で使うには向かないんだよ。ほとんどが殺す為の能力だから

四人のうち一人が離れ、三人が俺を逃がさない様に周りを囲む

三人は一斉に攻撃を開始し、時折気で強化した一撃を盛り込む

『速度』で包围を抜け、三人を『重力』で一気に押しつぶし、『雷』

で気絶させようとする

「まだまだでござる!」

(恐らく)本体が上から気弾の強力な一撃を見舞ってきた

まともに喰らいそうだったが、『隔離』を一瞬だけはって防ぎ、『重力』で落とす

「ぬ!」

このまま潰してやるうかと思った所で朝倉の怒号

「試合終了だって言ってんでしょーが!! 人の話聞けや!!」

「そうだったか?」

「いや、拙者は一人残るまでと思ってたでござる」

俺は忘れてた

「とにかく!! 試合しゅーりょー!! あんたら二人しか残って無いでしょーが!! 予選突破!!」

『重力』を解除し、舞台から降りる

「いやあ、強いでござるなあ。黒樹どの」

「お前もな。まさか影分身とは」

「いやいや、拙者はまだまだでござるよ」

がちりと握手し、その場を離れる

いつの間にか、俺と長瀬で謎の友情が芽生えていた

他の所も終わったらしくトーナメント表が出ていた

なお、俺と長瀬が激しい戦いをしたせいで自主的に降りた人たちが何人か居たのは言うまでもないだろう

Aブロック

第一試合 佐倉愛衣VS犬上小太郎

第二試合 長瀬楓VSクウネル・サウンダース

第三試合 古菲VS中村達也

第四試合 エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルVS桜咲刹那

Bブロック

第五試合 田中VS高音・D・グッドマン

第六試合 神楽坂明日菜VS大豪院ポチ

第七試合 近衛黒樹VS龍宮真名

第八試合 ネギ・スプリングフィールドVSタカミチ・T・高畑

最初から龍宮相手とか、マジで勘弁しろよ……

「フッフ、私が相手だね。よろしく頼むよ。黒樹」

「ああ、よろしく頼むぜ……」

コレ絶対超の仕業だろ。俺龍宮の後、少年かタカミチ、その後分かんけど、決勝は多分クウネル。

クウネルとかどうやって倒そうか。確かあいつ実体じゃ無いんだよな
ダリー、と思いながら帰っていると、長瀬に連れられ中夜祭へ

結局朝の四時くらいまで騒いでた

第三十話 麻帆良祭一日目 予選（後書き）

格闘大会予選です

武術とか知らないんで動きとか全然分かりませんが、頑張って書きたいと思います

感想は常時募集中です

第三十一話 麻帆良祭二日目 本戦（前書き）

知っている人は知っている

サウンドホライズンを聞きながら書きました。おかげでそのネタが
ちらほらと

そんなわけでどうぞ

第三十一話 麻帆良祭二日目 本戦

第三十一話 麻帆良祭二日目 本戦

「へえー、ここが麻帆良かー。でっかいわねえ」

赤い髪の少女がそう言っただけで周りを見渡す

「あんまり騒ぐな。嫌い」

黒く天然パーマがかかった髪を帽子で隠しながら、青年は歩く

「ふん。祭りなのにテンション低過ぎじゃ無い？ 鴉」

「リンが嫌いだけだ。俺は普通」

「何よワカメ頭。それよりさっさと『持ち主』を探すわよ。一回位
みてみないと！」

「ボスに怒られても知らないぞ」

「その時はアンタも道連れよ」

「ハア！？ 何で俺まで！？」

少女と青年は麻帆良祭の人ごみに紛れて歩く

〈SIDE 黒樹〉

今、俺は武道会場の選手控室に居る

俺が入った時には龍宮や長瀬もいた

別荘で作った木刀の調子を確かめていると少年^{ネキ}たちが来て、高畑先生と何やら話していたが、別に俺には関係の無い話だ

今回、俺は能力をあまり使えない

何故、と言われれば派手だからと言うしか無い。派手じゃないなら使ってもいいんだけどね

まほら武道会本戦は龍宮神社内の一角で行われる

敷地としては都内、日本国内の神社としては破格な為、会場も十分すぎる程広く、20年前まで武道会の会場として使用していた場所を改装して再び使用する事になった

ステージとして使われるのはの周囲を水に囲まれた能舞台、場外及び水への落下は10カウントで失格となるルールで、他にもダウン10秒、気絶、ギブアップでも勝敗が決まる。もし試合時間の15分以内に勝負が決まらなかった場合は観客のメール投票に判断を委ねるらしい

少年^{ネギ}や神楽坂はかなり眠そつだな。朝の四時まで騒いでりや眠くもなるだろつけど

俺はエヴァの別荘で休んだし、眠くは無

ルール説明や注意事項の連絡も終わり、本戦の開始を待つだけとなつていた

『只今より、まほら武道会第一試合に入らせていただきます!!』

遂に始まった一回戦、第一試合は小太郎と佐倉だ

「頑張れよ。佐倉」

「あ、黒樹さん！頑張ってください！」

頑張れとは言つたものの、実力は小太郎の方が上だろうからな。まあ小太郎なら怪我させることもないだろ

『第一試合、Fight!!』

試合が始まり、佐倉がアーティファクトである箒を召喚した。

だが小太郎が瞬動で懐に入り、左手を一気に振り上げ、その風圧で愛衣は10mくらい吹き飛ばされ、水の中に落下。

10カウントを取られ、第一試合は1分も掛からずに小太郎の勝利に終わった。

「あゝあ、やっぱりこうなったか」

流石に勝てはしないだろうが、一撃も与えられずに負けたか

第二試合、クウネル・サウンダースと長瀬楓の試合

クウネルは確か幻影体の筈だからこの大会のルールで勝つ事はほぼ不可能

俺は分らんけど。幻影体なら手加減する必要もない訳だし

結果、善戦したもののアルお得意の重力魔法でKO。二回戦第一試合は小太郎VSアルに決定した

ちなみに重力魔法はしっかり『コピー』させて貰った

第三試合 古菲VS中村達也の試合

これはぶっちゃけ言うまでもなく古菲の勝ち

『遠当て』の『列空掌』とか叫んでたけど、一撃でのされた

第四試合 エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルVS桜咲刹那の試合

開始十数分でエヴァの幻想空間ファンタズマゴリアに入り、三十秒ほど経ってからエヴァが吹き飛ばされた

まあ原作通りっちゃ原作通りだな。俺見て無いけど。多分エヴァは刹那に原作と同じ事言ったと思う

エヴァの見舞いに医務室を訪れた。どうせもう治ってるだろうけどな

「お疲れ様、エヴァ。刹那もがんばったな」

「む、黒樹か。お前この怪我治せ。出来るだろ」

まだ治ってねーのかよ。どうした吸血鬼

「黒樹様も幻想空間での事を見ていたんですか？」

「いや、見て無い。入り方知らないし。つか怪我治したいなら茶々丸にでも……今アナウンサーやってたんだっけ」

どうしようかね。コイツ吸血鬼だから直ぐ治るだろ。よって放っておくことに……

「麻帆良結界で阻害されてるんだよ。治りが遅い」

「なるほど。納得」

どうせ協力関係だから恩を作つといて損は無いだろ、と思って『再生と死滅』の力で肋骨の骨折を治した

神楽坂辺りがこそこそ見てたが、別にどうだっていい事だったからな

「所で黒樹様、お嬢様がかなり不安定なんですが」

「……やっぱ刺激が強過ぎたかな」

「そりゃいきなりあんな事聞かされたらそうなりますよ」

実の兄が人を殺した事があるって結構来ると思う

話した俺が今更言う事でも無いかもしれないけどな

「取りあえず祭りを楽しんで、悩ませるな」

「それで何とかなるならいいんですけどね」

「何とかなると断言はできないが、取りあえず麻帆良祭中はな」

「？ 何故ですか？ あのアドバイスにしてもそうですが」

「勘ってヤツだよ。中々バカにできないもんだぜ。そんなわけでお前は麻帆良祭中は木乃香から目を離すな。何が起こるか分からん」

もしかすると情報を探りに来たりするかもしれないからな

これだけでかい祭りだと侵入者の判別も出来やしな

告白させない様にしては居るが、それはこっちの問題だし、むしろ外の連中からすれば侵入しやすいとも言える状況だからな

原作では超の事が最大の事件だったが、今は俺が居るからな。それにこういふときの勘に限って当たるモノだ

面倒な事にならなきゃいいが

第五試合 田中VS高音・D・グッドマンの試合

脱がされてた。やっぱり脱げ女の異名は伊達じゃ無かった

結局高音が勝ったけどな

第六試合 神楽坂明日菜VS大豪院ポチの試合

クウネルと始まる前に何やら話してたが、自分を無にするとか何とかって奴だと思う。少なくとも盗み聞きした時はそうだった

そして試合開始

大豪院はあつという間にやられた。モブキャラ乙

具体的に言えば、始まって女だからと油断し、一撃を許したら吹き飛んで気絶

なんとも言えない空気が漂ったよ

第七試合 近衛黒樹VS龍宮真名の試合

「全力でやらせて貰うよ」

「お〜お〜、勘弁してくれよ。体術ってそんな得意分野じゃねーのよ。俺」

「何を白々しい。楓とあそこまで戦っておいて得意じゃ無いなんて言わせないよ」

舞台上上がり、向き合う

俺は木刀を腰に差したまま構えず、龍宮はポケットに手を入れている

「それでは第七試合、FIGHT!」

〈SIDE 三人称〉

開始の合図と共に黒樹の額へと何かが飛んでくる

黒樹はそれを首を曲げて避け、龍宮の手に持った物を見る

「……驚いた、初見で避けて見せるとはね」

「驚いたのはこっちだったの。いきなり何飛ばして来てんだよ」

「まあ君なら避けてもおかしくは無いけどね。全力で行かせて貰う」

直後、大量の何かが黒樹へと飛んでくる

(うつわ、なにあれこわい)

そんな事を思いつつ居合抜きで当たりそうなものだけを弾き、それ以外を避ける

散らばったそれを見て黒樹や実況は気がつく

「五百円玉か」

「今のは……羅漢銭ですね」

「羅漢銭とは？」

客席にある解説席の豪徳寺薫の発言に茶々丸は問う

「分かりやすく言えば銭形平次の銭投げですね、しかしあれほどの威力は見たこともない。それを避けたり弾いたりする黒樹選手もまたすさまじいですがね」

「斬空閃」

龍宮の足元へと斬撃が飛び、黒樹は距離を詰める。龍宮は避けながら距離を取る

龍宮は袖から一万円分の積み重なった五百円玉をためらいもなく打つ

(あゝあ、メンド。何が悲しくて最初からこいつの相手何かしなくちやならないんだか)

そんな事を思いながら次々と五百円玉を弾き落とす

「神鳴流に飛び道具は効かないって知ってるだろ？」

「もちろん。だが、負けるつもりもないよ」

「あゝあ、ダリィ。正直面倒くさいわ。お前」

『速度』と瞬動を同時に使い、更に『風』でブーストし、超高速で龍宮の懐へと潜り込む

「私に苦手な距離は無い」

「偶然だな、俺もだよ」

龍宮は手に持った五百円玉を至近距離でマシンガンの如く打ち出す

「『零閃編隊・百機』」

高速で打ち出される五百円玉を悉く叩き落とし、龍宮へと斬りかかる

両腕を上へと弾き、無防備になった腹部へ零閃を当てる

龍宮は数メートル吹き飛びステージの端で態勢を整える

「……やっぱり速度がいまいちな。後ろに飛んで避けられるようじやまだまだだ」

斬刀が欲しい、と呟く黒樹

それに軽く体の調子確かめながら龍宮が呟く

「……今のでいまいちな速度かい。全く化け物だよ。君は」

「そりやどーも。で？ まだやるかい？」

「まだ負けて無いからね。それに手持ちの玉も残ってる」

黒樹はため息をつきながらも木刀を構える

龍宮も両手に五百円玉を構える

数秒の睨み合い

先に動いたのは龍宮だった

今までの二倍の数の五百円玉が黒樹へと襲い掛かる

「『秘剣・零閃』」

零閃で五百円玉をいなしながら『速度』の能力で距離を詰める。実際方向転換が出来る分瞬動より使い勝手がいい

ある程度近づいた段階でクウネルの使っていた重力魔法を使い、体制を崩す

「っ！？ 重力魔法！？」

一瞬打つのを止め、その隙に瞬動で懐へ入り込み、『雷』を纏わせ
た木刀で一閃

龍宮の意識を奪い取った

〈SIDE 黒樹〉

「あ~~~~、疲れた」

「お疲れ様。黒樹君」

「あ、高畑先生。次の試合ですか。頑張ってくださいね」

「ハハハ、相手はネギ君だしね。僕も本気で行くよ。そう約束して
るからね」

「そりゃありがたい。高畑先生とはもう一度本気で戦ってみたかった
んだ」

「原作と違って別荘使ってねえし、クウネルの修行期間も短かったか
ら高畑先生には勝てないだろう」

そして試合が始まった

「それでは第八試合、Fight!!」

合図と共にネギは両腕を顔の前でクロスし、戦いの歌で身体強化、更に風楯を前面に展開、そのまま瞬動に入ってタカミチに突っ込んだ

タカミチは突っ込んでくるネギに向けて居合い拳を三発程度飛ばした

その三発でネギの風楯は消し飛んだが、腕を顔の前でクロスさせて防御していたネギにダメージは無い

タカミチの後ろで瞬動から抜けたネギはタカミチの気で強化した右ストレートをかわして一気に畳み掛ける

……へえ、流石に短期間とはいえ、英雄に師事した結果か。多少はやるようになってる

近距離での高速戦闘、とは言っても修業期間が短すぎる。一瞬の隙をついて魔法の射手を使った『雷華崩拳』を放つが、高畑先生はほぼ無傷

ってーか『雷華崩拳』使えるまでにはなってたんだな。意外と戦闘力は上がった事にビックリ

アレだけ魔法の修行してたら学校の仕事は身が入って無いんじゃないの？ 俺関係無いけどさ。いや、あるか。習ってる訳だし。一応

そこからまた近接戦闘。何で距離とった時点で居合拳使わないんだか

場外で十数秒の戦闘の後、ステージに戻って高畑先生は居合拳を使

いだす

ネギは何発か喰らいながらも耐える。だが、高畑先生が『感化法』を使った『豪殺居合拳』を使いだす

ネギは最初の何発かはギリギリで避けれていたが、瞬動術の練習が甘い

あつという間に追い込まれ、障壁をいとも簡単に突破して『豪殺居合拳』をまともに喰らった

大砲のような一撃をまともに喰らって気絶する

「結果は予想通り、か」

高畑先生と戦えるのはまあ良しとしよう

ネギはまあエヴァが師事して無いからあんなモンか

そして、この時点で二回戦へ上がったメンバーが表示された

第二回戦（準々決勝）

第一試合 小太郎VSクウネル・サンダース

第二試合 古菲VS桜咲刹那

第三試合 高音・D・グッドマンVS神楽坂明日菜

第四試合 近衛黒樹VSタカミチ・T・高畑

「お疲れ様です、高畑先生」

そう言っ水の入ったペットボトルを投げて渡す

「ああ、ありがとう。黒樹君」

高畑先生はそれを開けて飲み始める

「さっきの試合。どうでしたか？」

「うん。予想よりずっと強くなってたけど、少し残念かな」

「そうですか。まあ魔法を師事してくれる相手もいなかった訳ですからね」

高畑先生は知ってるだろうが、俺は一応知らない事になってるからな。知らないふりをしなくちゃならんのは面倒だ

「そうだね。でも、出来るなら僕に勝って欲しかったな」

「アレだけ露骨に手加減しておいて『勝って欲しかった』、ですか」

まあ手加減してるとは言え、高畑先生に勝てる人なんてそうはいないだろうしな

「アハハ、ばれてたのか」

「そうですね。一度戦った身としてみれば、手加減以外の何物でもありませんよ。……ま、俺との戦いで手加減なんてさせませんけどね」

「……そうか、次の相手は君だったか。うん。一度負けたけど、今度は初めから戦力で行かせて貰うよ」

「そうこなくちゃな。この人との戦いは楽しみだ。龍宮と違ってモチベーションが上がる」

控室で休んでいると、刹那が俺の所にやって来た

「お嬢様が何処に行っただか知りませんか？」

「木乃香？ 知らないが。いなくなったのか？」

「ええ。いつの間にかいなくなっていました。携帯も繋がりません」

「……今動かせる人員はそう多くは無いんだがな。まあいないよりマシか」

そう思ってエンヴィーとエヴァに木乃香を探させる事にした

厄介なことになって無いといいんだがな

〈SIDE 三人称〉

麻帆良、世界樹前広場

其処に、木乃香は一人でベンチに座っていた

ハア、と溜息をつく

（どうにかして兄様の『仕事』っていうのを止めさせななあ）

人殺しなんて仕事をして欲しく無いと言っただけなのに、難しい

避けられているような感じもするし、一度腹を割って話さなければ
ならない

どうにかして兄と話す機会を持ちたい。そう思っでは居るのだが、
中々行動に移せない

もう一度溜息をついて、兄の顔を思い出す

いつでも自分の前にいて、いろんなものから守ってくれていた

とはいっても、去年からの一年だけなのだが

十年位前の時のように、自分の前から兄が居なくなるのが怖い
こんな仕事をしていれば、いつか必ず自分の前から姿を消す。そんな気がしていた

兄はより深く、より昏く、闇に落ちて行くだろう

今でも、他人の事など昨日の夕飯位どうでもいいと考えている兄は、きっとネジの一本や二本は外れているんだろう、と考える

人は一人では生きていけないというが、あの兄は一人でもものうのと生きていそうだ。と思う

「……ねえ、やっぱりあれって……」

「だがな、現状だってボスに何も言わずに行動している。これ以上やると流石に……」

「いいのよ、手柄を上げれば問題ないでしょ」

近くにいる、傍から見ればカップルというより兄妹に近い二人組が、木乃香の方を向いて何やら話している

二人のうち、赤い髪を振りまきながら同い年くらいの少女が木乃香の方へ歩いてくる

「ねえ、あなたもしかして、コノエコノカ？」

「え、そうですけど。何か御用でも？」

「やっぱり、ほらね。兄の方とそっくりだし」

「？ 兄を知ってるんですか？」

「まあね、知り合いよ。仕事のね」

その言葉に、木乃香は息を飲む

「ああ、別にあなただをどうしようって訳じゃないのよ。唯、あんまり似てたからもしかしたらって思っただけ」

「……もしかして、兄の『仕事』についても何か知ってるんですか？」

「ええ、知ってるわ。……あなた、妹なのに何も聞いて無いの？」

別に黒樹が仕事の事を木乃香に話す義務など無いのだが、木乃香は『妹なのに何も聞いて無い』と言う事に愕然とする

ふーん、と赤髪の少女は木乃香の反応にそう返す

「……あの、出来ればでいいんですが、兄の仕事について詳しく教えてもらえませんか？」

「……一応、理由を聞かせて貰えるかしら。機密事項だしね」

赤髪の少女はそう言って周りに認識阻害の魔法を掛ける

「……私は、兄に『仕事』を止めさせたいんです。人を殺す事が仕事だって聞いてますけど、そんな事しなくてもいいのって思うん

です。だから、詳しく知って、その上で一度話し合いたいんですけど、最近避けられている気がして……」

「なるほど、分かったわ。構わないわよ」

「おい、リン！」

「いいじゃない、無関係ってわけじゃないんだし。どうせ何の意味もないわよ」

そして、木乃香は黒樹の仕事の内容を知る

木乃香は黒樹が『仕事』と称し、やっていた事に驚く

殺人の仕事がほとんど。黒樹が関わった組織はほとんどが壊滅している等。その数は膨大だ。少なくとも、一人でやれるような数じゃ無い

「仕事の時、彼は『零崎黒識』と名乗っているわ」

「……そんな、事を」

木乃香は唇を噛み締める

「それで、やっぱり話し合いたい？」

「……はい」

「それじゃあそんなあなたにプレゼント」

鴉、アレだしなさい、アレ。と理不尽な要求をする

鴉と呼ばれる青年は渋々と言った顔で一振りのナイフを取り出す。アレで分かる辺り、かなり意思疎通できるんだなあ、と木乃香は感心する

ナイフの刃にはカバーがかけられており、見えなかった

「それは？」

「これは『精神と肉体を強制的に分離させる』アーティファクトよ。これをあなたのお兄さんに刺せば、お兄さんは精神世界に閉じ込められる。夢見の魔法でも使えば話せるから、そこでゆっくり話すのね。……ああ、後遺症とかは無いし、ナイフを抜けば元に戻るわ。効果は保障するわよ」

「そんな物を私が貰ってもいいんですか？」

「構わないわ。あなたと私は同い年くらいだし、彼にはお世話になったからね。あなたのお兄さんの為にもなる事だと思うし、これくらいいいのよ」

木乃香は疑うことなくその言葉を信用する

そして、木乃香はナイフを取り出し、刃を一度だけ確認する

刃には『Ark』と彫られていた

第三十一話 麻帆良祭二日目 本戦（後書き）

かなりの無理矢理感がしますが、見逃して貰えるとうれしいです

八月一日。サンホラの歌詞部分を消しました。

第三十二話 麻帆良祭二日目 VS 高畑（前書き）

更新が遅れて申し訳ないです。

もう一つの方に掛かりきりになってたのと、スランプになってたので……。

短いですが、投稿をと思ひまして。

第三十二話 麻帆良祭二日目 VS 高畑

「相も変わらず簡単に他人を差し出すな。お前は」

「何？ まだ怒ってたの？ 良いじゃない、『Ark』の実験台になる位。安全は保障されてる訳だし」

人ごみの中に紛れ、人を器用に避けて、局地的に『認識阻害』の魔法を使って会話の内容を聞かれない様にする

「ふふ、素直な子だったわね。一度実際に見せただけで信用してくれるなんて」

「相変わらずお前のやり方には脱帽するな」

「まあ『組織』内でもこういうことに長けてる人って中々いないからね」

「そうだな。……しかし、アレを渡して良かったのか？」

「ああ、『Ark』の事？ 大丈夫よ。どうせ試作品だし、普通の人間相手なら効果はあったみたいだしね」

もつとも、『普通の』人間相手なだけけれど。と付け加え、リンは近くの屋台でたこ焼きを買う

たこ焼きを食べながら話を続ける

「それに、あの子も精神的に大分参ってたみたいだしね。兄の方は大方『人質として利用されない様に』とでも印象付ける為でしょうけど。精神的にかなり疲弊してた状態じゃ、私じゃ無くても簡単に意識の操作は出来たわよ」

「言うほど簡単な事じゃ無いんだがな」

「そんな事は無いわ。嘘の中に真実を混ぜればれにくくなる。人の意識を操作・誘導するにはそう言った詐欺師紛いの方法は有効と言えるのよ」

「最も、私はそれを魔法や別の力でもカバーしてるんだけど。と言いながら、自販機でお茶を買う」

お茶を飲みながら、また話を再開させる

「ともかく、コレで『持ち主』に対してアプローチを掛ける事が出来たわ。これから妹の方がどう動くのかも気になるし、兄の方もうまくいけば行動不能に出来るでしょうしね」

「『肉体と精神の分離』か……『アクロ・システム』を元に岡田達が研究したアーティファクトとはいえ、研究そのものを始めたのはほんの四、五年前だろう。元々御霊の存在自体、今の人類の科学・魔法技術で再現できるレベルじゃ無いんだぞ？」

「だから言ったじゃない。『試作品』だって。形はともかく、効果があるモノを作れたのもほんの数カ月前。『持ち主』が最近見つかったって聞いて、大急ぎで研究してるわ。『完成させるために』」

ってね」

「アレとて、数千と言う実験で成功したいくつかの一つを持って来たに過ぎない。うまくいくのか？」

「さあね。うまくいったなら岡田は泣いて喜ぶでしょう。うまくいかなかったにせよ、何かしらの影響は与えられる筈よ。それを報告すれば、無駄にはならないわ」

「……兄の方を相手に、生きていられたらな」

「大丈夫でしょ。私とあなたのコンビは闘争はともかく逃走にはもってこいだしね」

そして、二人の姿は人込みへと紛れて行く

↳SIDE 黒樹↳

未だに木乃香の行方は分からない、と

悶々としながら報告を待っていると、俺と高畑先生との試合の間になった

あーあ、結局試合は見れなかったな

結果はこちら

第一試合 小太郎VSクウネル・サンダース 勝者、クウネル・サンダース

第二試合 古菲VS桜咲刹那 勝者、桜咲刹那

第三試合 高音・D・グッドマンVS神楽坂明日菜 勝者、神楽坂明日菜

クウネルと刹那が勝つのはまあ当然として、神楽坂が勝っちゃったか

『魔法無効化能力』があるなら魔法使いには天敵だよねえ

次の試合でどうなるか楽しみになって来た

いや、楽しんでる場合でも無いか。木乃香が無事なら別にどうでもいいけどな

「そんなわけでどうぞよろしくお願いします」

「いや、全くどんな訳か分からないけどね……」

既にステージ上。ぼーっとしながら歩いてたら既にここだったという。

まあ別に良いんだけどね

『それじゃあ早速！ 第四試合、開始！！』

～SIDE 三人称～

開始の合図と共に二人同時に感卦法を使う

「豪殺居合拳！」

「雷光剣！」

轟音と共に二つの攻撃がぶつかる。

その余波で距離を取り、木刀を後ろへ投げ捨てる。後ろには刹那
があり、投げられた木刀は彼女が拾う

「武器を捨てるのかい？」

「いえいえ、こっちのが面白そうなんで」

そして、ポケットに手を入れて構える。

「「豪殺居合拳！」」

連続した爆音。それぞれが放つ強力な居合拳を相殺し合う。

『こ、コレは！ 居合拳同士の戦いだーっ！！ デスメガネ……高
畑先生が使っているものと全く同じ、コレは面白くなりそうです！
』！

観客席、解説役の豪徳寺が叫ぶ。

黒樹は瞬動で移動しながら、高畑の居合拳を正確に撃ち落とし、尚且つばれない様に足元をシャボン玉で破壊する。

(まるで自分自身と戦っている様な錯覚を覚えるね……)

同じように動き、同じように居合拳を放つ。咸卦の密度までもがほぼ同じ。

鏡と相對しているかのような錯覚さえ覚える。

どちらも余裕を持って撃ちあっているが、余波とシャボン玉で足元はガタガタになって、瞬動で動いても足場が悪く、下手をすれば転倒してしまう。

ならば、と。

黒樹は空中へと飛び上がり、虚空瞬動を駆使して空を駆ける。

「上に行くか！」

それでもなお撃ち続け、黒樹は空から居合拳と魔法を織り交ぜて撃ち続ける。

「『魔法の射手 連弾・闇の千一矢』」

「『七条閃鋹無音拳』」
しちじょうせんそくむおんけん

無数とさえいえる膨大な数が撃ち続けられる。魔力任せの魔法の射手では相殺は難しいが、いつくかを一遍に当てれば相殺は可能だ。撃ち零しは豪殺居合拳で相殺し、まるで花火のように空に火花を散らせる。

尚も撃ちあうが、三次元的に動く為に当てる事はもちろん、相殺さえ難しい。

「空こでやりあっても得はあんまりなさそうですね」

両手をポケットから離し、広げる。風を操作して高速で移動し、降り立つ。

「高畑先生としても、超の監視をジジイから頼まれてるんでしょう。早めに終わらせる事には同感だと思いますが？」

「……そうだね。確かにそうだ。君が居合拳を使える事にも驚いたけど、任務の事を知っているのもね」

そのまま二人はステージの端で相対する。

客は危険を察知したかのように二つに割れ、黒樹と高畑の後ろには誰もいなくなった。

「丁度よかったですじゃないですか。空気を読む客だ」

咸卦の密度を上げ、手をポケットに入れて構える。

「居合拳の撃ちあいかい？」

高畑もまた、手をポケットに入れて咸卦の密度を上げる。

「それでもこちらとしては構いませんよ」

そして、一瞬の静寂。

「『七条大槍無音拳』！」
しちじょうたいそうむおんけん

膨大な数の居合拳を放つ事で、一本の槍が如く威力を高めた居合拳。

「『闇の吹雪』！」

対する黒樹は足りない数を魔法で補う。

卑怯だと思いかもしれないが、一度見ない限りは『コピー』出来ない為に、足りない火力を魔法で補う事を選択する。

居合拳を撃ち出しながら魔法を放ち、ぶつかると。

膨大な数の居合拳は強力無比。しかも、ずっとソレの鍛錬を続けて来た高畑に、黒樹が敵う通りなど無い。

だからこそ。

「この瞬間がチャンス、という訳だ」

真正面では無く、横から弾く形で居合拳を逸らし、最短ルートで高畑の後ろへと回り込む。

直ぐにポケットから手を抜き、近接戦闘に入ろうとする。

だが、もう遅い。

「チェックメイトだ」

バチィ！！ と音がして、高畑が倒れる。

『お、おーっとこれは予想外！ 黒樹選手、高畑選手を倒した！？ カウントに入らせていただきませす！！』

朝倉が叫びながらカウントを取る。

「……………やられたよ」

「お、意識あつたんすか」

「咸卦法を使っていたからね。体は頑丈だよ。しびれて動けないけど……………所で、さっきのは……………」

黒樹は口に手を当て、『しー』と形を作ってその先を喋らせない。

『10！ テンカウント取りました！ 黒木選手の勝利ーっ！！』

黒樹はその声を聞き届け、控室へと戻っていく。

第三十二話 麻帆良祭二日目 VS 高畑（後書き）

これからも更新は不定期になるでしょうが、応援していただけだと思います。

キツチリ完結させる気は有りますので。

……よくよく思えばコレBADEND なんだよなあ……HA
PPYENDまで書くのか。大変だ。

どこから分岐させればいいのか作者にも分からない（マテ

感想を頂けると嬉しいです。

第三十三話 麻帆良祭二日目 決勝（前書き）

少し短めです。

第三十三話 麻帆良祭二日目 決勝

特に何事も無くトーナメントは進み、準決勝。

英雄の一角であるアルビレオに善戦したものの、やはり刹那の負けだった。

「残念だったな。刹那」

「ハイ、少しばかり修行不足でした」

「気に済んな。アレは父さんと同じ英雄だしな」

「え？ どういう事ですか？」

「ソレについては後で詳しく教えてやる。木乃香の安全だけを確保しろ。誰が来てるか分からんからな」

「……分かりました」

そう言つと、刹那は何処かで着替えて木乃香を探しに行った。

次は黒樹対神楽坂。

二人とも既に舞台の上に上がり、構えている。

「……アンタ、バカにしてんの？」

「どじが?」

「傘で私と戦う気がって言うてるのよ!」

黒樹の右手にあるのは黒い布で覆われた傘。錬金術で作られた即興モノである。

「そうだけど、何か?」

フック型になっている持ち手を掴んで、クルクルと回しながら答える。

手加減するならこういう方がいいのだ。強度は相当だが。

『試合開始!』

コールがなり、試合が始まる。

右足で飛びかかって来た所を、左足に傘の持ち手を掛け、神楽坂のバランスを崩す。

「う、わっと!」

そのまま回転しながら着地する。

「少しは出来るみたいだが、まだまだだ。何かに振りまわされてるよっに見えるぞ?」

「うるさいわね!」

ヒュンヒュンとハリセンを振りまわし、黒樹に攻撃しようとする手を必死に動かす。

『こ、これは……まさか傘で戦うなんて思いもしませんでしたね』

豪徳寺がまたも必要あるのか分からない解説をしていた。

受け流すように傘を使い、バランスが緩い所を持ち手の部分で引つける。

神楽坂はバランスが崩れて旨く攻撃出来ずにイライラしていた。

「あーもう！！ どうなってんのよ！！」

「カルシウムが足りないな。牛乳飲んでるか？」

ケタケタと笑い。余裕を見せながら傘で応戦する。

神楽坂は一旦距離を取り、構えた。

「左手に魔力、右手に気？」

何故ハテナマーク出たし。と思う間もなく、ボウッ！ と炎の様な咸卦の気が現れる。

そのまま神楽坂は咸卦法を使って距離を詰め、ハリセンを振るつ。

「お？ 咸卦法？」

そついや使つてたな。ともう臆げな原作を思い出す。犯人は分かっているが。

そちらを睨みつけると、にこやかに手を振り返して来た。

(ムカつく野郎だ)

エヴァがいれば情報を引き出せるか……いや、遊ばれるだけか。そつ思い直して神楽坂に向き直る。

攻撃は熾烈になり、数が増えて行く。

この試合では黒樹は基本的に受け身に攻撃を返す。相手が攻撃してくればバランスを崩し、少しずつ体力を奪って落とす。

咸卦法で強化された神楽坂は身体能力が跳ね上がっている為、気ぐらいは使わなければ対応が難しい。

左眼を使えば速いのだが、こんな大衆のいる所で使う訳にもいかず。

傘で目に当たらないよう気をつけながら突きを繰り返す。

だが、避けられた。

そのまま回転し、傘を持った右手をハリセンで弾かれ、蹴りを食らわされる。

当然ながら左手で防ぎ、ダメージは無い。

(……今の動き……)

チラ、と観客席の方を見る。

フードをかぶった男がこちらを面白そうに見ていた。

「……クソツタレが。人で遊びやがって」

少し、キレた。

咸卦法を使い、密度を上げ、一撃で神楽坂を吹き飛ばす。

粉塵を上げながら観客席に突っ込む神楽坂。手加減なしの一撃だ。

「……チツ。クソが」

意図的にインパクトをハズされた。

当たる瞬間にずらされたのだ。確実に当たっていれば観客席を貫通してもおかしくない。アルビレオがまたアドバイスをしたのだ。

「ゲホッ、ゲホ！」

せき込みながらも、ハリセンに捕まりながら立ち上がる。

「いいだろ、お前はよく頑張った。今ギブアップするならそれだけで済むぞ」

めんどくさそうに黒樹が言う。

これ以上アルビレオの遊びには付き合っていられない。次の試合でボコしてから帰る。と、そう考える。

「ふざ、けんじゃ、無いわよ……」

「んん？ どうした？」

「ふざけんじゃないわよ！ このままで終われるもんですか！ アイツが危ない事してんのに、私が助けてやらなくて誰がやるのよ！」

神楽坂の持っているハリセンが変わる。強靱な剣へと。

記憶の断片が、黒樹に見えた。

血塗れのおじさん。近くにいる高畑。おじさんに向かって何か言っている神楽坂。

（コレ、は）

神楽坂を見ると、ノイズ混じりで見られなかった光景。これが、神楽坂の心の傷。

「は、大切な人を傷つけられたか」

剣を振りかぶり、高速で振るわれる。

だが、黒樹は気にも留めない。

「まあ、分からんでも無いが。お前じゃ力が足りねーよ」

半歩横にずれる。それだけで剣は空振り、ステージへと突き刺さる。

そのまま横に蹴り飛ばし、神楽坂は気絶した。

「朝倉！」

『あ。しよ、勝者、黒木選手ー！！』

観客席にいるフード男を睨みながら、黒樹は控室へと帰る。

控室。

刹那と念話が繋がり、ようやく見つかったと連絡が来た。

「取りあえずは一安心か」

そう考え、水を口に含む。

エンヴィーからの連絡では、特に何か有った様子も無いとの事。

(『誰か』が接触してなきやいいが……可能性はある、か)

誰も知らない時間帯。ならば、『誰か』が接触した可能性もある。気は抜けず、もしかしたら洗脳でもしてあるかもしれない。

『抵抗』^{レジスト}は出来るだろうが、まだ木乃香は半人前。レベルの違う相

手には勝てないだろう。

(どの道、多少は確かめる必要がある、か)

そう思いながら、黒樹は決勝へと向かう。

『さあ！ 遂にまほら武道会も決勝戦！！ 対戦するのは……圧倒的な剣技と拳で勝ち進んできた近衛黒樹選手と、謎の力で相手を圧倒してきたこれまた謎のフード男ことクウネル・サウンダーズ選手！！』

会場は盛り上がり、熱気に包まれている。

『さあ、盛大に戦って頂きましょう！ まほら武道会決勝戦開始いっ！！！！』

「フッフ、あなた、私の事を知っているのですか？」

「知らないね。だが、随分と気に喰わない事をしてくれたようだ」

手には木刀。咸卦法は既に発動しており、いつでも攻撃に移れる体制だ。

「さっきの試合、気付いていたようですね」

「あんなのが、アイツに出来る訳ねーだろ」

「いえいえ、ソレは偏見というものです。彼女は才能があり、ソレを引き出す手助けをしてあげただけですよ」

にこやかに笑うアルビレオに殺意を抱きながら右手を出す。

「『闇の吹雪』」

魔力の奔流がアルビレオを襲い、やや鋭角に撃ち込んだ為にステ
ージが削れる。

水煙が巻き上がるが、それで見逃す黒樹では無い。

「チツ、無傷かよ。少しはダメージがあっても良さそうだがな」

「いえ、私としても驚きましたよ。いきなりあのレベルの魔法を無
詠唱で使ってくるとは」

「お前お得意の重力魔法でも使ってやろうか？」

イラつきながらもう一度木刀を構え、斬撃を飛ばす。

ソレを軽く避けながら、アルビレオは一枚のカードを取り出した。

仮契約カード。
バックティオ

ざあ……と、アルビレオの周囲に、大量の本が出現した。

ごきん、と両手と首を鳴らして、いつでも飛びだせるように身体

に力を込める。

あのアーティファクトの効果は2つ。

一つは、特定人物の身体能力と外見的特徴の再生。但し、使用者よりも強い存在の再生は数分に限定される。

もう一つは

「この本……『半生の書』を作成した時点での、特定人物の性格・記憶・感情を全て含めての、『全人格の完全再生』です」

「くだらねえな。そんなモン集めて面白いのか？」

「出来ればあなたの『半生の書』も作ってみたいですねえ。詠春の子供ですし」

「全力で拒否する。当たり前だろうがロリコン」

「おや、私の趣味を知っているのですか」

アルビレオはそう言って、一冊の本を手にした。フードから覗く口元は、笑んでいるようにも見える。

「親子勝負、と行きましようか」

「興味無いね」

魔法の射手で絨毯爆撃し、足元を破壊。

「おやおや、そうですか。では仕方が無い」

アルビレオの周りに黒い球体がいくつも現れ、黒樹に向かって動く。

同じように黒い球体をぶつけ、相殺し、瞬動で距離を詰める。

「雷鳴剣」

雷を纏った木刀を振るい、ぶつける。

だが、手応えは無い。

「驚きましたよ。まさか重力魔法まで使えるとは」

「それくらいで驚いてたらキリが無いぞ」

虚空瞬動を駆使し、空からの攻撃。

下からはシャボン玉を使い、空からは魔法の射手の絨毯爆撃。

魔法の射手を良ければシャボン玉に当たって爆弾となり、シャボン玉を避けようと意識を向ければ魔法の射手が襲う。

全方位からの爆撃だ。並みの魔法使いたちなら避けられない。

そう、並みの魔法使いなら。

アルビレオはアーティファクトを使い、本を手に取る。そのまま槌を本に挟め、一気に引き抜いた。

そして光が包む。アルビレオがいた場所には渋い顔のおじさんがトウ。

(……さっきの神楽坂の記憶で見たな)

高畑の師匠であり、無音拳の使い手。

咸卦法を使い、全方位の魔法の射手とシャボン玉を撃ち抜く。

撃ち抜いた後、直ぐに元の姿に戻り、黒い球体をいくつも生み出す。

「チツ。面倒な」

舌打ちしながら、パチン、と音を鳴らす。

爆炎がアルビレオを包む。だが、爆炎の中から出て来たアルビレオは無傷だった。

「今のは魔法とは違うようですね。一体どんな力なのやら。興味があります」

「テメエには教えねーよ」

やはり、物理攻撃はほぼ効かない。ならば、長瀬がやった様に一気に消し去るしかない。

(……本体は別にいる筈だし、コイツ消しても問題は無い。……よな?)

一抹の不安を抱えるが、大した事じゃないか。と考え直す。

英雄殺しとなる可能性もあるが、どの道この学園全員相手にして
も無傷で勝てる自信はある。気にしても仕方が無い。

「ま、ここは俺の勝ちだ」

「ほう、一体何を見せて　！？」

瞬間、『無』の力がアルビレオを襲う。

殺気も敵意も持たない、知覚不可能の攻撃。それによってアルビ
レオは姿を消した。

強力な『無』の力はアルビレオを消しただけに留まらず、ステ
ジを円形に切り抜いた様な形に抉り取った。

「朝倉、カウントやれ」

地面に降り立ち、悠然と立ち尽くす。

分身である以上、また出てくる可能性もあつたが、もう出てくる
気は無いらしい。

そのままカウントを数え、黒樹の優勝が確定した。

第三十三話 麻帆良祭二日目 決勝（後書き）

漸くまほら武道会終了。

これから先の構想は完全に出来上がってるので、かなり早く……と
までは行きませんが、少なくとも其処まで間は開かないかと。
それこそ何か用事でも入ってこない限りは、です。

感想を頂けると嬉しいです。

第三十四話 麻帆良際二日目 歪む二人（前書き）

早くできるといいながら遅くなりました。

しかも短いです。

第三十四話 麻帆良際二日目 歪む二人

授賞式を終え、一先ずエンヴィーと合流する事にした。

マスコミは適当に撒いて喫茶店に入り、木乃香の報告を受ける。

「……で、特に変わった様子は無かったと？」

「強いて言うなら、少し立ち直ってたね。何かあったのは間違いない」

急激に立ち直った訳じゃないだろうが、少なくとも一人でぼーっとしていて解決できる問題じゃない筈だし。

何かがあった。誰かが接触した。という可能性もある。

木乃香が一人で結論出してどうにかしようとしてるならいい事なんだが。

「それに、お父様の事探してみたいだよ？」

「俺の事を？」

武道会に行っていた事は知ってる筈だしな……終わった後に何かあったと考えるべきか？ もしくは、俺が一人の時に来るか。

どちらにせよ、何か心境の変化が起きる様な事があったのは間違

いないだろう。

この麻帆良^{箱庭}に侵入して、木乃香に何かする様なクソ野郎は上下左右に引き裂いてブチ殺す。

……大分物騒な方向に思考が向いたな。まだ誰かが干渉したと決まった訳でもないのに。

取りあえずどうするべきか……木乃香と接触すべきかな。だがあまりべたべたしてると見られた時が面倒だ。疎遠にしておけばいいんだが、接触しようとしてる訳だしな。

というか、どの道会わなきゃならんだろ。学校一緒なんだし。

そう考えると、会うべきかと思ってしまふ。というか、会うかもう考えるの面倒だし。

「何処にいるんだ？」

「エヴァンジェリンの家。別荘には入って無いみたいだけど？」

エヴァの家か。ウジウジ考えても仕方が無い。さっさと行こう。

ガチャ、と音を立ててドアを開ける。

中を見ると、紅茶を飲んでいるエヴァ、刹那、茶々丸、そして木乃香。

「兄、様」

「俺の事探してるって聞いたんでな。エンヴィーに」

俺もソファに座り、茶々丸に紅茶を淹れて貰う。

何故か俺と木乃香を交互に見ている刹那。どうした。エヴァはやれやれ、といった顔をしてるし。

「で、木乃香。単刀直入に言う。俺に何の用だ？」

「え、えっと……兄様の仕事、教えてほしいんやけど……」

仕事？ 零崎としての仕事の事かな。詳細を教える事は出来ないが、まあ少しくらいならいいかな。

「でも、兄様の仕事仲間っていう人から聞いたんよ」

……何？ 仕事仲間、だと？

俺にそんな物はない。いるとすれば、それを騙って得のある連中。俺は老若男女はもちろん一族郎党皆殺しが基本だから恨みなんて残ってても分からない。

だが、仕事仲間なんて一度も持った事が無い。となれば、おのずと答えは見えてくる。

ハンプティダンプティの組織連中か。

「容姿は？」

「えっと、一人は女の人で肩甲骨くらいの長さの赤い髪、ウチと同じ位の身長。眼も赤かったえ。もう一人は男の人で黒髪の天然パーマみたいな人、身長は龍宮さん位あった」

それだけ分かれば十分。後は雰囲気を探し出せる。

ドアを開け、外へ出る。

「どこ行くん？ 兄様」

顔だけ振りかえり、木乃香の顔を見る。

木乃香の眼は何か不安そうで、求めている答えがある様だった。

「掃除さ。ゴミ掃除」

それだけ言い残し、森の中へ行く。エンヴィーを連れて。

まだ日はある。影の能力は使える筈だ。

影の能力を使い、足元に広がって行き、眼を瞑る。視界は幾重にも分かれ、次々と人の顔を映していく。影が路地で止まれば人の顔を判別する位訳は無い。

かなり疲れるから、あまりやりたくは無いんだがな。

そして、数時間。日は暮れ、周りはライトアップされた装飾などが目立つ。

もつけない可能性もあったが、俺は運がいいらしい。

「見つけた」

口元を三日月形に歪ませ、笑う。そのまま『扉^{ゲイト}』の魔法で影を通り、一番近い場所へと転移する。

エンヴィーは既に付いて来ている。

俺達はその二人組を追いかける。距離を取り、離れ過ぎないように、近づき過ぎないように。

やがて気付いたのだろう、足速に歩きだし、俺の尾行を撒こうとする。

当然、俺から逃げ切れる筈も無い。

いくつか路地を曲がり、いろんな道を通り、森のある場所に来る。周りに人影は無い。

「いい加減出てきたら？」

女の声。若いな、まだ十代じゃないのか？

そんな事を思いながら茂みをかき分け、目の前に立つ。

俺の姿を確認して顔色を変える二人。当然ながら隔離して隠蔽してある。逃げられはしない。逃がしはしない。

エンヴィーは『隔離』の外で待機している。

「っ!？ アンタ」

「はじめまして、と言つべきか？」

殺気を隠そうともせず威圧する。別にこいつ等の意志なんてどうでもいい。後で洗脳して聞きだせばいいんだから。

故に、話を聞く必要も無い。だが、確認は必要だ。

「お前等が、木乃香に接触したのか？」

「あなたの妹？ …… そうね、接触したわ」

ビンゴ。それだけ分かれば十分。後は洗脳してからでいい。

足に魔力を込め、瞬動で一気に近づいて殴りかかる。

相手の女はそれを避け、俺の方を向いて何か呟く。瞬間、頭にか違和感が走る。

視界がブレる。

陽炎の様に揺らめいて、旨く狙いを定められない。

「サトリ、つて妖怪を知ってる？」

サトリ。確か、人の心を読む妖怪だった筈だ。

「そう、サトリは人の心を読める。でも、使い方次第では、『受信機』から『発信機』にも成れるのよ」

つまり、簡単に言うならば。

心を読む、と言う事は脳から思考を読み取る。ならば、逆に脳に干渉して思考や感覚を操作する事も可能だろう。

力次第だが、ここにいる奴らは本物とも限らない。五感が支配されているならば、聴覚を操って聞こえる様にしている可能性もある。

だが、無駄。

見えないなら、見る必要は無い。

ここは既に隔離されている。それなら暴れても外にバレる事は無い。少なくとも隔離されている中でこれが維持できている以上、奴らはこの中にいる。

そう考え、暴風を巻き起こす。竜巻が巻き起こり、木々が揺れ、石が飛ぶ。風速百メートルを超える暴風が吹き荒れ、隔離された境界内は悲惨だった。

簡単に言えば、意識の集中を妨害する。それだけでこういう類の能力は使えなくなるし、思考を読んで攻撃を避けるなら思考が及ば

ない攻撃をしてやればいい。

例えば、暴風で吹き荒れる木々や石。

避けられる可能性もあるが、並行して雷撃を其処彼処に飛ばす。どれか一つに当たるだろう。下手な鉄砲数撃ちや当たるってな。

そして、一つの悲鳴。同時に視界が戻る。

「ハハハッ！ クリティカルヒットつかあー！」

もう一度俺に対して五感のジャックを行おうとしているらしいが、遅い。

頭に触れ、パシン。と音がした。

「『魔法の射手 連弾・闇の十七矢』！」

至近距離からの魔法の射手。殺すつもりにしては少ない。倒れているこの女に被害が行かない様にか？ 甘いな。

「『魔法の射手 連弾・氷の十七矢』」

相殺し、瞬動で近づき、頭に触れる。

これでもう、俺から逃れられない。持っている情報を全て吐いて貰う。

隔離を解き、外で待機しているエンヴィーを待つ事にした。

SIDE 三人称

エンヴィーと一緒に何故か木乃香まで来ている。その事に、黒樹は疑問を覚えた。だが、何も聞かない。

「……兄様。その人たちに何したん？」

「……洗脳だよ。持っている情報を全て吐かせる為にな」

黒樹の方を見ながら何かを呟いているが、知らない。黒樹はやるべき事がある。情報を吐かせて、敵の居場所を突き止め

皆殺しだ。

「……情報を吐かせたら、その人たちも殺すん？」

木乃香の横を通り、エヴァの家に向かおうとして、立ち止まる。別荘内なら死体の処理も簡単だ。

黒樹に対して聞く木乃香の声は、微かに震えていた。

「そうだな。用済みとみなせば殺す。生かして置く理由も無い」

洗脳が解ける可能性は無いだろうが、万が一何かあると面倒だ。絶対は無い。

そのまま、木乃香の横を素通りし、エンヴィーを連れてエヴァの家へと向かおうとした。

木乃香の手の中には、一振りの^{ナイフ}Knife。刃には『^{アーク}Ark』と彫られている、特殊なモノ。

刃は未だカバーに覆われており、その魔力は隠蔽されている。

アクロシステムを参考　つまり、能力者の中の精身体を引き剥がす力を持つナイフ。

だが、唯の人間には精神を閉じ込める能力しか無い。それは研究の仕方故か、それは分からない。

無理矢理、強制的に。

それは耐えがたい激痛と、最悪精神の崩壊を呼ぶ。唯の人間なら生き残れない。

だが、木乃香は知らない。

サトリの能力で思考を誘導され、能力者が存在しないが故に能力者に対して実験する事が出来なかったアーティファクトの力を。

唯の人間に対しては精神を内部に閉じ込める力を持つ。だからこそ、木乃香は疑う事無く、そのナイフを掲げる。

黒樹が気付いた時にはもう遅い。

「大丈夫やえ、兄様」

そのナイフは振り下ろされ、黒樹の胸へと深く突き刺さった。

第三十四話 麻帆良際二日目 歪む二人（後書き）

木乃香がヤンデレ……？

いや、デレじゃ無いですよね、これもう。

結構無茶な部分とかありますが、目をつぶって頂ければと。

感想を頂けるとありがたいです。

第三十五話 麻帆良祭二日目 変化する世界（前書き）

この小説を読んでも人っているんですかね？感想が来なくて呼んでる人がいるのか不安です。

アクセスを見るといるんでしょうけど、新しく更新された小説を探してたまたま目に入る。それで入ってみるけど面白くない。なんて事じゃ無いと良いんですが。

第三十五話 麻帆良祭二日目 変化する世界

「……………」

響き渡る絶叫。

特殊なアーティファクトを使った事による、耐えがたい激痛。

能力が暴走し、近くの木が燃え、石化し、氷結し、切り刻まれ、破裂する。

空中へと雷撃が飛び、地面が円形に抉れる。

吹き荒れる暴風で吹き飛ばされた木乃香は、その姿を見て焦る。

「な、何で……何で兄様が苦しむんや!？」

確かに普通の人間であれば効いただろう。精神を閉じ込める。いや、精神と肉体を乖離させるアーティファクの力が。

だが、それはアクロシテムを元とした力。不完全故に、精身体をその身に宿す黒樹にとって激痛を生む。

本能的に動き、痛みを和らげようとするが頭が回らず、その為の思考が出来ない。

故に、

この痛みを生んだモノを敵と認識して、殺そうと動いた。

能力まで用いた瞬動。戦闘経験があり、普段から動きを見慣れているとはいえ、全力の殺気をぶつけられた上で本気の動きについていける筈が無い。

そのまま、木乃香の胸を抉ろうと黒樹が腕を動かす。

だが、当たらなかった。

「危ない危ない。もう少しで死ぬ所だったね」

軽口を叩きながら、木乃香を抱えているのはエンヴィー。

「ど、どうして……？」

口を吐いて出たのは、疑問。それが黒樹に刺したアーティファクトの事を言ったのか、エンヴィーが自身を助けた事を言ったのかは分からない。

だが、エンヴィーは答える。

「お父様に頼まれてたんだよ。有事の際は命をかけて助けろってね。まさかお父様自身が殺そうとするとは思わなかったけど、まだ命令は続行中だ」

命令したのは黒樹で、襲っているのも黒樹。

本来なら見捨ててもおかしくは無いが、命令は続行中。「守るな」との命令を受けていないので、護衛を続ける。

今、命令できる状況じゃ無いとしても、本能的に殺そうとしているからこそその判断だ。

だが、この状態の黒樹を、エンヴィーは止められない。

木乃香を庇いながら攻撃を受けるエンヴィー。その攻撃は一撃一撃が即死級。元々殺す為に特化した能力だ。殺し合いにおいてこそ、その力は真価を發揮する。

エンヴィーの持つ賢者の石。それによる命のストックがガリガリと削られていく。

思考が出来ない為に、頭を使って発動する錬金術は発動しない。否、出来ない。

剣術が使えない状況と言うのがまだ救いがあった所か。能力だけでも十二分に強力で状況は悪いが、剣術が加われば更に命のストックは減っていただろう。

そして、エンヴィーの足を消し飛ばし、木乃香の胸を貫こうともう一度手を伸ばす。

木乃香は逃げようとしても、それを回り込むように攻撃を仕掛ける為、逃げきれない。故に、ここで殺されると思った。

自分の所為で大切な兄が傷つき、痛みに呻き、自身を殺そうとしている。なら、と動きを止め、受け入れる様に手を広げる。

「……死ぬのは怖い。けど、ウチの所為でこうなったなら。兄様がそれで救われるなら」

償いをするように、死を受け入れようとする。

だが、その腕は横から止められた。

「馬鹿な事を考えるな、木乃香。止める方法はまだある筈だ」

木乃香の影から現れたのはエヴァ。黒樹の腕を掴んで放り投げ、距離を取る。

「……………」

咆哮。痛みに耐える様に、激痛を和らげる様に、叫ぶ。

「チツ、一体どうなっている。ああなったのは何が原因だ」

「……………多分、兄様の、胸のナイフ。やと、思う」

途切れ途切れに、息を切らせて言う。

木乃香を蝕むのは、恐怖。

当然だ。裏に関わっているとはいえ、一介の中学生。その上、自分が信頼している兄から殺されそうになった。

一度は勢いで死を受け入れようとしたが、今それを思い出すと手が震える。

怖い、と。感情が身を包む。

「ナイフ……？ 奴がそんな物を喰らうとは思えんが……」

「……ウチが、刺したんや」

「……何？」

疑問を浮かべるエヴァ。仲の良い兄妹が、妹を溺愛している兄が、兄を溺愛している妹に刺された。

それは疑問しか浮かばないだろう。どうなったら、そう言う状況になるのか、と。

だが、詳しい事は後だ。今は黒樹を止める事が最優先。取りあえず、胸のナイフを抜けば元に戻る可能性はある。

魔力を込め、身体能力を強化する。結界で力が弱まっている為、念の時の為に『賢者の石』を持っているのだ。

それに秘められた膨大な魔力を使い、黒樹を止めようと動く。

糸を手繰り、動きを阻害する。無駄。糸は触れた瞬間に次々に切れて行く。

魔法で動きを阻害しようとする。無駄。魔法は糸と同じ様に円形に挟まれて消滅していく。

「 チツ！ リク・ラクラ・ラック・ライラック！」

舌打ちをしながら、詠唱を紡ぐ。

「『こおるせかい』！！」

百五十フィート完全凍結呪文。強烈な冷気が黒樹を襲う。だが、殺す為では無く、動きを止める為。この程度なら直ぐに破壊して出てくるだろう。

「

！！」

案の定。円形に氷を抉りながら出て来ようとしている。そこにエヴァが身体を強化して近づき、ナイフに手を伸ばす。

全盛期の力を取り戻したエヴァの身体能力は雷速にさえ対応できる。それほどの能力を持つても、黒樹の放つ『無』の攻撃は避けきれなかった。

いや、避ける避けない以前に、反応が出来ないのだ。

左腕を消し飛ばされ、一瞬のすきをついて蹴り飛ばされる。

「クッ！」

上へと蹴り飛ばされたエヴァは地面に降り立ち、左腕を再生させる。右腕には、一振りのナイフ。

「

」

ドサツ。そんな音を立て、黒樹は地面へと倒れ込む。起き上がる
そぶりは、無い。

「……一応は、安心。か？」

疑問を残しながらも、右手に持ったナイフを見る。

「『^{アーク}Ark』。方舟？ ……どういう事だ？」

未だ体を振るわせる木乃香を見つつ。新たな疑問に頭を抱える。

「イタタ……悪いね、助けて貰って」

「素直に礼は言えんのか」

「ありがとう」

結構な量のストックが削られた。それでも三ヶタはあるのだが、
だからと言って油断はしないモノだ。

「お父様達を連れて行くな、アレも連れて行って貰える？」

エンヴィーは黒樹が洗脳した二人を指差し、そう告げる。

先ほどの戦闘の余波で良く死ななかつた物だ。運の良さは驚嘆に
値する。

「良いだろう。黒樹が洗脳したようだからな。何かしらの情報は持
ってるという事だろう」

一旦全員を家に連れて帰るか。そう考え、『賢者の石』を仕舞って黒樹を抱えて、木乃香とエンヴィー、その他二人を連れて転移した。

別荘内。

木乃香から事の顛末を聞き、それに対してエヴァは思考する。

(……あの女から貰った、か。木乃香の魔法の抵抗力は高い方だろうが、それをすり抜けて意識に介入したという所だろう)

実際、調べてみれば意識に介入された様な跡が残っていた。

警戒心を薄れさせ、取り込みやすくしたのだろう、と判断し。

「黒樹はまだ目覚めんか？」

「ハイ。意識は未だ目覚めず、呼吸や脈は安定しているのですが、魔力が不安定に放出されています」

別荘内でのみ動ける、メイド服姿の人形がそう答える。

黒樹の持つ魔力は膨大どころか無限だ。アクロの心臓は半永久的なエネルギーの塊なのだから、当然の事だが。

不安定に漏れている所為で一時的に別荘内の魔力濃度が上がるほど。それだけ漏れ出しているのだ。

「このアーティファクト。どういう能力だ？」

エヴァが聞いている相手は、黒樹が洗脳した二人。渡した本人なら、何か知っているだろうと判断し。

「それは、肉体と精神を分離させるアーティファクト。刺された相手はナイフを抜くまで精神世界に閉じ込められる物よ」

それを聞き、眉を顰める。

「なら、何故黒樹は苦しんでいた？ 理由は分からないのか？」

「それは分からない。少なくとも、私達が試していた時点では問題無く使えた」

「……ふん、使ってみるのが速いか」

そう呟き、ナイフを女の方に刺す。同時に、糸が切れた様に倒れる女。

数分待つても、起き上がる気配は無い。

「……このアーティファクトが壊れているという訳ではないのか？」

ならば、一体どういう事だ？ そう考える。

黒樹と女　　リンの反応がちがう。なら、二人には何かしらの違いがある筈だ。

リンの方は分からないが、黒樹の方なら心当たりがあり。それか？　と目星を付ける。

精身体。

黒樹が特殊な力を手に入れた原因だと知っている為、恐らくそれが何かしらの影響を及ぼしたのだろうと判断し。詳しい事は黒樹が起きてから考えようと紅茶を飲む。

(……全く。嫌な部分で勘が当たる奴だ)

～SIDE　黒樹～

暗い。それが俺の第一印象だ。

この場所は暗く、闇ばかり。永劫続くのではないかと言う暗闇を唯見つめるのみで、自身は何も動いている様には感じ無い。

そして、ふと見えたのは青い球体。地球だ。

俺達は、其処へ落下する。一人も分かれず、唯一人の中へと入る。

客観的に、俺はそれを見ていた。他人事のように、自分は関係ないという様に。

其処にいたのは、『俺』だった。

精身体が全て、余る事無く『俺』の中へ入っている。本来ありえない光景。ありえてはならない光景。

そうか、これは記憶なんだ。俺は端的に今の状況を認識する。

『俺』の記憶では無く、精身体達の記憶。何故これが見る事が出来たのかは分からない。

恒久的な闇。永劫続く旅。『個』の概念さえも薄れているこの状況で、地球へと辿りついた。

そして、俺へと堕ちた。

俺自身が望んだ事。これは俺の力となって、手に入れたモノだ。神の力を使ったからと言っても、俺が手に入れたことには違いない。

『僕は』『私は』『俺は』

精身体達の声が聞こえる。本来、この地球に降り注ぎ、死を甘受する予定だったが、俺の手でそれが止められた。

ある意味において、人類を守ったとも取れる。だが、俺がいなければそもそもいること自体が無かっただろう。

『死にたい』 『生きたくない』

永劫続く闇は精身体達に一つの考えを持たせた。それが、

『死こそが最終進化』

だからこそ、生物に取りついて自殺しようとした。そして、生き残った俺は能力者となり、死を『受ける』側では無く、『与える』側になった。

殺人鬼の称号とも言える『零崎』を名乗るのも、俺に合っていると思ったからだ。

『生と死は紙一重』 『生と死は大違い』

『君は、どちらを選ぶ？』

俺が選ぶのは一つの道しかない。泥にまみれようと、どれだけ惨めでも。木乃香だけは守りたい。

そう、思い続けてきた。この手が血にまみれようと、どれだけ汚れようと、守りたい物を守る。それだけで十分だった。

『大丈夫やえ、兄様』

それは、最悪の形で裏切られた。

何故、木乃香は俺を刺した？ 何故、木乃香は俺にナイフを刺す

ような真似をした？

何故何故何故何故　　そう、問い続ける。

だが、答えは出無い。

木乃香は俺が嫌いか。それは別に構わない。人殺しが人並みの幸せなんて手に入れられない事くらいわかってる。

蔑まれて、恨まれて、嫌われる。それが人殺しの末路だ。

それでも、守りたいと思っていた。

それが、揺らぐ。

理由は分からない。裏切られた事か、別の何かが要因なのかは分からない。だが、今まで通り守ってやりたいとは、思えなくなっていた。

どうでもいい訳じゃない。唯、木乃香に対する思いが急速に薄れている。

『なら、　　してしまえばいい』

誰かの声があった。だが、ぶれた様な声はハッキリとは聞こえなかった。

そして、目覚める。

ゆっくりと目を開ける。其処は見慣れない光景。だが、見た事はある。恐らくは別荘の一室だろう。

「ゲツ……」

息がつまるような痛みが胸に走る。だが、触ってみても怪我は無い。

それに、頭が痛い。頭を触ろうとすると、左眼に当たる。無意識のうちに閉じていたようだ。

左眼を開ける。

すると、飛び込んできたのは点と線の世界。世界の綻びが、既に視えている。

本来なら、視覚化されたこの状況は、自身が望まなければ起こらない。そして、自分の意思で止める事が出来る。

だが、出来ない。一体どういう事だ？

左眼を抑えながら立ち上がり、軽くめまいを覚えながらも歩きだす。

予想通り、別荘の中だった。青い海と砂浜。広い城。全てに覚えがある。

「ん？ 漸く起きたか、黒樹」

「……ああ。俺は、どれくらい寝ていた？」

「そつだな、一週間だ」

一週間。その言葉を聞いた時、固まった。一週間だと？ 幾らなんでも長すぎやしないか？

相変わらず左眼を抑えたまま、グルグルと頭の中で考える。

「……お前、左眼をどうかしたのか？」

「……ああ。まあ見れば速いだろうな」

左眼から手を離す。途端に見える様になる点と線の世界。今まで何度も使った事があるからある程度は慣れているが、完全になれる事は出来ないだろう世界。

「お前、それは制御できるんじゃないのか？」

「いや、どうやら出来ないらしい。何が原因かと言われれば、アレしか思い浮かばないけどな」

苦笑しながら錬金術を発動させ、鏡を作る。鏡をのぞきこめば、映っていたのは自分。

そして、左眼にはウロボロスの文様。どうやら、消せなくなったみたいだ。

適当に眼帯で左眼を覆い、見えない様にする。

「あの後どうなった？」

「お前が洗脳した連中から敵の居場所を聞き出して拘束。適当に牢屋に放り込んでるが、出る気は無いらしい。後は……木乃香に精神を安定させる為に魔法を少し使った位か」

「そうか、敵の場所を教えてくれ」

「ああ」

十分分ほどかけて詳しく場所を教えてくれた。どうやら魔法世界にあるらしい。

夏休みだ。

「夏休み、魔法世界に行く。其処で敵は皆殺しにしてやる」

「……お前、木乃香の事は聞かないんだな」

「聞いて欲しいのか？ ……何だろうな、今までは何があっても守りたいと思っていた。だが、今はもうその気持ちが薄れてる」

「……そうか。あんな事があつたんだ。無理も無いとは思うが」

いや、唯刺されただけじゃ無い。俺の中で『何か』が変わった。

今は唯の不安要素でしかないが、放っておくと最悪の形で出る事になるだろう。そう感じる。

世界がどうなろうと、知った事じゃ無い。だが、多少薄れても守

りたい気持ちはある。俺の手でそれを壊す可能性があるのなら

「 エヴァンジェリン。お前に、渡して置くものがある」

「何だ？ 急に改まって」

そして、俺は『

』をエヴァに渡した

第三十六話 麻帆良祭三日目 動く者達（前書き）

短いですが、これ以上間隔開くと駄目かなあと思い投稿。

第三十六話 麻帆良祭三日目 動く者達

麻帆良祭二日目夜。

この日、超鈴音のお別れパーティと言う事で、3-Aのメンバーは各自騒いでいた。

いないのはエヴァと黒樹のみ。木乃香は刹那に連れられ、この場で騒いでいる。エヴァの魔法は効いているらしい。

精神は安定し、突発的な事はしないだろうと刹那は一安心する。

「や、元気してる力？」

「超鈴音……何しに来た？」

ネギと長瀬の二人に連れられ、ここに来た超。手には黒いスーツケースがある。

「そんな睨まないで欲しいネ。黒樹に頼まれてたものが完成したから、渡して貰おうと思ってたヨ」

「頼まれてたもの？」

超が渡したのは、手元のスーツケース。軽く叩いてみるが頑丈さは並みでは無く、開けてみれば中には衝撃吸収材が敷き詰められている。

その中央には、同じ様に黒いビニールの様な物に包まれた一つの物体。

「丁寧に扱って貰いたいヨ。結構高級品ネ」

「わかった……一つ聞きたいが、黒樹様はお前の計画に荷担しているのか？」

「ん？ 荷担というより、雇った様な物ヨ。これ作るのを手伝うと言う条件でネ」

その言葉を聞いて驚く刹那。これが、其処まで価値のあるものは思えない。

「余計な事は話さないで貰いたいね」

トンツ、と軽快に降り立ったのは黒樹。ジーンに黒の長袖。普段通りの格好だ。

「黒樹様、大丈夫だったんですか？」

「刹那さん、違いますよ。彼はエンヴィーです」

茶々丸が横で訂正するように告げる。見た目で判断は出来ないが、茶々丸は練丹術を学ぶ上で気の流れを読み取ることが出来るようになり、エンヴィーの正体が分かる。

「そう。その荷物を貰いに来たんだよ。お父様は今動かない方がいいからね」

刹那の持つ、黒いスニーカーを指差す。

「動かない方がいい、とは？」

「目覚めて無いし、いろいろと不安定。幼馴染なら一度会った方がいいんじゃない？ 俺からはそうとしか言えない」

やれやれ、とでも言いたげに首を振り、刹那の持つスニーカーを受け取る。

発光している世界中を見て、エンヴィーは声を漏らす。

幾らホムンクルスだと言っても、ある程度の感性はある。美しいと感じる事もあるのだ。

「……明日。明日で、全てが決まるヨ」

「お父様は今動けない。多分動かないだろうしね」

「それは僥倖。黒樹が本気で止めにかかれば、この作戦は成功しないだろうしネ」

そもそも、一撃で殺される可能性もある。抵抗させさせてくれな
いかもしれない。そんなレベルの相手だ。

「黒樹様はお前の計画を知っているのか？」

「知っているヨ。教える事も含めてこちら側に入って貰ってたからね。最も、二日目までだったガ」

「計画は三日目に行く予定ですので。黒樹さんは必然的に最終段階では関わらない事になります」

「興味もなさそうだったしネ。結果も含め、魔法がバレようとバレまいと気にして無いヨ」

「やれやれ、とでも言いたげに溜息をつき、手に持っていた飲み物を飲み干す。

「全ては明日、いや、時間的には今日。全てが決まるヨ」

発光している世界中を見ながら、超はそう呟く。

話を盗み聞きしている者たちを視界に入れながら。

「え……それ、どっいつ事？」

「どっつもどっつも無いです。黒樹さんは、超さんの計画に荷担しているのですよ」

綾瀬は口早に言う。聞いている神楽坂は困惑気味だ。寝起きにそんなこと言われても、困るだけでしか無いとは思うが。

「じゃあ、もしかしたら、黒樹に聞けば何か教えてくれるかもしれないって事？」

「可能性は薄いですが、何か超さんの計画について知っている事は間違いないですよ」

「じゃあさ、直接聞いてみようよ」

先日魔法の存在を知った早乙女が口をはさむ。宮崎は後ろで静かに会話を聞いている。

この場にいるのは、ネギを手伝おうと協力的な姿勢を見せている生徒達。

神楽坂、宮崎、早乙女、朝倉、綾瀬、クーフェイ、長瀬。そして、木乃香と刹那。

「兄様が……」

「むう……黒樹殿は相当な使い手でござるからなあ……敵になつたら勝てる気がしないでござるが」

「三日目は手伝わないと超さんが言っていました。嘘という可能性もありますが、どう思いますか？」

「……兄様は、そう言うのは本当に興味無いと思う。多分、何かと

取引で手伝ってたんや無いかな」

木乃香は静かにそう告げる。刹那は、何も語らない。

「ぬう……だが、言っても教えてくれるとは思えねえな」

「でしょうね。黒樹ってネギの事嫌いみたいだし、ネギの事手伝ってる私達の事、あまりよく思って無いみたいだから」

軽い怒気を孕ませながら、神楽坂はカモに答える。

朝日はとうに上り、三日目のパレードが町の中を進んでいるのが見える。

「ともかく、言ってみるのがいいと思います。聞けば、もしかしたら何か教えてもらえるかもしれないですから」

「でも、どこにいるの？ 寮？」

「多分。エヴァさんのログハウスでしょう。会う事位なら出来ると思いますが」

刹那が口をはさみ、それを教える。

「エヴァちゃんのこと？」

「じゃあ、早速行ってみましょう。黒樹さんに頼みこんで、超さんの計画を教えてもらわなければ」

ネギが意見をまとめ、全員がそれに賛同する。

刹那だけは、今の木乃香を黒樹と会わせて大丈夫かと心配しているようだが。

エヴァンジェリンのログハウス。

ベルを鳴らし、鍵のかかっていないドアを開ける。

「不用心じゃないの、これ？」

「いつも開いてるから、大丈夫なんやと思うけど」

ぞろぞろと全員でエヴァのログハウスに来て、ドアを開けてエヴァを呼ぶ。

エヴァは眠気眼で目を擦りつつ出てきて、ネギや神楽坂を見つけると、いつも通りの雰囲気と眼力を戻す。

「何の用だ、ぼーや。修行の話はもう終わったよな？」

「黒樹さんがここにいると思って来たんですが」

「……黒樹にか？ 何の用だ？」

眉をひそめつつ、エヴァは問う。

「超さんが、今日未明に何か起こす事を知っていますか？」

「ああ、茶々丸を貸してやったからな。知っているよ」

「では、何をやるうとしているのかも？」

「聞いている。詳細は知らんがな。興味も無いし」

「黒樹さんがそれを知っていると聞いたので、教えてもらえればと思っ
て来たんです」

エヴァはそれを聞いて、目を丸くする。何を言っているんだ、とばかりに。

「……まあ、好きにするといい。そのソファに寝ている。あまり騒がしくするなよ。出来ればお前等はいれたくも無いんだからな」

これは黒樹自身の問題だと、黒樹に問題解決を丸ごと投げつける。ソファで横になり、目を隠す様にして寝ている黒樹を一度見てから、二階へと戻る。

木乃香がいる。今の黒樹に会わせるとどうなるか分からないが、何かしらの動きがある筈だと思い、魔力や気を監視しつつ着代える事に。

数分間ネギ達が起こそうとして、黒樹は黒樹でガヤガヤと騒がしい事に気付き、上半身を起こして騒々しさの原因に目を向ける。

左眼は瞑ったまま。眼帯をして向き直る。

「で、何の用だ」

「超さんの計画を知っていますよね。出来れば教えてもらいたいと思っただけです」

「ふうん。で、対価は？」

「え……対価？」

「俺が情報を渡すんだ。お前等は俺にその情報に見合うモノを渡すのが道理だろう？ 等価交換というじゃないか」

眠そうに答えつつ、魔力や気を使って体の調子を確かめる。

「……魔法をばらすと言う事は、世界中の人に迷惑がかかるんですよ？ 魔法は世界にばらしてはいけない、これは魔法使いの基本じゃないですか！ どうして手伝ってくれないんですか!？」

「いや、俺魔法使いじゃないし」

あっさりと返答する。そもそも、それをやった所で黒樹にメリットもデメリットも無い。

やる意味も意義も存在しないのだ。

「そもそもさあ、魔法の秘匿ってお前のどの口がいうんだよ。それだけの連中に魔法がばれて、オコジョにならないのが不思議でしようがない」

頭を掻きながら、ネギを見てそう言う。

「お前からで勝手にやれよ。……ああ、そうだな気が変わった。見世物として見てやるからさ。今日の夕方に二千五百体位のロボが攻め込んでくる。麻帆良で、世界樹を使って行つ魔法位分かるだろう。防ぐ方法はお前からで勝手に考えろ」

飄々とした態度であっさりと計画を教えた。

単なる暇つぶしとしてしか見ていないのか。それとも、何か目的があるのか。

にやりと笑って、ネギに告げる。

「精々頑張れよ、英雄の息子とその仲間達」

その笑みに、ネギ達は微かな恐怖を抱いた。

第三十六話 麻帆良祭三日目 動く者達（後書き）

出来れば感想を頂きたいです……。

第三十七話 麻帆良祭三日目 戦闘準備（前書き）

かなり短め。次回はかなり長くなる予定です。

第三十七話 麻帆良祭三日目 戦闘準備

昼前。ネギ達は学園長室にいて、学園長達と話を進めていた。

「……二千五百体もの数のロボットを、超君が保持しているじゃと？」

「はい。黒樹さんがそう言っていました」

頷きつつ、学園長にそう答える。

「むう……黒樹が、か。詳しい事を知っておるのか？」

「多分、知っていると思います」

「なら、本人を呼んだ方が速いかの。エヴァの家におるじゃろうし」

「無駄だよ。無駄。お父様は君等に協力する気なんて無いからさ」

その声を聞いて、学園長とネギは振り返る。そこには、窓辺に座っているエンヴィーの姿があつた。

「何者じゃ？」

「近衛黒樹の従者。エンヴィーさ。『ホームクルス人造人間』」だけどね」

口を歪めて笑いながら告げる。背中を曲げ、両手は足の上にと置かれている状態だ。首元にはアーティファクトである勾玉の

様な首飾り。

「『ホムンクルス人造人間』じゃと？ 黒樹はそんな物を作れるのか？」

「おいおい、物扱いかよ。酷くないか？ ま、別に良いが。証拠は俺。殺しても死なないのが証拠だ。ナイフでも突き刺してみるか？」

笑いながら学園長に言い、ネギを指差す。

「伝え忘れた事がある。戦力だが、千雨を頼るといい。頼み込めば助けてくれるんじゃないか？ 利害は一致しているだろうしな」

「千雨さん……？ 利害の一致とは、一体どういう事ですか？」

「さあな。どういう事かは自分で考える。このままじゃ戦力差が開き過ぎててつまらん。もっと俺を楽しませろ」

その雰囲気は、正に黒樹を相手にした時と同じ。殺伐とした雰囲気、気を抜けば殺されそうな、そんな雰囲気が感じられる。

「後は、そうだな。麻帆良祭のイベント、一般人は参加不可の見世物にすれば、魔法先生も戦えると思うぜ。俺の用件はこれだけだ。じゃあな」

後ろに倒れ込み、エンヴィーは窓から落ちる。

ネギが窓に近づき、下を見た時、既にエンヴィーの姿は消えていた。

「……ふむ。長谷川君か。確か、黒樹と仲の良い子の一人じゃな」

「はい。確か、修学旅行時も黒樹さんと一緒にいました」

「なら、頼み込めば助けしてくれるかも知れねえ。誰か行って貰うか？」

「千雨さんと仲がいいのは、木乃香さん？」

「多分な。よく一緒にいる所を見るだろ？」

カモと話しつつ、念話で木乃香の近くにいるであろうアスナに頼み込む。数分かけて連絡し、了承して貰ったので、恐らく大丈夫だろうと判断し。

「で、だ。超の目的は麻帆良で世界樹を使った大規模魔法を発動させることらしい。世界樹を使うと言う事は、何かしらの制約がある筈だ。わからねえか、学園長？」

「ふむ……恐らく、六か所の魔力溜まりを使うのじゃろつな。それならかなりの範囲に影響を及ぼせるじゃろつ」

「アイツの言う通り、見世物にすれば魔法先生達も存分に戦える。戦力は十分だろつ」

「よし、直ぐに準備させよう。ネギ君達も休んで置く様に」

「はいー！」

「ハア？ 何で私がそんな事を？」

「お願い。もしかしたら魔法が世界にバレるかも知れないのよ」

神楽坂が千雨に対し、誠心誠意頼み込んでいた。

カフェテリアでゆったりしつつネットをしていた千雨だが、木乃香から連絡を受けて会ってみればこの状況。

選択を間違えたなあ。と遠い目をする。

「千雨ちゃんと私達で、何だっけ……えっと、利害の一致？ がするらしいのよ」

「何で私とお前らで利害が一致するんだよ……」

「えっとな、兄様がそう言ってたんや。それに、魔法なんてファンタジーな物が日常に入り込むのは、千雨ちゃんあんまり快く思っ
て無いやろ？」

「黒樹の差し金か……まあ、そうだな。私も魔法を世界にばらされるのは勘弁だ」

テーブルに置いてある珈琲を飲みつつ、千雨はそう答える。

「それより、私が気になるのはお前だよ」

そう言いつつ、木乃香を指差す。

「え、ウチ？」

木乃香は首をかしげつつ、ハテナマークを頭の上に浮かべる。

「そう、お前。お前、黒樹の事会話に出す度に拳動が不自然になつてるぞ」

「え……いや、そんなこと無いと思うけど……」

木乃香は、千雨から目を逸らしながらそう呟く。千雨はそれを見ながら、また珈琲を一口飲む。

「木乃香。お前、黒樹の事でまた何かあっただろ？」

拳動が不自然。そのくせ、精神は安定している。矛盾した状態が保たれているが、本来こんな事はありません。

何かしらの精神安定用の薬でも飲んだのか、魔法で精神を安定させているのかは知らないが、そう言った方法を使っても木乃香の精神がぶれつつある。

そう言った事で、千雨に思いつくのは黒樹関連の事しか無い。

「……ううん。大丈夫や。何でも無い」

まるで、自分に言い聞かせるように、小さく呟く。千雨もそれを見て、これ以上は深く突っこまない方がいいと判断し、話を変える。

「さっきの件だがな、私は手伝っても構わないが。条件があるぞ」

「条件？ 黒樹が言ってた等価交換って奴？」

「確かに私達錬金術師に対しては等価交換で物事を進めた方が話は速く進む。だが、今回は私にもメリットがあるからそれは良い。私の力が最大限使えるように手配しろ」

「千雨ちゃんの力が、最大限使えるように？」

「そうだ。私の力はな、下手すれば人殺す事だつて簡単にできるんだ。余程の時を除いて目くらましとかにしか使わない」

焔の錬金術。紅蓮の錬金術。二つとも、戦争で使われるレベルの力だ。下手すれば、麻帆良祭で死者が出る可能性がある。

無論、そうはしない様に千雨も気を配るが、そうなると力を最大限発揮できない。相手が機械である以上、敵に躊躇はしなくていいのは利点だが。

「……そんな危険な力を、修学旅行では使ってたの？」

「身を守るためだ。言っただろ、余程の時以外は目くらましとしてしか使えないってな」

教えた奴が教えた奴なので、危険がどうかは考慮して無いんだ

ろつなあ。と千雨は考えている。

実際、人一人殺すのに何のためらいも無い人間だ。自分の身を守れるならその他大勢はどうなるかと全て等しく同じじゃないか、とでも考えているのだろう。

何を使うにしても、使い次第という訳だ。

「うん、分かった。ネギに言ってみる」

「それと……」

神楽坂の肩を持ち、木乃香に聞こえないよう配慮しながら話す。

「木乃香の事だが。刹那は一緒なんだろうな？」

「え、多分私達と一緒に敵のロボ破壊すると思うけど……」

「出来るだけ木乃香から離れるなって言っとけ。……「う」いうのは、本当は黒樹の役目だと思っただがな」

話を聞いた以上、出来るだけ手伝おうと考えている。友人である木乃香が狙われるのは千雨としても不本意であり。

「お前もな。木乃香から出来るだけ目を離すな」

「わ、分かったわ。……でも、どうして？」

「理由は聞くな。今の木乃香を見ると危なっかしくて仕方がない」

横目で木乃香を見る。木乃香は手持ちの符を確認している途中の様で、こちらの会話には興味もなさそうだ。

「……何が起こっても、おかしく無いからな」

そう、呟いた。

場所は麻帆良。六時より一般客及び生徒達は室内へと歩を進める。

時間が近づくにつれ、見つければ強制的に近く of 建物の中へと案内されている状態だ。

日が沈むにつれ、人が少なくなり、六時十数分前ともなるともはや人通りはほとんどない。

室内では用意されたテレビで外の様子をつかがう事が出来、一般客の干渉が可能となっている。

それぞれしつつも、楽しみに待つ生徒や一般客。

その影では魔法生徒及び魔法先生が各持ち場に着き、準備を整えていた。

そして、その時は訪れる。

湖の水を波立たせ、防水性の服と装甲で覆われている機械人形、ロボ達が歩いてく。テレビで見ている者達はそれを見つけると、時間だと騒ぎ始める。

建物の上に立つのは千雨。両手には錬成陣の付いた発火布。敵を見据え、黒のロングコートを着て、近くにいる刹那とアイコンタクトする。

念話は通じない。携帯も通じない。連絡手段は断たれたが、念話に関しては妨害を遮断する事も可能で、学園長は各持ち場についている魔法先生・生徒から連絡を受けていた。

「……よし、総員全力を尽くすように！ 開戦じゃ！！」

それを合図に、動きだす。

上空三百メートル。

「フッフ、始まったか」

「見世物としては丁度いいだろうな。お前も手は出さんのだろう？」

「ああ、俺は見守るだけ。……いや、ゲームバランスをとる位なら動いた方が楽しめるかな？」

「お前がやったなら直ぐに終わるだろうが。つまらん」

箒に座り、手には酒を持って黒樹とエヴァは談笑する。

この二人はこのゲームには参加しない。いや、黒樹に限って言えば調整の為に動く可能性はあるが。

こういったゲームとは、二つの力が拮抗している程面白い。片方が過剰戦力ならば、調整しなければならぬ。黒樹はそう考えている。

「さあ、楽しい楽しい潰し合いだ」
ショータイム

夕刻。茜色の陽射しが麻帆良の町を照らす頃。　　祭りは、始まった。

第三十七話 麻帆良祭三日目 戦闘準備（後書き）

感想お待ちしています。

第三十八話 麻帆良祭三日目 戦いの開幕

パチン、パチン、とフィンガースナップ　俗に言う指パッチンの音がする。

その音が聞こえる度、爆風と爆炎が機械を焼き、機能を停止させていく。

精密機器であっても、やはり外殻というモノが存在する以上は爆発も威力が減退する。だが、千雨はビームを発しようと口を開ける瞬間をピンポイントで狙う事で内部を直接焼いていた。

直接焼いてしまえば、外殻など関係無い。内部の精密機器は熱でショートし、頭を吹き飛ばせば機能を停止する。

……まあ、火力を跳ね上げれば外殻ごと黒炭にする事も可能ではあるのだが。

「便利ですよね、その錬金術」

さよは千雨を見ながら、感心したように呟いた。

「お前も一応使えるんだろ？」

「私のは少し違うんですよ。エヴァさん曰く、どちらかといえば固有能力に近いそうです。黒樹さんが作ったものですし、どんなものが出来上がっても違和感は無いですけどね」

苦笑しながら、腕を動かす。両手の手首から先は黒く変色してお

り、ダイヤモンドの様に硬質化していた。

ホムンクルスとしての肉体に付加した特異な能力。さよ自身もつい先日まで知らなかった力。

「最強の楯、だったか。その能力」

「黒樹さんが面白半分に作り出した能力らしいですけどね。便利ですよ」

自身の体そのものをポルターガイストで動かし、魔力で身体強化したうえで殴りかかる。

硬度、というモノは、傷がつきやすいかつきにくいかで決まる。ダイヤモンドは、こと硬度においてはほぼ地球最硬レベル。衝撃に弱いという弱点はあるが、それこそ魔力で強化してしまえば問題無い。

「さつきまではナイフを大量に投げ飛ばしてたが、アレはもう店じまいか？」

「錬成出来る人がいてこそその刀剣類の雨です。消耗が凄いですよアレ。相手が機械だから、というのももちろんありますけどね」

口を動かしながらも、手を動かす事は止めない。次々に口ボを破壊し、地に沈めていく。

戦闘に置いては、最堅の防御とは同時に最大の攻撃にも成り得る。其処へ更に速度を加えれば、威力としては途方も無い。

地面に散らばるナイフや西洋剣、刀やレイピア等の刀剣類。これは予め黒樹が錬成しておいてさよに渡して置いたものだ。

ゲームの備品と言って膨大な量を錬成しており、それを相手に所構わずぶつけまくった結果、ものの三十分程度で全て刃がこぼれてしまった。

もちろん鈍器としても使えるが、如何せん足元に細かく大量に散らばっており、ぶつけた所で大したダメージにはならない。

「千雨さんこそ、紅蓮の方は使わないんですか？」

「アレは奥の手だ。出来ればあんな爆弾魔みたいなのは使いたくない」

雨が降っている時に使う為に習得しただけだしな、と続け、またも別の口ボを焼く。

千雨の付けている発火布には、手の甲に『焰の錬金術の陣』。掌には『紅蓮の錬金術の陣』がそれぞれ描かれている。

当然ながら予備も数枚用意しており、念の為に賢者の石も用意している。

真正面からの火力勝負なら、エヴァとさえ肉薄できるだろう。ちなみに瞬動や虚空瞬動も会得している。元は逃げる為の手段を教える手筈だったのだ。当たり前と言えば当たり前だが、別荘を使ったとはいえかなり短い期間で虚空瞬動を会得している辺り、才能はある方だろう。

虚空瞬動は成功率六割、というなんとも微妙な状態ではあるが。

「さて、刹那の方は上手くやってるかな」

また一体、爆炎に包みながら、小さく呟いた。

鞘から刀を抜き、居合切りの要領で縦に真つ二つに斬った。

斬られたロボは倒れて機能を停止し、刹那は周りにいる他のロボに目を向ける。

この場にいるロボの数だけで既に三十近く。幾ら人手が足りないからって、これは多過ぎるだろう。と刹那は小さくため息を吐く。

言ったところで無駄か。と判断して抜き身の刀を構え、姿勢を低くして 動く。

瞬動で懐に入り、下から切り上げる形で表面の外郭から内部の機械類を切り裂いた。動力部分は魔力だが、精密機器を使っている以上は人体と同じで体内は弱点だ。

最も、体内が弱点では無い生物など存在するのかどうかさえ分からないが。

そんな無駄な考えを頭から振り払い、他のロボへと意識を移す。口を開け、武道会でも使っていた脱げビームを発射するつもりだろう。

タ、タン、と軽くステップをしてビームの射線上から外れ、開けたままの口に刀を突き刺す。頭部を貫かれ、機能を停止して止まるロボ。

息を吐き、吸って振り返りざまに一閃。腕を斬り落とし、其処から横に突き、内部を破壊する。

(……しかし、なんて数だ)

こうしている間にもまた、次々と六か所の魔力溜まりを指して進撃している。この後ろには魔法先生達が構えている筈だが、自分一人しかいないこの場所を超える事は造作も無いだろう。

が、一体でも多くの敵を倒す事が今は最優先。抜けて行った敵は魔法先生達が相手をするだろうと考え、目の前にいる敵に集中する。

「神鳴流奥義　百烈桜華斬」

円形に動いて周りの敵を一斉に切り裂き、一旦建物の上に跳んで敵の数を再確認をしようとした。

その時だった。

「貪狼、武曲」

二体の式神。巨躯の狼と鎧を纏った侍。木乃香の魔力を供給され、二体は動く。

「せつちゃん、大丈夫？」

「大丈夫です、お嬢様。……ですが、後ろに控えていたのでは？」

「せつちゃんは大丈夫やと思ったけど、なんかメインコンピュータがどうのこうのって騒いどったえ。結界が落とされるかもしれないって連絡受けたから、取りあえずせつちゃんに連絡しようと思って」

ポケットからいくつか符を取り出しつつ、木乃香はそう答えた。

「結界が、ですか？」

「うん。茶々丸やないかなーと思うえ。千雨ちゃんならネットの事をどうにかできるかもって思ったけど、戦力としてかなりやってみたいやし、ここで抜けられると困るかなって感じや」

まあそんな訳で現状結構困つとるんよと告げる。それと同時に入る連絡。

連絡を受け、とある方向に目を向ければ、遠目に見える巨躯の大鬼。無銘の鬼神と言うモノだ。

スクナにこそ霊格や力は劣るが、それでも十分な力を持つ。頭部を科学で制御する事によって暴走しない様にされており、これらもまた、広場を占領せしめんと進撃を始めていた。

「あつちは確か……千雨さんが居る場所ですね」

「運が悪かったなあ、あの鬼。こと火力に関してはウチより凄いの
に」

そう言って笑う木乃香。だが、刹那にはその笑顔が仮面の様にし
か思えなかった。

「おいおいおいおい、何だアレ何だよアレ何なんだよアレはよ!」

間近で見るととてつもない。ビル数階分に相当する大きさの鬼神。
体の頑丈さは並では無く、無銘とはいえやはり鬼神。そこらの魔法
使い程度が相手に出来るレベルをはるかに超えている。

「アレはちょっと厄介ですね。使い捨ての剣ならこつこついう場面ですべきだったかもしれません」

早々に刀剣類を壊してしまった事を悔やむさよ。だが、嘆いた所で何も始まらない。

頭部の前にエネルギーが集まり、集束され、放たれる。

いろいろと嫌な予感がして早々に回避行動に移る千雨。同じ様にさよも続き、ビームの射線上から外れる。

多分あれも脱げビーム的な何だろうなあ……と軽くため息をつき、両手を合わせた。

「使つんですか？」

「ま、さつさとぶつ壊したいしな。邪魔だよアレは」

そして、両手を鬼神へと向けた。瞬間、空気が爆発して後ろへと倒れる鬼神。

追撃するようにフィンガースナップで爆炎をおこし、地面へと叩きつける。更に続けて爆弾を錬成し、腹部へと大量にばらまく。

爆炎と轟音が辺りに響いた。

爆音が轟くその場所は、熱で軽く地面が溶けており、降りる事を戸惑わせる。

その為、建物の上に立って破壊出来たかを確認する。大半は爆炎で黒く焼けており、頭部は出来るだけダメージを与えない様配慮した結果、煤がかなりついたものの、傷は殆ど無い。

「まず一体、と」

「私の出番無いですね」

「爆弾錬成するからぶつける　って、そうか。その方法が一番楽じゃないか」

「でも下手すると簡単に建物壊しますよ？」

「それはアレだろ。それこそ錬金術師の出番……　ってか本領であつて本業だろう」

「系統の違いがありますけどね。黒樹さんならお金で雇えばやりそうですけど」

「アイツは殆ど何でも出来るからなあ……　ああいう奴をチートとかバグっていうんだよな。才能の塊みたいな奴だ」

「詠春さんは錬金術の事を全く知らないみたいでしたけどね」

そうだったな、と千雨は呟いた。

「アイツがどこで錬金術なんて覚えてきたのか、見当もつかないって詠春さん言ってたな。少なくとも小学校の間は数年間植物状態だったらしいし、あそこまで完璧に出来る様に成るには、どれだけ学んで練習すればいいのやら」

錬金術にも相性　　と言つより、向き不向きがある。

医療分野や金属分野と言つた違いもあり、学べば絶対使えるようになると言つ訳でも無い。

そう言う意味で言えば、黒樹は凄まじいの一言だ。

まさか小学校以前から学んでいた訳も無く、小学校に上がる以前から五年間は植物状態で昏睡。目覚めてから学びだしたとしても、数年程度しか無い。

それだけで錬金術を全てマスターしたと言つ事が、実際に学んで難しさを実感している千雨からすれば、凄まじいと言ひようがないのだ。

「才能つてやつかね」

「でしょうね。私も六十年間、いろんな人を見て来ましたから。あいう人は偶にいましたよ」

近くにいたロボを破壊しつつ、さよはそう答える。

「どこか外れている、とでも言うんでしょうか。常人とは考え方そのものが違っている様な、そんな感じなんですよね」

「……人間観察が趣味か」

「六十年間ずっと暇だったんですよ。それぐらい良いじゃないですか」

「まあしかし、分かんでも無いな。黒樹は常人とはお世辞にも言えない奴だし」

小さく息を吐き、口ポを爆炎で包む。

「……だからこそ、木乃香とあそこまで仲が良かったのが不思議なんだよな」

「普通、ああいった人は同じ様な人で無いと仲良くなれないんでしようけどね」

「同族って奴だろ。それを言っしまえば仲が良い私達も螺子が外れてる事になるぞ？」

「私は別に良いんですよ。あそこで誰にも気付かれないまま永遠にいたら、それこそ本当に精神が摩耗して潰れていたかも知れません。今更螺子が外れていると言われても別におかしい事では無いですからね」

常人である木乃香と、非常人である黒樹。でこぼこな兄妹で、歯車が噛み合わない様な二人。

そのくせ、異常なまでに仲が良い。千雨から見ればそう言った見立てだ。

殺人鬼と公言する黒樹。それと普通に接する事の出来る千雨達。十分外れてるよな、私達。と千雨は小さく呟いた。

「……いや、あの二人は噛み合わないからこそ、仲が良かったのか

もな」

「仲が、良かった？」

過去形になっっている事に疑問を覚え、千雨を問いただす。

「最近はずいぶんしゃくしてる。……まあ、普通の奴と外れた奴が一緒にいるなら、あれが当たり前前の関係だと私は思うけどな」

「詳しい事は知らないですよ、私。一体、何があつたんですか？」

「簡単に言えば、木乃香が黒樹を拒否って、木乃香が黒樹と話そうとして、黒樹はそれを拒絶して、木乃香が何かやったらしくて、ギクシャクしてる」

「……なんか、なんとも言えないですね」

尽くすれ違っている二人だと、さよは思った。

驚くほどに行動が噛み合わない。これだけ聞けば、木乃香が悪くて黒樹は弁解を聞こうとしない様にも思えるが、実際には違う。

元を言ってしまうえば、黒樹の『裏の仕事』が原因だろう。だが、それは黒樹が決めた事で他の誰かが口出しする事では無い。

木乃香は妹としてそれを止める様言つつもりで、それを他者に利用され、黒樹の精神に何かしらの『影響』を与えた。

他者が介入しなければ、あるいは上手く行っていたかもしれない。

千雨は黒樹の真意を知っていたのだからこそ、そういった思いを抱く。

先ほど、木乃香と会った際。違和感があった。

正に、自分の感情を抑えている様な、仮面をかぶっている様な、偽りの思いを話している様な感じだった。

押さえつけている、とでもいうのだろうか。余計な事をすれば藪蛇かもな、と思っただけあまり干渉はしなかったが、やはり心配ではある。

黒樹の様子も、ここに来る前に一度見た。そして、エヴァからの話と黒樹を見て抱いた感想はといえば、

「……木乃香、か」

「何がですか？」

「いや、いろいろとな」

呟きに律儀に返すさよに対し、顔を横にを振って誤魔化する。

何にせよ、面倒臭い事になっている事には違いない。千雨からすれば、こんなお祭り騒ぎは勘弁してほしいところがある。

「さっさと、潰す」

コキコキ、と首を鳴らし、派手に攻撃を再開した。

第三十八話 麻帆良祭三日目 戦いの開幕（後書き）

主人公登場せず。次回はネギ側かなあ、と思ってます。

感想を頂けると嬉しいです。はい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1766s/>

ネギま！ ～最終進化的転生者～

2011年11月1日23時21分発行